

連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 3 No. 2

第十号

September 2012

対人援助学会

共同開催

第4回対人援助学会

第3回ヒューマンサービス研究会

日時 平成24年12月8日(土)10時から

場所 神奈川県立保健福祉大学(横須賀市)

メインテーマ **「対人援助の新たな可能性を求めて」**

1 パネルセッション

2 基調講演

主催者あいさつ 大会会長 白井正樹

基調講演 篠崎 英夫(日本公衆衛生協会理事長)

「精神保健の昨日・今日・明日」

3 企画シンポジウム

「精神障害者の地域生活を支える - 在宅生活はどこまで可能になったか - 」

(シンポジスト3名程度予定)

4 対人援助学会理事会企画ワークショップ

「対人援助マガジン」は何をしてきたのか？ 執筆者、読者の考察」

5 研究報告

報告者……公募。一人20分(報告15分、質疑5分)

6 懇親会

参加費 :1000円(資料代として、補助者を除く参加者全員から徴収)

懇親会費:2000円

詳細は学会HP ちらし・大会案内をご覧ください。

大会告知		002
目次		003
執筆者@短信	執筆者全員	004-010
知的障害者の労働現場 010	千葉 晃央	011-014
社会臨床の視界 (10)	中村 正	015-026
ケアマネの会った家族たち (10)	木村 晃子	027-030
街場の就活論 vol.10	団 遊	031-033
心理療法が始まるまで (10)	藤 信子	034-036
第10回 誌上ひとりワークショップ(その6)	岡田 隆介	037-040
映画の中の子どもたち 10 「オレンジと太陽」	川崎 二三彦	041-042
子どもと家族と学校と	中島 弘美	043-046
蠨螂の斧 社会システム変化への介入 第10回	団 士郎	047-054
学校臨床の新展開	浦田 雅夫	055-057
学びの森の住人たち (5)	北村 真也	058-068
幼稚園の現場から これは、いじめ？	鶴谷 主一	069-071
福祉系対人援助職養成の現場から	西川 友理	072-076
我流子育て支援論 (10)	河岸 由里子	077-083
不妊治療現場の過去・現在・未来 10	荒木 晃子	084-090
対人援助学&心理学の縦横無尽 (7)	サトウ タツヤ	091-094
ドラマセラピーの手法 (1)	尾上 明代	095-101
家族造形法の深度 (10)	早樫 一男	102-104
旅は道連れ、世は情け 10 女性LC研究所 20年	村本 邦子	105-108
きもちは言葉をさがしている 第9話	水野 スウ	109-115
やくしまに暮らして 第九章	大野 睦	116-118
お寺の社会性(八) 生奥坊主のつづやきー	竹中 尚文	119-124
これからの男性援助を考える 第八回	松本 健輔	125-128
ノーサイド 第6回 被害と被害を超えた論理の構築	中村 周平	129-133
それでも「遍照金剛言う」ことにします(5)	三野 宏治	134-145
「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い(5)	山本 菜穂子	146-152
男は痛い！第四回 「フライ・ダディ・フライ」	國友 万裕	153-160
援助職のリカバリー (3)	袴田 洋子	161-165
周旋屋日記 (3)	乾 明紀	166-168
トランスジェンダーをいきる(2)	牛若 孝治	169-172
役場の対人援助論(2)	岡崎 正明	173-174
新連載 発達検査で分かること 新版K式発達検査をめぐって1	大谷 多加志	175-178
編集後記	編集長&編集員	179-180

第十号

執筆者

33人

@短信

大谷 多加志 新連載

社会福祉法人京都国際社会福祉協会の中で、児童発達支援事業所と研修・研究機能を持つ京都国際社会福祉センターで勤務しています。

今年で10年目。経験値ゼロで始めた仕事が少しずつ形になってきた時に、今回のマガジンへのお誘いをいただきました。思えば、この10年、周りにはチャンスを与え続けてくれる方が本当にたくさんいたと思います。

私の最も重要な仕事の1つである「新版K式発達検査」をめぐる執筆したいと思っています。どうぞよろしく願います。

岡田 隆介

20年以上の付き合いのある友人も私も、60歳半ばで若作りのオッサンである。お互い下戸・甘党で、おしゃべりが大好きだ。同じ時期に児童相談所で育ち、家族療法に興味をもった。面接を楽しくやりたいたいという臨床のスタイルも似ていると思う。妻と3人の子どもがいて、星座も血液型も近い(?)。

にもかかわらず、講演やワークショップはぜんぜん違う。友人は新鮮な素材を参加者に提供し、煮るなり焼くなりあなたたちが決めなさいというスタイルだ(たぶん)。

家族については語りまくるが、目標や手段についての指図はしない(たぶん)。わたしはレシピを配る。調理してみせる。ひたすら味付けにこだわる。

友人は、形を変えることなく長く人々を惹きつける。変わるのは参加者の方で、それを心底楽しんでいる。私はというと、強迫的に次々とレシピを用意する。パウポにも凝る。疲れる、飽きる。そして、そんな自分を楽しんでいる。真似たり盗んだりしても無理、そう悟ったのは数年前のことだった。

最近、Facebookでも同じだなと思った。友人は、次々に旬の素材を書き込む。素材は投げっぱなし、誰かが食いついても煮るなど焼くなど好きにするとばかり、次の新鮮なネタを投げ込む。わたしは、ときどき人のネタに絡んだりツッコんだりする程度。Facebookにレシピはなじまない、とばかりに…。

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

今日、朝のニュースが「シリアのアレップでジャーナリストの山本美香さんが死亡しました」と伝えた。私は、「えっ?」と思って友人のカメラマンに電話をした。「そう言えば、あいつらシリアに行っているらしいよ。え〜!」私は夫の佐藤和孝さんの事を思った。彼は30年ほど前にアフガニスタンの紛争の取材をしてから戦争の取材を続けている。彼は自分の死に対して覚悟を決めて仕事をしていたと思う。友人たちはそんな彼のことを「オニ」と呼んだ。当時、私が出会ったカメラマンたちは、自らを決してcombat photographerと言わなかった。そこにある「死」の重さを感じてのことだろうと思った。佐藤さんもあれからいろいろとあって、美香さんに出会った。彼女と一緒にってから、いつも一緒、戦場の取材も二人で出かけた。同じ頃、私も結婚など二度とするまいと思っていたのに今の妻に出会った。私たちも、いつも一緒、仕事をするのも一緒である。だから、佐藤さんが自分の命よりも大切な存在に出会った気持ちがよく解る。彼はよもや美香さんの命が失われるなんて思わなかったろ

う。彼が奥さんを連れて帰ってくる姿を思うに、涙が流れる。

川崎 二三彦

子どもの虹情報研修センターが設立10年を迎え、私はこの地で、いつのまにかその半分の期間を過ごしたことになりました。ということは、単身赴任生活も、はや5年を超えたということになります。

過日、連れ合いが京都からはるばる横浜2Kのアパートにやってきました。かれこれ2年ぶりになるでしょうか。そうすると不思議なもので、私、トイレ掃除をしてみたりスリッパを買い換えてみたり、何となく“接待”気分になるんですね、これが。とはいえ、敵も然るもの引掻くもの、部屋に入った途端、「汚れている!」と、こっちの涙ぐましい努力など鼻にもかけず非難の連続。いきなりガスコンロを磨き始め、挙げ句の果て、ガス台のコーティングが剥がれてしまうのはめに。「おい、剥がれたぞ」「あのね、日頃掃除してないからこんなことになるの」「……」とまあ、こんな調子で夜も更けていくのですが、今回は、翌日から青森観光旅行を予定していました。何しろこの人、何の用もなく掃除するためだけに狭いアパートに出てくるはずもなく、わざわざやって来るには、それなりの収穫が必要です。

振り返ると、この5年間、児童相談所時代には考えられもしないほど温泉巡りをしました。アパートで1泊した後、近場の大



滝温泉天城荘、奥湯河原温泉海石榴、今は倒産したらしい箱根湯本温泉桜庵、熱海温泉山の上ホテル、伊香保温泉香雲館などに出かけ、あるいは浅草芸芸ホールや新宿末廣亭などの寄席も覗いて見ました。横浜港を船で遊覧したりもしたんですからね。時には現地集合、現地解散の旅

行企画も立てました。白骨温泉湯元齋藤旅館、下呂温泉月のあかり、雲仙温泉半水廬、別府温泉郷べっぴ昭和園等々に足を向け、温泉以外にも金沢金城樓や沖縄サザンビーチホテルに出かけました。ついでに書いておくと、娘がいた北京にも足を伸ばしました。都合がよかったのは、休日・夜間に緊急の連絡がないこと。職場から突然呼び出されることなんてあり得ないので、計画を立てやすいんです。

さて、青森はねぶた祭り直前の弘前経由で大鰐温泉星野リゾート界津軽泊。翌日に奥入瀬、十和田湖をまわって青森市内の某ホテルに宿泊すると、最後は日本最大級の縄文集落跡三内丸山遺跡で小旅行の打ち止め。

空港で連れ合いを見送り、私は残ってこの後密かに……、というような良いことがあるといいんですが、残念ながら虹センター職員と合流して青森で仕事と相成りました。という、落ちこぼれ家庭「単身赴任の巻き」のお粗末でした。

鶴谷 圭一

夏休みに沖縄本島の北部にある本部というところに5日間滞在しました。3回ぐらい会っただけの知り合いと一緒に行って、ゲストハウスという一泊2,500円の宿で寝泊まりして、知り合いの友だちがやっているビーチハウスで図らずも職場体験！をさせてもらいました。いや、勝手にしてしまいました。

台風が通過したあとの沖縄のビーチは悲惨です。木、家庭ゴミ、海草、訳のわからない瓦礫、石ころなどが打ち上げられ、その撤去に3日かかりました。

お手伝いなので僕らは気楽なのですが、ビーチはウスの人にとっては死活問題。台風2発で潰れる店もあるとか…厳しいです。

3日間の作業が終わって感じたのは、白い砂浜と青い海のステキな沖縄のビーチは、現地の人が汗を流しながら作った作品だということがわかりました。今回は僕もそれに加担したぞ！という充実感をもって昼寝が出来たことは幸せでした。もう一つの収穫は、いっしょに行った「知り合い」

が「友だち」になったことです。

ツルヤシュイチ(原町幼稚園 園長)

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール:osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター:haramachikinder

河岸 由里子

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰 (臨床心理士)

最近歳のせい、ボケて来たのか、いつも何か探しているような気がする。ちょっとどこかに置くと、もう見つからない。車のカギ、携帯、財布などなど。何かをしようとして移動すると、その場まで来て何をしようとしていたのか忘れて、元の場所まで戻ること度々ある。

久しぶりの休みの日、銀行に税金やら何やら支払いに行ったときのこと、入金額を書くのに便利ようと、合計金額を書いた紙をバッグに入れたのにみつからない。キャッシュカードをすぐ使えるようにと財布から出しておいたのにみつからない。ゆっくり探したらどちらもちゃんとあったのだが、番号札をとって準備をしていると、こういう時に限ってすぐ呼ばれる。そうすると焦る。焦れば余計に見つからなくなる。

更に銀行の用事を終えて買い物しようと思ったら、買い物リストが見つからない。全部覚えていればリストは要らないのだが、大抵一つ二つ買い忘れたり、同じものを又買ってしまったりということがある。今回は一つ買い忘れたが、まあ大勢に影響ないのでよしとした。結局買い物リストは家に置き忘れていた。

忘れると言う事は大事なことで、何もかも覚えているのは辛い。嫌なことはなるべく忘れたいものだが、そういう記憶は中々忘れない。記憶の選択というのは出来ないのだ。そして今、電話番号や車のナンバーなど、一度聴いたら忘れなかった筈が、何度聞いても、書いても忘れる。歳をとると言う事は、こうやって少しずつ、今まで出来ていたことが出来なくなって行くのかなあとしみじみ思う。

中村 周平

始まるまではほとんど関心のなかったオリンピック。いざテレビを通して選手の活躍している姿を観ていると目が離せなくなってしまう自分がいました。睡眠時間もいつもより短めに。あらためてスポーツが好きだということを実感した夏の夜でした。4年後のリオオリンピックでは、7人制のラグビーが男女ともに正式種目となります。地球の反対側であるリオデジャネイロとの時差は12時間…果たして寝かせてもらえるのでしょうか。というより地上波での放送はあるのかな。

北村 真也

私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>)代表。

私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>)、フリースクール

「知誠館」(<http://tiseikan.com>) 代表。

先日、東北大学の長谷川啓三先生の書かれた『ソリューション・バンク』という本を紹介され一気に読みました。その本の中には、私がかつて学んできたA.アドラー、M.エリクソン、G.ベイトソン、R.バンドラー、J.グリンダー、J.ヘンリー、S.ミニューチン、S.D.シェイザー、I.K.バーク、M.ホワイトの相関関係がブリーフ・セラピーというフレームの中でわかりやすく記されていました。そして最後のページに載せられていた長谷川先生の著作に目を通した瞬間に、20年以上前に名古屋のとある屋台で先生と一緒に「味噌煮込みおでん」を食べた記憶がよみがえってきたのです。当時先生は、少しの間だけ名古屋の椋山女子大におられたことがあり、その時に私は個人的に出会っていたのです。一冊の本を通して、私の学びの世界と現実の世界がどこかつながった感じがした瞬間でもありました。

村本 邦子

この夏はブーケットに行って、仕事ばかりしていた。たくさん原稿を書くつもりで6つも持って行ったが、結局、2つと半分しか終わらなかった。「時間さえあれば」というのが間違いであることを悟ったが、でも、

まあ、「ああでもない、こうでもない」と悶々と思考する贅沢というのも悪くないだろう。なんだかんだ言って、いつになく、のんびりダラダラしていたとは言える。今回で連載を終えるけど、また近いうちに。

荒木 晃子

母の経口摂取がストップしてから8か月。知り合いの医師からは、点滴のみで生命を維持する限界は約2年とも聞いた。横たわる母に、進行性の脳性麻痺の変化は目に見えて明かだ。でも、そうやって、母は生きている。私には、唯一動く左目で愛娘を見つめる母のまなざしが、時に、不思議そうに、また、うれしそうにも映る。おそらく、何かを語りかけたいのだろう、何かを伝えたいのだろうとを感じる時もある。私も、もう一度母の声を、そして、言葉を聞きたい。もし、かなうなら、いま何を感じ、何を思うのか、たずねてみたい。

かなうことのない望みと知りつつ、私は変わらず母に語りかける。いつものように、ただ、日常の出来事を。うれしかったこと、いま頑張っていること、どんな人たちが私を支えてくれているかということ。返事のない対話と、まるで顔を突き合わせながら語るふたりの距離が、現在の母と娘の唯一のコミュニケーションだ。目の前に、息する母をみつめながら、いま、私は、この世で一番母を大切に思っているのだなと、今までもずっとそうだったんだなと、当たり前のことをおもい、そして、それを母に伝える。

そこは、奈良県は信貴山山系に佇む総合病院の一室。母の病室には4つのベッドが並び、4人の高齢者が静かに横たわっている。そのうちのおふたりにご家族が見舞う光景は未だ目にすることがない。認知症専門内科病棟では、おふたりのように、入院以来家族のだれも訪れるものがない方々も多いと聞いた。きっと、ご本人はさびしい思いをされていることだろう。

母と同室のもう一人の女性には、私が訪れた大半でお会いする高齢の男性がいつも寄り添っている。おそらくご夫婦なのだと思う。隣のベッドでお二人が交わす、意思の疎通ができているとは決して言え

ない会話の中で、時折小耳にはさむ男性の言葉に、先日、深い愛情を感じる機会があった。面会が終わり、病室を去る際男性が奥様にお別れの言葉をかけた。「じゃあね、帰るよ。また来るからね」そう言い一旦病室を後にした後、2度3度再びベッド際に帰ってくることを繰り返す。3度目の「じゃあね」の後、女性が初めて返事した。「忘れ物はなっかい?」。男性はうれしそうに満面の笑みを浮かべ、「僕の忘れ物は君だよ」そういいながら部屋を後にした。男性が返った後の病室は、柔らかな空気と穏やかな時間に包まれた。そして、そのとき母は、確かに、私に向かって微笑んでいた。

尾上 明代

今、東京で、恒例の夏の連続セッションの真っ最中です。

いつも違ったテーマを決めて行いますが、5回分のセッション・プログラムを創るのも、実施するのもとてもワクワクして、自分自身もすごく楽しくできる仕事の1つです。今回のテーマは、「心の障害物」を乗り越えて夢を叶える! ~自分自身の根源的な力を確認して~

毎回、少しずつ希望や夢を叶える力をつけていき、最終ワークで、参加者全員の夢を実現するドラマを創ります。

ところで私は今日、流れ星を見て(東京のプラネタリウムで、ですが…)急いで願いごとを言いました。

きっと叶うと思っています!

木村 晃子

わが町には、共生型コミュニティ農園「べこべこのはたけ」というスペースがある。地元のNPO法人が中心で様々な取り組みを展開しているが、内閣府の「新しい公共」というモデル事業を受け、このスペースで高齢者の就労支援を展開する取り組みをしている。地域の団塊世代の元気高齢者は勿論、要介護者であっても参加できる場所。

春から、企画に携わり、利用者さんをお誘いし、8月初旬に種まきを開始した。ケアマネでありながら、利用者と一緒に地域

の活動に参加していくことの喜び、支援の枠組みを固定しないことで、利用者、家族との関係にもたらされる大きな変化。日々、様々なことを感じ学びの連続。

地域包括ケアが叫ばれる中、関係機関の連携や、ケアチームと利用者のつながりの強化だけにとどまらない。老いに伴い地域とのつながりが弱まっていく高齢者でも、再び地域につながっていけるように、支援展開が必要だと思う。次号からは、そんな地域の実践活動もお伝えしていきたい。

北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

団遊

8/24に第二子が産まれました。女兒でした。名を「そよ夏」としました。去年、友人が1歳の娘を急病で亡くしました。葬儀で、喪主でもある友人が「私はあなたが産まれて4人になったときに、初めて家族を持てたと思いました。我が家を家族にしてくれてありがとう」と涙ながらにあいさつしたのが、とても印象的でした。

昨晚、病院から戻ったそよ夏が、息子のつなぐと妻と三人で、同じ部屋に寝ていました。その様子を眺めた時に、これまで私たち夫婦の付き添いのような息子が兄になり、2対1だったのが、2対2になったのだと強く思いました。友人のセリフを思い出しながら、彼が言っていたのは、きっとこういう気分なのだろうと思いました。

藤 信子

7月の下旬にコロンビアに行った。シカゴに寄るといので、気温を調べたら32度ということで、京都と変わらないことを確かめた。シカゴというのは、寒い所らしいと勝手に思っていたけれど、夏は暑いらしいということを知った。あんなに大きな湖(私の感覚からいうと海みたい)の傍なのに、何故暑くて寒いのかしらと不思議な感じ。そのシカゴ、そして一泊したマイアミの空港とホテルのエアコンの寒さ(涼しさというべきか)に震え上がった。ここまで冷房を効かせなくてもと言いながら、少し前

の新幹線を思い出した。そう言えばこの頃新幹線は一頃のむやみな寒さではなくなったなと思出した。計画停電が始まるかという関西から出かけて、エネルギーの問題を考えていない(考えなくて良いと思っているらしい)国なんだと改めて思った。日本も大震災が無ければ、冷やしすぎはないにしても、あまり変わらなかったのかな、とぼんやり考えた。世界は広いのか、いいとは思えないような、よく分からない体験だった。

水野 スウ

とりわけ厳しい今年の夏よ！その暑さにもめげず、クーラーのないわが家(っていっても、今や森みたいにしげった庭木の葉っぱたちの緑エアコンがよく効いて、結構涼しいんだけど)には、夏休みならではの人たちが、今年も出たり入ったり、よく訪ねてきました。

夏休み最初の、紅茶の時間の日めがけてやってきたのは、このコース2回目の、滋賀の子育てグループが母子10人で。家族旅行の行き先をふたたび石川に選んで、2年ぶりに秋田から来てくれた人もいた。その秋田の彼女が、県に申請してくれた出前紅茶の企画が通ったおかげで、私はこの冬、5月に続いてまた秋田に行くことに。

大阪からは、生まれて半年の赤ちゃん連れで、若い夫婦が泊まりがけでやってきた。赤ちゃんの父親と出逢ったのは16年前、彼が19歳の時。不登校の子と学校に行ってる子たちとが、パネラーになっての「学校って何？」というシンポジウムを開こうというオリジナルな企画で、彼はその実行委員長だった。十代の彼らがいつもわが家でその委員会を開いてたことから、不登校だった彼と、今に至る長いつきあいがはじまった、というわけ。

夫婦とも、私たち家族に対して、血によらない「家族」を感じてくれるみたいで、私は、生まれたその子の名づけ親となり、うちの娘は、その子が成長して親に反抗した時の家出先・第一号に指定されたとのこと。

若い彼らの結婚観、家族観、子ども観。

それは彼らが育ったそれぞれの家のとはものすっごく違う。自分たちがそれぞれにしんどかった歳月を、この夫婦はよく語り合い、分析もしていて、子どもはできるかぎり、親が抱え込まずに、社会の中で育てて行きたい、と強く願っているらしい。いわば赤の他人である私が、赤ちゃんのゴッドマザーになったわけも、きっとそのあたりにあるのだろうな。「紅茶の時間」の家主。石川県在住。

E-mail :sue-miz@nifty.com

「紅茶の時間」URL

<http://www12.ocn.ne.jp/~mimia/sue.htm>

山本 菜穂子

誰かが誰かにいじめられ、いじめられた誰かが誰かをいじめ、またその誰かが誰かを・・・そうしていくつもの連鎖の先で事件になる。他人事じゃない。その連鎖の中に自分もいるかもしれないって考える想像力が私たち誰にでも必要な気がする。事件で見えてきた加害者と被害者の関係を云々することに意味がないとは思わない。でもその場面の加害者を罰したら、全てが解決するような気になるのは、ちょっと違うんじゃないかとずっと思ってきた。だから、ほほえみプロデュースを始めたようなもの。私自身は誰かを虐げていないか。私は誰かの良いところに気づけているか。それをちゃんと伝えているか。みんなで自分にできることから始めませんか。

すぐできる改善策と同時に、長くかかっても根本に手をつけよう。

罰則で締め付けたところから、また次の鬱屈した思いのはけ口が、いじめになってこぼれていく、そんな気がするの。

さ、我が村、田舎館村の今年の田んぼアートも素敵ですよ。

<http://www.vill.inakadate.lg.jp/docs/2012060600012/>

早樫 一男

夏バテという言葉には無縁のように、この夏も、予定通りのスケジュールをこなすことができました。健康な体であることに何よりも感謝です。

連載している「家族造形法」に関しては、定例の事例検討会や研究会だけでなく、単発のワークショップなどでも紹介する機会がありました(その内容については、今回、紹介しています)。家族造形法を通して、さまざまな家族や人々に出会えることが元気の素になっているのかもしれない。秋もこのペースで乗り切りたいと思っています！

西川 友里

いくつかの学校で、福祉系対人援助職の養成に関わっている者です。

この原稿の締め切りは8月下旬、夏休みの真っ最中。夏休みは実習指導の季節。今年は始めて何う施設が多く、新しい施設や職員さんとのたくさんのお会いがありました。

特に昨今は、施設の経営、運営に関する勉強をさせていただける施設が増えていきます。改めて、私も経営の勉強をしなければいけないと思い、経営学の本を読んだり、勉強をしておいたりしています。

そこで気付いたのですが、経営の入門書、福祉の入門書は沢山ありますが、福祉経営の入門書というのはとても少ない。「福祉サービスの組織と経営」という科目が社会福祉士国家試験の科目になりましたので、その教科書を読んではいますが...どうもピンとこない。

こんな時、施設の事務長さんとお話をさせていただくと、とても勉強になります。特に、一般企業でのご経験のある事務の方は、視野が広くて、お話ししてとても面白い！数回前の記事にも書きましたが、やっぱり全然違う分野から社会福祉分野に来た人からは、なんらかの独特なパワーを感じるなぁと思います。

中島 弘美

個人開業のカウンセリングオフィスを大阪でしています。

私が生まれたのは大阪市内で、隣接する兵庫県の尼崎というところで育ち、ずっと人口密度の高いところで暮らしてきました。といっても自宅の周りには田んぼも畑もあったので、都市部で暮らしているとい

う感覚はそれほどなかったのです。が、私はどうもコテコテの大阪人らしいということを感じています。

それは、あるテレビ番組の影響です。その番組はさまざまな県や地域のしきたりや習慣を取り上げて、おもしろおかしく他県と比較する内容です。大阪や関西の話題をみていると、そんなこと常識で当たり前かと思っていたことが次々と放映され、それって大阪だけのことかと気づかされるのがたびたびあります。

最近、違いを知って驚いたのは「喫茶店はおしゃべりをするための空間」と思っていたことです。それは大阪人だけで、本来、喫茶店は、静かにお茶を飲んで本を読んだりして、くつろぐ場所らしいです。大阪人の私は、友だちといっしょに楽しくおしゃべりする場所だと思っていました。おしゃべりしたいからお店に入るのだから、仕方なくついでに飲み物を注文することもあり、あくまでもメインはおしゃべり。なぜなら、しゃべることがなによりも重要だからです。

そういえば、大阪から遠く離れて自然豊かな観光地を訪れると、みんな静かだなあと思うことが多く、お店の人は、もちろん親切に対応してくれて、押しつけがましいことは全くありません。ただ周りの人は、あまり話さずに食事をしている気がします。旅行のあと大阪にもどってきてわかるのは、やはりおしゃべりが多くて、にぎやかなことです。もうちょっとそのあたりを自覚せなあかなあ～。

千葉 晃央

救命救急講習を受けた。初めてではない。前回とは AED の説明、胸部圧迫、人工呼吸のやり方が少し変更になっていた。

それよりも印象的だったのは講師の救命救急士の方がはなす、現場で起こったこと、体験された話。なかでも、阪神淡路大震災に派遣されて経験したこと、東日本大震災に派遣を送っている立場から聞こえてくる話。予定終了時刻のころ、もう少しだけ時間が欲しいとおっしゃて、受講者への期待を語られた。あの震災のよう

な事態や誰かが倒れているという場面に遭遇したら、是非今日習ったことを一生懸命してください。

そして最後は、京都市の平均救急車到着時間 6 分間を 6 人チームで救命処置をしながら待つというシュミレーション。私のチームは、実際に「あの日」を経験したメンバー。実際に救急車を待つ時間経験したメンバー。そして、朝「おはようございます！」とあいさつを交わした同僚が、翌日には棺の中であったことを経験したメンバー。あの時も、もしかしたら、こうしていたら助かったかもしれない。そうよぎりながら、でも決して口には出さず、黙々と取り組んだ。皆が思っているのは言うまでもない。

「千葉さんの原動力は何ですか？」... あの時、後輩が流した涙が忘れられへんねん。20 代の後輩がこんなはやくに職場でこんな経験していいのか？自分が中途半端な仕事をしていたからじゃないのか？自分が何かしていたら、あんなこと防げたんじゃないのか？自分ができると、気づいていることがあれば、必ず取組む。こんな原動力は、きかれても毎回話せないよ。

三野 宏治

群馬県高崎市は暑いのです。最高気温日本一の座を争う(争わないでいただきたいのです)熊谷市や館林市が近いといえればご理解いただけるかもしれませんが。最高気温 38 度という日も珍しくありませんでした。ただ、風通しの良い芝生の上の百葉箱で観測された最高気温などあてにはならないのです。風がなくしかも 2 階のアパートなどでは 40 度を超えることなど普通のこと。車の車外温度計で 42 度という表示を見ました。そういえば秋田にいたことは - 20 度という表示を見たっけ。「気温差 62 度かあ。車大丈夫か？」と思いながら、「いやいや私たちこそ大丈夫か」と自分でじぶんをつっこむ土曜日の午後 2 時なのでした。

浦田雅夫

9 月 22 日から 23 日、京都造形芸術大

学 学園祭にて、京都ほっとはあとセンターほかのみなさんと協働して、障がい者施設のオリジナル商品を販売します。ぜひ、お立ち寄りください。

<http://www.kyoto-art.ac.jp/>

中村 正

いつも夏には家族と旅行にでかけているが、こしはお盆を入れて十日間の休みがとれたので連れ合いと二人だけでデンマークにいった。コペンハーゲンにすべて滞在した。一つところに拠点をもち郊外もいれてあちこち歩いた。普段とかかわらずカフェにも入り、おしゃべりをする時間をつくった。急がない旅にした。連れ合いは日本語教師をしているので世界各地に教え子がいる。ここにもいて、彼は王立劇場で働いているので舞台裏など入れないところへと案内してもらったりもした。空港から 3 つ目の駅がコペンハーゲン中央駅でアクセスはよい。その前には荘厳なつくりのコペンハーゲン市役所庁舎がある。大きな広場があり、ちょうどゲイやレズビアンやセクシャルマイノリティのプライドコンサートが開催されていた。やたらと同性同士のカップルがめだった。夜遅くまで大賑わいだった。かつて、サンフランシスコのカストロ地域(ゲイ&レズビアンのコミュニティ)にいたこともあり、こうした志向には多様性への賛美があるので、有色人種の私としても暮らしやすい、安心できたことも思いだし、連れ合いともそんな話をして、レインボーフラッグはためく偶然のコンサートを楽しんだ。今回の内容にしたソーシャル・ナラティブやソーシャル・ドキュメンタリーのコンテンツともなる話である。そのコペンハーゲンでは、セグウェイという電動立ち乗り式自転車のような新種の乗り物で街を疾走するというツアーを連れ合いがみつけてきて参加した。とても快適だった。その模様がツアー会社の HP から YouTube にアップされている。お暇な方は末尾に記したサイトからどうぞ。美しいコペンハーゲンの街の様子がわかる。どうでもいいことだが、そこに映っている一番後が私でその前の青い服の女性が連れ合いだ。そしてこの様子からわかるように

デンマークは歩道と車道と自転車道が見事に整備されている。このセグウェイは自転車道を走る。街には自転車があふれている。エコな街である。それには理由がある。自動車メーカーがないのだ。隣国からBMWやVOLVOがどンドン入ってくるのを防ぐために高い関税をとることにしたという。エコノミーとエコロジーはやはり両輪のようだ。最高気温24度くらいの快適な休暇だった。さて、また締め切りと格闘し、講演や研修や仕事にでかけるか。

<http://www.youtube.com/embed/4flWsGKBbnA>

サトウタツヤ

短信に毎回毎回締め切りのことを書くのも気が引ける。前号の編集委員長の編集後記に、締め切りのことをしっかり書かれてしまったので、今回は締め切りに遅れないようにしようと思ったりもしていた。ところが、8/25が締め切りだというメールがない。「あれ？ 催促がないな？ もしかして、9/25だけ？」などと考えてしまうところが大问题。8月20日過ぎになって催促がきた。編集委員長のもとに「催促がきてないけど」という問い合わせが相次いだそうである。まさに心がけの違いというべきか。催促がないから、きっと締め切りが延びたんだろう、なんてことは誰も思わないらしいのである。かくして、今回も「あと二人だけですよ」という催促をもらうことになった。

数日遅れなんて、主観的には締め切りを守っているつもりなのですが……(あくまで本人基準ですが)。これまた言い訳ですが、本題に入るまでに色々書くので疲れてしまう、というのが私の欠点。

今回から福島について書いていきますが、なぜ福島のことを書くのか、なぜ行ったのか、を書くだけで、疲れてしまっている体たらく。まあ、これも自分のスタイルだと思ってあきらめるしかないですが。

大野 睦

家の周りにはいつもカニがいて軒下にハチが巣を作りました。そんな夏は台風がよく来る。

先人から教えてもらった通り、今年は台風の当たり年のようです。

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

坊 隆史

企業内の心理職をしているということもあり、経営の観点からの研修や管理職に対して研修をする機会が増えてきた。経営に直結する立場の方々と話していると、対人援助職者と違う話題で盛り上がるのができ、とても新鮮で楽しい。特にお金に関する考え方は、非常にシビアで勉強になる。産業分野に対人援助が貢献できることも多々あると感じる。どのように実践に活かすかを模索している今日この頃である。

松本 健輔

カウンセリングルームHummingBird 主宰 <http://www.hummingbird-cr.com>

今月、偶然に婚活のセミナーの依頼が複数あった。結婚相談所を離れ、夫婦カウンセリングに身を置いて、婚活というものがまた違って見えてきている。婚活の現場で相談を受けるから見えるもの、そこから離れて、結婚後の夫婦の相談から見えるもの。それを統合してセミナーでどう表現し、より援助としてクオリティーの高い物を作り上げていくか。そして、その結果、幸せな結婚を作り上げるお手伝いになる。そう考えていると今からワクワクしてくる。

団 士郎

8月23日に三人目が、27日に四人目の孫が生まれた。母子共に元気らしい。二人のお母さん共に暑いときにご苦労様。長男と次男がそれぞれ、二人ずつの子の親になってくれた。

私は自分の子育てに、けっして熱心だったわけではないが、子どもは大好きだったので、親になって、家族を営むのは楽しいことだと思いつけてきた。そして近年、ますます家族があることの喜びを実感している。

あれやこれや、いろんな仕事をして、我ながら良くやっていると思う。でも、私が親として役割を果たし、お爺ちゃんになっている事以上に、嬉しいと思うことはない。

これは資格や才能を云々しなくても、誰にも可能なことだと思う。そこがとても良いと思うのだ。

ただ一方で、巡り合わせに左右されることも大きい。正しいことも正しくないことも、運も不運も含まれて日常は成立している。だからあらゆる事を、心を込めて行わなければならない。

「明日、地球が亡ぶとしても、私は今日、リンゴの木を植える」

何処で出会った言葉だったか忘れたが、私はそう思い続けていることで、運を貰っている人間のような。孫達は人類の未来だ。本当にそう思う。

お知らせ youtubeで「木陰の物語」がアニメ化されたものを順次アップすることになりました。今まで、紙芝居版の「好きになる力」一本でしたが、いま、アニメ版第一弾「歩道で」、第二弾「花嫁」を見ることができます。是非、ご覧下さい。ホンブロック 歩道で <http://p.tl/v-sC>

岡崎 正明

先日プロ野球観戦に友人らと行った時のこと。

にぎやかな外野席。私たちもメガホンを叩き、大きな声で声援を送っていた。

すると、前の座席の苦虫を噛みつぶしたような顔したオジサンが振り向き、私の友人に何かしらボソボソと話しかけた。

友人は神妙な顔でうなずいた。私が小声で「どうした？」とたずねると「うるさいから静かにしてくれて……」と。

おいおい。ここはお寺でもなければ、夜の住宅街でもない。ましてや周囲は大騒ぎ。こいつ1人を黙らせたところで、静寂がおとずれるとはとても思えない。

思わず「だったら家のテレビで見られたらどうですか」とお伝えしたくなったが、トラブルになっても面白くないのでやめておいた。そのかわり以前にも増して大声で声援を送ったが。

相談の仕事をしていても、こんな首をか
しげたくなるような発言を聞く場面がよくあ
る。本人の選択で当然起こりそうな結果
が出ているのに、それに納得ができなくて
怒ったり、「なんでこんなことに…」と頭を
抱えるパターンだ。

行動選択のクセかシステムの仕業か。
様々な要因があってのことだろうが、思わ
ず「そりゃそうなるわなフツー！」とツッコミ
たくなってしまふ。

しかし普通にツッコんでも自分のボケに
気付かない人が多い。おそらく狙ってやっ
てないからか。となると「そうそう。外野席
では口バクで音を立てずに応援…って、
パントマイムかっ」ぐらいのノリツッコミが
必要なかもしれない。

牛若 孝治

先日、といってもマガジン初連載の前後
になるが、夕方、帰宅するためにバスに
乗った。すると、60代と思われる男性が、
空席を教えてくれた。そこまではよかった
のだが、男性との次のような会話に、私は
わが耳を疑った。

男性:私は定年退職して、今、介護職を
目指して勉強しています。

私:そうですか。では、あなたがもし何か
の病気や怪我で、介護を必要としなけれ
ばならなくなったとき、自分ならどんな介
護を受けたいか考えたことがありますか？

男性:いや。そんなこと考えたことない。
僕は定年退職したのだから、これからは
なにかいいことしたいと思って、介護の勉
強してるんですよ。

私:いいことしたいのだったら、まずは自
分がどんな介護受けたいか考えてみたほ
うがいいですね。

私はこの手の会話をするたびに、一石
を投じたくなる。この人たちは、本当に介
護職に尽きたいのではなく、ただ自己の
ために「いいことしたい」だけなのだ。しか
し非介護者は、そのような自己本位的な
介護者に介護してもらおうとは思っていな
い。本当に介護職を目指しているなら、
「もし自分だったらどんな介護を受けたい
か」と考えることが必要である。

袴田 洋子

8月2日に、飼い猫を亡くしました。リン
パ腫という癌でした。14歳と4カ月、人間
で言えば74歳くらいです。

7月に入り急に状態が悪くなり、抗がん剤
治療の効果が得られず、あつという間でし
た。1か月という短い闘病・介護期間でし
たが、色々なことを思いました。

何より「病気、治したいから、病院に行く
ね」と、猫が思うわけないところで、病院に
連れていくことの罪悪感。「自己決定」を
伴わない援助の居心地の悪さを、存分に
味わいました。

乾 明紀

今回で3回目の投稿となります。懇意
にしている方に、校正を兼ねて事前に読
んでもらったのですが、その方から、「原
稿になると、急に控え目な人格になります
ね」と言われました。今日、恩師に別件で
「論文でもっと主張しなきゃ！」って言われ
ました。逆に言えば、原稿より実践の方が
もっと過激だということなんですよ。や
んちゃって反省文ばかり書いてきた訳じ
ゃないのにな～。

國友 万裕

今日(8月13日)、原稿を送りました。僕
はせっかちですし、早くに仕事はすませて
しまわないと気が済まないの、原稿を出
すのも、いつも一番乗りだそうです。

その後、ピンポンがなって、アマゾンで
注文したばかりのDVDがもう届いたみた
いでした。買ったDVDは「燃えよ、ドラゴ
ン」。『フライ、ダディ、フライ』で、主人公の
おっさんが、この映画のDVDを買う場面
があって、つい真似して衝動買いしてしま
ったのです。この頃、僕はどういう心境の
変化が起きたのか、男っぽくなりたくてた
まりません(笑)。元々は男っぽいこと大嫌
いで、意地でも男っぽいことはしたくなくて、
だから結婚したり、女性と付き合ったりす
るのも嫌だったんですよ。

それが、これだけ年とともに変化するな
んて、自分でも不思議です。去年出版した
『マッチョになりたい!』(彩流社)は、お
かげさまで文芸年鑑にも紹介されて、
色々な先生に誉めてもらって、内容的に

は自信作です。しかし、如何せん、あまり
売れていません。学術的な内容なので、
インテリの先生たちからは評価してもらえ
ただけど、一般人にはちょっと難しい
ということだったみたいです。

次はもっと一般向けに男性ジェンダー
の本を書きたいと思っています。今、マッ
チョな友達に出会ってトレーニング中であ
るので、この経過をエッセイ風につづつ
て、『マッチョになった!』というのはどうか
なあと考えています(笑)。でもマッチョな
ボディになるのには1年ぐらいはかかるで
しょうねー。そうだなあ。もし、そういう身体
になれたら、思い切って、自分の裸の写
真を本に出してもいいかなあなんて、面白
がって想像したりしています(誰も見たが
らないか、笑)。そのためには、とりあえず、
マッチョにならなくては!!! もしなれな
かった場合は、『マッチョになれなかつ
た。。。』という本でも出しましょうか(笑)。

マンガ プレゼントのお知らせ

昨年に続いて、被災地や避難地域に暮
らす御家族に向けて、被災復興支援の小
冊子「木陰の物語 追憶の一步」110
頁を製作しました。ご希望の方は140円
切手を貼った返信用封筒(定形外)に住
所氏名記入の上、対人援助学マガジン編
集部 仕事場D・A・N(巻末に表示)にお
申し込み下さい。



「実習生がやってきた！」

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 010

千葉 晃央

知的障害者の労働現場には、様々な実習生がやってきます。対人援助学マガジンの連載では、西川友里さんが実習生を送り出す学校側のことを書いてくださっています。私自身も現在、社会福祉士養成課程の教務も担当しており、西川さんの連載をいつも楽しく勉強させてもらいながら、そして共感しながら読ませていただいています。

実習生を送り出す学校側、実習生を受け入れる施設側の両方を私は経験してきましたが、今回は知的障害者の労働現場に実習生が来たときのことを取り上げます。

■変化に弱い？

毎日、ほぼ同じメンバー、同じ職員が通う通所型の事業所（施設）では、来訪者は日々そんなに多くはありません。そんななかで、実習生は一定期間施設にいるのでとても存在感があります。

「変化に弱い」これは障害を持った方々の特徴としてよく言われている説明です。ある利用者の方が休んでいる間に、施設では大掃除があり棚を動かしたことがありました。後日、体調が戻り、いつも通りその方が施設に来ると棚の場所が変わっている。それを見つけて、そのままその場に立ちつくし、数十分動けず、独り言を繰り返す。しばらくすると突然、走り出して、施設の外にいつてしまうというようなこともありました。

こうした「変化」は生活につきものです。

ある程度そういうことも「平気」「経験済み」ということを蓄積していけるのも施設の場だと思っています。ですので、先述のエピソードも、単純に「失敗」エピソードとして捉えては不十分です。すごしやすい環境を整える、これだけでは、その整った環境でしか暮らしていけないということになりかねません。ご本人の心地よさと、できるだけ普通な生活（普通とは何か？というのがありますが…）の間、ご本人の状態等と折り合いを付けながらすすめていきます。この落としどころをご本人、ご家族と一緒に考えていくのが職員の仕事です。

こうなってくると、毎日ほぼ同じメンバー、同じ職員という、一定の環境であるという部分は施設の日々の安定というところからいえばメリットです。逆に環境への順応性を高める経験の場という視点からはデメリットです。過剰に保護的になりすぎてもいけないわけです。

以上のように、施設にいる私たちは実習生というストレンジャーの登場はいろんな意味での経験や学習の機会だと思っています。また、実習生は若い人が多いので、まず施設に活気が生まれます。若い子が来る、その人と一緒に何かできるかも、それだけでの反応ではないかと思います。老若男女関係なくです。例えば作業を教えるという自分の役割ができる、自分がしていることを次世代に伝えられる、知ってもらえる、

自分の知らない新しい世界、新しい世代の文化を知ることができる…などなどあげるときりがありません。

■ほんたいことば

必ず実習生が来ると「あんたのこと嫌いやし」（もちろん真意はその逆なんです）と喋って話しかけていく方もいたりします。そして、その反応として実習生は「私はなんかしたんだろうか？」と一人で悩んだり、そのことで職員に相談したり、時には泣き出したり。「自分がその人の調子を崩してしまった！」「その人に何かひどいことをしてしまった」「実習先に迷惑をかけてしまった！」というような気持ちになっていくこともあります。「よくあることやから気にしないで」と実習生に言うことも、職員にとっては定番になっています。

利用者の方が本当にデリケートな状況なら、まず実習生には接してもらえません。ケガ、事故に結びつく可能性もありますので。

■登場人物

知的障害者福祉サービスの利用者の中には、自閉症といわれる診断名をお持ちの方もおられます。自閉症の方の世界を知るには、ニキリンコ氏の著書や「自閉症だった私へ」（ドナ・ウィリアムズ）など当事者の著書や研究成果で知るしかないのですが、その方にとって日々の生活の中に登場している人物かどうかというのがあるような気がします。

私がかかわってきたところは、ケース担当制をとっていて、利用者が40～50人ぐらいの規模の施設です。担当ケースは1人で7～9人のことが多いように思います。担当利用者とのかかわりはたくさんあります。

職員として作業時間は作業をまわしながら、一方でケースへの対応もしていきます。私とあまり関わることがない、私には関わって来られない利用者の方もおられます。利用者が40～50人規模ですので接点が少ない方も当然出てきます。それは担当ケースへの支援を優先するためです。

その方には無理に関係を作ろうとはしません。もちろん無視ではないです。その方の日常では私がいなくても十分に過ごしておられるからです。学生や実習生にこの話をするとう「冷たい！」といわれるのですが、そうではありません。その人の日常に私がまず登場していないので、そこに無理に（役割や場の意味を持たずに）登場する必然性が認められないからです。

毎日、施設で働いている職員でもこのようなことがあるのが普通です。数日間しかない実習の中で、実習生が利用者に関わるということにも限界があります。自分のペースを持っている利用者の方もおられるのでなかなか関係が築きにくいこともあります。

また一方で、人へのこだわりがある方もおられます。いつもはいない人が日常の中にいる（登場）ということで、その人に質問をたくさんすることもあります。自分の中でその人が現れた理由やどういう人かを納得しようと試みているようにみえます。もちろん、若い方・新しい方への興味という要素もあります。そして、触ってしまうような接近過剰なことも起こります。実習生が、どの作業場に入るかも上記のような事情を踏まえながら、実習生の希望を含めつつも、職員、施設は適正な判断をしなくてはなりません。

■「障害者」とは誰か？

「障害者を介護する」「障害者に作業のやり方を教えてあげる」「障害者を手伝ってあげる」こういうことが実習の内容だと思ってくる実習生も多いです。私はよく利用者のことを知ってもらうことから始めます。実習生は利用者の方から作業のやり方を教えてもらう場面を作るのです。そして、実習生がなんとか作業ができるようになって、作業のはやさも、正確さも、品質も利用者の方のようにはすぐにはできません。この道 20 年以上の利用者の方もいるので、今日来た人がすぐにはかなうはずもないのです。

また作業によっては、手袋（ケガの防止と疲れの防止）、エプロン（作業着の汚れ、摩耗防止）、帽子（髪の毛の混入、頭のケガの防止）、マスク（粉じんの吸い込み防止）、耳栓（機械音を遮断し疲れ軽減）、ゴーグル（目に破片が入らないように）などを装着することもあります。これらの装着を毎日している利用者が実習生に装着の仕方や、それらの備品の置き方を教えるということもよくしてもらいます。例えば、手袋をはめてから、エプロンのひもは結べません。なのに、してしまった！ということで、間違えて焦っているという場面もよくあります。その横をすり抜けるように利用者同士で会話をしながら上記の装備を身に付けていく利用者もおられます。

時には全く障害を持った方に接したことがない実習生も来ます。その時は自然に接してもらえよう流れ作業に入ってもらい、協同で働くような作業も設定していきながら実習は進んでいきます。

それでも基本的に検品を実習生には任せ

ないことが多いです。（特に出荷前の最終検品は）世界のユニクロレベルの低不良率（「1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 007」対人援助学マガジン第 7 号参照）を支えるにはやはりこれは簡単には任せられません。

納期が厳しく、忙しいときには、実習生にも一緒に忙しく働いてもらいます。時には残業を自主的に手伝ってくれた実習生もいました。日々の仕事を確保する信頼関係を継続していく上ではそれが施設の現実です。

「福祉のところはやっぱり…」「障害者はやっぱり…」と言われたくはありません。作業を通して、そういった評価、偏見や差別を覆そうと考えています。

■実力です

何年も働いてきた利用者の実習生とでは体力の差が見て取れる場面も多いです。利用者の方は、日々の働きで体ができています。

以前、施設に子どもが来ました。9 歳でした。一方、発達検査で発達年齢が 9 歳といわれている利用者も通っていたりもします。利用者子どもと一緒に作業をしたのですが、明らかに利用者の方が仕事を根気よく、じっと座って丁寧に仕上げていきます。子どもは、しばらくすると立ち上がってウロウロとしはじめたり、飽きて手が止まったり。発達検査では拾うことができないたくさんさんの積み重ねがあることをあらためて実感した場面でした。

■とりあい

利用者の方も自分が遊んでほしい！自分も話したい！と実習生の取り合いのようになることもあります。

また、実習生が同じ利用者とのかわり

ばかりに偏ることも多いです。話しかけてきてくれる、優しい、親切な同じ利用者といつも実習生がいたりします。話しかけてこない利用者に対して意識がいないこともあるので、そのあたりを実習生に働きかけることもあります。

このような実習を通して「障害者はどっち?」「障害者って?」「障害って何?」こういうところを持ち帰ってもらうのが私たちの仕事のひとつだと考えています。

■実習生は作業禁止!

教員の实習、保育士の実習、社会福祉士の実習等の実習生が来ます。なかでも、社会福祉士の実習では、実習自体の科目名が「社会福祉援助技術現場実習」(←長い!)から「相談援助実習」に変更になりました。受け入れ側の施設の職員は、現在実習指導者講習(実習生に適正な実習を提供できるように考え方や技術を身に着けるのが目的)を受ける必要があります。このように法律が変わり、実習では実習生に作業をしてもらうのではなく、「相談援助」の部分を実習として取り上げると定められました。とはいえ、実態としては相談援助のみをしている実習先(施設)なんて、ごくわずかというのが実情です。相談機関は個人情報の保護もあり、実習生の受け入れには後ろ向きな印象です。それなのに「相談援助実習」であり、「相談援助」を中心に据えることが現在法律上では求められています。

「日常的に関わっている、時間を共有している、一緒に汗を流している、いつもお世話になっているからこそ、相談に乗ってほしい、相談に乗ることができる。このことを伝えなくてはいけない!」こう教えてくれたのはこの科目を長く担当されている

坂口伊都先生(東大阪大学)です。

相談はこちらで、毎日の作業はあっちに通い、行政の手続きは役所に行くというような福祉制度における機関、機能の細分化が進んでいます。その根底にある福祉制度が持つ「人間観」がとても心配になります。人間をどういうものだととらえているのか?です。

相談機関にいて、そこにいるスタッフに会って、心を開いて相談して、また別に毎日の作業はこっちなのでそこでもスタッフと信頼関係を構築して、サービスの利用のことはケースワーカーさんのところに行って、生活の困りごとを親身になって話せる関係になる。それぞれ場所も建物も違います。通うだけでも時間も体力も交通費も必要です。

こんなことは障害なんて関係なく、誰でも大変ではないのか?「変化に弱い」といわせているのは、こんなあちこちで人間関係を作ることを前提に求めている制度ではないかと思うときもあります。誰でも、新しいところに行き、新しい人に出会い、そこで自分の私生活の悩みを話すというのは精神的に負担です。でもそれをやれというのが今の福祉制度です。



(写真:橋本総子)

社会臨床の視界

(10)

ソーシャル・ナラティブと社会臨床

- 変わりにくい日常という物語を書き換えることの重要性と
社会の物語構造に着目することの意義について -

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

1. 物語としての社会

前号では児童移民とケア・リーバー（児童養護施設で育った人たち）のことを記した。

イギリスの児童福祉の基本となっている社会的養護について、子どもたちが一貫した人生の筋をつくる、つまり自分の人生の物語を構成していく作業を支援するライフストーリーワークが大切となり、それはトラウマケアともなる臨床的な取り組みであることを紹介した。さらにそれだけではなく、児童移民のような集団的体験は社会の側もそれを包摂した物語をもつ必要があることも強調した。「排除の物語」であったものから、謝罪と和解、史実の探求、修復と回復、理解と共有を基調とした「包摂の物語」に書き換えられるべきだ。これは再物語化＝再著述化とナラティブアプローチでは考える。映画や小説はそれに相応しい媒体となる。研究もまた歴史を冷静に見つめる。

マクロにみれば、児童移民は「帝国のシステム」として作動していた一部なので、それはシステム内部の問題であり、したがって排除の物語という意味づけがあったわけではない。相克はあったにせよ、それを是とした当時の社会の、そして当地の必然

があった。しかし後世からすると別の物語となる。社会的養護の子どもたちを文字通り社会が引き受けるための物語が必要となり、謝罪と和解、再会と修復があるからこそ、個人が自らの歴史を一貫させる支援としてのライフストーリーワークがうまく機能する。そのためにも再著述の力点としては包摂という新しい社会の物語を構築することが大切となる。物語とはひとまとまりとなった意味の体系であり、人々の了解や共感の、行動と規範の源泉となる。ここではそれらをまとめてソーシャル・ナラティブと呼んでおきたい。個人だけではなく社会もまたその有り様を変容させる必要に迫られるという意味での社会臨床的なものの見方である。映画や小説や研究をとおして児童移民についての物語の書き換えとなり、里親を中心とした社会的養護の仕組みがさらに強化され、イギリス児童福祉の厚みをもたらす物語の変更であるようにすることは現在を生きる者の責任であろう。

物語を表現する際に、演劇、映画、小説は格好の手法となる。あいまいで、揺らぎのある、相互作用をとおして変化する関係性という側面は、児童相談所や少年刑務所をはじめとしたいろんな臨床の事例では極めて重要なので、そこからくみ取るべき事柄は大切にしたいと思う。人間行動の不可

解さも含めて逸脱行動や社会病理の理解には広い視野が重要で、趨勢となっている科学的な思考、たとえば、リスク統計的な定量的思考、数理的な根拠づけ、概念的分析的なアプローチにくわえた異なる視点が求められる。だから、あいまいなもの、割り切れないもの、発想を刺激するものを重視するのが社会臨床の視界である。これらは視野を深め、広げ、時にはかすめ、攪乱させてくれる。これを第1号では「家族は小説より奇なり」とも表現し、第4号では「社会の詩的言語としての臨床と表象」と呼んだ。今回の文脈では「ソーシャル・ナラティブ（複数の声から成り立つ〈社会〉の物語）」にとらえ、別の角度から眺めてみることにしたい。

2. ヤン・ヨンヒ監督の映画 - 『ディア・ピョンヤン』から『かぞくのくに』へ

生老病死、貧病争苦があるところには個人の物語とともに家族の物語があり、それは私憤や受苦や被害の体験をもとにする。さらに、ある程度の広がりや関心をもとにしてその物語は、公憤、共感、連帯そして支援などの公共化する行動や作用を媒介として、社会の物語へと変容していく。支配的な物語としてあったものがそうではなくなり、時には都合のよいように、時にはよりよいものへと、また時には新しい価値の創出のために、随時、書き換えられていく。何らかの社会的変化は物語の書き換えとしてすすむといってもよい。制度やシステムの変更につながると公的な書き換えとして国家の物語も登場する。

以前にも述べたことだが、ナラティブセラピーやナラティブアプローチという言い方は、支配的な物語の書き換えということ

に関心をもつマイケル・ホワイトらの流れをくむ言い方である。セラピーとしての臨床的な対話を組織する際に、支援する者とされる者ではなく、ソーシャル・ナラティブとして再構成するための共同作業者のような立ち位置が大切だと学んだ。マイケルはベトナム帰還兵へのセラピーや暴力加害への臨床を例にしてその立ち位置、つまりポジショニングについて語っていたことを紹介した。児童移民の事例も同じであり、語る者のポジショニング（この場合は、児童移民問題をネグレクトしないための権利擁護と社会的養護の視点）とそれをソーシャル・ナラティブとして再物語化することの大切さを思う。

他にもこれらと同型の主題は社会のなかに遍在している。アート系「京都シネマ」の代表をされている神谷雅子さんと一緒に「シネマで学ぶ社会と人間の現在」というテーマで数本の映画と対談をセットした企画を組んでいる。立命館大学の人間科学研究所が実施している（これらの言葉で検索してもらおうと経過がわかるが、現在は「シリーズ 13」となっている）。シネマ企画はこうしたソーシャル・ナラティブの視点から練り上げている。2009年1月は「家族の現在」と題したシリーズを組んだ。そのひとつとして映画『ディア・ピョンヤン』（2006年）を上映し、監督であるヤン・ヨンヒさんを招き、作品をめぐるあれこれについて神谷さんが聞き役となり対談をお願いしたことがある。

『ディア・ピョンヤン』は北朝鮮を祖国と仰ぐ父と娘のヤン・ヨンヒさんの関係に焦点をあてている。第2作目の『愛しきソナ』（2009年）は北朝鮮に住む姪の成長を描いたものであるが私はまだ観ていない。『かぞくのくに』（2012年）は北朝鮮に渡っ

た三人の兄との関係に焦点をあてた家族の物語である。これは創作であるが、実話は『兄：かぞくのくに』（小学館、2012年）として出版されている。この書物は映画の背景を赤裸々に記したドキュメントである。「私には三人の兄がいる。兄は北朝鮮にいる。『帰国事業』で北朝鮮に渡っていった兄と私と『かぞく』の真実の物語」と書き始められている。

全部、自らの家族の日常を映し出した作品群である。徹底した家族の物語なのだが、その日常には現代日本の家族からすれば非日常とでもいうしかない現実が組み込まれている。朝鮮半島をめぐる現代史そのものが直に表出されているからである。ヨンヒさんの家族は朝鮮半島をめぐる世界の渦に巻き込まれ、錯綜する。父は朝鮮総連の幹部、1959年にはじまり、1960年代にピーク迎え、1984年まで続いたとされるいわゆる「帰国事業」があり、宣伝されたような「地上の楽園」でないとなりに分りかけた段階で父は中学生だった三人の兄を北朝鮮に送り出したという。本来の出身地ではない「北」に93340人が「帰国」した。彼女の兄たちは1971年から1972年に「帰国」した。幾度かその兄たちと会うために妹がピョンヤンにわたる。長男は躁鬱病に罹っていた。その後、父もまた病に伏した。母は実に健気に兄たちに物資の仕送りをつづけている。こうした家族の様子がこれらの作品に描かれている。兄が病気の治療のために三ヶ月だけ一時帰国を許された。しかし終始、監視がついている。家族は自由に話しもできない。検査の結果、手術が必要で、3ヶ月では短いと医師が告げる。兄は寡黙であり多くを語らない。その静かさにかの地の困難が透けてみえる。そんな具合の家族のやりとりが映画には描写され

ている。

3. 「帰国事業」と帰国意思 - 物語の創造

ヨンヒさんは入口と出口の「あいだ」に埋め込まれたテーマを観て欲しいという。在日、親子、恋人関係、介護、思い出、仕送りなどのいろんな「あいだ」がそこにある。はじめに家族ありきの映画である。でも後景に国家の問題がうつり、出口は狭い。『ディア・ピョンヤン』で主役だった父はすでに亡くなり、その墓は北にある。長兄もまた先立ち、その墓もピョンヤンにあるという。「悩んだんです。故郷は済州島ですから。でもピョンヤンにいる次男、三男や孫が墓参りできるようにと。去年、大阪に住む母が遺骨を持って行きました。離散家族ですね。普通に家族と会うとか墓参りするとかって、こんなに難しいのかと。今は行き来さえできれば国は二つでいい、統一しなくていいと思います。北極や南極の方が近くに感じます。隣の国なのにね。」（「家族と国のはざままで・撮る・映画監督ヤン・ヨンヒさん」（『朝日新聞』2012年8月15日、朝刊）と語る。

「帰国事業」は韓国からみると「北送事業」とされる。そしてイギリスの児童移民でも非営利団体や教会が活躍していたが、ここでは国際赤十字社が関与していた。北朝鮮と日本には国交がないからである。また日本国内では北と南を代表する民間団体（在日本朝鮮人総联合会と在日本大韓国民団）が活躍している。くわえて当時の在日朝鮮人問題の解決をも日本政府は意図していたという。さらにアメリカ政府の野望も重なる。これが入り交じり歴史における利害の錯綜と一致も重なり、「地上の楽園へ帰ろう」という物語が創られた。どうして

9万人もの人々が、文字通りの「エクソダス」(集団的移動や脱出のこと)として自らの出身地ではない「北へと帰国する」ことを希望したのかは必要な情報が公開されていない面もあり、今後も検証がすすめられるべき課題となっている。

たとえば、テッサ・モーリス・スズキさん(オーストラリア国立大学教授)の『北朝鮮へのエクソダス - 「帰国事業」の影をたどる』(原著 2007年 朝日文庫 2011年)がある。マクロな歴史記述を元にしていて個人や家族の個別性も描かれた物語的記述となっている。姜尚中さんがその解説文で「歴史の詩学」としてこの書物の意義を評している。歴史の研究という枠を越えた、ここでいうソーシャル・ナラティブに近い表現で、ひとりひとりの顔と家族の事情と歴史の必然と偶然の錯綜した様子が描かれているからである。

菊池嘉晃さんの『北朝鮮帰国事業 - 「壮大な拉致」か「追放」か - 』(中公新書、2009年)にも教えられることが多かった。「大量帰国を生み出したのは、彼らの帰国意思形成をめぐるプッシュ・プル要因にあった」という。「就職支援や差別解消の啓発など定住・共生への責任ある取り組みはほとんどなく、貧困、差別、不安定な法的地位など日本でのマイナス(プッシュ)要因が帰国者らの背を押したのは事実だろう」(232頁)と指摘し、日本社会の側、つまり「こちら側」の影を見過ごせないという。もちろんプル要因もある。「地上の楽園」という物語をつくりだした社会主義国家と社会運動の側(これは民族と革命の物語)である。両者の相乗効果にくわえ、さらにその背景となっていた東アジアをめぐる世界政治の状況が重なる。文字通りの重層的な物語である。

「帰国事業」は強制移住ではなく自発的な意思を尊重するかたちをとっていた。物語作用として社会的に形成された「帰国意思」があり、それを前提に個々の家族の「決断」が行われ、物語が動き出す。ひとつひとつの家族の物語はみな違いますが社会的に構成された物語という大きな方向づけがそこにはある。この「帰国事業」の渦に巻き込まれた家族と個人も児童移民問題と同じようなソーシャル・ナラティブというアプローチがよく似合う主題となっている。

4. ソーシャル・ドキュメンタリーというアプローチ

ソーシャル・ナラティブというアプローチに近いものとして、映像の領域ではソーシャル・ドキュメンタリーといういい方がある。その集大成のひとつに『ソーシャル・ドキュメンタリー - 現代日本を記録する映像たち』(萩野亮・編集部編、フィルムアート社、2012年)という書物がある。この書物の「まえがき」ではソーシャル・ドキュメントはいわゆる「社会派ドキュメント」のことではないと強調されている。従来の社会派に色濃くある啓蒙や反体制の色調とは異なるのだという。では一体何であるのか。「<個>の視点を元にする表現、家族や自身の記録にある社会的な広がりをもつもの、より軽快に、より等身大の空間感覚から、社会のあり方が問題提起されている一群の作品を指した総称だ(4頁)とされる。

このアプローチはここで述べているソーシャル・ナラティブに近い。媒体が映像であるという違いくらいだ。すべての事柄がそこに係留される、そこに参照枠がある、そこに回帰し、そこから生成する、意味の源や磁場となる日常性が私的体験も含めて

表現されていく。日常そのものが懐胎する、清濁併せ持って動いている、国家と社会と世界の「ねじれ」を生き抜かざるをえない現実をとらえたいと思うソーシャル・ナラティブはこのアプローチに近い。私憤、被害、受苦、混乱、錯綜などの体験や出来事は、科学的な学問研究も含みこんでナラティブ化され、ドキュメント化されることで、共苦、公憤、対話、理解、恢復などの社会の物語へと編みあげられていく。その過程はダイナミックである。割り切れない現実が多いのだが、社会の物語として流通することで制度やシステムの変更につながることもある。その記述と表現のもつインパクトはソーシャル・ナラティブとソーシャル・ドキュメンタリーという手法をとおしてひとつの可能性を得ると私は思っている。

かつて「個人的なことは政治的なことだ」とフェミニズムは語った。しかし、現代からすると、政治といえどことなく無骨で無粋ないいようである。あちら側とこちら側、つまり敵と味方に区分けするような二分法がちらつき、「女性対男性」を彷彿させるのであまり用いたくない。私としては、「こちら側の問題性」をも射程に入れて劈開したい。どちらかといえば「メビウスの輪」のようにねじれてつながり、プーメランのようにこちらにも帰ってくる、そんな関係性を射程に入れたいと思う。なぜなら、自らも構成員としてそのシステムを成していることを考えると、そのような関係性を視野にいれ、その言明をより複雑にして、個人的なことと政治的なこととのつながり方の問題として、単なる二分法的なものだけではない「錯綜」をおいておきたいと思うからである。

ヨンヒさんの私的な家族のかかわりを描く入口と出口の「あいだ」には実に多様な

もの、たとえば社会的で公共的で政治的な事項が召喚されてくる、そんな家族の日常なのである。観る者によっては「非日常的現実」と映るが、「拉致家族問題」とはまた異なる位相で「北朝鮮との関係を生きる家族」がそこに描かれている。国家間関係や戦後世界政治の大きな物語としての朝鮮半島をめぐる物語ではなく、家族の物語のなかから立ち上がるこの社会のもつ「きしみ」や「ねじれ」の物語である。そして何よりもそれらをひきうけて生きている家族があり、個人がいる。まずはそうした現実をそのものとして受け取ることが大切だと思うので、ソーシャル・ドキュメンタリーといういい方が効果を持つのだろうし、ソーシャル・ナラティブを聴いて共感するのだろう。

しかしその前に、そのものとして語ることそれ自体のリスクがあるテーマ群をこの手法は選び取る。現に家族の喜怒哀楽を語っただけなのに彼女は北朝鮮への入国を拒否されている。物語化困難な現実が開示されていく。それは私の隣にある質量感をもった日常性である。「帰国事業」や児童移民のこのあとに家族問題を考えると、私の生きる家族との異同とともに家族問題の振幅を考えることを余儀なくされる。そうするとそれに感応し、応答し、近似の現実を理解し、感受する家族支援者や家族問題の研究者であることが要請される、あるいは少なくとも、家族問題のもつ社会性や公共性や個別性を視野に入れつつ、私にできる家族問題の解決への実践と倫理が私的にも公的にも問われることとなる。

この点は、先のマイケルのポジショニング論にならって言えば、選択的夫婦別氏制度や男性問題へのこだわり、そして「家族中心社会・日本」のもつ負の側面を理解し

た上で家族療法論や家族システム論、そして家族問題解決にかかわる実践倫理的な方法論がいかに大切であるかといつも考えている私の背後仮説のように存在している大事なポイントである。

5. 日常性を見据え、それを表現すること

この「帰国事業」という物語もまだまだ解明されるべきであり、現に、1984年まで続いたとされる「帰国者」は家族の現在を「北」でいまも生きている。「帰国事業」の全体像となるとその物語は垣間見えるだけである。また、行き来できるだけでいいとはならない「拉致家族」や「脱北者」もいて、物語はさらに錯綜し、重層的となる。「北と南」という現在を肯定し、そのなかで暮らす家族の安寧が保たれる、安否の情報やりとりだけでもできるということそれ自体、とてつもないことだといえる現実は無視できない。「統一という物語」でなくともいいというヨンヒさんの思いは切実に届く。

さらに他の国々のことであるが、分断された民族や国家の問題が変容した後にもなお残るのは、そのなかを生きてきたひとりひとりの人生の物語の重さについてである。今回は詳しくは紹介できないが、具体的には国家の物語が急速に変化した社会での人々の再物語化とトラウマ的な体験の乗り越えのことである。たとえば、『過去と闘う国々 - 共産主義のトラウマをどう生きるか』(ティナ・ローゼンバーグ、新曜社、原著1995年 翻訳1999年)では、チェコスロバキア、ポーランド、ドイツの事例が具体的に書かれていて、それはそれで大変な経過をたどることが詳述されている。これは「人間が過去を書き直して現在に合わせら

れる能力 - とくに恥ずべき過去と共謀した自らの個人体験を書き直せる能力」(頁)に焦点をあてている。正統性が急速に変化する国家の物語構造の変化に遭遇し、社会、そして個人や家族はどう対応するのか、それがトラウマ的体験のようにしてあることについて知ることの重大性がわかる。革命や変革それ自体への関心は高まるが、その後の社会への関心をも持続させていきたいものだ。

体制変革という「革命の物語」に比べると、「喪失からの回復」の物語はより時間のかかるものである。社会臨床は「革命の物語」ではなく、その予後も含めて社会の回復を視野に入れたいと思うし、一方的に変わるべき守旧的なものと、それを変える者がいるのではないと仮定する。「こちら側」でそれを支えるようにしている頑固な日常があり、変革を唱えるものもそこに巻き込まれている日常の重さがある。

そのよい例を扱った映画がある。『グッバイ、レーニン!』(2002年、ドイツ)である。ベルリンの壁が崩壊する前の東ドイツの首都ベルリンに暮らす息子と母の物語である。母の人生は社会主義の暮らしにどっぷりついていた。しかし時代は変化し、ベルリンの壁崩壊間近となった。息子はその反体制運動に関わっている。デモに参加していた息子をみて母は心臓発作を起こす。昏睡していた間にととう壁は崩壊し東西が統一された。しかしその弱った心臓はこれ以上のショックに耐えられないだろうと医師はいう。そこで息子は一計を講じた。なお東ドイツはそのままであり、母の信奉する社会主義体制は以前と変わらずに続いているという壮大なお芝居を打つことにしたのだ。ニュースを捏造してまで西側化する社会を隠す。あたり前のようにしてあっ

た日常の変化が人々の意識や態度にまで腑に落ちるにはより時間がかかり、負荷ともなることを描いている。だまし続けることの騒動がコミカルに描かれているが、息子が自らの信念を無理に母に押しつけようとせず、むしろ社会主義の元で長く暮らしてきた母の思いと生活に配慮しようとした心配りに感銘を受けた。国家の物語、社会の物語とは異なりをみせる個人と家族の物語である。だから、この息子のようなケアのところが要るのだと思う。確かに共産主義という過去は変化していくが、そのもとで生きてきたという重みや歴史や生活を無視できない。母は個人として、家族としてそこを生きたのだから。日常としてその時代と社会を生きている人たちを一刀両断には否定できないのだと思う。「拉致」や「脱北」や「入国禁止」という壮絶な体験も含まれながらそこには「帰国事業」とおして「北の今」を生きる人たちがいて、レーニンは確かに母を含めて東の人々を生かし続けた重みもあり、また、現になお社会主義社会で生活を送る人々もいて、その功罪と清濁の全部をあわせた社会的現実、そして何よりも西の国々にも課題が山積していることや南の問題もたくさんあることをとらえるためにも、ソーシャル・ナラティブとソーシャル・ドキュメンタリーというアプローチは大切にしたいと思う。

6. 村上春樹さんの発想 - あちら側とこちら側、「合わせ鏡」に映るもの -

児童移民のことを遠い国の、過去の話としてではなくケア・リーバーの問題として再定義してみるとまた異なった把握ができると指摘した。合わせ鏡に写る「こちら側」を照射するものとしてそうした諸課題を置

いてみるとよいのではないかという意味だ。いわば「メビウスの輪」のように捻れてつながる、あるいは「むこう側とこちら側」を架橋する、そして被害と加害の「あいだ」や影として社会病理をみることなどが社会臨床の関心であるとこれまで書いてきた。そうした見地をさらにソーシャル・ナラティブとして意識化していきたいと思っている。

こうしたことに敏感な作家のひとりには村上春樹さんである。地下鉄サリン事件の被害者へのインタビューを試みた動機はこの視点だったと記している。それはオウム真理教とは何であったのかという問いであるが、社会病理学者もまた共有すべきものである。

地下鉄サリン事件と同じ 1995 年の阪神淡路大震災がその後、ボランティアや NPO という新しい物語をもたらしたように、物語構造としてみると、オウム真理教幹部による地下鉄サリン事件からいかなることを考えるべきなのかと問い、被害者へのインタビューを試みた。それを編集した分厚い書物が『アンダーグラウンド』(1997 年 講談社文庫 1999 年)である。そのあとがきは「目じるしのない悪夢 - 私たちはどこに向かおうとしているのだろうか?」と題されている。被害者問題とは端的に言えば二次被害のことである。サリン事件の被害者でその後体調が思うように回復せず仕事を辞めざるを得ない人がいた。「二重の暴力性」と村上さんはいう。それは「むこう側」の課題ではなく、「こちら側」の私たちの課題であるという。被害者インタビューをとおして「むこう側とこちら側」が根っこでつながっていることを明らかにしたいという。だから「アンダーグラウンド」なのだ。もちろん地下鉄での事件だったからと

いう意味もあるが。

さらに物語としてみると、麻原彰晃による安物の救済の物語を阻止できず、現代日本社会における「物語の脆弱さ」を示したものとしてオウム真理教問題があると村上さんは続ける。物語の創造にかかわる作家の責任を自覚した言い方だと思う。あちら側や加害者や異常者たちが一方的にしているのではない。たちうちできない、阻止できなかった物語の欠如をこそ教訓にすべきだと彼はいう。そして、物語のための意味づけを他者に委譲していただろうかと問う。

この村上さんの問いと類似の問いは社会病理をめぐる諸問題には枚挙に暇がないほどである。たとえば「戸塚ヨットスクール問題」である。ここはスパルタ式に問題行動を直すという施設である。寮生は家族に連れられて常に一定数確保されていたということは何を意味するのだろうか。これも「物語の委譲」である。必要悪なのか、最終的な解決を託したのか、他に選択肢はなかったのか。

『平成ジレンマ』(2010年、齋藤潤一監督)という作品がある。スクールでのしごきが原因で入寮生が亡くなった事件で訴えられ、4年間の刑期を終えた戸塚ヨットスクール校長があたりまえのようにして学校を再開する様子を描いたソーシャル・ドキュメンタリーである。彼を求める人々とともに体罰を必要とするという彼の主張が響く。しかし最後の場面はスクールに入ってくるのが長引いたひきこもりの40代の男性であることから問題のフェーズが変化したことがわかる。やんちゃな非行少年はもう来ない。しかしそれでもスクールに入りたいという人が家族と共に訪れる。行き場のない人たちを誰が、どこが引き受けてい

るのか、と映画は問うているようだ。別の話題ではあるが刑務所も福祉化していると山本譲司さんは『累犯障害者』(2006年新潮文庫2009年)で書き、高齢者や知的障害者たちの排除の物語を描いた。社会的な包摂や統合の物語とそれに支えられたシステムと制度の未整備、家族が最後のよりどころになっている家庭内暴力への無策、虐待が発生するたびに騒ぎはするが社会的養護への関心が向かわない冷淡さなど、「こちら側」の「物語の委譲」の構図、この場合は社会的なネグレクトの様相がみえてくる。

村上さんはこうして合わせ鏡に映り、事件をとおして透視される「こちら側」の論理とシステムこそを問うべきだという。「『あちら側』が突き出てきた謎を解明するための鍵は(あるいは鍵の一部は)ひょっとして『こちら側』のエリアの地面の下に隠されているのではあるまいか」(740頁)という。その『こちら側』とは『一般市民の論理とシステム』であり、『あちら側』とは、『オウム真理教の論理とシステム』であり、両者は一種の合わせ鏡的な像を共有していたのではないか。(744頁)それは「自分自身の内なる影の部分(アンダーグラウンド)ではないか。・・そこには我々の自我と、それが作り出す『物語』が関わっている」(745頁)と考えている。「もしあなたが自我を失えば、そこであなたは自分という一貫した物語をも喪失してしまう。しかし人は、物語なしに長く生きていくことはできない。物語というものは、あなたがあなたを取り囲み限定する論理的制度(あるいは制度的論理)を超越し、他者と共時体験をおこなうために重要な秘密の鍵であり、安全弁なのだから」(750頁)。

7. こちら側を把握する

そのためにまずはメディア・リテラシーである。マスメディアは「地下鉄サリン事件とは要するに、正義と悪、正気と狂気、健全と奇形の、明白な対立」(736頁)を描いた。連載第2号では「思考のレッスン」と記し、この枠づけからとりあえず自由になる素材をたくさん紹介した。それほど多様に、社会病理にはこの種の「悪のドラマ化」が常套的である。「マスメディアの基本姿勢は<被害者=無垢なるもの=正義>という『こちら側』と、<加害者=汚されたもの=悪>という『あちら側』を対立させることだった。・・このような相互流通性を欠いたモーメントの行き着く先は、往々にして、煮詰められパターン化された論理であり、淀みがもたらす無感覚である」(740頁)という。

しかしそれに対して「こちら側の私たちはいったいどんな有効な物語を持ち出すことができるだろう？麻原の荒唐無稽な物語を放逐できるだけのまっとうな力を持つ物語を、サブカルチャーの領域であれ、メインカルチャーの領域であれ、私たちは果たして手に入れているだろうか？」(753頁)「あなたは誰か(何か)に対して自我の一定部分を差し出し、その代価としての『物語』を受け取ってはいないだろうか？私たちは何らかの制度=システムに対して、人格の一部を預けてしまっていないだろうか？もしそうだとしたら、その制度はいつかあなたに向かって何らかの『狂気』を要求しないだろうか？・・あなたが今持っている物語は、本当にあなたの夢なのだろうか？それはいつかとんでもない悪夢に転換していくかもしれない誰か別の人間の夢ではないのか？」(753-754頁)と問っている。「それらはともに私たちの内部から - 文字

どおり足元の下暗黒 - 地下(アンダーグラウンド)から - 「悪夢」というかたちをとってどっと吹き出し、同時にまた、私たちの社会システムが内奥に包含していた矛盾と弱点とをおそろしいほど明確に浮き彫りにした」(767頁)。

そしてその後も9.11の米国でのテロがあり、昨年には東日本大震災があり、フクシマがあり、もっと身近には滋賀県大津市でのいじめ自殺があり、各地での子ども虐待死亡事件や家庭内暴力事件がある。それらは同じくシステムの綻びを顕わにする。私たちは、日々、その同じシステムを生きている。いじめ、自殺、家庭内暴力、不登校やひきこもり、薬物依存など、それらはすべて地続きにこちらの世界とつながっている。これはしつけであるとして虐待があり、夫婦喧嘩と何が違うのかとDV加害者はいう。これは遊びやふざけの一環だったとっていいじめの暴力性が軽くなっていく。叱咤激励にハラスメントは宿る。相手の尊厳に傷をつけ、罵ることをモラルハラスメントは捕捉した。行きたくない/行けない学校の現実是不問に付されて不登校が語られる。生き辛さや言葉にならない鬱積と薬物依存は近い。言葉にならない身体の反乱が暴力をひきおこす。こうして日常性に病理は宿る。こちら側もその日常という現実を生きている。フクシマはさらに多くのことを問いかける。原子力を夢見てきた長い戦後の歴史と電力の一定部分をそれに頼って生きている現実があり、それを支えた科学技術もあり、日常性から問い直すべき格好のテーマとなる(たとえば、吉見俊哉『夢の原子力: Atoms for Dream』ちくま新書、2012年など)。どこもそうだろうが私の出身高校は戦後になって校歌

を変えた。「原子の時に生を受け、ゆくてけわしき道をすすむ」というくだりがある。広島や長崎のことを踏まえた歌詞であると習った。もちろんそこには原子力の平和的利用という共同の夢見る物語も含まれていた。チェルノブイリやスリーマイル島やフクシマは想定されてはいなかった。こうした類いの夢物語は他にもあるのだろう。

ジェンダーの意識もまた同じ。虐待や暴力を含んだ家族に接することが多い仕事をしていると、同じように、男性性や父性のはき違えを無意識に生きている加害者が轍（わだち）にはまり、愛すべき家庭内の弱者を苦しめている様子と重なる。この場合は安物の「男らしさの物語」にかけがえのない家族を譲り渡してしまった男性や父親や息子の行き詰まりがみえてくる。ナラティブセラピーとしてはその安物の、しかし支配的に、頑固にも流通している、変わりにくい日常的な行動規範ともなっている「男らしさの物語」の書き換えをおこなうこととなる。

こうして社会病理の数多くの事例には、冷淡な傍観者の姿、システムへの過剰な期待、リスク社会の喧伝と扇情、悪のドラマ化への加担、安物の物語への依存など「こちら側」の影が映る。それらはみな「物語の委譲」である。そうではなくてできることをする、日常からの思考、二分法への疑い、あいだへの関心などからみえてくることは多い。

8．物語を書き換えることと知のかたち

社会の物語の再構成を行う際に「社会と臨床」という大きなフレームが貢献する。そこから生成する「臨床の知・実践の知」

についての体系化をしたいと考えている。このマガジンを連載している方々のなかには、同僚の教員たちとチームティーチングで教えた大学院の修了生たちがいる。それぞれ物語を書き換えようとして実践してきた経験を持ち、そのことをバネにいまでも努力をしている方々である。

テーマは多岐に渡る。不妊治療であり、スポーツ事故であり、不登校児の認定フリースクールであり、学びの場づくりであり、男性問題という新しいカウンセリング領域の開発であり、精神科デイケアでの回復をめぐるやりとりである。緩慢なようだがしかし確実に動いていく日常が捉えられている。社会の物語を書き換える営みとして、こうした方々の、当事者研究風の描写によって、告発や非難だけではない、しかし単に科学的なだけでもない、ソーシャル・ナラティブとでもいえる社会臨床の記述をとおして可視化されるものの集積は貴重だと思う。こうした積み重ねの結果、制度に風穴があくこともある。認定フリースクール、修復的対話と和解、不妊カウンセリングの開発、男性問題という新領域への挑戦などはその典型だろう。そんな知的なインパクトを大切にしたい。

日常を生きるという意味では実に身近な話題ばかりである。とはいえ、そうしたことを記述するための知の制度は固有にあった方がよいと思っている。臨床の知は個別性を物語として取り出すのに有益だ。これらは合流して「知の創造工房」のようになるといいなと考えている。そのために、制度疲労を起こしている「大学院」という制度を、社会人の実践や知恵が単に当該領域の専門知やその作法にならって表現されるのではなく、ソーシャル・ナラティブという知に変換できるように機能させられれば

と願っている。単に「大学院」が社会人を受け入れるというだけでは無益だろう。新しい知のかたちの創造と流通のためにこうしたデジタルマガジンは力を発揮する。『ドキュメンタリーの修辞学』（佐藤真、みすず書房、2006年）がいう「素材先行主義」（当事者としての特異な体験や出自を過剰に扱うこと）の相対化や社会化にも貢献するので、共通言語として流通しやすいある形式のもとに臨床や支援の実践言説を整形することは大切だと思う。しかしそれが単に既存の学術的なものへと回収されていくだけでは意味が薄れる。新しい知のかたちが求められているのだと思う。

他にも知のかたちとしてこのソーシャル・ナラティブに近い手法にノンフィクションというアプローチがある。すぐれた作品が多い（石井光太編『ノンフィクション新世紀』河出書房新社、2012年が参考になった）。別途、検討してみたいが、ノンフィクションは書き手の意思が前景化する、つまり執筆の意図がよくでた表現方式となる。これは、ソーシャル・ナラティブとの関連では「編集」という作業の位置づけとの関わりで是非とも吟味しておきたい論点である。さらにそれぞれの学問分野における質的調査や事例研究やフィールドワークなどもあり、ソーシャル・ナラティブとの比較で考えていきたいと思う。

9. さいごに

映像によるソーシャル・ドキュメンタリーであれ、物語によるソーシャル・ナラティブであれ、受苦と受難、私憤と不幸、被害と苦痛、混乱と閉塞などの出来事と体験を社会の物語として変容させていく過程で、それらは、公憤と共苦、支援と連帯、回復

と理解などを基調とした物語構造が産み出されていく。臨床や支援の領域では、当事者と研究者の二分法や質的研究と量的研究の二分法が散見されることもあり（もちろん対立的という意味でなくどんな共同関係ができるのかを想定しての意味であるが）、ソーシャル・ドキュメンタリーやソーシャル・ナラティブはその乗り越えも意識している（量的研究の質にかかわるメタ的研究や質的研究の客観化の手法開発も進んでいるが）、当事者であれ（前述した素材先行主義とも重なる）、研究者であれ、臨床家であれ、表現者としての工夫が要ると思うからだ。ここではそれをソーシャル・ナラティブやソーシャル・ドキュメンタリーという視点で紹介してみた。臨床と支援の現実をよりよく表現し、物語の書き換えに向かう知のかたちとしてさらに追求していきたい方法論である。社会臨床の視界に入ったものを伝達する手法を精緻にしていきたいと思う。

追記

入手しやすいこの連載、全編とおして丁寧に読んでくれている方がおり、8月初めの暑い日、東京からわざわざ京都まで訪ねてこられた。夏休みで学生が少なく閑散とした大学のブック&カフェ風のオープンスペースで長い時間かけて連載で扱っている事項のあれこれについて、行間を埋めるような内容の話をした。私よりはお若いその方は毎号の内容について印象に残る言葉を書き出していたのでそれを見せていただいた。ぎっしりとしたメモの束だった。もちろんどうしてそんな具合に関心をもってきているのかについて私もお聞きしながらだったので対話のような時間となった。文

脈の理解をしてきているその方との会話は弾み、行間といっても私があまり意識していないところまで突っ込んでくれたので私としても発見があった。その時はそれでも時間が足りずに、話の最後の方になってナラティブや社会詩学とは何かの話になった。ここで記したことをいおうと思ったのだが時間切れとなった。彼女の質問に応えるような思いで書いた次第である。

こうして連載が10号分もたまると、講演や取材を依頼してくる方、大学院で勉強したいという方、学部や大学院のゼミの学生たち、臨床の現場で出会う専門家たち、そして研究者仲間にもこの連載の紹介をすることがある。少々ハードに、かつボリュームをもたせて書いているので、「アカデミック・エッセイ」と紹介することになっている。第1号に書いたように元々は備忘録として書いているので私の頭の整理のようではあるが、こうして読んでくれている方もいて、また場合によっては読んでくださいとお勧めすることもあり、社会臨床の論としては一貫させようと心がけている。とりわけこうしたオフ会のような出会いがあると、どんなものであれ、やはりものを書いていることの責任を感じる。彼女は今回もまた丁寧なメモをとってくれているかと思いつつ思考の連鎖に終わりは来ない。

ケアマネの出会った 家族たち

1 0

～ 家族理解と家族支援 ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

～ 家族のかたち～

ケアマネの仕事始めて、実に多くの高齢者とその家族に出会いました。担当した利用者はこれまで、100人ほどになります。当然それだけの家族にも出会いました。そして、ケアマネとして「介護」という課題を通して家族との関係作りも様々でした。

介護の問題さえ解決できればうまく生活が続く場合には、家族の事情に深く入り込むこともなく支援が進むケース。反対に、介護の問題というよりは、長年の家族関係が「介護」の問題を大きく重くしているケース。その状態をなんとかしたい、ということで、ケアマネが家族の関りに深く関わりや支援を展開していくケース。或いは、客観的に家族を捉えた時に、「大丈夫かな。もう少し何とかならないかな。」と思いつつも、家族が問題意識を持っていないので深い介入もできない事例などがありました。

家族の形は様々です。「これが、正解。これが、

家族のあるべき姿」と規定することはできません。まわりから、どのように映ろうとも、家族が自分たちの在り方をよしとしているならば、それでよし。第三者がごちゃごちゃいう必要はないのです。

今回は、もう少しなんとかならないかな、とケアマネが感じながら、なかなか介入の糸口がつかめず時間が経過してしまった家族の話です。当然よからぬ状況も発生してしまいましたが、時間経過の中で家族が「こうありたい」という生活像を思い描いた時、その家族の持っている力が発揮されました。

連絡が取れない？

87歳のタマヨさんは、10年前に夫を亡くし一人暮らしをしていましたが、最近では年のせいもあり、家事もままならなくなりました。隣町から、長男夫婦を頼って、夫婦と孫との5人暮らしが始まったのは、3年前でした。隣町、と言っても初めてきたこの土地には知り合いもいません。息子

夫婦は、日中はそれぞれ仕事にでかけています。孫たちも学校です。一人で家の中で過ごしていることを気にかけてくれた近所の方が、ディサービスの話をしてくれました。早速、要介護認定を受けると、どうやらディサービスに通うことができることになりました。タマヨさんは、週に1回ディサービスに通うこととなりました。84歳でした。年齢相応の物忘れはありましたが、自分の意思も伝えることができ、ケアマネはタマヨさんのやりとりに苦勞もなく、ケアプランの作成やサービス利用については、タマヨさんの意思を尊重する形で支援が続いていました。

息子夫婦は、仕事でいつも夜の7時過ぎに帰宅。朝食はそろって食べるが、昼食はタマヨさんは自分で冷蔵庫にあるものを出して食べます。夜は、夫婦が帰宅後、少し遅めの時間に一家がそろって食事をするとします。タマヨさんの話を聞いていると、どうも、長男の妻との折り合いが悪いようです。それでも、息子や孫のことは、笑みを浮かべ話をしてくれます。ケアマネは、1年支援を続ける中で、息子夫婦に会うことはありませんでした。

ディサービスの利用にも慣れ、楽しく週1回のサービス利用ができるようになった頃、たて続けにサービスを休むことがありました。

心配して訪問してみると、タマヨさんは、一人で自分の部屋で寝込んでいます。「最近調子が悪くてね。起きているのもつらいから、もうディサービスには通えないと思う。」と話します。息子夫婦はいつものように仕事にでかけたと言います。ベッド横には、お昼の食事が用意されています。息子夫婦に様子を確認したいと、ケアマネは何度となく、遅い時間に訪問したり、電話を試みました。けれども、対応してくれるのは、小学生の子供たちです。いずれも両親のことを「まだ帰っていない。」と言います。

ケアマネは、タマヨさんの家の近くを通るたび

に訪問し、顔を見て、息子夫婦あてに手紙を置いて連絡を待っていると伝えました。けれども、息子夫婦から連絡がくることはありませんでした。1か月ほどしたある日、ケアマネが訪問するとタマヨさんはいません。夕方、孫の帰宅している時間に再度訪問すると、「ばあちゃんは、入院した。」と言います。入院先の病院名を聞いて翌日病院へ連絡してみると、数日前に、自宅で転倒し骨折。手術をしたばかりだと言う。今後、術後の経過をみながらリハビリを行う予定であることが説明され、退院の目途がたった時点で、病院からケアマネに連絡をもらうことを約束した。

面倒な課題設定

あれから、10か月。病院からようやく連絡が入りました。

「実は、手術後の経過は極めて順調でした。術後1か月の時点では、退院の許可も出ていました。ところが、息子さん夫婦と連絡が取れなかったのです。タマヨさんが自宅に戻ると、日中一人でいる時間が増えます。ご家族が仕事のために、介護が難しいのであれば、自宅に一人でいても、また転倒してしまう可能性があります。であれば、自宅ではなく施設入所がタマヨさんにとって適切な環境とも思うのですが、息子さんになかなか連絡がつかなかったのも、これまで話が進められませんでした。ようやく先日、息子さんとお会いすることができたので、退院許可がでたことをお伝えすると、自宅に連れて帰るといいます。どう考えても、介護できる状態にないと思うのです。ケアマネさんは、どう考えますか。」ソーシャルワーカーからの連絡内容はそのようなことでした。

ケアマネは、タマヨさんが自宅で生活していた時のことを振り返りました。共働きの夫婦。遅くに帰宅するために、日中は独居の状態。現在の状態では、歩行もできない。移動には介助が必要。この状態で、自宅に戻っても、タマヨさんの生活

の質が入院中以上に良いとは思えませんでした。

「タマヨさんの気持ちはどうでしょうか。お家に帰りたいのでしょうか。それとも病院のように、誰かと一緒に過ごせるほうが良いと思っているのでしょうか。」

ソーシャルワーカーの話では、タマヨさんは、現在療養病棟で、他の患者さんとも良い関係で一日を過ごしている。家に帰りたい、という言葉もタマヨさんの口からきくことはなく、「家に帰っても一人だからね。」としか、答えないとします。

ケアマネとソーシャルワーカーは、タマヨさんにとって最も良い生活環境は何か考えることにしました。

後日、ケアマネが病院を訪問し、ソーシャルワーカーとタマヨさんと三人で話し合いをしました。タマヨさんは家に帰ることについて「どっちでもいいよ。帰ってもいいし、帰らなくてもいいし。」その言葉は、本当に言葉通りのように聞こえました。

ケアマネとソーシャルワーカーは、タマヨさんにとって、介護の体制が整っている環境がベストだと判断しました。けれども、自宅に連れて帰りたいという息子の意向もあります。今後、タマヨさんが自宅で生活するためには、家族が介護できない日中の体制を整えなくてはなりません。今後、在宅サービスを利用しながら、在宅生活を継続するためには、これまで以上に息子夫婦の協力が必要です。いつでも連絡がとれること、タマヨさんの介護を具体的にどの程度できるか、息子自身が自覚をし、どんな対応策があるか考えることが求められます。

そこで、退院の日が正式に決まる前に、試験外泊を提案することにしました。それは、単に自宅に外泊する、ということではなく、2泊3日の自宅外泊をする。自宅で過ごしている間に、ケアマネに息子が連絡をし、ケアマネの自宅訪問を受ける。自宅での生活を試した時に、介護上の

具体的課題をみつけ対応策をケアマネと一緒に考える。以上の3つを息子に提案し、それらがどの程度達成できるかをみることにしました。

今後、自宅生活が再開された時に、様々なサービスが必要になり、サービスを利用していくためには、タマヨさんについての連絡がすみやかにとれる必要があると考えたからです。仕事をしながら介護をする、というのは覚悟以上に負担も多い現実です。どの程度の現実を認識しているのか、その介護体制と介護力についてアセスメントが重要です。

息子は、自分の仕事の調整をして、外泊日程を決めました。予定通り外泊のため自宅に戻った当日、ケアマネに連絡をし、翌日、ケアマネが訪問をしました。

外泊を試してみて、自宅で過ごす際に、どんなことが課題になるか確認しました。まずは、歩行ができないので、自宅内でも車いすの使用が必要。そして、夜間に数回トイレに起きる際の介護が必要。それは、息子自身が対応できるという。ベッドから、車いすの移乗は見守りが必要。一人でいる時間が長いと、トイレなどの際、移乗の失敗の危険性もあるため、なるべく日中の一人で過ごす時間を減らしたい。そのためにできるだけディサービスの利用をさせたい、と話します。

タマヨさん本人に自宅に戻ってきた感想を聞くと「やっぱり家がいいね。」と涙を浮かべて答えが返ってきました。

タマヨさん本人が自宅に帰りたいという意思があって、息子がそれを受け入れるという覚悟ができた。それを支えるのが、ケアマネの役割です。そこを支援していくのは勿論ではあるが、一つ気になることがありました。息子の奥さんはどう考えているのだろうか。今回は、奥さんは一度も話に顔を出さない。

「奥さんは、タマヨさんがご自宅に戻られることをどう考えていると思いますか。」息子さんへ問い

てみました。

「あ、いや・・・。今、いないので、私が母親の面倒さえ見ることができれば、大丈夫です。」

「あのう、いない、と仰いますと？」ケアマネは尋ねました。

「仕事の関係で、単身赴任です。」との答えです。そうか、奥さんは小学生の子ども二人を夫にまかせ、単身赴任をしたのか。そうすると、介護と子育てと仕事の3つのわらじは大変だろう、とケアマネは感じました。

「お仕事と、介護と、子育てでは負担も多そうですね。もしも、自宅での介護が難しい時には、短期入所の利用という方法もありますから、覚えておいてくださいね。」と息子さんと本人へ向かって情報提供をしました。

「大丈夫です。子供たちも大きくなったので、少しは家のことも協力してくれていますから。」と話がありました。

2泊3日の予定が、天候のため、3泊4日に延期となって病院へ戻りました。

次の課題は、息子が仕事の調整をして、退院日を決めること。退院前に、必要なサービスの職員とケアマネと息子で話し合いを持つ日を確認することです。息子は、ソーシャルワーカーに言われたことをやや時間がかかりながらもこなし、ケアマネと退院にむけて調整を進めました。息子は、何度もソーシャルワーカーへ電話連絡をしたり、ケアマネからの電話連絡を受けたり、仕事の休みを整えたり、など今後の体制作りのために煩わしいと思うようなこともこなしていきました。

本当は、もう少し合理的なやり取りをする方が、息子の負担は減ったと思います。けれども、自宅介護という大きな決断をするためには、今後このように介護のために何度も時間が割かれていくことを実感しておくことが必要です。そういうことが、タマヨさんにとっての、適切な生活環境作りにつながると考えていました。

この間のやりとりを見ながら、以前、10か月も連絡が滞っていたころの息子さんとは違う良い変化があると判断し、タマヨさんの退院は決まりました。

退院翌日から、介護サービスの利用が開始できるように準備もそろっていました。

家族の回復。新たな生活

予定通り退院したタマヨさんは、予定通りサービスに通いました。自宅でも、息子や孫たちが協力し合って介護をしています。半年後、タマヨさんの心身の状態はとても改善しています。入院中使用していた車いすも不要になって、歩けるようになりました。毎日のサービスも楽しく通うことができ、夜は、家族そろって食事と一杯の晩酌です。ケアマネが訪問するたびに、息子は「手を抜きながら、適当にやっていますよ。」と言いながら、タマヨさんの変化を詳しく教えてくれます。息子が話すタマヨさんの様子は、日ごろの家庭での関わりの深い様子の表れです。

この事例は、家族の介護力の弱さを感じさせる時を経ながら、家族の環境の中に何らかの変化が起きて（息子の妻が単身赴任）から、家族の物事に対応する姿勢が好転したことで本人の生活が良い循環の中に位置づいたと思います。

何かが変わると、その影響を受けて何かが変わっていく。元々あった家族の本来の力が、家族の手によって回復できたのだと思います。

けれども、この家族にとって、長男の妻の単身赴任とは、どのような、いきさつがあったのだろうか？疑問は残ります。

* プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。

街場の就活論 vol.10

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ
団 遊

定年消滅

「定年」という言葉は、死語になっていくのではないか？ そう感じるが増えました。「60歳定年で再雇用」が現状では一般的ですが、先日人事役員の話聞いたファスナーで有名なY社は、目下65歳定年に切り替えていました。定年という言葉自体は引き続き使われていましたが、言葉の持つ意味合いは、ずいぶん変わってきている気がしました。

「定年」は、日本においては、会社が正々堂々と人をクビにできる唯一の制度だと言われます。言い換えれば、定年とは終身雇用と表裏一体関係にあるものでした。裏がもはや体をなしていないとすると、表も崩れていくのが自然だといえるでしょう。

もうひとつ、終身雇用とセットだったのが、年功序列という考え方です。終身雇用が崩れ行く今、年功序列も崩壊しつつあり、また、年功序列を崩さない限り、定年の引き上げや、あるいはその先の「定年という概念の崩壊」は成し得ないと思います。事実、Y社の場合、概算ではあるそうですが、現状の報酬体系を維持したまま65歳定年に引き上げると、人件費が年8%増加するそうです。

これは「グループ社の年間利益が吹っ飛ぶ金額」だそうで、半端な数字でないことがわかります。つまり定年年齢の引き上げや、定年という概念をなくすには、報酬体系の見直しが不可欠なのです。

40代を人生の何と見るか

数か月前から、人材紹介会社・I社の依頼を受け、エグゼクティブの群像を追っています。エグゼクティブな人材を「自ら主体的に行動し、変化や刺激を生み出せる人」と定義し、I社所属のコンサルタントに紹介してもらった人に会って話を聞いています。当然、会社内での地位も高い人が多く、結果的に年収も高い人が大半です。「彼らの意識の置き方」や「仕事の捉え方」「行動特性」をテーマに、導き出せる法則がないかと探っています（ちなみに本人たちの名誉のために書き添えますが、エグゼクティブだと命名しているのはこちらであって、彼ら自身は、誰一人自分をエグゼクティブだとは思っていません）。

ある程度の数に会ってきた中で「ここは共通している」と思う点があります。それは「40代を職業人生の中間地点に置いている」という点です。実際に、その中のひとは「40代を人生の中間地点

と見るか、終盤戦と見るかで仕事人として生き方が変わってくる」と言っていました。

HRの世界で名の知られた法政大学の諏訪教授に会ったときも、同じような話をしていました。「ほんの10年前まで、50歳といえば、人生のラストスパートへの入口だった。逃げ切りというような言葉もあった。でも今は、職業人生を70歳までと考えて、キャリアプランを立てるべきだ。そう考えると、40代後半は、第二の職業人生のスタート地点であり、学び直しの時期であり、それまでの職業人生の棚卸の時期だ」。

日本就労人口の減少は、確定事項です。その結果、大半の企業は「外国人労働者を積極的に採用しながら」「日本人労働者により長く働いてもらう」道を選んでいきます。もちろん前者は大手であるからできることで、街場の中小企業が、取り急ぎできる対策としては、後者になります。70歳までの職業人生。ますます「好き」を「仕事」にしないと、やっていられません。

ひと夏の就業体験

この夏、私の授業からは、最終的に60人ほどの学生が、インターンシップに行きました。2012年7月初旬～9月末までの実施期間です。短い子で一週間、長い子だと二か月です。様々なことを吸収し、憧れや充実、不平と不満も十分抱いて帰ってきます。そんな彼らの意識も、上記のような状況にあわせて、変えさせていかなければと思います。

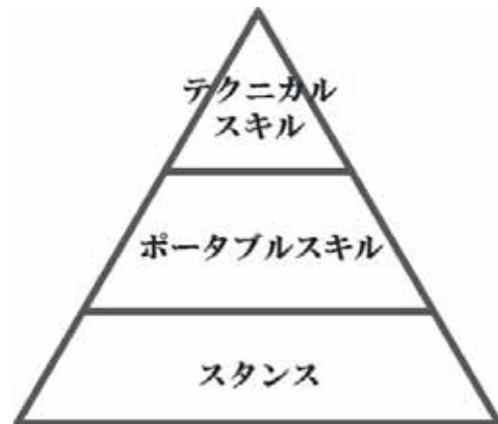
というのも、学生の仕事に対する意識は、まだまだ10年前のままだからです。インターンシップも就職先探しの一環と捉える学生が多いのが現状です。「僕は商社マンになりたいから、M物産のイン

ターンに行きたい」。このような声は、はいて捨てるほど聞こえてきます。その先にある目標は「周りが“すげえなあ”と言ってくれる会社の内定を誰より先にゲットすること」です。

インターンシップで大事なことは、「なぜ働くのか」を人生で初めて考え、「どのような職業人生を送りたいか」の夢を描く第一歩にすることです。志望業界や志望企業にインターンシップに行けてしまうと、このような大局的視点が失われがちなのが残念なところです。

興味が低い業界や企業でのインターンシップを勧めるのも、そんな理由からです。例えば旅行も同じで、憧れのフランス・パリをガイドブックで調べに調べ、予定通りに旅することは、事前調査の確認作業に過ぎません。好奇心だけは強く持ち、はじめてのところに飛び込んでみる。「目的」さえ見失わなければ、その方が、結果的に新しい価値観や自らの可能性に出会えたりするものだと、僕は思います。

スタンスを問いつける



仕事人としての能力を計る際、上図のような考え方をすることがあります。スタンスは「仕事への

向き合い方」や「価値観」といったようなもの。ポータブルスキルは比較的持ち運びが可能な能力、たとえば「調整力」や「粘り強さ」「マーケティング力」「論理的思考」といったようなもの。テクニカルスキルは文字通り専門性の高い能力のことで、この総和を仕事力と見做すわけです。

家も人生も基礎工事が大事、ではないですが、やはり、特に若い時代に育むべきは、スタンスであると僕は思います。つまり就職活動の第一歩は、自らの仕事へのスタンスを考えるとということです。この問いかけには「明確な答えがない」ことがやっかいですが、「仕事人として生きる」ということは、年齢に関わらず、スタンスと向き合い続けることではないかと僕は思います。

文系学生の就職活動で企業が見ているのも、この点に尽きます（理系はテクニカルスキルのマッチングで判断されることも多い）。ところが、学生は「私はサークルの部長をしていました！ だからみんなをまとめあげる力があります！」と、自己評価によるポータブルスキルのお披露目を続ける傾向にあります。

22歳時点での「私の強み」に大した意味はありません。それよりも、これから続く50年間をどのように考えているのか？ に興味を持ちます。答えがなくとも、あるいは、たどたどしくとも、いま考えていることを必死に伝えられると、人はそれを「可能性」と受け取ります。結果的に「社会人として良い第一歩」を踏み出す学生は、スタンスへの考察に時間をかけていると感じます。

文/ だん・あそぶ

立命館アジア太平洋大学非常勤講師

「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にした授業を展開している。

心理療法が始まるまで

(10)

— コミュニティと病院で —

藤 信子

コロンビアのカルタヘナでの国際集団療法集団過程学会 (IAGP) の第 18 回大会 (2012) で、たまたま私が参加したプログラムでのことかもしれないが、言語的心理療法に対する関心薄れていっていることの不安が語られていた。確かに言語による内省的心理療法は、現代の成果をすぐに求める風潮、エビデンスを求める医療の中での短期で成果を示しにくい点などから見ると、魅力的とはいえないかもしれない。まして集団精神療法—グループで語る—方法は、若い学習者にとって、まだるっこしく何をしているのか奇妙でしかないのかもしれない。

実は集団精神療法の世界で考えると、日本の学会では病院、医療の分野の会員が多いという特徴がある。これは何より日本の精神医療が入院中心の医療であったことの影響は大きいと言える。そして現在も以前に比べるとコスト面での問題で少なくなっているとは言え、入院中の精神病圏に対する集団精神療法の報告がある。昨年ロンドンにおける 15th European Symposium in Group Analysis (2011) に参加した時の psychosis への Group の分科会は、その日本の特徴を感じた体験だった。ギリシアと英国から、精神病圏への治療 (もちろんグループアナリシスの) 有効性が論じられていた。ギリシャの報告は、

データを示しながら、躁鬱病にとってグループアナリシスは良い結果をもたらした。統合失調症にとっては、直接寛解に結びつくものではなかったが、いろんな有益なことがあった。というものだった。英国の報告は、リハビリテーション病棟での極めて慢性の患者とのグループの報告だった。ギリシアの報告は3箇所の都市でのデータで、そういう研究は私にとっては、珍しかった。そこに参加していたのは、発表者以外は日本、マレーシア、フィンランド、ノルウェイなどで。ノルウェイの人が精神病圏へのグループアナリシスなど、あまり大事じゃないといういようなことを言っていて、何故だろうなと思っていると、統合失調症は地域でネットワークで支えるものだったということだった。でも効果はあるのよ、と言う意見など……。その中で私たち日本人4名は皆精神病圏のグループは経験している、という他の人たちがすごく驚くので、どうしてだろうと最初思った。そして気付いたことが私たちが入院病棟での経験が多いのは、日本の精神科病院に未だ33万人が入院しているからだということだった。そのことを話すと他の国の人達は、とても驚いていた。日本が他の諸国と違って、入院病床が非常に多い、というのにまた驚かれた。

アメリカ集団精神療学会の実践ガイドラインを読んでいて、日本の事情をまた考えた。アメリカの場合、外来の神経症圏もしくは境

界例くらいまでが、治療の対象としてガイドラインは書かれている。これはずっと以前集団精神療法を始めた頃、日本語のテキストが少ないので、アメリカのものを読んでいて、その殆どが外来のグループのことだった、ことを思い出した。どうも日本の集団精神療法とアメリカは違うのだけれど、どうしてかその時はあまり考えなかった。私たちは精神病院の中で、「集団精神療法で(だけで、というべきか)」統合失調症が「治る」と思っているわけではない。ただ、グループという機会を持ち、他の人と一緒にいられる場、時間を持つこと、そして自分の思いをことばにすることを探していく場を持つことが、とても精神病の人にとって大事なことだということ、その経験が病棟を変えることにもつながることを体験しているのだった。

思い出してみると、アメリカの場合、効果の上らない治療は引き受けない、というのは精神分析(個人)の話聞いて理解していたが、そのことを考えると、なんとなく分かってくる。それと「治療効果」という点で言えば、その治療法だけ行うということが、条件らしい。随分前に、精神分析医から、国際基準では精神分析というのは服薬なしに週3-4日分析を行うことを言うので、日本の精神分析(当時)は、この基準に当てはまらない、ということを知ったことを思い出した。当たり前のようだけれど、これは精神病圏ではあ

り得ないと思っている。薬がある程度効果があるのに使用しないことはないのだから。精神病院に勤務していた時、統合失調症（当時は精神分裂病）の治療は薬物療法だけでなく、精神療法（個人も集団も含め）、治療的な病棟環境、活動を含めた社会療法的視点等、いろんな方法論を統合することが大切だという経験をした。このようないろいろな方法の組み合わせ、というのは一つ一つの方法の治療効果を見えにくくするのだろうか。

東日本大震災後、日本集団精神療学会の「相互支援グループ」を実施してきて、私はその中で、これから何をしたらよいのか考え続けている（藤 2012）。時間をかけながら、自分を社会を考える機会があることを、大事にしたいと思っている。成果がどのように計測されるのか、ということは難しい。しかし、単一の治療法の効果を競うのは、少なくとも当てはまらない領域、対象があるのではないだろうか。チームやネットワークで統合した治療の良さをどのように表現するのか、ということは大事なことだろう。そうでないと、いろんな意味で重症の人、障がいの重い人への治療効果を語りにくくするのではないかと、思う。そのためには日本の集団精神療法の経験をまとめていくことはかえって大事なことでないかと考えた。

—文献—

藤 信子（2012）集団精神療法の立場から—相互支援グループを継続している経験から—精神療法 38（1）53—57

誌上ひとりワークショップ

(その6)

～ 家族援助は街のアパレル～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「最終回です。長かったですね、1年以上ワークをやってきたことになります。ここ3回ほどは、“枠のギリギリ外”というテーマでやってきました。どうでしょうか、援助者としての自分の枠を知り、広げることにつながってきたでしょうか？では前回の続きで、本児の仮説ストーリーの“結”の部分を手がかりにした最終回のスタートです」。

(エ) 仮説“結”の部分

ではまた、本児の役は交替してもらいましょうか。ぐるっと回ってみて、どのグループも全員が次々と援助者をやっていました。みなさん、とても熱心ですね。今回はFグループをお願いします。

本児役：Aとの関係は命がけで守る。何があっても、Aとは離れない。ずっと待たなくてはいけないかもしれないけど、いつかは一緒に住みたい。時間はかかると思う。でも、自分がしっかりしていたら絶対に乗り越えられる。それがほんとの人との付き合いだ。それで、家族になれる。

援助者役：そんなに好きなの…。で、もし子どもができたとするよね。Aはいい父親になれるだろうか。キミが育った家庭のようにはないと思う？

本児役：わたしがしっかりしていたら、きっとなんとかなる。

援助者役：キミだけがしっかりするだけで乗り越えられる問題だろうか。家族でしょ、家族はお互いに支え合うんじゃないか？

本児役：そうだけど…。

援助者役：行き当たりばったの家族なら、結局、お母さんと同じじゃない？身体と心は自分で守らなきゃダメだと思うよ。

本児役：そんなこと、言われなくてもわかってる(泣)。

私：う～ん、子ども役の方、いかがでしたか？

援助者役：完璧に予想通りでした。援助者の意図は丸見えで。

私：話すほどムキになってたね。

援助者役: はい、もう絶対に一緒になると言わざるをえない気分でした。

私: で、不自由せずに育った人に何が分かるの、に行き着いて、うんざりからイライラを経て爆発・号泣にいたったんですね。援助者役はどうだった？

援助者役: でも、援助者としてよりも人間として止めたかったんです。

私: 説得できると？

援助者役: まさか(笑)。

私: たとえ『どうせ大人は…』となっても、『叱ってくれる人もいない』よりはマシだと信じてね？

援助者役: はい。

私: 確かに、こういったやりとりではゴールをはずすのはとても難しいですよ。他にありませんか？ だいたいみなさん、こんな感じでしたか？ じゃあ、ちょっとやってみましょうか。本児が「No!」を完璧に予測しているなら、「Yes!」から入ってみようかな。

本児役: Aとの関係は命がけで守る。Aとのことは、自分がしっかりすることで乗り越えられる。それが家族であり、人と人との付き合いだと思ふ。

私(援助者約): うん、それは間違っていない。お互いに自分を犠牲にしても相手を守ろうとする、それが家族なんだからね。

本児役: はい。先生、わたしにできると思いますか？

私: キミなら、できるかもね。

本児役: うれしい。頑張ります。

私: うん。で、Aはどうだろう？

本児役: Aだって、たぶん。

私: シンナーのときはどうだった？

本児役: あときは、自分のことでいっぱいだったから、それで難しかったんだと思ふ。

私: なるほど。自分のことでいっぱいいっぱい、キミのことを考える余裕がなかった？

本児役: そう。

私: キミだっていっぱいいっぱいだったけど、それでも相手を大事にしたのにな。キミみたいに命がけで相手を守るつもりなら、シンナーくらい止められたかもって思うけど。

本児役: え？ 命がけかぁ…。

私: そう、命がけ。

本児役: 自信、ない、かなぁ…。

私: どうだったかなぁ？

本児役: 別れさせる方向は同じですけど、説得されている感じはなかったです。

私: 選択を否定されるという予想はありましたか？

本児役: ダメ出しは当然だと思ってます。

私: 肯定しながらすすめいったんだけど。

本児役: キミならできるかも、には驚きました。うれしい、よし頑張ろうってところで、Aの話になったのでちょっと混乱し

てしまいました。不思議に反発は起きなかった気がします。

私：意図は同じでも、肯定から入るだけで抵抗は小さくなるでしょ。説得よりも質問のほうが受け入れやすい、これは間違いありません。それから、抽象的観念的な教示よりも具体的行動の“試行”の方がいいでしょう。さきほどのセックスの話のように。この場合は、シンナー断ちの方法をいっしょに考えるのがいいかもしれません。補導中で面接には制約はあるでしょうけど、継続的に会っていきたいケースでした。さて、なにか質問、ありますか？

参加者：枠って、一つだけですか？たくさんあるような気がしますけど

私：はい、おっしゃる通りです。人生観とか主義主張なんてのは、大きな枠ですよ。面接で感じる家族観や仕事観は、ローカルで小さな枠ですね。ほかに世の常識みたいな、その中間くらいの枠もあります。(枠の大きさと縛り具合は関連していますか)。いい質問ですね。どう思われますか？人生観なんて比較的緩い枠じゃないですか？日常的に、自分の主義主張と照らし合わせて判断する場面も、そうめったにあるもんじゃない。対人関係とか適応の難しさを訴える相談で表面化するのは、たいてい家族観とか仕事観です。小さな枠だから、かえって窮屈なんですよ、きっと。

参加者：常識との衝突もあるように思いますけど。

私：ええ、世の常識もそこそこ顔を出しますね。ただ、常識自体にある程度の弾力性というか幅があるから、さほど大きな縛りにはならないような気がしますけど、どうでしょう？たとえば、ボクと皆さん方を比べたとき、常識はさほど変わらないでしょうけど、家族観や仕事観には個性があって千差万別です。(じゃあ、家族の小枠を感じ取ればいいのですね)でも、わたしの小枠を感じようとしてもけっこう難しいでしょ。それに対し、わたしの大枠はなんとなく伝わっているんじゃないでしょうか。家族面接においても、それに近いことが起きている気がします。

事例に話を戻しますね。『母親は身勝手だし、兄弟はバラバラ。自分の家族は家族とは呼べない。そうである以上、家族をあてにせず自分が強くなって道を切り開いて生きるしかない』という問題理解・仮説のベースにあるのは、小枠である家族観です。『母みたいな生き方は嫌だ、自分の身は自分で守るしかない、だから家を出る』という行動選択もそうです。けど、この年齢で母親を見切ってAのもとに飛び込む決断を可能にしたのは、彼女の人生観ではないでしょうか。枠の大きさ・縛りはいろいろだけど、リンクしていることは間違いありません。

ワークを始めた頃に言ったけど、他人の枠に手を突っ込んでそれを変えることはできません。この枠が動くとしたら、それはかつて思いもしなかった想定外の体験の積み重ねでしかないように思います。枠の外側にも世界があると知ったら、母親や家族がいろんな風に見えてきて、“ありえないほどの不運と不幸”な色で塗った自分史を塗り変える日が来るのではないのでしょうか。

11. おわりに

「ほんとに、ほんとに終わりの時間です。いまここで伝えたいのは、“実は、私たちも自分の枠の内側で仕事をしている。家族といっしょに、私たち自身も枠の外にも世界が広がっていることを知ろう”ということです。

最後に、一つの事象を対照的な二つの視点から眺めることを提案したいと思います。左右の目で見ると立体視ができる、左右の耳で聞くから定位しやすい、つまりものごとの奥行きがわかる、そういう意味で絵画の二点透視図法に似ています。

ここまでみなさんと考えてきた「不安と怒り」、「解決努力と問題持続」、「リスクとストレス」、「変えると変わる」、「枠の内と外」、これらはまさに対照的な二点です(図4)。枠に縛られて窮屈に生きているのは、家族だけじゃない。私たちだって、同じような縛りの中で窮屈に仕事をし、生きているかもしれません。

このワークがきっかけで、2点透視図的にものごとを眺めるようになって枠の外にも気持ちを向けられたら、そして家族だけでなく自分たちの枠についても考える機会になったとしたら、とてもうれしく思います。延々とおつきあいいただき、ほんとうにありがとうございました。

図4 2点透視図法による奥行き認識

緊張と緩和の組み合わせ		
感情	表(裏)の顔としての不安	裏(表)の顔としての怒り
解決努力	ねぎらいの対象	問題を持続させる働き
家族要素	脆弱性(リスクファクター)	強み(ストレングス)
家族援助	変える援助	変わるのを支援
手順	心理教育(教える)	質問する、教わる
枠の内外	期待(期待)通り、想定内	予想外、意外、想定外
反応	安心、現状維持	驚き、変化の糸口

52

参考文献

家族が変わる、子育てが変わる、コミュニケーションのヒント 明石書店

映画

の中の

子ども
たち

第10回 「オレンジと太陽」

—ソーシャルワークの理想を見た—

川崎 二三彦

発端

「それは不可能よ」

「違法です！ 保護者なしで船に乗せるなんて」

偶然聞かされたエピソードを、最初は言下に否定したマーガレットだったが、次第に疑い、調査を始め、ついには信じ難い事実と直面する。では、その事実とは……

*

「悲しいことだが、ゆりかご^{から}が空であることが過疎の一因となっている時代には、外部に供給源を求める必要があります。そしてもしこの不足を我々と同じ人種で補うことができなければ、我々は近隣地域に住む多産な無数のアジア人諸種族の脅威に自らの身をさらすままになったはずであります」

こう演説したのは、西オーストラリア・パースの大司教。1938年8月、8歳から12歳までの子どもたち37人がイギリスから到着した歓迎会の席のことだ。大司教は続ける。

「若年の少年少女を連れて来て農業や家事を初歩から教え込むという現在採用している政策は、遥かに良識にかなった方法であります。これには、子供たちを初手からオーストラリアの環境になじませ、オーストラリア人の感情や理想を彼らの中にしみ込ませるといふ付加価値があります。これこそ真



の市民の本質的特徴となるものであります」

イギリスのソーシャルワーカーであり、自らの活動を「からのゆりかご—大英帝国の迷い子たち—」として著したマーガレット・ハンフリーズは、その著書の中で、この点につき次のように述べる。

「計画の裏にある論理がはっきりしてきた。英国は社会福祉問題を解消するために金を払い、一方、オーストラリアは人口を増やす」

衝撃

本作を観て、私はじっとしていられなくなった。それはまず何よりも、戦後も長く続いたイギリスの児童移民政策に対する衝撃による。

映画終了後、その場で買い込んだ分厚い本を読み進むうちに、事実、私は激しいダメージを受けてしまった。イギリスからオーストラリアに渡った子どもたちは、孤児院に収容されて過酷な環境に置かれ、養育者による虐待の数々は、文字どおり筆舌には尽くせない。しかも数十年後の今に至るまで自らの名前や年齢さえも間違われ、自分が誰であるかがわからないのである。過去を奪われた人間が味わう比類なき苦しみというものを、これでもかと言うほど次々と目の当たりにさせられ、私は耐えきれなくなってしまった。

「その人まだ生きていますか？」

「ええ、生きています」

「信じられない。こんなに運がいいなんて！ その人、どんな人？」

「美しい方よ」

本書も半ばにさしかかろうとしたところで登場する一コマである。

「私にはお母さんがいるのね！」

もはや限界だった。喫茶店にいた私はたまらず本を閉じ、両手で顔を覆って吹きこぼれそうになる感情を押し殺すしかないのであった。

面接

それにしても、映画ではいくつかの面接場面に感心させられた。たとえば、夫婦でパブを営む女性を訪ねるシーン。

「まあ、もしかして……」

結婚する前に生んだ娘のことを、女性は夫に隠していた。

「静かなところで話しましょう」

「娘はどこに？」

「今はオーストラリアです。そこの孤児院で育ちました」

突然こんなことを聞かされたら、誰だって茫然とし、次の瞬間、泣きじゃくるしかあるまい。私までがその女性を抱きしめたいという衝動に襲われたのだけれど、2人の間にはテーブルがあって思うにまかせない。とその瞬間、マーガレットはそっと手を伸ばし、さりげなく女性の手を握る。「ああ、こういう面接をしたいものだ」と思わずにはいられない心憎い仕草であった。

もう一つ、やはり調査結果を伝えるシーンを紹介しよう。面接のために、彼女は慎重に場所を選ぶ。かつて私も、条件の悪い出張先の面接では椅子や机の位置などを微調整し、多少とも安心して面接できるよう工夫したものだが、彼女は毅然としている。

「ここではダメ。大切な情報を伝える、一生忘れられない日になるの。もっといい部屋を」

選ばれたのは、海を望む瀟洒な一室であった。

「母が見つかった？」

「ええ」

「死んでいたんだね」

「ええ」

驚嘆

それにしても、映画の主人公となったマーガレットのソーシャルワークには驚嘆させられる。彼女がこの活動を



始めたのは1986年。振り返ると、私が児童福祉司となったのは1989年だから、彼女はいわば私と同時代のソーシャルワーカーだ。

その彼女が予断を捨て、求められるまま真摯に事実に向き合い、僅かな手がかりを頼りに気の遠くなるような調査を続け、わかったことは注意深く当事者に伝え、サポートする。当時の児童移民政策が明るみに出ることを恐れる者から白眼視され、脅迫されて身の危険を感じてもくじけず、ついには英豪両政府が公式の謝罪を表明する。

ことの重大さを前に、彼女は本来の児童福祉業務を^{なげう}擲ち、今なおこの活動に全精力を注ぎ込んでいるというのだが、緻密な調査活動や一つ一つの面接といった個別の援助を超え、期せずして強いソーシャルアクションもなしている。まさに彼女こそ真のソーシャルワーカーと言うべきであろう。

* 2010 / イギリス・オーストラリア

* 鑑賞データ 2012/05/27 岩波ホール

* 公式 HP <http://www.oranges-movie.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/16328>

<これまでの連載>

- 第1回 [プレシャス] <http://bit.ly/9qGWXm>
- 第2回 [クロッシング] <http://bit.ly/rYwUnO>
- 第3回 [冬の小鳥] <http://bit.ly/eGJ1d9>
- 第4回 「その街の子ども」 <http://bit.ly/hzhB9t>
- 第5回 「八日目の蟬」 <http://bit.ly/keXFwL>
- 第6回 「いのちの子ども」 <http://bit.ly/pm8V0p>
- 第7回 「ラビット・ホール」 <http://bit.ly/wF8G4a>
- 第8回 「サラの鍵」 <http://bit.ly/Hf2MsL>
- 第9回 「少年と自転車」 <http://bit.ly/LXzFK4>

子どもと家族と学校と

⑩

『私がこんな性格になったのは、母の育て方が悪かったからだ！』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

カウンセリングをしている過程で、クライアントさんが変わってきたなあとも明確に感じることもある。

それと同じように、大学で講義をしていて、学生さんたちの理解が進んでいき、よくわかっている、ちゃんと伝わっていると思えてうれしくなることがある。

それは、ともにある事象に対する受けとめ方が変わり、柔軟になっていくからだ。凝り固まってしまった考えから解放されて柔らかくなる。

お母さんの育て方が悪い

「こんな性格になったのは、お母さんの育て方が悪かったから、だから私はおとなしくなってしまった、上手に育ててくれていたらもっと明るくて活発な性格になっていたのに」

彼女は大学に通う学生さん。

自分の性格が好きではない。おとなしくて、どちらかというと暗くて、人から好かれない、いわゆる内向的な性格だと思っている。お母さんがもっと上手に私を育ててくれていたら、こんなことには

ならなかったのにと母親批判を繰り返していた。

たとえば、大学に入ることができたのはお母さんが上手に育ててくれたおかげなどと、スムーズにいったことについては、お母さんの影響だとは考えない。うまくいかないことに関しては決まって、お母さんが悪いということになっている。

思い通りにならない状況に向き合わなければならないとき、多くの人が同じような考え方になる。何が原因か、誰が悪いのかを追求して、その原因らしき要因がひとつ浮かび上がると、まさにそれが悪の根源であると集中砲火を浴びせて、おとなしい性格になったのはお母さんのせいという考え方が固まっていく。

ところがこの学生さんに少しずつ変化が起きる。

お母さんは、お母さんなりにいろいろと考えて、私を育てるために精一杯やってくれたのではないかと思えるようになった。

習い事もいろいろ行かせてもらったし、洋服も何かとおしゃれをさせてくれた。

勉強しなさいと、そんなに口やかまし

くいわれた覚えはないし、どちらかという
と黙って見守ってくれた気もする。

このように、考え方受けとめ方が変わ
ってきた。

お父さんイヤ

もうひとり別の学生さんの場合。

実は、お父さんとうまくいっていない。
お父さんのことが嫌で仕方がないという。
家族に迷惑ばかりをかけている父が好き
になれない。

仕事から帰って、家にいるときは、い
つもお酒を飲んでいる。飲み過ぎが原因
でからだを壊して入院をした。回復する
と、また家でお酒を飲んで、再び病院に
入院する。からだのことや家族のことを
考えずにずっと家でお酒ばかり飲んでい
る。母がお酒を飲まないように父にいつ
も言うことをきかないままだった。

その姿をみているので、父親に対する
印象は良くない。父と顔を合わせると、
無視するし、話かけることもほとんどな
く、父親否定を続けていた。

高校生のとき、進路のことでどうして
も父と話しあわないといけなかったこと
があった。父が、大学進学を応援してく
れるのはよくわかったが、その話し合い
のときですら、お酒を飲んでいたので。父
は最低だ！と思った。

寂しいのかもしれない

あとでわかったこと、父はお酒を飲ま
ないと、人と話しあえないような気の弱
さがあると母が説明してくれた。わが子
と話すのもアルコールなしでまじめな話

をすることができない状態にあった。

大学に入ってから、いろいろなことを
学んでいくうちに、少しずつ父に対する
受け止め方がかわってきたことに気がつ
いた。

たとえば、居間にいて母とふたりで話
をしているところへ父がふらっと姿を現
すと、ふたりとも急に話をやめてしま
う。とく父に聞かれない話題ではないが、
楽しそうに話している姿を見られたく
ない思いからついつい無視してしまうこ
とも多い。

このような環境にある家で暮らしてい
ると、もしかしたら、お父さんは寂しい
のかもしれない、、、。

父のすべてを理解することはできない
けれど、ちょっとかわいそうな気がして
きた。

大学生になると、これまで抱いていた
親像と異なって見えてくる。親の態度が
大きく変わるということではなくて、親
の行動に対しての子どもの理解が変わる。

姉妹のように仲良しの母娘、なんでも
おしゃべりする親子もいるが、中学高校
では、友人とのつながりが強くなる一方
で、親に対しては、反抗的な態度を取っ
ていることも多い時期だ。

高校を卒業すると受験のストレスもな
くなって、新しい生活が始まり、自由
に行動できる範囲が広がる。

するとそのゆとりも手伝って、親の立
場からものごとを考えられるようになって
いく。さらに、親を一人の人間とみる
ようにもなってくる。

このころ、お父さんやお母さんから、
おじやおふくろという呼び方にかわっ
ていく青年もいる。

あるいは、アルバイトを経験することによって、毎日親が働いている大変さを痛感し、そのことから歩み寄れる場合もあるだろう。

これまでさんざん親に対して批判を繰り返してきた学生さんの受けとめ方が少しずつ変わったのは、個人の成長と言えるだろう。そして、対人支援の講義の中で、学んだことが自らの立場をふりかえるきっかけになり、受けとめ方が変わっていくこともある。

人は最善の選択をして行動

講義の中で、対人援助を必要としている人を理解するとき
～人はその場その場で、最も有益だと思ったことを選択して、行動しているという前提で人と接する～

あとから、ふりかえてみて、あの行動は正しくなかったとか、もっとこうしたら良かったと判断することがあるかもしれないけれど、そのとき、その場では、その人は、そうするのが一番良いと思ってやったことであるとその人の選択を尊重した態度で接する。

そのように、講義において力説している。講師の私の気持ちとしては、対人支援の現場にいるとき、支援を必要としている人には、いろいろな人がいて批判したい気持ちになるかもしれないけれど、人のことを簡単に責めないでよ、という願いがあるからだ。

クライアントさんを理解することを通して、自らの立場や家族のことをふと思うと、受けとめ方が大きく変わってゆくのにつながっていったようだ。

親に対してだけでなく、きょうだいについても同じような感想があった。

詳細を記すことはできないが、ポイントはこうだ。

姉はキツイ

年齢が三歳離れている姉妹の妹は、いつも姉のことをうっとうしいと思い、ケンカを繰り返していた。

姉が断りもなく、妹の持ち物をさわったり、洋服を着ていたりすることで衝突を繰り返していた。

姉は感情的な表現を多く使って話をし、言い合いになり、妹はあまりにも姉の言い方が激しいので言い返すことができず、黙ってしまう。黙ってしまう妹をみて、姉がイライラしてまたキツイ言い方をしてしまう。その繰り返しになっていることがわかった。

妹としては、姉がキツイ言い方をするので悲しく感じて、その言い方はやめてほしいと思っていた。姉は姉で、感情を込めて話さなければ人には自分の思いが伝わらないと考えて、結果的に激しい表現やキツイ言い方になっていた。

一生懸命に話をしているのに、妹は黙るので、その態度にイラついて、妹のことをぼろくそに攻撃していた。

姉に言いたいこと言ってみよう

そんなときに、講義で人はその場その場で一番有益だと思うことを選んで行動をしているということを学んだあとは、いままでとはことなった受けとめ方ができるようになったという。

あのキツイ言い方でもお姉ちゃんなりに考えた態度。お姉ちゃんに、もうちょっと自分の言いたいことをいっても良いのかもしれないと思うようになり、つねに姉批判で終わるのではなく、自分でやれることをやってみようと思えるようになったという。

他者批判を繰り返すのではなく、何をしはじめたら良いのかそのポイントが見えるととても動きやすくなる。

家族の変化

相談に来られているクライアントさんやご家族は、柔軟な受けとめ方をすることができるようになり、かつ次の行動を起こすことができるためには、時間が必要だ。

家族が困った状況から解決に至るまでによく見られるプロセスがある。

それはまず、困った状況の渦中にある場合たとえば、子どもが不登校になり欠席が長く続くと、私の育て方が悪かったら、子どもがこうなってしまったのではないかと、しきりに過去のことを思い出し反省を繰り返すお母さんがいる。

また、お父さんは仕事で忙しいからお母さんにまかせっきりになってしまった、それが良くなかった。

おじいちゃんやおばあちゃんたちは、孫を甘やかせすぎたと反省する。もっとガツンといわないからこそ、子どもが凶に乗ってしまった。好きなものをどんどん与えてガマンさせることをしてこなかったから、このようになった。

それぞれが過去に思い当たることを掘り起こして、何が良くなかったかのオン

パレード。

そして、学校の担任がもっと的確に動いてくればこんな事態にはならなかった、クラス担任の配慮が足りないなどと、攻撃対象が学校になったりする。

そのように、これまでのことを見つめなおしていくと、少しずつ全体像が把握でき整理される。そのまとめができると、さあ次のステップ。

これからどんなことができますか？
と考えていく。

少なくともこれまでと同じように続けていくのが良いと思うことはどんなことですか？

あるいは新しく始めると良いと思うことはどんなことですか？

と、過去ではなく今後に焦点を当てて、話し合いができる状態になっていく。

これらについて考えていくことができる状況になると、家族が能動的になり、少しずつ変化がやってくる。

螻蛄の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第十回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

22年前の業務中心の日誌を一ヶ月ずつ、今の私が振り返る企画。10回目ともなると飽きてくる。読者は読まなければいいのだから簡単だが、筆者はそういうわけにはいかない。(勝手にやっておいて、何を言っている！)

「意味のないことまで、だらだらと・・・」とか、「要するに何なのか・・・」と思わないでもない。

そしてこれがまさに、ある意味この連載の本旨だとも思う。仕事の日常とはそういうものだからである。

もし仕事が、事件や祭りで代表されてしまったら、日常は「祭りの前か後」ということになる。結果だけが目的だとしたら、陽の目を見なかった日々の地道さは空しい。レギュラーになれないのに繰り返すトレーニングも空しい。勝利に結びつかなかった努力は徒労ということになる。すぐに結果のでない精進が無駄に思えても仕方がない。

だが本当は、そんな投資と対費用効果のような因果が、仕事の意味であるはずがない。そんな働き方ばかりし続けてしまった結果が私たちの周りに蔓延していて、今、不毛さに苦しんでいるのではないのか？

暮らしか、生きることとか、働くことは、誰かに勝つことや、け落とすことではない。

米を作っている人は自分の田んぼも、隣の田んぼも豊作だったら嬉しいだろう。そんな時に凶作地域を想像して、価格高騰に期待を寄せるのは業者だ。そういう人たちは作物を育てない。経済にしか熱中できない。あらゆることを利益をあげる手段にしか考えない拝金主義者にとって、グローバル経済社会がわがもの顔でいられる世界なのだろう。

私はそんな感覚がまったくしっくり来ない。経済問題を軽んじるつもりはないし、お金は大切だと思っている。でもそれは、いくら集めるかではなく、どう経済活動(消費)するかが重要だ。豊かになるとは、使い道のことであって獲得量(金額)や備蓄量の事ではない。

世代間の格差が喧伝される(真偽に疑問もあるが)。その恵まれた側だと言われる団塊世代人としては、今、何に消費するかが問われている気がしてならない。精神貧困なまま、勝ち逃げの年寄りにならないために、考えなければならないことがある。

(2012/9/15)

1990年10月

10/1 MON 別の歯がまたちょっと欠けて歯科へ行った。公演のシナリオ打ち合わせ。本当に手間取っている。こんな大変なことになるとは思わなかった。

少し具合が悪いと、直ぐに歯医者にゆく事にしている。だから一度で治療完了になることが多い。ずるずる治療に通い続けたら、手遅れみたいなことが嫌いなのだ。

しかしこの行動は、健康に気遣っているというより、面倒な事態を早めに避けている感じが強いので、不健康な一面なのかもしれない。

延々と通院したり、待合室でぼんやり時間を食いつぶされていくのが心底嫌いなのである。こういう性癖は、介護や付き添いを面倒がる傾向に現れている。歳を取ったら公私ともに、そういう現実が近づいてくる。効率的に動けることに酔いしれるばかりではない行動パターンの学習が必要なのは分かっているのだが、なかなか身につかない。

児相研セミナーでのアマチュア芝居公演、出演者達は、楽しげではあったが大変だったようだ。

10/3 WED ABCラジオ最終回。アシスタントやキャスター、その他いろんな人がいっぺんに変わってしまう。フリーで仕事をしている人達が多いが、みんな大変だなあと思う。

夜、ナビオのスカラ座で「ダイ・ハード2」をみる。楽しみにしていた一本。期待を裏切らない。

月一回で結構長く関わっていたラジオ、

この件がどんなことだったのか記憶がない。公務員として雇用の確保された中から、フリーの人達のことを見ていた。もっとも、マンガ家としての仕事ではフリーだったから、連載が始まったり、突然終了したりする事への不満や不安は共感できた。

サラリーマン編集者に、いいように言われて連載打ちきりになったり、原稿料を値下げされたりしているフリーランスの憤懣はわかる。

最近のニュースで警察官が、釣り情報誌に連載をして稿料を貰ったことが問題になり、退職したと聞いた。私は公務員に途中採用（欠員補充のために7月採用）されたとき、既に新聞にマンガの連載をしていた。人事課はそれを承知で採用した。そして、一度も問題にされることなく、25年過ごした。京都府の依頼仕事に漫画を描いて、原稿料まで貰ったことがある。例外だったのだろうか？

「ダイ・ハード2」は良く覚えているというより大好きな映画だ。正当な映画ファンなら、第一作が良いと言うべきなのだが、好みだからしょうがない。特別版DVDも持っていて、今もたまに見返すことがある。

10/4 THU 受理判定処遇会議。

シナリオが何かふくらみが足りないので、手直しのアイデアを書いている。難しい、演出家のセンスとこっちのそれとの違いにも苦勞する。違った感性の人との共同作業は難しい。

公演「児童相談所の日」（タイトルは違ったと思うが内容はそうだった）のシナリオを書いたのだった。シノプシスといった方が良いようなものだったかもしれない。中味の記憶が曖昧だが、福知山児相にいた小巻さんが演出した。児相研セミナーで主

に同業者に見せるモノだから、積極的に楽屋落ちと共感を狙ったモノだった。

当時はまだ、こんなに豊かに仕事と関わることが児童相談所において可能だった。状況が激変するのに、大した時間は要らないことが今になるとよく分かる。

10/5 FRI 朝一番に、児相研セミナーの案内をもって、本庁の主管課長のところに挨拶に行く。その後、三児相課長・係長会議。議題山積み。夕方、再び今度は呼ばれて府庁・児童家庭課へ。三児相課長で話を聞く。話が長引いて、出張開催している亀岡の勉強会は欠席。そうなる結果的に、「編集者講座」の遅刻出席が可能になる。講師はイラストレーター安西水丸氏。面白く話を聞いた後、有志で飲み会をやるのに初めて付き合う。12時前まで三条小橋「めなみ」でおばんざいを食べながら引き続き水丸氏の話聞く。

任意の団体が実施するセミナーを、京都府も応援してくれることになっていた。職場をあげて協力体制を組み、主催雑務への協力も取り付けてあった。(申込書が届く宛先、必要書類のコピー機使用、封入発送などの作業場提供、問い合わせ電話受信等、筋から言えば、いろいろ言われそうなことを、「一つよろしく」でお願いできていた。そして来賓として挨拶も頼んでいたと思う。そんな協議で、夕刻に再度本庁に出向いたのだったと思う。)

亀岡勉強会は川畑君と地域担当CWが行ってくれた。京都児相では、担当地域の学校教員達との定例よもやま相談会を、夜、地域に出向いて開催していた。乙訓地域も同様で、隔月交代実施していた。熱心だったなあと思える。

編集者講座の講師との飲み会がよくおこ

なわれていた。自分が酒を飲まないことや、公務員だから明日の勤務スケジュールがあって、あまり出席することはなかった。だからこの日は珍しく気が向いて同行したのだった。

この時、安西水丸ファンの人の振る舞いをみて、ファンとはこういう人のことを言うのだと感心した。とても彼のことをよく知っていて、著作などもみんな読んで記憶している。作家にしたら嬉しいだろうと思った。私はせいぜいイラストを知っているくらいだった。氏は村上春樹の本の装丁を、沢山している。

10/6 SAT 高校生の家庭内暴力ケースの家族面接初回。午後、二代前の相談所長・吉田研二さんの退職を労うパーティがあった。午後2時から始まって、最後のカラオケ店を出たのは11時過ぎだった。9時間あまり、ウーロン茶、ジンジャール、ジュースでトイレばかり行っていた。

吉田さんは中間管理職になったばかりの私にとって、とてもありがたい所長だった。そのことに本当に気づいたのは、後任の正反対の所長が着任したときだった。この二人が余りにも違っていただけから、管理職のあり方や、どういう事が問題になるのかも学んだと思う。

ある組織の職員相談室で受けるケースに、「希望したわけでもないのに管理職になって苦しい…」と訴える人が少なくない。しかし、子どもが出来たら親をやらなければならないように、そういうことは人生にあると、なぜ覚悟が決まらないのだろうと思う。

10/7 SUN 夜更かしが続いていたので、昼まで寝ていた。製作から発送まで思

いのほか時間がかかってしまったDAN通信の11号を仕上げた。

この時はまだ月刊ペースでミニコミ誌（D・A・N通信）を制作していた。原稿を書いて、コピーして、折ってシールを貼って、記念切手を貼って発送していた。一番長く続いた時期には300通くらい発送していた。毎半年賀状を出していたようなものだ。

今では、ブログもツイッターもfacebookも、書いたら即、送信である。手間は要らない。変われば変わるものだ。当然のことながら、メリット、デメリットはあるだろう。

10/9 TUE 夜、久しぶりに家族療法訓練の担当日だった。緊張しながら臨んだ分、非常に面白かった。

京都国際社会福祉センターの家族療法訓練はこの時、スタッフ三人で交代担当していたのだった。もう今では記憶もおぼろげだ。

10/10 WED 祝日。例によって昼まで寝ていた。その後、机の周りを少し片付けながら原稿を描いた。夕方、最近の知人のTさんから、会社の方針とじっくり来ないので転職を考えているという電話。「転職先は今の時代いくらもあるが、やりたいこととなるとナカナカだ」という。Tさんに幸運を。

そうか、この時代の感覚はこんなだったのだ。彼は放送局のディレクターで、管理職への人事異動を断っての退職だった。今なら、辞めたところで次の仕事がそう簡単には見つからないだろうし…という事になるのだろう。そして私自身がこの8年後に公務員退職の選択をすることになるなど、想像もしていない。

時の中では、あらゆるモノが変化する。何がどう変わるかなどはさっぱり分らないが、同じままであるはずはないという点だけが確かだ。この「変化」に対して、ポジティブもネガティブもという当然のことへの確信のない人が、ずっとこのまま続くような気がするという夢を見たがる。

10/11 THU 受理判定処遇会議。夜は公演のシナリオ確定作業。いろいろあったけれども、とにかくいよいよ稽古に入ることになる。出演の皆さんよろしく。

児相で働く人たちが、日程を決めて集まって、芝居の稽古をしていた。京都府内三児相合同で演劇をする。今思うと、なかなか文化的な話だ。この時期、各職場にダウンして休職中という人はなかったのではないかと思う。そして児相在職年数は、みんな長かった。公務員職では恵まれた良い仕事だと思っていた。就職して以来、退職するまでずっと児相という元気なおばさんもいた。

10/12 FRI 「いい話の新聞」というのを企画している細見さんが来訪。これはその内いろいろな展開になっていきそうな気がする。

面接を一つした後、K子が弁護士と会った結果を話しに来た。帰路、葵橋ファミリー・クリニックにマンガ原稿を届けて、入口で事務局長・園昌和と立ち話。なかなか組織運営は大変という。彼は小学校の同級生で、ボーイスカウト時代から御近所の幼なじみだ。

細見さんの画期的な新聞は創刊された。私もコマ漫画を描かせて貰っていた。経営的には苦難の数年を、必死に持ちこたえ、そしてつぶれた。その後、彼は病魔に倒れ、亡くなった。

ニュースといえば他人の不幸、これが結局「新聞」「TVニュース」の限界なのだろう。良いことが沢山あることを告知するのが、世の中を良くする一つの道筋なのだが、よからぬ事のレポートの方を世間は求めてしまう。細見さんのコンセプトは間違っていないが、事業として成立しなかった。そんな起業家の話を、つい最近もNPOのスタッフとしたばかりだ。

10/13 SAT 第二・四土曜は閉庁で休み。読売国際漫画大賞の応募作品と「こども旅」の原稿を仕上げた。夕方から労演、「出雲の阿国」太地喜和子。何だか面白くない。その後、川崎、広谷のおっさんトリオが北山通でクレープを食べた。どうだ、似合わないだろう。

この時代はまだ、週休二日ではなかった。今ではもう、思い出せないくらいだ。太地喜和子が、下田の海で事故死するのは、この後なのだなあ。

10/14 SUN ずるずると読売国際マンガ大賞応募作品を描いていた。この賞はまだ、佳作に一度入っただけだ。



優秀賞を受賞して、元旦の新聞に作品が

掲載されることになるのは、この八年後の事である。（メダルはその時のもの。誰かに見せたことはないから、本邦初公開だ）

その日まで、この後もただただ応募し続けた。止めてしまっても良いのに、そうしなかったのはなぜなのか？不思議な気がするが、どこかで止めていたら受賞はなかったのだと思う。

もしそうだったら、自分のマンガ家としての意識は、多少違ったものになっていただろう。結果の見えない未来に向かって二十年以上も、毎年応募し続けたことに、我ながら感心する。

そして、こういう日々が、自分を根気強く粘る人間であるとか、諦めなければ陽のさす時は来ると思う人間に育てた。

結果ではなく、プロセスが人間を育てるのだと実感しておくことは、人生において大切なことの一つだ。

10/15 MON 徳島県児相から依頼されて16日午前中、家族療法の研修をすることになった。午後から出て前日泊の段取りになっていた。そうしたら妻が、私もついて行こうかなあと言いだして、そういうことになった。そこで遠回りだけでも、瀬戸大橋をJRで渡ることにした。パノラマ車両900円は十分値打ちがあった。

10/16 TUE 昼過ぎまで講演をした後、市内見物をしていた妻と合流した。鳴門へ行って渦潮を見ようという。せっかくだから潮の勢いのいい時間に合わせて行こうという。小型船で海峡にかかると、思ったよりはるかに大きな渦や波が見えた。その後、高速バスで淡路島・津名港に。そして高速フェリーで神戸についた。

まれに妻が講演に同伴することがあった。そんな時はちょっと足を伸ばして観光もし

た。記憶にあるのはもう一度、宇都宮行きに同行したとき、奥日光まで足を伸ばしたことからいだ。

10/17 WED 午前中、月例家族療法ビデオ・カンファレンスにケースを出す。午後、教護院(現・児童自立支援施設)との話し合い。「教育権保障」問題と「年長児処遇」問題がテーマ。主に非行のあった子供達が措置されている教護院は、現在の日本で唯一学校教育法に基づく義務教育の体制が未整備の所である。夜、編集者講座の予定が講師の発熱で中止になった。そこで見たいと思っていた映画「ゴースト・ニューヨークの幻」に行った。平日の夜なのに若者でいっぱいだった。甘口のセンチメンタルな分かりやすい作品だった。たくさんの女の子達がすすり泣きながら見ていた。こんなことに出くわすと「いいじゃないか、なかなか」なんて思う。

外部からSVを招いて、月例で家族療法のカンファレンスをしていた。そしてだんだん飽きてきたりもしていた。今考えると、贅沢な話だ。こういう状況を作り出せたのは、時代もあるし京都児相の取り組みの成果という部分もある。

京都府の三児相には全て、ワンサイドミラーの設置した家族療法室があった。この設備は要求して設置して貰ったものだが、本庁担当者の理解があって、宇治児相の新築時に三所一斉に設置されたものだった。主管課の係長が、児相業務を理解して、イロイロ尽力してくれていた。

当時の教護院問題は結局、内部の人たちの古い体質を、外から変えるのは困難だった。児童福祉施設全体に対する研修の働きかけにも拒否的なままだった。教護院は、

府県によって様々な状態のまま、児童自立支援施設という名称にかわっていった。

長い付き合いの早樫一男が、一時期、京都府の教護院校長職にあったが、私には結局、何が問題なのかすっきりとは見えないままだった。

10/18 THU 受理判定処遇会議。一時保護の女の子がいるので宿直。

全国をみわたすと、今も少数派で存在するようだが、職員が交代で一時保護中の子どもがいる日は宿直をしていた。負担だったが、メリットもあって、労働条件のことだけで一口にどうこう言えないところがあった。

宿直勤務時の子どもとの交流は、生活施設職員経験のない身には、なかなか貴重だった。食事のこと入浴のこと、それぞれの育った家族を反映した多彩さだった。

調理員さんが作ってくれたたくさんのご馳走を前に、いきなり白いご飯に醤油をかけて食べた子どもを見たのは、随分前のことだ。

そう言えばベストセラー「ホームレス中学生」の著者である芸人が、成功してから番組で、豪華な食事をしている所を放送していたが、辛くて見ていられなかった。

10/19 FRI 愛知県半田児相から(療育事業琵琶湖一周サイクリングなど)の視察に二人みえた。ビデオを見ながらいろいろ話す。夜は編集者講座。中西亮さんの世界の文字の話。非常に面白い教養講座。

全国の児相から視察者も多かった。京都見物を兼ねていた人も多いただろうが、熱心な人も多かった。自分たちの所の仕事を自慢に思っていたので、打診が有ればどんどん受け入れていた。2,3カ所からの視察が重なることもあって、遠方から来た児相職員同士の思わぬ交流になったりもした。

10/20 SAT 「いい話の新聞」の細見さんの紹介で、露路裏文化研究会(ロジケン)なるものの発足準備会に参加。会場が京都・島原の「輪違(わちがii)屋」というのに惹かれたところがある。初めて太夫なるものを見た。おまけに飛び入りでグローバル・アクション「サハラを2020年までに緑に」という運動の京都オフィス開設のため来日しているユーゴスラヴィアのエリザベス王女という人が、女性二人を伴って一同席した。とにかく何だか目まぐるしくたくさんの人と名刺交換をした。このごろ流行りの異業種交流みたいなものだ。

好奇心の塊のように動いていたし、成果を手にしたことも少くない。一方で、世の中の様々なことが、あっという間に過ぎていってしまうものだと実感した。

ユーゴスラヴィアは国自体がもうない。露地研も数年で消滅した。あの時テーマにされていた事が解消したわけではないだろう。問題はなくならないが、問題解決を唱えた方は居なくなる。これが世の常だと学んだことは、その後の自分の行動選択に少なからず影響していると思う。

10/22 MON 宿直勤務のアケで昼から出勤した。K子の事件のことで約束してあった河本弁護士の事務所に行った。時代祭のせいで道路が異常に混んでいて、自転車で行ったのに何度も道を迂回した。

戻って夫婦家族面接をして、その後、宇治児相の佐藤課長と二人で、福知山の鉄川課長の家に行った。

全国児相所長会の実施している非常に書き難い登校拒否児への取組のアンケート記入と、近畿児相長会議の議題の回答をまとめるためだ。時間がないのでやむを

得ずこんなことになった。そのあといろいろ四方山話。

おかしな仕事の仕方だと思うが、楽しんでいた。男三人で助け合いながら、三児相の課長業務をまっとうしていた。ちょっと部活のような気分の所があって、仕事がまったく苦ではなかった。ノルマという印象もなかった。得手、不得手があった三人が、お互いを尊重し合いながら仕事をしていた。

状況に恵まれていたのか、三人の人柄かは判然としないが、葛藤は少なかった。サンショお互いの情報はスムーズに共有されていた。

10/23 TUE 福知山児相で業務検討会議。療育キャンプ事業の到達点と問題点、教護院の抱えている課題に対して、児相がどう係わっていくかを中心に話した。

以前も書いたが、業務検討会議(ぎょうけん)は三所持ち周り開催で、長い期間続けた取り組みだ。児童福祉司、心理判定員、一時保護所職員、庶務担当職員、そして管理職が各所5人一組で、あらゆる児相業務について見直しをしていた。

働く者が自ら、自分たちの仕事を「科学する」という言い方をしていた。業務の細部、一つ一つを検証していた。

仕事の中味について考えることなく、労働としての不満や、人間関係のことをグズグズ言うのは、労働者としても、人間としても、弱体化している。その先に病休しかないなんて、いかがなものだろう。

10/25 THU 近畿児相職員研修会が京都市の主催で行われた。僕は留守番をしていたが、戻った人達がそろって批判的だったのに驚いた。近いから余計に、要らないところまで見えるのだから、確かにちょっと

京都市児相は悪く変わってきたなあと
思う。

政令指定都市児相と、そこを含む府県の児相が仲の悪いのは当時定番だった。今、更に中核都市に新たに児相が設置されている。そこと都道府県児相の関係はどのようなだろう。

当時、京都府の児相は京都市児相に、伝統的に小言をいうスタンスだった。そしてたしかに具体的なエピソードとして、杜撰に思うことがいっぱいあった。京都市児相は臨床の専門機関だという意識が強かったように思う。私には似合わないことだが、府の中間管理職として、京都市児相の対応のまずさに、心理職出身の所長直々に、苦言を呈したことがあったのを思い出した。

10/26 FRI 向陽保健所主催の「保健・医療・福祉ネットワーク会議」に出た。痴呆性老人・寝たきり老人の問題がほとんどで、出番はなかった。しかしいくつか勉強になる事実があった。

この頃の私や児相の意識はこんなものだった。自分たちは児童福祉が専門だと考えていた。乙訓地域の保健所では、保健、医療、福祉のネットワーク化を考えていたから、こういう会合への呼びかけがあったのだろう。しかしここから何か新しい動きが開始されていった実感はない。

10/27 SAT 昼まで寝ていて、午後、こと葉(小二の娘)のバレエ・レッスンに付き合った。一時間、小さな女子達がアヒルみたいにチョロチョロしているのを見ていた。大きな窓から琵琶湖の見渡せるビルの三階から、イラクは遙か彼方のように思えた。

この時、湾岸戦争まっただ中だったイラクも遙か彼方だったが、8歳の娘の保護者として、レッスン場の隅にいた時間も、遙か彼方になった。

この娘が今や30歳。劇団四季では中堅クラスで、厳しい舞台に奮闘中だ。

10/29 MON 心理テストカンファレンス。三児相の判定員が月一度、集まってデータのブラインド分析で研鑽を深めている。しかしまだまだ負けない(何という根性だろう)。そのあと家族面接が一つ。

読み返してみてもあらためて、仕事を始めてから、勉強するようになった気がする。専門書ばかりではないが、読書もするようになったし、研修にも幅広く出向いた。自分を取り巻く世界の構成にも関心が向いて、乱読は加速した。元気で他動なため、仲間達と次々企画を立てて実現していった。

良い時代だったというのも否定は出来ないだろうが、受験や資格取得のための詰め込まれる学習はしてこなかったのも、学びのキャパシティは十分あった。それは自分の好奇心の持ち方で、計ることが出来ると思っていた。

学校臨床の新展開

—⑩外国人も住民票を。しかし…—

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

不法滞在対策

ある地方都市へ出張で出た際、駅前で遊ぶ小学校1、2年くらいのきょうだいの子どもたちを目にしました。外国人風です。子どもたちだけか？ と思ってみていると、しばらくして親らしき人もあらわれました。やはり外国人のようです。平日の日中、今日は、学校はないのかな。そう思いながらも、目的地に向かって歩いて行きました。

いま、日本にはたくさんの外国人が、生活をしています。日本は長びく経済不況のなかですが、それでも世界的にみると「円」は価値があるようですので、多くの外国人が日本で就労しています。そのなかには、正規滞在期間を超え、「不法滞在」という形で、日本に居住する人もいます。そして、そのなかには子どもを持つ人々もいます。法務省の統計によると、2011年末現在における外国人登録者数は、3年連続で大幅に減少しているものの207万8,508人、また、

2012年1月1日現在、約7万人の外国人が「不法」に日本に滞在しています。さて、前回にもふれましたが、今年（2012年）の7月、外国人登録の制度が変わり、外国人に対する新しい在留管理制度がスタートしました。これにより外国人も住民基本台帳に登録され「住民票」が発行されるようになりました。これまで入国管理局が行っていた在留状況の把握と、外国人登録法に基づいて市区町村が行っていた在留状況の把握をひとまとめにして、法務省が一元的に管理するようになったのです。この背景には、二元的管理による外国人人口実態の不明化、不法滞在の増加や不就学の問題などがあります。「住民票」ができるということは、住民としてのサービスの提供を受けることができるということですが、一方で「管理」されることでもあり、危惧しなければならないこともあります。

外国人も住民票を。しかし…

外国籍の子どもたちの不就学の問題はとも深刻です。これらの背景には言語や文化、教育に対する親の価値観等さまざまな課題があるかと思われませんが、長期間外国に滞在しながら、十分な教育を受けない子どもたちは、「ダブル・リミテッド」と言われるように、母語も第二言語も不完全な習得に陥ることが指摘されています。

現在、日本では外国人に対して普通教育を受けさせる義務規定はないと解釈されています。そのため、前回も述べましたが、「国際人権規約」や「子どもの権利条約」を根拠に、当該市町村教育委員会が、その外国人登録に基づき、外国人の保護者に対して就学案内を行い、外国籍の子どもが公立の小学校や中学校等への入学を希望する場合には、市町村の教育委員会が入学すべき学校を指定し、当該学校に入学させるということになっています。

これまで、法務省が行う入管手続きと、各市町村が行う外国人登録が必ずしもリンクしていなかったため、その外国人の在留期間が過ぎても、各市町村は把握することが難しく、各教育委員会は不法在留者であっても、人道的立場から就学通知を出し、各種サービスを行い、学校側も、不法滞在者の児童を受け入れてきました。ところが、市町村の外国人登録制度が廃止され、法務省下の管理に一元化されることにより、不法滞在者の子どもたちは、学校教育から排除されてしまう可能性があります。国では、従来の対応（不法滞在であっても、子どもの利益を優先すること）を継続すると表明していますが、実質的に市町村は正規滞在者の把握のみしかできなくなるため、これ

まで、不法滞在者の子らを含め行っていた就学通知や各種サービスの通知を行えなくなる、あるいは行いにくくなることも事実です。

外国人の就労受け入れをめぐるっては、介護や看護の場でも、慢性的な人手不足から、インドネシアやフィリピンといった外国人の受け入れを積極的に行っています（さまざまな面で、うまくいっていませんが…）。また中小企業の工場などでは外国人の労働力が必要不可欠となっています。そのようななか外国人も、日本人同様、生活者としてのさまざまな問題に直面します。ことに学校では、今後、さまざまな形でこれまで以上に、外国籍の子どもたちやその家族の問題が表面化してくるのではないかと思われます。こういったことに、福祉的視点は欠かせません。いま、特に外国人の居住の多い地域を中心に「多文化ソーシャルワーカー」の活躍が注目されていますが、学校現場でも、外国籍の子どもたちへの支援が強く求められています。外国人の子どもとして生まれたがゆえに、地域や学校から突然、排除されるようなことは子どもの人権上許されることではありません。

スクールソーシャルワーカーの視点

スクールソーシャルワーカーの視点について、長くなりますが、文部科学省（2006）から引用させていただきます。

スクールソーシャルワークが従来の施策と異なるのは、以下の点である。第一に児童生徒との関係性である。これま

では、「無力あるいは非力な子どもを大人が指導、教育する」という視点で対応の枠組みが組み立てられてきた。だが、スクールソーシャルワークでは、職業的価値観である「人間尊重の理念」のもとに、「問題解決は、児童生徒、あるいは保護者、学校関係者との協働によって図られる」と考える。スクールソーシャルワーカーは、問題解決を代行する者ではなく、児童生徒の可能性を引き出し、自らの力によって解決できるような条件作りに参加するというスタンスをとる。

第二に、問題を個人の病理としてとらえるのではなく、人から社会システム、さらには自然までも含む「環境との不適合状態」としてとらえる。ゆえに、対応としては、「個人が不適合状態に対処できるよう力量を高めるように支援する」、あるいは「環境が個人のニーズに応えることができるように調整をする」という、「個人と環境の双方に働きかける」という特徴を有する。

文部科学省（2006年）「学校等における児童虐待防止に向けた取組について」（報告書）

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/06060513/001/019.htm

すべての子どもは、生まれる場所を自ら選ぶことができません。どのような場所で生まれ、育ったとしても、子どもが自らの力で、自己の人生を主体的に引き受けて生きていけるよう環境を整える努力を大人はしていかなければならないと思います。

-2. 学びの森の風景

学びの森の住人たち（5）

- 学校でもない学習塾でもない、森 という学びの世界が投げかけるもの -

アウラ学びの森 北村真也



5. 「できない」ということ

ここでは「できない」ということに焦点を当てて少し考えてみたいと思います。

私たちは、日常生活の中で幾度となく何かに

つまづくことで「できない」という場面に出合いますし、悔しさや諦めなどの感情、あるいは劣等感を味わいます。できることならつまずきたくないし、ましてや自分の子どもには、つまずかせたくなくと思っています。でもその一方で、私たちはつまずいて初めてそれまでの自分の行動を振り返り、改めて自分自身と向き合い直す

という経験を持っています。つまりつまりくことが、自分自身を変容させる上での重要な過程となっていることを経験的に知っているわけです。

そしてこのことは、子どもたちの教育の現場にも大きな意味を与えます。つまり、「できない」ということは、そもそもネガティブに捉えるべき問題なのだろうか？ということであらためて再考してみる必要性がでてくるように思うのです。

ポストモダンへと突入していった私たちの社会は、ますます不透明感の様相を示しています。政治、経済、そして社会のあり方そのものさえもが流動性を帯びてきました。社会学者のG.パウマンは、そんな社会をリキッドモダニティ(Liquid Modernity=液状化する社会)と呼んでいます。このような液状化の中にあっては、あらかじめ設定した予定通りに物事を運んでいくことが大変難しくなってしまいます。その過程でどうしてもつまずきが生じてしまう。つまずきながらも、いかにしてその時々最善の方法を模索できるかが問われてくるのです。だからつまずかないように子どもを育てるのではなく、つまずいてもそこから何かを学び取り、再びその課題を超えられる子どもを育てることが大事になってくるというわけです。つまりこの論点に立ち返る時、教育における目的が大きくシフトしていくことになるのです。

でも一方で、子どもたちが何かにつまずき「できない」という思いを抱くことで、その課題から逃げようとしてしまうこともよくあることです。「どうせやってもできないし...」とか、「そんな大変なことしたくない...」とか、その

理由は様々あるものの「できない」=「あきらめる」という短絡的なロジックが横行していることは疑いようのないように思います。

だからアウラでは、初めてやってくる子どもたちの中にある「できない」=「あきらめる」というロジックをいかにしてポジティブなもの、つまりつまずきを通して自分自身と向き合い課題を克服していくというロジックへと書き換えるかということに意識がおかれるわけです。すべては、そこからしか始まらないからです。

できないことに向き合う

自分ができないことを引き受けること、自分の嫌なところと向き合っていくことは、誰だって勇気のいることです。でも一旦それを引き受け、そこに向き合っていくことなしに変わっていくことはあり得ません。多くの子どもたちは、このことを共通の課題として持っています。でも本当に大切なことは、私たちおとなも彼らと同じ課題を持っているということです。だからこそ、私たちは彼らと理解しあえるのだと思うのです。

中3のS子は、その日も大量のプリントを自宅で作ってきました。内容は中2数学、今まで他の塾に通っていたのですが、ただ通っただけで自分ができていないところに向き合うこともせず。できていないことをごまかしながら、S子は中3になっていました。彼女の妹がこの4月からアウラにやってきたことをきっかけに、母親がS子をアウラに連れてきたのです。

アウラでは、体験入学の日に生徒に対してまず今の理解度をチェックします。入塾に際してテストを課すのではなく、その生徒の学習プログラムを立てるのに、まず現状把握が必要だと考えるからです。

「わからないものは、そのままでもいいし、まずやってみて。S子ちゃんのありのままを知りたいから...」

私は、そうやってS子にプリントをやらしてもらいました。その結果は、深刻なものでした。中2までの基礎計算が2割ほどしかできていません。

「Sちゃん、これじゃいくら今学習しているところができるでも、テストで結果が出ないでしょ。やっても、やっても、正解にならない。だから、まず正解率を上げるために復習が必要だと思うよ。どうする？復習からやってみる？」

「はい」

言葉少なに、S子は頷きました。そして、その日は復習プリントをやらしてもらいました。体験終了後の面談で、私は彼女の母親にS子の理解状況をありのまま伝えました。お母さんは一刻も早く今の塾を辞めさせてアウラに彼女を来させたがっているようでした。しかし、彼女は躊躇します。アウラに来ることで、自分ができていないことが暴露されるからです。そしてそれから1週間、S子の家からの連絡はありませんでした。

「ようやく納得してくれたようで...」

S子の母親から連絡が入りました。

「いやもう来ないかと思いました。彼女にとっては、自分ができないということと向き合うことはとても勇気がいることだ

と思うんです。でもそこを引き受けないと、できるようにはならない。それは、仕事だって同じことでしょ。その勇気が、子どもを変えていくんです」

私はそんなことを、母親に話しました。そして次の週から、S子はアウラにやってきました。まずは彼女が最も苦手としている数学のみを徹底的に学び直し、そこで少し自信を得てから、他の教科も学び直しをしていくことを私は提案し、彼女の学習は始まりました。

「すごいね。初めてきた日にやった時は2割しかできなかったプリントが6割もできるようになってるやん」

S子は、その日2時間たっぷり学習し、初日にやったテストに再び挑戦しました。結果は6割の正解でしたが、私は彼女の進歩に注目します。「やればできる」という自己肯定観や自信が今の彼女には最も必要なことだと考えるからです。

「はい」

相変わらず言葉少ない彼女の反応でしたが、明らかに彼女の表情は変化していました。それから私は、家でも学習することを勧め、約1ヶ月半で学び直しを完了させることを提案しました。S子は、その提案に対しても嬉しそうな表情を見せていました。そして毎回、彼女は大量のプリントを家でやってきては、嬉しそうに私に見せてくれました。

「S子ちゃん、えらいね」

「はあ？」

「S子ちゃんは、自分の一番人に見られたくない部分に向き合っているから...。数

学は本当に嫌だったでしょ。できないことを誰にも知られたくなかった…。いつも適当にごまかし、そこに注目してほしくなかった。私は、そんなS子ちゃんの気持ちがよくわかる。それは私だって同じだから…。誰だって、自分のできないところや、自分の嫌なところは、隠したい。誰にも見られたくない。そう思っている。でも、そこに一旦向き合わないと、それは克服できない。でも、一旦そこと向き合い、それを克服することができれば、大きな自信となって返ってくる。それは、苦手なものであればあるほど大きな自信になる。S子ちゃんは、今、その最中にあると思うんや。だから私は、すごいなって思っているんや…」

「はい」

S子は、うっすら涙を浮かべながらも私の方をしっかりと見つめてそういいました。

「できないこと」に向き合うことは、他人に見せたくないところ、いや、自分自身にとっても見たくないところを見ることかもしれません。それは、子どもにとっても嫌なことでしょうし、私たちにとってもできればしたくないことかもしれません。

S子は躊躇していました。1週間という時間は、彼女にとっての葛藤を表現していたのかもしれない。そして彼女は決心するのです。他人に見られたくない自分自身の恥部をあえてオープンにし、そこを一步ずつ自分の足で踏みしめながら歩き始める決心です。そしてこの決心から先は、彼女の歩いた分だけが進歩になります。「何がまだできないの？」ではなく「何ができるようになったのか？」に焦点を当てるだけで自然と課題解決へS子を導いていくことがで

きるようになります。

ここで大事なことはS子の中でのモードの変化です。自分に自信がなくてできないことをひとしきり隠し続けようとしてきたS子。隠し続けようとする限り彼女はますます自分に対して自信が持てなくなっていました。そしてあの沈黙の1週間。この1週間という時間の中で彼女のモードが変容するのです。そこからは、彼女の小さな一歩が自信へと置き換えられるようになったのです。つまりこの変化はたまたま数学という教科を媒介にして生じているのですが、彼女が自分自身と向き合い始めたことで、それは彼女自身のパースペクティブそのものを変容させていたのです。まさにJ.メジローの言うパースペクティブ変容が生じた瞬間です。

私、アホやし…

M子は、今年の5月からアウラに加わった学校に行かない生徒です。

M子は、大変はっきりと自己主張できる子で、私の質問にも彼女なりの意見を聞かせてくれます。学習に対しても意欲的で、何とかしていきたいという意志をしっかりと持っています。ただ気になったのは、今までの蓄積された理解でした。

M子は、現在中学2年ですが、1年の内容は全くと言っていいほど理解されていませんでした。「勉強は嫌い」と本人は言っていました。ここまできれいに忘れ去られていたケースは大変珍しい。聞けば、1年の時は、塾にも通っていたというのです。それにしても、これでは、今の学年の

内容に取り組んでも全く理解できないでしょう。私はM子に、もう一度1年の最初から学び直しをすることを勧め、彼女もそれに納得してくれました。

私は、彼女の数学を担当していますが、その後の彼女の進歩には目を見張るものがありました。正負の数の足し算から学び直して、2週間ほどで1次方程式の計算までできるようになっていきました。私はできるだけ、短期間に学年相当の理解まで到達できるように、基本の演習を中心に学習プログラムを組み立てました。

「M子ちゃんすごいやん。最初は、正負の数の足し算もほとんど間違えていたけど、今では、ほとんど正解や。あと、1年の内容は、こことここだけやっておこう。それ以外は、飛ばして2年生に行こう」

「これ飛ばしてもいいの？」

「いいよ」

「私、アホやし？」

「……」

M子のコトバに、私は一瞬コトバを詰まらせました。「私、アホやし？」そう彼女は、疑問形で聞いてきたのです。この私の一瞬のコトバの詰まりを、彼女はどう捉えたのでしょうか？相手が何を答えたかではなく、コトバとコトバとの間合いから、彼女はこれまでもいろいろなメッセージを受け取ってきたのかもしれない。

「M子ちゃんは、ほんの2週間前までアホやったかもしれん。でも、自分で自分のことを“これではあかん”と思ったから、

最初からやり直そうとしたんやろ。そして今、2週間前には全くできなかったことを、次々とできるようにしていつている。これって、アホなんだろうか...？」

「アホじゃないかもしれん...」

「M子ちゃんは、自分で自分のことを“アホや”と決めていたのかもしれない。アホやからわからないし、わからないから、練習もしない、練習しないから余計自分のことをアホやとってしまう...という、悪循環のループや。ひょっとすると、そんな風に思い続けてきたのかもしれん。でも、アウラに来て、それはほんの少しだけ変わってきた。数学の問題ができるようになったということではなくて、M子ちゃんの考え方が変わり始めた。自分で何とかしようと思い始めた。そうするとこの悪循環のループは機能しなくなる。このことが大事なんや。だからもう“自分のことアホやし”って思わんといて」

「わかった」

M子は、そうなづきながら私に返事をしました。毎朝、1日も休まずアウラにやってきては、ただひたすら5時間学ぶ彼女の姿に私はどこか力強さを感じていました。自分自身を変えるために、自分自身を生まれ変わらせるために、彼女はただひたすら学び続けるのです。

不登校だったM子は、その後、私立の進学校の特進コースへと進学していきました。アウラにやってきた当初の成績は、ほとんどが2でしたから、考えられないような変化です。実際、彼女の学校の校長先生も「君のようにこんなに短期間で力をつけた生徒は今までいなかった。

君は学校の歴史を塗り替えたんだよ」と言われたそうです。

M子にとっても「できない」ということが「アホ」という自己イメージに直結していました。だから、「できない」ことが「できる」ようになることは、自己イメージの更新を意味することでした。私たちはM子の学習に日々付き合いながら、彼女の自己イメージの変化を観察していたのです。

ここに異なる階層で並走する2つの指導のコンテクストがあります。G.ベイトソン流に言えば、メタログ（Meta-logue）という表現になるのですが、ここではメタなコンテクストがとても大きな意味を持っているのです。そこで彼女の変容が成立することで大きな変化が生じていくことになるわけです。

プラスの貯金

「学校に行きたくても行けない」中学生の不登校の場合、そんな風を感じている生徒が大変多いように思います。中学3年になったばかりのH子もそんな中学生でした。バレーボール部に所属していたH子は、クラブ内の人間関係のもつれから、クラブを辞めざるをえない状況に追いやられ、9月に退部をしました。しかし、同じクラブに所属する友達が同じクラス内にいたことから、クラスにも入りづらくなり、しかもクラブの顧問が担任だったこともあり、ますます学校に行けなくなってしまいました。

それから7カ月、彼女はその大半を家

で過ごすことになりました。学年が変わりクラス替えがあった時には、学校へ行こうと決心したものの、身体が動かない。やっぱり無理ということで、自分でフリースクールをインターネットで探し始めて、アウラを見つけたそうです。

「学校へ行きたくても行けないんです」

「どうしてなんだろう？」

「みんなジロジロ見る気がする...」

「なるほど、それはHちゃんだけじゃなくて、今アウラで勉強している中学生もみんな同じことを言ってたよ。そんなみんながジロジロ見ることなんてないんだけど、みんなそう思うんだ。でも、そう思ったら、Hちゃんにとってもそれが事実になっちゃう」

「はい」

「もっと、自信がいるんだよね。Hちゃん勉強は、学校に行かない間やってた？」

「いいえ、全然」

「じゃ学校に行ってる間の勉強はどうだった？ ついていけてた？」

「勉強が苦手で...」

「そうなんや、じゃなおさら、このまま学校へ戻ってもついていけないかもしれんな」

「ここは、学校じゃないから、Hちゃんが来たければこればいい。絶対来なくちゃいけないということはない。いいね。“学校へ行きたくても行けない”っていうのは、自信がないからだと思う。人間、自信をつけようと思ったら、プラスの貯金がいる。たとえばアウラに来ることになれば、朝も早く起きる。身支度もしないといけない。

電車とバスに乗らないといけない。毎日 5 時間集中して勉強しないといけない…。そんなことはみんな H ちゃんにとって新しい経験になる。それがプラスの貯金になると思うんや。自信がないっていう状態は、何も H ちゃんだけじゃない。大人だっていっしょ。私だって、お母さんだって一緒。新しいことに踏み出そうと思うと、誰だって自信がなくなる。だから“やりたくてもやれない”状況になる。そんな時は、プラスの貯金をしないとイケないんだ。自分がこれから変わっていくための貯金」

私は、そんなことを H 子との最初の面談で話しました。一通り彼女の気持ちを受け止めながら私なりの提案を投げかけていきました。そしてお母さんにもお聞きになりたいことがあるかどうかを尋ねました。

「アウラに通わせていただければ、学校の出席認定になるんですね」

「出席認定にならなかった学校は、今までありません。それに通学証明も学校で出すことになっていますから、通学定期も購入できます。学習評価も、多くの学校で評価が実現しています。ただ評価については、学校長の権限ということになっていますから、最終的には、各学校の判断です」

お母さんは、H 子の今後の進路のことを心配されているのでしょうか、そんな質問を私にされました。

「私が不登校の子どもたちを指導してきて、一番大切に思っていること。それは、彼らが“不登校になってよかった”と思ってくれることです。不登校になると、みんないろんなことを考えます。これまでの生

活を振り返ったり、将来の生活について考えたり、あるいは、自分の性格や友達関係のこと、さらには生きることの意味なんて哲学的なことまで考えたりすることがあります。そうよね H ちゃん？」

H 子は、私に向かって頷きました。

「こんなことは、不登校にならないと考えなかったことです。今までの自分自身を振り返り、これからの自分自身を考える絶好の機会を不登校という経験がくれたのです。私は、子どもたちにそう思ってもらいたいと思って指導を続けています。人生に無駄な時間はないのです。すべては意味のある時間であり、意味のある経験なんです。大切なことは、その意味を理解すること、私はそう思っています。そしてこのことは、お母さん自身にも当てはまります。自分の子どもが学校へ行かなくなって初めて考えさせられたことがたくさんあるはずで、それは、つらかったこともあるでしょうが、そこから得たものもたくさんあったはずで、それらはみんなこれからの人生の肥やしになっていくものです。そう、プラスの貯金になるものです」

お母さんは、目頭を押さえながら私の話に頷いておられました。

こうして H 子の初回の面談は終わりました。もう一度家に帰ってよく考えてもらいたいアウラでやっていきたいということになれば、体験の申し込みをしてもらうことになっています。

不登校の子どもへの初回面談、その場面で私は「プラスの貯金」というメタファーを使いました。プラスの貯金とは、自分に対する自信の

ことです。不登校の子どもたちの多くは、きわめて自己イメージが低いのが共通した特徴です。そしてさらには、子どもが学校へ行かないという状況が、親子関係においても様々な課題を作り上げてしまうのです。そしてその結果、親子関係そのものも子どもの自信を奪い取ってしまいがちになってしまうようです。

そこには一つのシステムがあります。学校に行きたくても行けない自分自身を否定し、家に引きこもれば引きこもったで、そうしかできない自分自身を否定し、親子で言い合いをすれば、親に心配をかけてしまう自分自身をまた否定してしまうのです。あらゆることが、自己否定へとつながってしまうようなシステムがそこにはできあがっているわけです。だから、それを一旦断ち切らないといけないのです。このことは、不登校の子どもたちの面談においてとても大事なロジックなのです。

その後、H子はアウラで学び始めるようになりました。そして1日の欠席もなく皆勤状態で卒業し、現在元気に高校生活を送っています。彼女のプラスの貯金が、彼女のその後の人生を切り拓いていったのです。

頭の中がごちゃごちゃになるんです

今度は、多動の男の子のエピソードを紹介します。とにかく物が片づけられないというK君でしたが、国語の学習を媒介にして家庭での片づけが大幅に改善していきます。何が起こったのか、お母さんも最初はわからない状況でしたがK君はどんどん変わり始めます。

小6のK君は、片付けが大の苦手という

男の子です。アウラでの初回面談で、お母さんに「何か気になることはありますか」とお尋ねしたところ、この片付けの話が話題に上がりました。ただ私の印象は、大きく違って大変礼儀正しい素朴な男の子というようなものでしたから、お母さんの口から出てきたコトバに私は少し戸惑っていました。

「とにかく自分の部屋もすごいんです。机の上も本とかプリントの山とかで...。学校の忘れものも多くて、とにかく大変なんです」

お母さんの口ぶりからは、結構大変そうな感じがうかがえ、K君もそれに頷いていました。私はK君に聞いてみました。

「お母さんの話では、K君の部屋は大変な状態になってるみたいだけど、そうなの？」

「はい」

「じゃあ、学校で使うプリントとか、よくなったりするでしょ？」

「はい、よくなります」

「不便だよね、そんな散らかったままじゃ...。どうして、そうなるんだろう？」

「何か、頭がごちゃごちゃになるんです。一つのことだけやってるときはいいんですけど、いくつものことをやらなあかん時に、ごちゃごちゃになるんです。そうしたら、いつの間にか...」

「そうなんや、じゃ、K君は、本当はちゃんと整理していたんや。でもいっぺんにいくつものことをやらないといけない状態になってしまっごちゃごちゃになるわけなんや」

「はい」

「なるほどな」

私は、K君に興味を持ちました。大変丁寧なやり取りと、対称的な片づけられないという行動パターン。そして彼なりに自分の状態を認知していること。お母さんは「多動」というコトバを出されていましたが、私は、そのラベルを受け入れようとは思っていません。K君を「多動」と私が認知した段階で見えなくなるものがあるからです。むしろ彼の口から出た表現。“頭がごちゃごちゃになるんです”これが出発点になります。

「私は教科の学習を通して、それぞれの子どもの奥にあるものを見つめます。きっとK君の場合は、片づけられないということが、その奥にあることなのかもしれません。片づけられないという状況が何を意味しているのか、あるいは片づけられないという状況を支えているものは何なのか、とにかく私はそのことに向き合うことになるかもしれません。「多動」というコトバ一つで片づけてしまうのではなく、その彼の状態をもっとよく観察することで、その奥にあるものが何なのかを知りたいのです」

こうしてK君の初回面談は終わりました。そして初めての体験日、彼は大変集中して丁寧に問題に取り組んでいました。そして彼の提出したプリントには、とても丁寧な字でその答えがつつられていました。

埋め込まれていく学び

モノが片づけられないとっていた小6のK君が、アウラで学習を初めて3ヶ月。今日は、初めてのお母さんとの面談でした。家で は、どんな変化が見られているのでしょうか。私は、それを楽しみにしていました。

「彼は、アウラで学ぶことを家でどんな風に言ってますか？結構楽しんで来てるでしょ？」

「楽しんでます」

「そうでしょ、楽しんできてますよね。そう思います。毎回、楽しそうにやってるしね」

「あの最初の時にお話した中で“モノが全く片づけられない”ということでしたよね。そしてそのことがあって...、ここではいろんなことを大変しっかりとやってますよ」

「確かに、ここにお世話になってから、変わってきたなというのは見えてきてるんですよ」

「どういう風に？」

「むちゃくちゃきれいにするというんではないんですけど、学校のものとは要らないものと今使うものに分けられるようになった」

「前はできてなかった？」

「もう、それはぐちゃぐちゃで...」

「ほー、あっそう。なるほどね。不思議ですね、国語だけを週に1回学習してるだけなんですけどね」

「もうほんまに、何でって思うんです...」

「お母さんの話では、ほんまにひどかつ

たんですね。家の中もぐちゃぐちゃで、何から手をつけていいかわからん状態やったようでしたよね。私も最初聞いてびっくりするくらい…。そして本人は、“すぐに頭の中がごちゃごちゃになる”って表現していた…」

「言っていました」

「だから、本人も訳がわからんようになっていたんだと思うんです。そして、国語を履修することを通して彼のその部分がどんな風に変化していくのか、それを見たかった。だから私の焦点はそこにあったわけです。“ごちゃごちゃになってしまう”という状態がどう変わっていくかを、国語を通してやろうという指導目標を立てたわけです。でも、国語のプリントとかとても彼はきちんとするんですね。私は驚いたんです。一度、見てやってください。それは、本当に感心するくらい間違い直しもきちんとしてるしね」

「そうですか…」

「まあ、見てください。彼のやったプリントを、“見せて”って言って…」

「見ました」

「きれいでしょ？丁寧に直せてるし…。読書の発表も起承転結をちゃんといれて、丁寧に発表するんですよ。彼は、日本の歴史にこだわりがあるようで、そればかり読んでますけど…」

「そう、歴史がおもしろいみたいです」

「それを、“こうなって、こうなって”って、実に丁寧に話してくれるんですよ。だからここでの彼の様子を誰に見せても、“きちんとした子だね”って思われるだろうし、まさか今までモノを全く片づけられなかった子どもだったとは想像もつかな

いと思いますよ。まあある意味、多動的な行動があるとか、誰にも見えないだろうなって思うんです。だから、あの…、不思議やなって思うんですよ。でも少なくとも、週に1回は、そんな様子で学習に取り組むでしょ、それが彼の日常のごく一部ですけど、彼自身の中に埋め込まれていくんでしょうね。だから当然日常の生活の中にも変化が現れる…」

「あんまり言い過ぎた部分もあるのかなって、私が…。“片付けなさいって”とか“早くしなさい”とか、この人少し参ってたこともあったから…」

「それもあるやろね…」

「だから、言わないようにはしてますけど…」

「褒めてあげることが大事かもしれないですね。まああんまり何も言わなくて、逆にうまくやれている部分を褒めてあげるといふ…。やっぱりそれがすごくいいと思います。私は彼に対しては、よく褒めているわけですよ。“すごくきちんとやれてる”とか、“ていねいにやれてる”とかね、まあだから、あえてそういうポイントで褒めている。何点やったとか、そんなことあんまり関心を示さないんですよ。そんなことより、きちんと上げられることの方が大事、そこに私の意図があるんですよ。そこにね…。それは、先も言ったように、彼への指導目標をそこにおいてるのでね、ぶれないんですよ。教育って奥深いんですよ。それで、大変知的な作業なんですよ。これってね…、見えないところでいっぱい絵を描くんですよ。そしてそれを彼とのやり取りの中で表現するだけの話なんですよ。まあ、でも今のお母さんの話を聞いて、

私はうれしいですよ。それだけ彼はどうしようもなかったわけでしょ？何をやってもなかなか改善されなかったわけでしょ？」

「何回も学校へ行って相談したんです」

「ねえ、もっと早くアウラに来られたらよかったのにね。手品のように動くわけですよ。教育のすごさですね。ということは、お母さんにとっては結構満足ですね」

「それはもう、大満足です」

「それはよかった」

「少しずつ変わってきたのが、目に見えるようになってきましたから...」

「まあ、それじゃそういうところを褒めてあげてくださいね」

「できないところ」は、人が変わっていくときの転換点かもしれないと思うことがあります。だからそれをいつもネガティブに捉えていては、その変容が生じてこないのです。あの職人的な催眠療法家であったミルトン・エリクソンがどこまでも深い観察によって鋭い技法を生み出したように、その「できない」というポイントにこそヒントが隠されているように思うのです。

そしてエリクソンの技法とベイトソンの理論が大きな源流となって誕生したブリーフ・セラピー(短期心理療法)。そこには、家族療法、NLP、そしてソリューション・アプローチなどが展開するわけですが、それらに共通して見出すことのできる概念として、リフレーミング

(Re-framing)というものがあります。「できない」ということに関しての自己否定感へとつながるネガティブなフレームを自信へとつながるポジティブなフレームへと置き換えていくこと。そうすることで「できない」ということにかか

わるシステムそのものが変容していくことを私たちは経験的に理解しているのかもしれませんが。

アウラの森では、日々日常のやり取りの中でこのようなフレームの書き換えが起こっています。それは私たちと子どもたちの間にのみ起こるのではなく、私たちと親たち、そしてさらには親子の間でも生じていきます。まさにそれは、それぞれがバラバラに機能するのではなく、互いに有機的に影響し合う円環的なシステムであり、生態学的(エコロジカル)な世界の広がりでもあるわけです。

(きたむらしんや 2012/8/20 脱稿)

『幼稚園の現場から』

・これは、いじめ？

鶴谷主一

原町幼稚園(静岡県沼津市) 園長

保育園の年中児が・・・

私の妻は隣接する原町保育園の副園長をしています。彼女から聞いた話です。

6月のある日

保育園の幼児組(年少～年長)は吹き抜けのホールに集まってみんなで昼食の準備をしていました。

6人掛けのテーブルで、席は自由に選べる状況だったので、仲の良い年中の男児が5人で座っていたそうです。そこに、軽い障がいのある男児Aと一緒に座りたくてやってきた。

Aがいると会話がうまく成り立たないとか、一緒にあそんでいても決めごとを守らないなど、子ども同士でもなんとなく嫌なことがあったのだろう。

「Aと座りたくないよね～」や「だもんねー」そんな会話を交わしていた5人のうちのBが、Aが座ろうとした席に身を乗り出し、席に座らせないように邪魔をした。4人は「いいぞ！」といった感じ。

Aと一緒に座りたいという気持ちが強く、空気を読んで引き下がるようなことも無く、強引にイスに座った。すると5人はサッと隣のテーブルに移ってしまった。一人残されたAもちょっと遅れて隣に移った。すると5人はまた元のテーブルに戻ってくる。そしてまたイスをめぐるのいざこざが始まり・・・

とうとう頭にきたAは、Bの服をつかんで引っ張った。そこでBが「せんせーい！Aくんがやったー！」と訴え

る。

少し離れたところで後ろを向いて昼食の支度をしていた若い担任(2年目)は、はじめてその場にやってきて、Aに向かって「ダメでしょ、お友達を引っ張っては・・・」と注意を始めた。

Aはもともと話すことが苦手なうえに、怒りと興奮とで、じゅうぶんに状況を説明出来ないで黙り込んでしまった。

そこで、2階から一部始終を見ていた副園長がすっ飛んで行って、担任に状況を説明し、Bと4人をこっぴどく叱ったという。ちなみにBはすぐに泣きべそをかいて謝った。

Aは精神的に幼いため、感情的なしこりを感じることはなく、目的が達成されればゴキゲンで着席した。

この事例から・・・

このような場面は、保育現場では時おり起こってしまうことです。そこで「こんなこともあるから気をつけよう」という“気づき”を職員間で共有することができました。

まとめると『保育中は、子どもの様子をしっかりと見ていることはもちろんだけど、見ていなかった場合の子どものトラブルは双方の意見や周りの状況をよく聞く。そして、子どもの人間関係や性格を考慮した保育者の洞察力が大切』ということになります。

職員のスキルアップにはつながる事例でしたが、このケースは別の意味で考えさせられました。

最初この話を聞いた時に、私は非常に驚きました。年長児の話だと思っていたからです。そこで、「え？年中なの！」と聞き返していました。年中児の6月に、しかも男児にこのような、いじわるな連係プレーができるなんて幼稚園では想像が付きませんでした。幼稚園の年中男児はもう少し幼い感じですので、AとBの直接対決、ようするにケンカになっていたと想像します。

いじめの芽？

いじめの問題がメディアで取り上げられている昨今、気にしすぎかなあ、と思いつつ気になってしまいました。

これは“いじめの芽”でしょうか？

Bを含む5人の行動を小中学生に置き換えると、完全にいじめに見えますが、、、迷った末にこう考えることにしました。『いじめという言葉で定義する必要もないが、見過ごしてはいけない成長の過程』

「仲間に入れてくれない！」

「あそんでくれない！」

「いじめられた」・・・

という訴えは、年少児の時期からあります。ほとんどが2、3人。多くても4人グループの中でのトラブルで、仲良くしていたのに相手が急に遊んでくれなくなったり、他の子と仲良くなったので縁を切られたり、遊びの輪に入れてくれなかった、という内容です。

ボス的な子どもが、仲間に加わるのを許可したり拒否したりという仕切りを行うことも珍しくありません。気の弱い子どもや、まだ幼くて言われるままにくっついていくような子どもを従えてグループを形成するのです。独占欲もからんできます。

幼児の人間関係も大人の縮図、というよりもっと赤

裸々に繰り広げられていきます。しかし、その関係は子どもたちの成長発達とともに、逆転したり、関係が変わっていったりしますが、それが子どもたちにとっての人づきあいの学習となると考えています。

幼児期になにをすべきか

そこで！です。

私たち幼児教育の役割として

いじめに加担しない子ども、

いじめを受けてもめげないタフな子ども、

もっと理想的にはいじめを防止、あるいは回避できる子ども。そんな一面を持つ人を育てるには、幼児教育の現場でどういう教育をしたら良いのか、いろいろと考えてしまいました。

残念ながら幼児教育の結果はすぐに見ることができません。何年後かに自覚した人が「これは幼児期のあの経験のおかげだ！」なんて思うことが稀にあったとして、はっきりと紐づけできるものではないからです。しかし、その人の潜在意識やものの考え方の基礎を形成する時期に多少影響を与えていることは事実なんだと思います。

それを踏まえて、いま現在、こんなことがひっかかっています。あくまでも個人的な思いですので、ご意見を頂ければ幸いです。

仲良くしなさい！という呪縛

私の幼稚園の保育目標にも「なかよく」という言葉が使われています。いろんな事象に興味を持ち、広い心、大きな器になってほしいと、幅広い意味を込めているつもりですが、「なかよく」という言葉がその第一の意味を発信し続けているのは事実です。そして、ケンカしないで仲良くしなさい。と子どもたちは物心ついた頃から言われ続けているでしょう。

だからかわかりませんが、この頃子どもたちのケンカが少なくなっているような気がします。取っ組み合いのケンカはめったに見ません。園内は平和なので良いのですが、本当に良いことなのでしょうか。ケン

力をしたり、仲直りをしたりする経験は、立ち直りが早く、相互の関係修復も容易な幼児期だからこそ積極的に経験すべきことかもしれません。

ちょっとアタマの回る子どもなら、ケンカで叱られるより他の方法で、、、ということにもつながるのではないかな、などと考えてしまいます。

だからといって、「ケンカしろ！」とは言えませんから、起こったらすぐに止めずに見守る姿勢を推奨しています。

友だち、仲間が一番なんだよ！

という呪縛

いちねんせいーになったら

ともだちひやくにんできるかな

という歌もあるほど、教育現場でも世間でも「友達」「仲間」に手放して価値を強調しています。幼稚園で歌っている歌にも仲間を讃えたものが多く、よく歌います。子どもたちに伝えたいことだし大切なものですが、もしかして仲間はずれになることに恐怖を感じるほどの呪縛をかけ過ぎているとしたら、、、う～ん、考えすぎでしょうか。ステキな歌がいっぱいあるんだけどねえ…。

みんなと同じ

幼稚園では制服、カラー帽子、靴や体操服…

いろんな持ち物が同じです。そして一斉活動では同じ時間に集まって、同じ活動をして、キレイに並んで…という集団生活をしていきます。お弁当箱を並べてみると、みごとに男児はブルー系、女児はピンク系で揃います。その中で所属意識が育ち、規範意識も育ち、学校へ入学するという準備も出来るのですが、、、。

みんなと同じでなくてもいいんだよ、自分が大事だよ。という視点も育てないと片手落ちではないかと思うのです。

エネルギーの放出

雨の日が続いたりすると、外で遊べない子どもたちのフラストレーションが溜まって集中力が低下したり、トラブルが多くなったり、すぐに泣いたりすることが多くなります。こうなると保育がうまくいかない。

なので、保育者たちはよく知っていて、ホールに連れて行ってワーツとダンスをしたり、騒いだりして発散遊びを行います。雨が降っていない日でも、朝にじゅうぶん遊んでから部屋に入らないと、落ち着かない子どもがいたりします。エネルギーが発散されていない状態です。中には攻撃的なエネルギーを溜め込んでいる子どももいるので、それを放出してやります。

ずっと抑圧されたままの状態を意図的に開放してやる。それがないと、その余ったエネルギーが気に入らないクラスメイトに向かう場合もあるのかもしれないね。

おわりに

いじめの問題は幼児教育の現場では、命に関わるような重大な問題としては顕在化してきません。だから何もなくていいというわけではなく、潜在化していることがあるとしたら、それは改善していかなければならないはずですよ。いまはハッキリしたこともわからず手探り状態ですが、今後もそうかもしれません。ハッキリ「これがいいんだ！」と猪突猛進するのも危ういかもしれません。かもかもだらけで、結論の出ない今回になってしまいました。

最初の話に戻りますが、あの5人のとった、いじめっぽい行動はあれ以来無く、時おりケンカをしながらも、文字通り“仲良く”やっているそうです。



ツルヤシュイチ

(幼稚園勤務29年/うち園長10年目)

<http://www.haramachi-ki.jp>

福祉系 対人援助職養成の 現場から^⑩

西川 友理

彼女は授業中、常に机にうつ伏して寝ていた学生でした。成績も良くありませんでした。

「福祉って、なんかアホみたい。色々やっても、しんどい人が沢山おるのが現実やん。」

「教科書も、なんかきれい事ばかりでうっとおしい。」

「この学校なんか、親が行けって言うたから、入学しただけやもん。」

と文句ばかり言っていました。

「特に何をしたいとかってないねん。一生、フリーターでええわ。」

と言って、学校をやめていった学生でした。

数年後のある日、突然、電話がかかってきました。

「お久しぶり！今どうしてるの？」

「お久しぶりです。今、ヘルパー資格を取得して、高齢者施設で職員しています。」

「ええっ、高齢者施設？！ていうかあなたが敬語？！」

「あはは、さすがに敬語は使いますよ！」

「そ、そうだね、ごめんごめん。」

「この前、在学中の教科書を引っ張り出して読んだら、面白いなーって思って…」

「き、教科書とか読むようになったんだ！」

「やっぱりちゃんと勉強して、資格をとって仕事したい、と思って。」

「そ、そうかそうか。いや、あの、ちょ

っと待って、なんか意外な情報が多すぎて処理できない…」

「あははは、そうですねー、当時の私から考えたらね、こうなるなんて思ってなかったです！」

彼女は、あの授業ではこう言っていた、この先生はこうだった、こういうビデオを見たけど、今思ったらあれにはこう思う…と在学中にあったことを色々思い出して話してくれました。

私は彼女が机にうつ伏していたシーンしか覚えていませんでしたが、授業の内容は彼女に届いていたのです。

「今この仕事についてのも、あの授業であんなことを聞いたり、あんなビデオを見たからやと思うんですよね。」

Head - Hand(s) - Heart

「3つのH」という言葉があります。Head、Hand(s)、Heartの頭文字で、「3つのH」。これは福祉、看護、芸術や教育等、様々な場面でその道の専門職に欠かせない要素として挙げられます。Healthを足して4つのHとする人、さらにいくつか足して6つのHとか、7つのHとする人もいますが、Head、Hand(s)、Heartは欠かさず挙げられます。元が英単語ですから、分野によって、また使用する時と場合によって、微妙に訳し方、解釈の仕方には違いがあります。

社会福祉の場では、Head=頭を“知識”、Hand(s)=手を“技術”、そしてHeartは“心”として解釈していることが多いと思います。

社会福祉の“知識”は、養成校の教員が教えるべきことの1つです。厚生労働省から、これを教えなさいと明確に規定されています。極端に言えば、小六法や参考書を開けば調べることが出来るものです。

社会福祉の“技術”も、授業で教えることとして規定されています。福祉系対人援助職の通信課程で、わざわざスクーリングを実施するのは、面接技術などの技術指導を実際に演習形式で行うためです。

しかし社会福祉の“心”、これを教えるのはとても難しいと感じます。

社会福祉士や介護福祉士、保育士等には、規範として「倫理綱領」が明文化されており、一定の判断基準になっています。しかし、価値観や倫理観は、その土地の文化や社会情勢の移り変わりによって、変化するものです。事実、社会福祉士の倫理綱領も過去に改訂されています。このように、「倫理綱領」は客観的な基準であり、個人が主観的に感じて受け止め、言動で表現する部分とは、若干異なるものです。何よりも、「倫理綱領」という文章の存在を教え、これは大切ですよと伝えるだけならば、それは“知識”の伝達にすぎません。

以上を踏まえると社会福祉分野の「3つのH」で言う“心”とは、心の働き方、具体的には感受性や感性を示すのではないかと考えられます。

感受性と感性は同義語としている辞書も多いのですが、ここでは、感受性を“外界にあるものを感じ取り、解釈する時の性質”、感性を“頭や心、内面にあるものを他者から認識出来る形に表現

する時の性質”とします。

例えば社会福祉士の相談援助実習では、学生は実習が始まる前に、実習先施設・機関がある土地の地域情報を収集します。行政のホームページやパンフレットなどを参考に、人口構造や文化性、産業の発展の歴史などを知ることで、そこに生きる人々の生活や歴史に思いを馳せ、こういう土地ではないかと想像力を働かせる。また、実際にその土地に行き、町並みの様子やそこで生きる人々の服装や話し方を知る。買い物をしたり、人々と言葉を交わしてその土地らしさを感じ取る。すると、データや書類だけでは出来なかった深い理解につながります。しかし、それを感じとれるか、またどのように感じとるのかということ、その学生の感受性にかかっています。

実習に入ると、実習前に用意した情報や、手元にある資料、目の前の状況を踏まえ、相手にどう働きかけるか、支援のための暫定的目標をどうするか、グレーゾーンのケースに対して「これは出来る、これは出来ない」の見切りをどのようにつけるかと考え、行動します。その言動のありかたには感性が現れます。

感受性は、物事を見る時の癖のようなもの、感性は言動に表われる癖のようなものだと思います。それらの癖が社会福祉的に習慣付けられているかどうかポイントになります。

「3つのH」はどれも大切ですが、特にHeart、社会福祉的な感受性や感性がないと、専門職としてまず情報を取り入れることが出来ませんし、知識や技術を吟味して組み合わせたりすること

も、それを相手に伝わるような形で表現することも出来ません。

Heartは援助の要素であると同時に、援助全体に関わってくる大切なものと言えます。

福祉的な感受性や感性が 鋭い学生、鈍い学生

感受性や感性というものは、それぞれの学生が体験してきたあらゆる事象や社会的な関係性により、培われてきた人間性であろうと思います。養成教育を受けることで、それらの癖を社会福祉的に習慣付けることが必要です。しかし、それまでの人生を経て培われてきたモノの見方の癖、表現の仕方の癖は、やはりどうしても大きいと感じます。

ある福祉施設で実習している学生のもとに、実習指導に行った際のことです。実習前から私は、その学生に対し、社会福祉的な感受性が鋭いなあと感じていました。

「僕の、ヒトへの視点って、これでいいんでしょうか。」

「え？ どういうこと？」

「なんか、もっと、専門職っぽい見方とか、視点とか、考え方とか、そういうのがあるんじゃないかなって思うんです」

「自分では、今の自分のもの見方は、専門職とはちょっと違う、と思うんですか？」

「いえ、そうじゃなくて…今の、僕の、ヒトの見方って、普段僕が普通にヒトを見る時の見方なんですよ…なんとい

うか、あまりにも普通にやっている見方に近すぎて、特別なことをしている気になれないっていうか…勉強しているように思わないっていうか…問題なさ過ぎて不安って言ったらヘンなんですけど、そんな感じで…」
と、なんだかとても不安そうでした。真面目な学生でした。

逆にこのような学生もいます。

真面目に実習をこなし、ちゃんと勉強したいと思っており、職員に指示されたことにもきちんと従う。ただ、日々の記録である実習日誌が書けない。

実習日誌は原則的に、その日あった出来事を全て書くのではなく、印象に残ったシーンを2つ3つピックアップして詳細に記録し、これについて自分なりの考察や意見、質問を含めた文章を書くように指導しています。

ところがこの学生は、どのシーンをピックアップすれば良いか解らない。とにかくその日にあった事実を延々と書き連ねるだけで、考察が浅い、自分なりの意見も表れていない記録しか書けませんでした。

「何を、どこを、どんなふうに見たらいいのかわからないんです。」

そこで、実習時間中どこを見たらいいか、どんな風に考えたらいいか、話し合ってみたのですが、

「先生や友達に“ここやで”といわれたら、なるほどとは思いますが、自分でそれに気付けないっていうか…」

この学生もとても真面目でした。必死にもがいていました。

このように、社会福祉的な感受性や感性を、これまでの生育環境によって持ち合わせている学生と、そうではない学生がいます。どうやら社会福祉的な感受性や感性は、勉強すれば簡単に手に入る、というものではないようです。なおかつそれらは、一定の基準や数値ではかかれるものでもない。おまけにこれで良いとか、悪いといったことも明確に言い切れない。しかし、社会福祉的な感受性や感性の鋭い学生と、鈍い学生の違いは、明らかにあるのです。

社会福祉的な感受性や感性の鈍い学生に対しては、なんとかしたい、どうにかして教えたいと思ってしまいます。

養成校教員の役割

…と、このようなことを考えていると、ある施設の職員に話した際、

「そうですねー…うーん…」と苦笑され、「教育でなんとかするっていうのは難しいんじゃないでしょうかね。学校は、知識や技術の基本となるところをしっかりと教えるところじゃないんですか。…多分、おっしゃっているようなものは、学校内だけではなく、様々な場面で磨かれると思うんですよね。教職員の先生方は、様々なことを感じられるようになるための、基礎的な知識や技術を教えて下さい。」

と、おっしゃいました。

…そうだった、私（教員）の役割というのがあるんだって、と思い出しました。

対人援助職養成校の役割は、学生が、

専門職としての第一歩を踏み出せるように、教えること。

つまり、対人援助職の基礎となる法制度の知識や援助の技術を教える。

これに加え、社会福祉の価値観や倫理観という知識を教える。

そうすることによって学生は、自身の人間性や価値観が今の社会福祉のパラダイムと比較してどうか、目の前のケースに対してどう考えるのか、このようなことを自ら考え、判断するための材料が持てる。

そして、知識や技術といった材料を持つ学生に、何らかのきっかけで「あ、これはこうなるんだ」「こういうことじゃないのかな」という気づきが生まれると、単なる知識や技術が、その学生自身の心に内面化される。

「あれっ」「へえっ」という気づき生まれ、ほんの少しでも興味が湧けば、もしかするとそれが、社会福祉的な感受性や感性が豊かになっていくきっかけになるのではないかと思うのです。興味が湧けば、それについて知りたいという思いが生まれ、目や耳をそちらに向けて、心の感度を高めようとするでしょうから。

教えるというより、気づきを待つ。

そう考えると、そもそも私が“社会福祉の感受性や感性”として学生に伝えたいと思っているものは、本当に“正解”なのだろうか、と疑問が生まれます。“社会福祉の感受性や感性”には正解も不正解もなく、本人が気づき、習慣付けてい

くものなのでしょう。教員という職業がら、育てたい、教えたいという気持ちがどうしても出てきてしまう、という傾向も把握しつつ、押し付けないように気をつけるべきだと思います。

かといって、何もしないのではありません。学生に対して「何が最も正しいかはわからないし、明確な答えはないけれど、今の私からはこのように見える。だからこのようにしている。」という自分なりのあり方を提示する。このような見方、考え方、援助の視点、知識と技術の組み合わせ方を、出来るだけ多種多様に学生に提示し、「沢山の見方を紹介する」ようにすることが、いちばん良いのではないかと考えられます。学生にとって、何らかの気づきにつながるかもしれないきっかけの“種”を沢山蒔き続ける、ということです。

たとえその気づきが在学中になくても、いつかどこかで何かの際に思い出して、何らかのきっかけになってくれるかもしれません。少なくとも冒頭に挙げた学生の実例があるのです。蒔いた種がいつどこでどんな風に芽吹き、成長していくかという事は、誰にもわからない。沢山の可能性を秘めていると思うのです。

社会福祉研究家の一人、パワーズによる言葉で「ソーシャルワークはアートである」という有名なものがあります。ソーシャルワークは“私”というキャラクターの感受性や感性を生かした、創造的な仕事です。社会福祉の援助は、法令の枠組みや一定のパラダイムはあるとしても、表現としては、ひとりひとり違うものになるのです。

我流子育て支援論

(10)

～ 発達障がい ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

「発達障がい」という言葉が最初に使われるようになったのは、1961年のアメリカで、当時の大統領ケネディーによって作られた「精神遅滞に関する会議」においてである。

その後、日本で一般的に使われるようになったのは、ここ20年くらいのものであろう。

精神障がいについては、統合失調症(当時は分裂病)やうつ病など、一般的に知られていたし、知的障がい(精神発達遅滞)についても、特殊学級も社会的に受け入れられていた。しかし発達障がいと言う考え方は最近のものである。

筆者が学生時代、「自閉症」は後天的な病気として認識されており、その治療場面を見学に行った事がある。世界でも一時は母原病とまで言われていた。しかし、ここ30年ほどの間に、自閉症は発達障がいとしての地位を確立し、様々な広が

りをみせている。自閉症も高機能、中機能、低機能と別れたり、自閉症スペクトラムという言葉も含め様々な言葉が生まれた。アスペルガー症候群或いは広汎性発達障がいも同様である。

そのような中、アスペルガー症候群や広汎性発達障がいは、違う意味で有名になった。レッサーパンダ事件(広汎性発達障害)、豊川市主婦殺人事件(アスペルガー症候群)、長崎男児殺人事件(アスペルガー症候群)など、世間で何か特異な事件が起きた時に、発達障がいの診断名がマスコミで取りざたされることが増え、知名度が上がってしまったのだ。その結果、ネットで保護者が調べ、自分の子がアスペルガーではないかと疑うようになったのである。

アスペルガー症候群と子どもが診断されたことで、将来事件を起こすのではないかと相談に来る保護者もいるくらい、

犯罪と発達障がい結び付けられているように見える。しかし、発達障がい犯罪の原因になるわけではない。このことから、報道機関に対して日本発達障害ネットワークは次のような要請を出している。

1. 発達障害の診断を受けていた場合でも、本人の状況に配慮し、本人への告知をしていない場合が少なくありません。当事者自身も正しく説明を受けていない場合には、診断名を公表することは、差し控えていただくこと。
2. 事件と発達障害の因果関係が司法精神医学的に解明されていない段階においては、注釈の有無を問わず、障害名を報道することは控えていただくこと。
特に、初報では原則として、障害名に触れないこと。
3. 報道機関として、日頃から、発達障害に関する正しい情報を報道するようご尽力いただくこと。(原文転載)

こうした要請を出しても、どこまで報道機関が正しい情報報道をしてくれるかは分からない。臨床心理士会でも、子ども絡みの事件が起きた時、子どもたちへのインタビューは事件等の再体験になり、予後を悪化させる可能性があることから、避けて欲しいと要望を出しているが、いまだに子どもたちに直接マイクを向け、インタビューが報道されているところを見ると、こうした要請・要望は無視されるのかもしれない。視聴率や話題性ばかりを追求する側としては、そんな要請に等応えられないのだろう。こんなことでは益々発達障がいの悪い意味での知名度が上がってしまう。

注地欠陥多動性症候群（ADHD）という言葉も一般的になり、ちょっと落ち着きがないと「うちの子 ADHD じゃないかと思って」と相談に来る保護者も増えた。刑務所や少年院に ADHD と診断された人がいると報道されると、一部であっても『皆』とか『多くが』ADHD であるかのような誤解を招く。

一方、発達障がいの状態像についての本も書店でたくさん見かけるし、ネットでも情報を得られるようになった。

ネットで流れている情報や本に載っている情報が間違っているわけではないが、アスペルガーや ADHD の症状の一部は、子ども達に多くみられる様相であるにもかかわらず、障がいを決定するとみられてしまうことに問題がある。子育て中の母親にしてみれば、「普通」の基準が分からない事が多い。そのような中、発達障がいの話を聞けば、ちょっとした様子に「発達障がいではないか」と不安になっても仕方がない。情報が多すぎることの弊害でもある。知らなければ悩まずにすむと言う事は多々ある。

そもそも、健常と障がいの線引きはどうなっているのか？

古くから知られている精神発達遅滞一つをとっても、概ね IQ70 以下（75 以下ということもある）という一応の目安はあるものの、では、71 なら精神発達遅滞ではないと言えるのだろうか？境界知能という言葉があり、71～85 までがそれにあたる。それだけの幅を設けているのには、やはり 71 であっても、80 であっても知能としては学校で勉強に付いていく上で大変なところがあるから

であろう。では86、87であれば、大丈夫かと言えば、そうとも言えないのである。

知能検査自体、子どもの体調や気分によっても違いが生じるものであり、数値に置き換えているとはいえ、血液検査結果のように割り切れるものではない。

一つの目安として検査を行っているが検査だけではなく、観察によるところも大きく、ということは、そこに人が介入する以上、人が左右するところもあると言う事である。

しかし、療育手帳の判定などは、知能検査を基準に決定して行かねばならない。手帳に該当するか否かについては一応の基準はあるものの、諸事情を勘案して決めることもある。即ちIQが70(75)以下ばかりではないと言う事になる。

最近ではアスペルガー症候群など、IQは100近くあっても、手帳該当になることもあるようだ。子どもの社会性の問題が大きくあり、IQは高くても社会には適応しにくく、生活上の様々な困難を抱えていると言う事が考慮されるからである。

つまり、ここからが健常、ここからは障がいという線引きは、はっきりとは引けないのである。だからこそ、教育現場や保育現場では、先生方や保育士、幼稚園教諭などが、苦勞するのだ。診断が出てしまえば、特別支援教育や障がい児保育など、加配やTT等の資源を使えるが、診断が無い場合は中々資源を使えないのが現状だからだ。

学校等でよく、「最近発達障がいの子どもが増えた」と言われるが本当にそうなのか？発症率があがっているのか？もちろん、発達障がいについてみる目が肥え

たし、軽度でも拾いやすくなったから増えたとも言えよう。他にも医療の発達とともに、昔であれば育たなかった子どもたちが育つ中で、障がいを持ってしまう子どもが増えたと言えるかもしれない。被虐待による発達障がいと言われるものも増えた。となると総合的には発達障がいは増えていると言えるのかもしれない。しかし彼らの生きにくさは昔より強くなっていると思う。

昔から発達障がいの子どもはいたわけで、今ほど区別されてはいなかった。小学校であれば、勉強の出来る子、出来ない子、スポーツが得意な子、不得手な子、音楽や絵が得意な子、不得手な子、色々な子が居て当たり前だった。もちろん子どもは残酷なので、下手な絵を笑ったり、吃音がある子や太っている子をからかったりということはあったが、その一方で、運動が得意な子は体育で注目され、勉強が得意な子は運動が出来なくても問題なかった。皆がそれほど豊かではなかった時代は、持ち物についてもとやかく言われることもなく、風呂に毎日入って居なくてもそれが普通だった。

しかし、今は人と違うことが受け入れられにくくなっているように見える。お風呂は毎日入る子が殆どで、2-3日に一度という家は圧倒的に少ない。毎日入らない子の場合、夏は髪の毛がべたついたりして、不潔だと言われてしまうこともある。

又、発達障がいのある子が書道の時間に筆先を友達のシャツやズボンにつけてしまうことは多々ある。白いシャツに墨をつけ、弁償させられた子を知っている。学校は汚れても良い恰好で行けば良い。

校庭で遊んだりできる服装と言えば、汚れても良い服装ではないのか？学校におしゃれをして登校する意味は何なのか？真っ白なズボンやひらひらスカートは学校という場に相応しいのだろうか？長い髪の毛を結わいていない子も多い。中には金髪に染めている子もいる。小学校では服装が自由なところが多いが、何かおかしいと思っているのは筆者だけか？こうしたことが、発達障がいを持つ子の（故意ではない）問題行動を増やしていると言えないか？

また、教室で見ていると、鉛筆や消しゴムなどの落し物がとても多い。しかも落とし主が見つからないのである。ADHDの子では落し物が多いのは仕方がない。しかし、発達障がいの無い子どもたちも、物を落とし、探そうとしない。又買えばいいと思っているようだ。授業中、鉛筆や消しゴムが落ちるのは当たり前。テストをやっているのにテスト用紙が落ちる、教科書やノートが落ちる、机の三隅にストッパー様の土手を作らないといけなのではと思うくらいである。ただ、物を落とす子どもたちが皆 ADHD ということはない。

物に拘る発達障がいの子もが、同じ鉛筆を豆粒のように短くなるまで使ったり、消しゴムのかすを集めたり、シャープペンシルの芯の空ケースを積んだり許されないのだろうか？いつもいつも同じマリオやポケモンの絵を描いたり、車の話や飛行機の極めて専門的な話を一方的に話したり、指のささくれをむしって血だらけになっていても、いいではないか。誰に迷惑をかけるのか？強いて言え

ば長い話はちょっと迷惑かもしれないが・・・。

空気が読めない、言語でのやり取りに齟齬が生じる、そんなことが発達障がいの子どもたちを追いつめている。日本では主語が省略されることが多く、英語より分かり辛い。しかし、周囲の人間には「分からないと言う事」が分からない。「それとって」って『それ』って何？、「後は適当にやっておいて」「『適当』って？」具体的ではない指示に、子どもたちは逡巡し、自分なりの結論に従って行動し、叱責される。深読みしすぎの事も多い。

「前に言ったでしょ。なんで同じことを繰り返すの？」と言われても、「前に言われたこと」と今回の事は同じではないのである。「1を聞いて10を知れ」と言われても、「1は1」でしかなく、1と1'はイコールではない。

どんな子も受け入れられるこころの広さと豊かさを大人や子ども達が持てれば、発達障がいのある子ども達は平和に集団生活を送る事が出来、保護者も安心だろう。しかし、今の社会には、人と違う事を認めない心の狭さ、貧困さがある。そのため、発達障がいを持った子ども達は昔よりも生き辛いのである。

最近高校生が、ちょっと変わった子を「ガイジ」と表現する。「障害児」という意味である。嫌な差別用語である。人と違う事がそんなに悪いことか？

過去を紐解いてみると、世の中の技術や文化の発展の陰には、多くの発達障が

い者の成果があったと思う。例えばダビンチ、アインシュタイン、エジソン、チャプリン、ピカソ、ダリ、岡本太郎、ビル・ゲイツなど。現在でも、映画俳優のトム・クルーズの学習障害は周知のことだが、他にも作家、芸術家など、診断はされていないものの発達障がい疑われる人は多い。人とは違った感覚、発想、見え方が発見や発展、芸術に寄与することは多いのだ。天才といわれた人たちは今で言えば発達障がいだったのではないか？結果を残す事が出来たために、奇異な行動があっても良しとされていただけかもしれない。そこには社会のおだやかさ、心の広さもあったと思う。

引きこもり青年の相談を受けていると、アスペルガーや高機能自閉など発達障がいの問題が度々みられる。小学校、中学校、高校と、ずっといじめにあい、しかも保護者が子どもの発達障がいに気付いていなかったために、二次障害を起こしていることもある。沢山のトラウマを抱えた青年は、鬱や強迫性障害などを発症している。その結果として自殺企図も多くみられる。3万人を超える自殺者の中には、このような青年も数多く存在すると思う。

周囲が本人の発達障がいを認識し、適切な対応をしていれば、本来素直で真面目な彼ら（ちょっと素直過ぎで真面目過ぎだが・・・）なので、二次障害を起こすことなく、真っ直ぐ育ち、得意な処を伸ばして自信を持って生きていくことができただろうと思う。人への不信感と、失った自信を回復するにはとても長い時間と膨大なエネルギーがいるのである。

我々子育て支援に関わる者たちは、子どもたちの様子をよく見て、発達障がいの有無に気付き、診断を受けるか受けないかより、まずはそうした子どもたちがいじめや虐待の被害者にならないように十二分に気を配らねばならないと思う。特にいじめでは、表情に出さなかったり、加害者が「冗談だよ」と言ったらそれで納得してしまうところがあるため、要注意である。

筆者は子どもたちがいじめについての講演をするとき、ドラえもんの話を出す。

ドラえもんは本来は黄色の猫型ロボットで、量産型なのでどれも同じ形であった。しかし、ネズミに耳をかじられ、耳が無くなった自分の姿を見て色は真っ青に変わり、猫型とは思えない形のロボットになったのである。（最近ドラえもんが青い理由についての話が変わったようだがそれについてはここでは述べない。）しかも、ドラミちゃんとは同じオイルを使っている兄妹で、古いオイルだったために上澄みの薄い部分と下の方に養分の溜まった濃い部分が出来、上澄みを使ったのがドラえもん、下の濃い部分を使ったのがドラミちゃんだったため、ドラえもんは妹より出来の悪いロボットになったのだ。

もしドラえもんがドラミちゃんと同じ黄色の猫型ロボットで、優秀だったら、そしてのび太君が勉強のできる、出木杉君のような子だったら、ドラえもんの話は成り立たない。

人と違う自分、勉強は出来ないが、綾取りが得意で心の優しいのび太君、胡麻

すりで嫌味で調子の良いお金持ちのスネ夫君、乱暴で音痴で意地悪なジャイアン君、そんな子どもたちの組み合わせが、学校の日常を描いている。生みの親の藤子不二雄両氏が意図したことが何かは別としても、ドラえもんの話は、子どもたちには伝わりやすい。色々な子が居るから、力を合わせた時にバランスよく纏まる。みんながみんな同じであれば、ただのロボットで、個性も何もないし、識別も出来ない。どんな人も認め、受け入れられる心の広い人間になってほしい。そんなメッセージを込めて、講演をしている。

中高生向けでは、枠組みの話をする。人それぞれが枠組みを持っていて、その枠組みを通して物事や言葉を理解しており、枠組みが小さいと、自分の枠組みに一致しない内容を受け入れられないと言う話をする。例えば「『夏の花』と言えは？」と質問すると、殆どの子どもたちが「ひまわり」と答える。しかし、ひまわりは必ずしも夏の花ではない。アラビア半島など砂漠の国では冬に花が咲く。そんなことを話すと、子どもたちはびっくりする。また、ひまわり以外の花を思い浮かべる子どもも何人かいるので、その様子を見て、「人それぞれ」に改めて気付くのである。つまり、どんな人も受け入れられる、大きな枠組みを持つこと、発達障がいのある子どもたちは皆とは違うが、そういう子どもがいても良いのだと言う事に気付いてもらいたくて枠組みの話をしているのである。

「鉄は熱いうちに打て」ということわ

ざのように、子どものうちから、他人をありのまま認め、自分をありのまま認められる子どもに育てていけば、発達障がいの問題は今のよう大きな問題にはならないだろう。

親への関わりも同じである。親が自分の子を自分の枠組みでがんじがらめにしているのは、子どもは自尊感情を育てられない。特に発達障がいの子どもでは親の奴隷となり下がるか、攻撃的になるかのどちらかになるだろう。我が子をありのまま受け止められる親にして行ければ、不幸な結果にはならないだろう。

知識を詰めただけの、子どもばかりを増産しても日本の未来はない。当たり前と思うようなことにも、「何故」「どうして」「不思議」と思う事、「こうしたらどうなる?」「あんなやり方はどうか?」そうした発想の豊かさは、今の時代発達障がいのある子どもにしか無いのかも思ってしまうほど、最近の子どもたちは教科書通りだ。

融通が利かないという面は「実直さ」に、集団に馴染まないところは「発想の豊かさ」に、言語でのやり取りの難しさは「視覚的情報によるやり取りの得意さ」に変換して行こう。

発達障がいのある子、発達障がい疑われる子に対しては、悪い所を探して治そうとするのではなく、良いところを伸ばす支援をして、自信を無くさないように、信頼できる人間関係を作って行ってほしい。

そして、世の中が、物質的にではなく

精神的な豊かさに溢れ、こうした子どもたちも、苦勞はするが全うな仕事に就けるようになればと強く望む。日本の伝統的な徒弟制度、職人の世界は、むしろこういう子どもたちにとっては分かりやすく、馴染みやすいものでもある。発展途上国とされていた国々がどんどん先進国の仲間入りをしている今、日本の伝統を守り、職人技を復活させていく良い機会ではないだろうか。後継者がいないと嘆いている職人も多々いると聞く。そこに、発達障がいの子どものたちの生きる道が一つあるのではと思う。

今回は、ゲームやネットについて書いてみようと思う。

不妊治療現場の過去・現在・未来

連載 10

伏線 荒木 晃子

〈前号までのあらすじ〉

本稿は、不妊をめぐる聴き手と話し手の対話で構成されている。聴き手の「私」は、現在、不妊臨床と家族の問題をテーマに研鑽を積む、生殖医療心理カウンセラーの女性。彼女自身も不妊を体験した当事者である。

第1章に登場した語り手のA子さんは、過去に不妊を経験した高齢女性であった。彼女はかつて、生殖医療のない時代に不妊を体験し、その時代を生きた女性でもある。現在、とかく不妊は、生命科学や生殖医療の問題として捉えがちであるが、A子さんにとっては“それ以前の問題”であったという。

第2章からは、不妊に悩み、結果、不妊治療を選択したB子さんが自身の体験を語り続けている。一説には「生殖の革命」とも呼ばれ、夫婦の不妊問題の解決手段となる生殖医療は、B子さんのところとからだ、そして、その夫婦関係に大きな変化をもたらしていた。

回を重ねる面談とその時間の経過の中で、B子さんとのラポールを確信した聴き手は、前号(第9章)で、思い切って「B子さんの家族」について尋ねた。それまでの対話から、不妊を、構造的家族システム論上の家族の問題として捉えた際、「境界・パワー・サブシステム」という家族キー概念にかかわる重要な問題解

決のヒントが浮かび上がったからだ。その解答は、不妊が当事者夫婦を取り巻く家族関係に潜在し、重大な家族問題へと肥大しつつあることを物語っていた。

序章

私の準備を見届けたかのように、再びB子さんは語り始める。

「ほんとはね、義理の父があんな風にしたのには、それなりの理由があったと思うの」また、ひとこと口を挟みたい衝動にかられた。が、何とかこらえる。

「あの出来事の以前に、私は、ホントウに子どもができないカラダになってしまっていたの」うっ？こみ上げた疑問が、まるでうめき声のようにきこえたのか、「うふふふ」と彼女は小さく笑ってそれをかわし、「そんなに驚かないで」と言わんばかりに穏やかな視線を向けた。

「私が不妊治療に通院していた頃の話は、以前したことがあったでしょう？そう、通算で5年ほど通院したかな・・正確には覚えていないけれど。その間は、ほんとにいろいろあったわよ。夫婦喧嘩とか、体調不良とか」

これは、いまでも変わらぬ不妊治療中の当事者女性の悩みとなっている。時代は変わり、あらゆるものが進化を遂げる現代においても、ひとの本質的な部分はそう大きくは変わらないのだろう。

「でもね、その中で、私にとって・・・というか、私たちにとって、と言った方がいいかもしれないけれど、大きな出来事が二つあったの。ひとつは、前にも少し話したことがあると思うけれど、卵管形成の手術をしたこと」この手術のことは、最初のころ聴いた覚えがある。

「いまでも私のお腹の真ん中には、縦に、そうねえ・・・20センチほどの傷が残ってる。まあ、これは、いわば、名誉の負傷ってところかな～ふふっ！」

そう、軽くいつてのけるB子さんにつられ、私も愛想笑いを返す。本心は、愉快ではなかった。

「もうひとつは・・・」

そう言いながら、B子さんは目を閉じた。次のことばを待つあいだ、私は、彼女の心臓の鼓動がドクドクひびくほどの静寂を体感していた。

「もうひとつはね、私が不妊治療をやめざるを得なくなった事件なの」

ときに、起きた出来事が重大な問題に発展したとき、人はそれを事件と呼ぶことがある。私はそのあとに続くことばを待っていた。

前兆

「あの5年間をひとことと言うと、“走りぬけた”って表現がぴったりかもしれない。仕事をして、家事をこなし、長男の嫁としての役割もあった。義理でも姉妹が一度に

3人できたわけだし、両親のほかに、義理の両親とその親戚づきあいも大変だった。私はひとりっこで、競争もなく、のびのびと能天気な育ったもんだから、余計にそう感じたのかもしれないわね。でもね、その中でも、不妊治療以上に大変なことはなかった。たぶん、家族のだれにもわからなかったと思う。もちろん、体調の変化は、カレが気遣ってくれたけど、仕事の性質上、自宅でふたりでゆっくりできる時間もあまりなかったし、治療後の安静時間も十分に取れなかった。あ、それも原因のひとつなのかな？治療の後、具合が悪くなったことが何度かあって・・・このことはすでに話したかしら？まあ、いいか。それで、何度か救急車で運ばれたこともあったのよね～」確かに聴いた話だった。

「そんなこんなで、治療を始めて4年を過ぎた頃だったかな。予定していた人工授精を無事終え、指示通りの薬を飲んで自宅で休んだ翌日、からだに異常を感じたの。下腹部がひどく痛み、徐々に腫れてきて、高熱が出る。この状況になると、いつも救急車を呼んでいたわね。私でも、多少は学習してるというか・・・でも、そうなることはわかっていても、治療は続けていたのよね・・・主治医は常に『ダイジョウブデス』と言っていたし、自分ではやめることができなかったのかもしれない。きっと、あの頃は、身体のこと、自分自身よりも、主治医のほうがよくわかってるとでも思っていたのかもしれないわね。」

すらすらと話す彼女を、その時は、まるで不思議なものをみるかのように、眺めていたと思う。確かに、治療中に起こる異常としては、OHSS（卵巣過剰刺激症候群）が

現在も報告されている。OHSSとは、排卵誘発剤による副作用で、症状としては、卵巣が腫れあがり、腹水や、ときに胸水などの合併症がおこることがある。この排卵誘発剤は、排卵日に合わせて人工授精を行う際や、体外受精に必要な採卵のために使用することが多く、生殖医療施設で日常的に行われている医療行為のひとつである。ひとつによって、ときにこのような副作用が起きる危険性があるという。

いま、B子さんから聞いたその時の症状は、まさにOHSSと同じだ。驚いたことに、彼女は当時、それを何度も経験したというのではない。彼女は、自身の身体が発信する危険信号に、気づけなかったのだろうか。それとも、それをすれば、自分の体に異常が起きることが分かっているにもかかわらず、治療を続けるほどのおもいがあったのだろうか。いずれにしろ、身体が発信する危険信号を無視するとは、あまりにも無謀な行為である。「あの頃は、身体のこと、自分自身よりも、主治医のほうがよくわかってるとでも思っていたのかもしれない」

先ほど、B子さんがそう語った理由が、いま、理解できた気がした。

事件

「その時通院していた不妊専門のYクリニックは外来のみだった。さっき話した手術の時もそうだったんだけど、ほかにも入院する必要がある場合は、すべてYクリニックが提携しているO病院へ行くシステムになっていた。O病院は、行ってみてわかったんだけど、入院施設がある高齢者専門の個人病院でね。その最上階にYクリニック専門フロアがあった。そのフロアだけがき

れいに改装してあって、若い女性ばかり、つまり、私のような不妊治療中の女性が入院していたの。あの日も、主治医に連絡を入れて、いつもの入院先へタクシーを飛ばしたと思う。起き上がれないほどの状態で、簡単な入院支度をしてね」

なぜ、救急車を呼ばなかったのかを尋ねる。

「ああ、その頃は、もう救急車を呼ぶことはなかったわね。もちろん、最初はちがったのよ。治療を始めてから、初めて具合が悪くなり入院した時は、もう、皆で大騒ぎして、救急車を呼んだことがある。そうしたらね、自宅近くの救急病院へ運ばれて。夜中だったので、当直医の若い先生がみてくれたことがあった。確か、耳鼻科の先生だったと思う」

現在でも、救急医療現場では、医師の不足や過酷な労働条件等も理由のひとつに、救急体制の不備による事故や事件が絶えない現状がある。特に、産科領域や高齢者救急では、その傾向が強いといわれるが、これもまた、いまも昔も変わらないことのひとつなのだろうか。

「高熱のうえ、血液検査の結果、白血球が20,000以上と異常に高く、からだのどこかに炎症を起こしているらしく、下腹部も腫れていた。なので、たしか、その時の診断では、急性の腸炎とか何とか言っていたんじゃないかな・・・その時は、その治療しかしてもらえなかったの。とにかく、不妊治療のことを何も知らない先生でね。耳鼻科の先生だから、しょうがないといえば、それまでなんだけど・・・『ここ数日、排卵誘発剤飲んでます。今日、人工授精しました』と言っても、それは関係ないでしょう、って取り合ってくれなかったの。結局、輸液

と抗生剤、そして多分消炎鎮痛剤も入っていたと思うんだけど、点滴をしながら、そのまま一晩入院して、翌日不妊治療クリニックへ連絡を入れ、提携病院に転院した。その時、不妊治療の主治医から言われたのは、『妊娠の可能性があるときは、解熱剤や抗生物質は使えない』ということ。流産したり、胎児に悪い影響が出るらしいのよね。だから、それ以来、からだに異常が出たら、即、不妊クリニックへ連絡をいれて、提携病院までタクシーで駆けつけることにした。いつ妊娠しているのか分からないから、他の病院へは行けなかったの。以前、一度だけ妊娠反応が出た後に、早期の時点で自然流産の経験があったもんだから、余計に神経質になっていたのかもしれないわね。

ここまでに、気づいたことがあった。彼女の話は、すでに妊娠中の女性、つまり、妊婦の語りと似通っていた。いつ妊娠しているか分からない状態で生活することは、常に、おなかの中に子どもが宿っていることを気にかけながら生活するのと同じ状態なのだ。そう考えると、不妊治療は女性の周期毎に妊娠するチャンスがあるので、その都度何らかの方法で不妊治療を受けるとすると、一か月の内、「排卵～受精～着床」を経て妊娠に至る可能性は、排卵から次の月経周期まで2週間ほど続くことになる。つまり、毎月の半分を、妊婦として過ごし、月経が来れば妊娠が成立していなかったことが判明し気持ちが沈む、ということを経験のたびに繰り返すことになるのだ。

これが、不妊心理でいうところの、感情の起伏が激しい＝気持ちのコントロールが難しい心理状態を形成する一因となる所以である。妊娠しているかもしれないと思

一か月の内半分を妊婦状態で生活し、月経が来ると妊娠していなかった＝不妊治療が失敗に終わった結果に落胆し、気を取りなおす間もなく、翌月の排卵に向けて、その準備のため通院を繰り返し、注射や服薬等で残りの2週間を過ごす。そして、翌月、予定の排卵日を迎えると、何らかの不妊治療を受けた後妊娠しているかもしれない生活を再び2週間過ごす。少なくとも、不妊治療中は、この生活パターンを繰り返すことになるのだ。この点もまた、現在通院中の当事者女性が語る辛さと、ほぼ同じ内容の話だった。

確かに、妊娠中の女性への投薬には医療者も注意を払う。母体が服薬することで、胎児への影響が懸念されるからだ。妊娠中の女性への配慮は医療者に限られたものではなく、例えば、電車の中には、高齢者や妊娠中の女性への優先席が用意されるなど社会的にも日常的な配慮となっている。もちろん、妊婦自身も細心の注意を払う生活を心がけているだろう。不妊治療中の女性は、そのような妊婦生活に近い状態で、月の内半分を、過ごすのだ。当然のことながら、妊娠中の女性に対する社会的配慮の類が与えられることは、不妊治療中の女性には皆無である。

声なき叫び

「入院は、いつも2週間ほどだった。あの日具合が悪くなった時も、0病院に入院し、時折検査をしながら点滴や投薬の処置を受けて熱も下がり、徐々に快復していった。いつもと同じようにね。特に、手術するわけでもないし、ただ身体が元の状態になるのを待つだけ。退院の日が決まったら、ま

たいつものように、すぐにYクリニックの予約も取らなきゃ・って思いながら、退院前の外泊許可をもらい、夕方自宅に一旦帰宅したのは、確か土曜日の夜のことだった。軽く夕食を食べて、『なんだか体調が良くない。外泊が早すぎたのかもしれない』と、大事をとって早々に休んだの。そして、身体があつくて眠れない。おまけに、両方の手のひらがやけに痒かった。気分が悪くて、電気をつけると両方の手のひらが真っ赤になって、腫れて痒いの。どういえば、うまく伝わるのか分からないけれど、熱湯に両手を入れて、熱くてたまらないのに、それ以上に痛くて痒い、っていうのかしら・そのうち、からだの関節が痛みだして、さらに、痒みと痛みが広がった。腕や唇、目もチカチカしてくるし・カレも、これはおかしい、といって即〇病院に状況を報告するために電話を入れると、対応した看護師さんから『明日の朝一番で病院に返ってくるように』と指示が出たらしい。私は、もう、何が何だか分からないけど、身体が辛くてだるくて、起き上がれなかった。これまでに経験したことのない変化が、自分に起きていることだけは分かっていた。その晩は、カレも徐々に悪化する私の身体を気にしながら時間が過ぎるのを待ち、夜が明けるや否や、病院に返ったのよ」

普段、話し手の話を聴くことを専門とする私だが、この時はまだ、B子さんの話す主訴がつかめずにいた。体調が悪くなり、何かこれまでに経験したことのない変化が起きていたという。しかし、その内容は、通常不妊治療中の女性の語りにある、具合の悪さや、体調不良といったケースとは違うようだ。

「なにがあったのですか？」
ことばにして聴いてみた。

聴き手の課題

「スティーブンス・ジョンソン症候群って、聞いたことある？」

質問した私に、B子さんはそう尋ねた。聴いたことがない病名だ。たしか、症候群というからには、症状の範囲が広い病名なのだろうということは、予想できる。医学領域の面接では、自分の専門外の病名や症状が話題にのぼることが頻繁にあり、医療現場の心理士としては、その都度医師に確認をとり、専門書で調べる作業が必要になることがある。診療分野の専門が違えば、たとえ現役の医師でも知らない病名が山ほどあるという。しかし、いま彼女から聞いた、スティーブンス・ジョンソン症候群という病名は、生殖医療や産婦人科領域でも、あるいは、精神科領域でも聞いたことのない疾患名であった。

心理士として精神科クリニックに長年所属している関係で、その領域の専門性が、不妊治療中の患者へのカウンセリングにおおいに役にたつことがある。大半の不妊治療中の患者は、自分自身で「精神的なサポートが必要」と自覚しない場合が多いため、自ら進んでカウンセリングを希望する方もそう多くはない。しかし、実際には、治療の不成功＝治療の失敗や、流産などの際、気持ちが沈み、日常的な作業でさえ手に付かない状態にまで陥る方も多く、その自覚のなさゆえに、医療者からリファーされて面接予約が入るケースもある。妊娠を目標に通院しているため、精神的な側面に対す

るケアの必要性に認識が薄いのかもしれないし、同時に、心理カウンセリングに対する抵抗もあるのだろう。不妊治療現場では、性に関する悩みや問題が生じるケースが多く、「性（＝セックス）を語る」慣習をもたない日本文化の中では、言語化しづらい側面があるかもしれない。

なかでも、流産のように、女性のからだに宿った命を失うという体験は、まぎれもない喪失体験であり、わが子を失った母親が、精神的・肉体的に大きな傷あとを残すことは数々の先行研究からも明確で、当事者にもその自覚がある。対して、流産体験とは異なり、不妊治療の不成功とは、「身体が妊娠しなかった」ことを表す。しかし、不妊治療中の女性たちは、その結果を知るまで、『妊娠しているかもしれない』といった心理状態で、妊婦らしい生活状況を維持している。そのため、精神的には、治療が不成功に終わるということ自体が、流産体験とよく似た、疑似流産体験であり、流産ほどではなくても、それに近い喪失体験を味わっているといえる。その精神状態を毎月繰り返すことが、治療中の精神的な負荷を強化することにつながるとすれば、ここに精神的なサポートの必要性が大切になるのであって、治療中にかかる精神的負荷の軽減につながるに違いない。このことを知る医療者や心理士たちは、通院患者に対する心理サポート体制を準備し、サポートを受ける必要性を患者に訴えるものの、その当事者である患者がそれを自覚すること自体が困難であり、そのことが重要課題となっている。

手渡された足跡

それにしても、いましがたB子さんから聞いた疾患名は、通常の医療業務の中で医療者が交わす疾患名や症状には無いことは明らかである。一般に、〇〇シンドロームという名称で呼ぶ疾患は、複合的な病態や、病気の原因が特定できずその対応が困難な場合が多い、という自分なりの認識をもつ。要は、病に苦しむその人に起きた、一連のよくない出来事、と言えるのかもしれない。いずれにせよ、疾患名に限らず、知らない固有名詞はすべて、必ずその都度質問するか、そのチャンスを逃した場合は、次回までにできる限りの情報収集に努めなければならない。聞けなかったことにはできないのだ。

聴き手が、本当は知らないことを、さも、わかっているかのように聴き続けたり、確認することをせずに聴き流したりすると、いつかどこかで、そのことが聴き手と話し手の信頼関係によくない影響を及ぼすことがある。特に、今回のように、話し手が『あなたは知っていますか？』といった質問形式や、『～ですよ？』と聴き手に確認を求める場合などには注意を払わなければならない。少なくとも、私はそういうスタンスで、面接を進めている。その場で容易に確認できることは、直接それを言った本人にたずねる。それは決して恥ずかしいことでもなく、失礼にもあたらない。基本的に、聴き手の持つ情報は、聴き手の専門性を証明するものであって、当然、聴き手はその領域の専門知識がある者という前提で話し手は語るのだ。専門性とは、例えば、精神科領域の心理士ならば、精神疾患の知識とその対応を知り、生殖医療心理士ならば不妊治療の医学的知識と不妊心理を理解して

いる、などをいう。それらを踏まえたうえで、知らないことは、その都度確認すればよいし、確認が不可能であるならば、知ろうと努力すればいい。情報社会といわれる現代では、知識や情報を集めることはそう困難なことではないはずだ。もっとも大切なことは、話し手に対して、常に誠実であろうと努めることだと思う。聴き手の知らない名称を理解することや、まったく専門外の知識がその話題に必要なだと判断した際には、その必要に応じ対処することも大切である。話し手が話したいことを聴くために、話し手の使用する用語の語彙を知るとは、聴き手の役割である。話し手にとって病は自分の一部であり、その病を抱えている・いたという前提で、話し手は語るのだ。この場合、聴き手がB子さんから聞いた疾患名の基本情報を知るとは、彼女を知ることと同様の意味がある。疾患の説明をB子さんに求めるわけにはいかない。それは、聴き手の宿題だ。彼女には、その「病の経験」を語ってもらわねばならない。

スティーブンス・ジョンソン症候群とはなにものか。「なにがあったのですか」と問うた私への返答に、B子さんはその疾患名を返した。まずは、それを知ることが先決だ。それを知らなければ、この疾患がなにものかを理解しなければ、この先、彼女の語りを聞き続けることができない、そう確信した。

そのおもいをB子さんに伝えると、

「そうね、そのとおりかもしれない。そこから、私の新しい人生が始まったのだから、それだけは、あなたにも知ってほしい」

安堵の表情を浮かべ、足元に置いてあった大きなバックを「よいしょ！」と呟きながら、一旦目の前のテーブルにのせ、両手で押しやるようにそれを私に差し出す。自分の病の体験の断片を語ることは、よほど疲れたのだろう。安堵の中に疲れた様子がうかがえる。「ん？これはなんですか？」確認のためたずねると、

「これをあなたに見てもらおうと思って・・・」

まるで、好意を寄せる人にはじめての贈り物をする、恥じらう少女のようなしぐさで、そう答えた。「それでは、次にお会いする時まで目を通しておきます」そう約束し、別れ際に、「お疲れになったでしょう？今後は話のペース配分に気をつけましょうね」と自戒を込めて言いつつ帰路についた。彼女から預かった大きなバックは、ことのほか重かった。

(次号へ続く)

対人援助学 & 心理学の縦横無尽 7



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

福島・ふくしま・Fukushima (1)

今回からは、福島のことなどを書いてみたい。なるべく長く色々。

私は立命館大学に来る前は福島大学行政社会学部助教授として七年間福島に住んでいた。

今や有名になってしまった Fukushima。そして、一時期ホットスポットとして有名になった渡利というところに住んでいたのがあった。

2011年3月11日、地震がおき、これまた有名になった Daiichi (福島第一原発) で放射能漏れが起きて以来、福島から離れた人間として何をすべきか、考えていたりもした。

これまた個人的な事情ではあるが、父母は福島県喜多方市出身であり、隣の会津若松市も含めて親戚が何人か住んでいる。福島は心理的に近い場所、なのである。そうであるのに何もできない、という思いもあるし、何かしても的外れになってしまうのではないか、という思いもあるし。

などとグダグダ考えていたところ、立命館大学生存学研究センターの院生プロジェクト「生存学における原子力研究会」の若手研究者たちが、福島大学の原発災害支援フォーラム (FGF) の人たちを呼んで話を聞きたい、ということになり、仲の良い元同僚が多かったので、呼んで話を聞くことにした。旧交を温めるというよりはシビアな話の連続ではあったが、福島に来て欲しい、それが観光であっても、実地調査であっても、という話があったので、いよいよ出かけることにした。この会がきっかけで院生が福島県立医大助手になるという全く予想外の出来事もあったりして、福島に出かける動機は高まっていた。

とはいえ、私も研究者のはしくれであり、観光に行くというわけにもいかない。そこで風評被害メカニズムの研究をすることにした。思えば、私がうわさ研究に足を踏み入れたのは、1995年の阪神・淡路大震災の時だった。その時、福島大学行政社会学部の同僚たちや学生たちと『震災と行政と社会』という冊子を刊行し、その売り上げを被

災地に贈ったのだった。その時、テーマとして選んだのが「地震とうわさー関東大震災の虐殺」であり、それ以来、私はうわさ研究を手がけるようになったのであった。

今、そのキャリア（轍）を活かさないでどうするのだ？

立命館大学の「東日本大震災に関する研究推進プログラム」に風評被害研究を行うという申請を出して採択された。2012年6月にはエストニア・タリン大学のカトリン・クラセップ准教授が来日することになっていたので、「被災地に行ってみるか？」と尋ねてみた。イヤがる人はイヤがるのだが、カトリンは行ってみたいという返事をくれた。それで本当に行ってみようということになった。生存学研究センター研究員の木戸彩恵氏を協働研究者に迎え、院生も関心をもってくれたので、一緒にいくことにした。しかし、さて、被災地に行く、と言ってもどこにどうやっていくのがいいだろうか？

日本質的心理学会・震災WGで活動をしている茨城大学・伊藤哲司教授に連絡を取ったところ、太平洋の海岸沿いをいろいろと案内してくれるという。ご長男とご一緒に、しかも、9人のりのバンを出して運転までしてくれるというのである。伊藤哲ちゃんとの付き合いも最早20年近くになるわけだが、いつでも頼れる男である。

というわけで、出発するまでにこれだけ書いてしまった。福島の話はどうなったのか？つまり、私はいろんな人に助けられて福島に行くことができたのだが、それを書く福島に着くまでのことを書ききれない！

詳細のレポートは次号に譲るとして写真を二葉ほどお見せしよう。いずれも、2012年6月の状態である。

まずは飯館村役場。0.71 マイクロシーベルト/時間である。この数値に24をかけ365をかけると年間の線量になる。6219.6 マイクロシーベルト/年、つまり6.5ミリシーベルトである。（写真1）

ところが、ここから車で五分も走ると、除染中。除染という言葉が良いのかは疑問である。要は表面の土を黒い袋に入れているのである（写真2）。この土の行き先はどうなるのか、気になるところだが、それはともかく、簡易版・ポータブルの線量計で測ってみると、3.71 マイクロシーベルト/時間である（写真3）。村役場の数値の約五倍。ここでも同じようにこの数値に24をかけ365をかけると年間の線量になる。32.5ミリシーベルト/年、であり、現状で人が住めるような数値ではない。

2012年6月でこの数値である。私たちはこの数値をどう受け止めればいいのか。





参考サイトなど

福島大学原発災害支援フォーラム

<http://fukugenken.e-contents.biz/>

6月4日(月)「風評被害の構造」

<http://fsl-fukushima-u.jimdo.com/2012/06/06/災害復興研究所-定例研究会を行いました/>

東日本大震災に対する本学会の取り組み

http://www.jaqp.jp/news/110830_oshirase/

ドラマセラピーの手法（１）
「社会を癒す」ソシオドラマ — 集合的問題への取組み

尾上 明代

これまでの連載では、実際のドラマセラピーのプロセスを、児童養護施設での治療を例に記述した。そこで使った手法は、主に劇遊びと、私が開発した「受容とミラーリングの即興ドラマ」である。

演劇・ドラマには癒しにつながる力があるという共通概念のもと、ドラマセラピーは、歴史的に多くの流れを引き継いで、そのアプローチが多様化、発展してきている。当然、ドラマセラピストはそれら多くのアプローチや手法に精通していなければならない。対象者、目的、プロセスに合わせて、何を使うかを選択、組み合わせてセッションを進めていく。しかし、海外のドラマセラピストたちを見ると、自身の得意領域（たとえば、自らがクライアントの共演者となってドラマの中で演じながら導く、またはディレクターとしてドラマの外から導くなど）や嗜好によって、特定の手法のみを多く使って仕事をしている人が少なくない。

私は、日本でパイオニアという役割を意識して、なるべく偏りなく、多くの手法を現場に合わせて使いながら、参加者や学

習者に提供するよう努めてきた。どのアプローチも興味深く、個人的にもエンjoyしながら実施できるため、今後もこのスタンスは続けていくつもりだ。

そこで今号から何回かにわたり、手法・アプローチ的な観点から、いくつかを選んで簡潔に紹介していきたい。（すべてを包括的に解説することは、別の機会に譲る。）

執筆の順番は、（ドラマセラピー分野にとっての）そのアプローチの重要性や開発された順番などを反映させたものではない。初回に「社会を癒す」手法から始めるのは、オーソドックスではないと思うが、ソシオドラマ創始者のモレノに従えば、全体の中の個人という視点がまず原点なので、その意義を考えるために、これを取り上げようと思う。またソシオドラマは、東京のアドバンストレーニングで現在集中的に実施していることや、立命館大学で始めた「性別に関する違和感を共に考える研究会」でも使っているアプローチなので、最近実施したドラマ例が豊富にあることも今回取り上げる理由の1つである。

モレノが創始したソシオドラマ

1920年代に、ウィーンでサイコドラマを発明したのは、天才的な精神科医、J. L. モレノであった。彼は、最初のドラマセラピストと言って良いだろう。その半世紀後の1970年ごろにドラマセラピーという新しい専門分野がイギリスやアメリカで正式に確立されることになるのだが、モレノの業績は、間違いなくその最大の源の1つとしての役割を担った。

サイコドラマは、主役となるクライアント個人の内面をドラマ化、可視化することで、行動として表現・変化させる精神治療法である。モレノは、クライアントの自発性と創造性を引き出し、精神と身体性、個人と他者との関係、個人の内面と外面との関係などを相互に作用させる道を切り拓いた。その一方でモレノは、人間の根本はその社会性であることを重要視し、社会と人間が相互作用する関係、通常は直接は見えない、精神に影響を与える社会的関係として存在しているものを具現化し、変容できるソシオドラマを提言・実行した。

彼は、人間はさまざまな役を演じる複合体であると捉え、自分の属する社会や文化等の中で共通認識のある集合的な役 (collective role) と個人的な役 (private role) の両方で構成されていると考えた。サイコドラマでは個人的な役、個人に実際に起きたできごとを扱うのに対して、ソシオドラマでは、仮定的な共通の問題場面を作り、演者には集合的な役をまとって演じってもらう。つまりソシオドラマの主役はグ

ループであり、さまざまな種類・レベルの社会問題、意識、感情、集団間の関係、集合的なイデオロギーや対立が扱われる。特にモレノは第二次世界大戦後の社会におけるさまざまな集団間のデリケートな問題を改善するために、この手法を発展させた。モレノ自身が行った多くのソシオドラマのテーマのうち、ほんの数例をあげると、アイヒマン裁判、ケネディー暗殺、アメリカの人種差別問題・戦争中の日系アメリカ人との対立などである。

社会を癒す "Societyry"

個人セラピーは大変重要であるが、それだけでは人類の多くの苦悩を治すことはできない、とモレノは信じていた。まったくその通りだと思う。そのことをモレノは、著書 *Who shall survive?* の冒頭にこう記している：「真の治療行為は、人類すべてを対象とする目的に繋がってなければならない。」つまり彼は、サイコドラマの主役の中に人類全てを見ていた、とも言える。

ここで提示したいのは、彼の *societyry* という概念である。*Who shall survive?* が未だ翻訳されていないこともあって、このことばは日本ではほとんど知られていない。モレノは、個人の精神の病を癒すための方法が *psychiatry* (精神医学) であるのに対して、社会の病を癒す方法を、*societyry* ということばを作って表現したのだ。ピーター F. ケラーマンは、社会の病を癒す治療家 (*sociatrist*—これもモレノの造語で、精神科医の *psychiatrist* をもじったもの) が使う方法として、社会分析学、臨床社会学、

そして集団精神療法—特にソシオドラマをあげている。

集合的トラウマ (Collective Trauma) を扱うソシオドラマ

ケラーマンはスウェーデン生まれ、イスラエル在住の臨床心理学者で、ホロコーストなどの集合的トラウマを扱ったサイコドラマやソシオドラマを多く実践している。またアメリカのドラマセラピスト、A. ヴォルカスも、歴史・戦争・民族関係の諸価値の衝突・矛盾を扱う「歴史の傷を癒す」HWH(Healing the Wounds of History)というアプローチを自ら開発し、その中でソシオ・サイコドラマなどを使いながら迫害者と被害者という対立のサイクルを乗り越える道を模索している。ここ数年ヴォルカス氏は、立命館大学の村本邦子教授らと共同で、「戦争のトラウマと和解修復の試み」を南京や立命館大学などで行っている。このような流れは、Societyry の実践そのものと言える。

上記のように、テーマにより参加者の集合的役割が固定されている（国籍や民族など）場合でも、プロセスを経ることにより対立者間の理解、受容などがおき、最終的に参加者の集合的役割は発展・変容したものになっていく。そして、このような変容が起きるためには、ファシリテーターのヒューマニティーが、もう一つの大きな基本的な要素としてあげられるだろう。

多様な社会問題・意識・感情を扱うソシオドラマ

一方、P. スターンバーグと A. ガルシアらによるソシオドラマでは、上記の国や民族レベルという、ある意味では区別が分かりやすい多人数に潜む集合的意識を対象にしたものというより、個人の中に体現されてしまっている社会的関係・価値の衝突・矛盾を含む様々なテーマが扱われ、その考え方に影響を受けた多くのドラマセラピストたちが、セラピー・教育・職場・宗教・コミュニティ等の中で実践している。

ソシオドラマは、背景となる集合的意識の認識の仕方により、広範囲の現実の問題に取り組めるので、個人と集団とのダイナミックな関係をしっかり把握しながら実施すれば、どのような目的・場・対象者にも効力を発揮すると考える。実施するセラピストにとっては、かなり難度の高い技術と多くの経験を要する。ちなみに私のトレーニーたちは、チャレンジし甲斐のある意義深いものと認識して頑張っているので、今後の成長が楽しみである。

ゴール

スターンバーグとガルシアは、ソシオドラマのゴールを、カタルシス、自己洞察、役割トレーニングの 3 つであると言う。私が簡潔に説明するならば、カタルシスとは、感情表現や解放から得られる心的な浄化である。囚われ、抑圧、固定的な見方からの解放として、単なる演技者個人のカタルシスではなく、観客も含めてのグループ全体

の、そして社会のカタルシスを目指す。自己洞察は、それまでの理解（無理解）が、変容・発展して、問題に対する新たなパースペクティブを手に入れることであると言える。しっかりと身体と頭で認識した新しい気づきである。三つ目の役割トレーニングは、ソシオドラマで「練習」した新しい役柄や行動を、実際の人生で使えるようになることである。演技者だけでなく、観客も同化しつつドラマに参加するので、参加者すべてにその効果が発揮される。このように、今まで無意識に囚われていた見方や考え方を自覚し、必要な変更を加えていくためには、つまり、人が変わるためには、感情、頭、身体の3つすべての要素にホリスティックに働きかけなければいけないとモレノは言う。これらのゴールは、集合的意識・無意識に支配されている諸個人に変化を起こす契機となっていく。

技法

ソシオドラマは、ウォームアップ、ドラマ、シェアリング（振り返り、分かち合い）の三部からなるが、ドラマ内でドラマセラピスト（ソシオドラマティスト）が使う具体的な技法は、役割交換、ダブル、空の椅子、独白、脇台詞、魔法のスクリーン、歩いて話す、活人画、具象化、彫刻、ミラーリング、未来投影、などである。これらのテクニックを適所で選択して使いながら、社会の問題が浮き彫りになるように場面を作っていく。多くの技法は、演技者がまだ表現していない感情や、言っていないこと、言いたいのに我慢していることなどを外に

出してもらおうためのツールや、その場面で実際何が起きているのか、そこにいる人たちの関係はどのようなものを可視化させるツールなどである。

他者の「靴を履く」

上記の技法の中で、ソシオドラマのコンセプトとして重要なものの1つは、「役割交換」であろう。アメリカのインディアンのことばに、「人を判断しようとするときは、その人のモカシン（インディアンの革靴）で1マイル歩いてみたあとでなければいけない。」というものがあることを、現在95才で健在のザーカ・モレノ（モレノの妻）が紹介している。長年（夫の死後も）サイコドラマやソシオドラマを実践してきた彼女は、さらに以下のように言う。

誰かと衝突したとき「私の立場に立ってみてほしい。もしあなたが私だったらどうしますか？」とよく言うけれど、お互いの立場を実際に交換して相手の主観の世界に入る体験を本当にさせてくれるための答えをくれたのが（夫の）モレノです。しかしそれを行う唯一の方法は、そのことをアクションでやることなのです。

つまり、真に相手を理解するためには、相手の立場を想像して認識した理解ではなく、実際に「靴を履く」という行為が必要なのだ。あるテーマや登場人物についての知識などがまったくない演技者が、ソシオドラマで「靴をはいた」あと、具体的実際的な理解を得ることは、非常によく起こることである。

ソシオドラマの事例

ではここで、「福島の中学校のホームルームで、夏の節電の方法を話し合うという設定」で行ったソシオドラマの内容を簡潔に紹介する。原発事故の苦悩を理解する手立ての1つとして今年（2012年）5月に実施したものである。

東電社員の娘A子、農家の娘B子、一般社員の息子C男という役を配置した。担任教師役が、生徒たちの意見を求めると、事故処理に一生懸命に取り組む父親の姿を見てきたA子はエアコン使用を控えて節電を、と言う。B子は、風評被害で農業ができなくなった親の気持ちを代弁するかのようになり、A子に怒りをぶつける。また放射能の影響を怖れてもいるので、とにかく窓を閉めてエアコンを使うべきだと主張した。二人の対立が高まると、C男が間に入る。彼はそれまで仲良しだった友人たちが、事故の影響で争うことを悲しく思うのだった。

仮に福島でこのようなホームルームを行ったとしても、上記の衝突のような表だった言い合いが起こることは考えにくいので、そう言う意味では「架空の」設定である。しかしそれでも、このようなドラマ場面という一例から、状況の難しさが理解できる。

次に、A子の家の場面を作った。A子が夕飯のとき、両親に学校で友人たちに責められた話をする、母親がそれをきっかけに、夫に会社を辞めてほしいと訴える。彼女は家族の健康も心配しているし、近所でも肩身の狭い思いをしているので、福島から出て行きたいのだ。ところが夫は東電マ

ンの誇りを持って仕事をしているので、何があってもここに残ると宣言し、夫婦は激しく対立する。妻からは「娘を連れて離婚する」ということばまで飛び出し、A子はますます辛い状況に陥る・・・。

この福島ソシオドラマを行った場には、実際の被災者はいなかったため、被災の実体験のない参加者たちが、このドラマからその苦悩のほんの一端を、具体的現実味をおびて理解できたことに意味がある。ソシオドラマの大きな目的は、家庭、学校、地域、共同体、国、世界で今現在起きている問題を演じることで、（問題の結論や解決策を出すことではなく）様々な対立の諸相を体験し、その新たな視点からその問題を深く理解することなのだ。（もちろん、それが解決にも繋がるし、しばしば理解し合うこと自体が解決になり得る。）

「役割交換」技法の真の効用

ところで、どのようなテーマであれ、その具体的な状況や関係者の気持ちを理解する良い方法の1つとしても活用できるのが、一般的な映画や演劇である。もちろんそれらにも大きな意義はある。しかし、受け身の観客としてよりも、実際に演じた役からダイレクトに伝わる身体的な体験と理解は力強い。ソシオドラマの技法、例えば対立する相手同士がそれぞれの立場を取り替える役割交換の効用は強力だ。しかしこの説明だけだと、実際に演じている人しか体験できないように思われるかもしれない。ところが役割交換は、実はそれを見ている観客にも強いインパクトを与える。たった今、「娘を連れてこの地を出て行く」と叫んで

いた妻役の役者その人が、その時点で役割交換をすると、突然「東電マンの誇りをかけてここに留まり守り抜く」と宣言する立場になる。それを見る観客の心は、同じ人が役割によって全く異なった意見を持つことを目の当たりにして、大きく揺さぶられるのだ。私はこれまで大人数の参加者（100－300人）にソシオドラマを多数回行ってきたが、観客が大きな衝撃で一番多くどよめくのは、今まである主張をしていた演技者が、役割交換をした次の瞬間に反対の立場の主張を始めたときであった。このようにソシオドラマに参加することで、同じ人が異なった意見や立場を超えて表明し、身体的にも、感情的にも、いずれの役にも同化するプロセスを体験、観察することで、誰でも立場が変われば対立相手を理解できるという可能性を見せつけられるのである。

また、役割交換をしても、新しい靴を（上手に）履けない、違和感を持つというときは、そのこと自体が新たなステップとなったプロセスが、様々な手法を使って開始される。これは、集合的役割が固定されている場合、特に重要な視点である。

観客の主体性を引き出す「ダブル」技法

観客はさらにダブルという技法で、参加する。「役」のさまざまな感情やことばを、その演技者が十分に表出していないと思われるとき、観客にそれらを引き出す役目を与えるのだ。このように演技者も観客も台本のない即興ドラマを一緒に作っていく。参加者数にかかわらず、その場に集まった人たちが皆が主体的に創りあげたという感覚が得られることで、その集団全体への影響力が強くなり、また既存の社会の意見や見

方を深め、変化させる。ソシオドラマ実行後は、言わば参加者にとって、社会はすでに変容したのであり、これが現実の社会を変える力につながって行くのだ。

その他の事例

私が実施した、他のソシオドラマのテーマ例を挙げてみよう。

学校内のいじめを扱ったもの。実際の体験者ではない参加者たちも含め、いじめっ子といじめられる子ども、傍観者の友人たちを演じ合った。演じる中で演技者たちが得た実感の例として、以下のようなものがあった。

- ・いじめられっ子が抵抗を示す場面を、実験的に試みたあとの、いじめっ子役の感想：「相手が無抵抗じゃないと、いじめていても面白くない」
- ・いじめられている子を強い態度でかばう子が出現したときのいじめっ子役の感想：「その強い子に従属しなくなった。」
- ・傍観している子役たちの感想：「無視するには、多くのエネルギーが必要だった。」「無感覚になることで防衛している。」

いずれも、現実には実験ができない状況を、ソシオドラマの技法を駆使して体験したことでこのような理解が得られたことは興味深い。

紙面の都合で詳しい説明は割愛するが、他にもいくつかテーマのみ列挙する。

- ・就労が不可能ではないのに生活保護を受けている人と福祉事務所員の葛藤

- ・ 占い師にマインドコントロールされて金をつぎ込む女性と引き戻そうとする周囲の人
- ・ 国民の大きな期待を背負うオリンピック選手の苦悩
- ・ 非正規職員としてがんばって働いたのに、次期の契約にこぎつけない若者の落胆と彼を支援するハローワーク職員とジョブコーチの苦勞
- ・ パチンコ依存症の母親と、駐車場の車の中に閉じ込められて腹痛で泣いている子ども、心配する近所の住民と姑
- ・ 自己の身体的性別に違和感を感じて、「制服のスカートを履くのが苦痛なのでズボン履きたい」と教師に訴える女子生徒
- ・ 女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく、という固定化されたジェンダー意識的な教育方針の保育園の子どもたち
- ・ 「女性的な男性」キャラクターに対する社会の嫌悪、またそれを自らネタとして笑いに使っているお笑いタレントとそのことに対する世間の考え

最後に一小さなグループの大きな可能性

これまで説明してきたように、家族の間関係から、学校でのいじめ、職場の問題、社会制度や政治問題、さらには大きな災害や戦争、虐殺までありとあらゆるできごと、意識・感情・トラウマなどの問題が、この1つの手法で扱うことができることを理解していただけたと思う。即興ドラマを基本に、いくつもの技法を使うことで、数人から1000人単位の参加者たち（モレノは、地球に生きる人類すべてに広げて考えていた！）の視点は変化し広がり、思いもよらなかったことがらや人への理解がもたらさ

れ、集合的意識に囚われていた個人が解放され、新たな視野が広がる。そして何より、いろいろなレベルで社会への変化に繋がることにモレノは希望を抱いていた。彼は、世界中の人々が皆ソシオドラマを行ったら世界は平和になると語ったそう。そしてそのために、実は小さなグループ内の相互関係の中にこそ、その病理の根本を理解する鍵があることを見落としてはいけない、と言っているのが印象的である。

サイコドラマと共にソシオドラマを創始したモレノは、実は、集団の意識を取り扱うソシオドラマの中に、その集団を構成する個人を発見することで、この個人と集団は深く厳しい連環の中にあることを知っていたのだ。集団的行動や意識は、そのような連環の中でしか変容（または乗り越え）できないだろうと私も考える。

文献

- Moreno, J.L. (1953). Who shall survive? New York: Beacon House.
- Sternberg, P. and Garcia, A. (2000) Sociodrama: who's in your shoes? New York: Praeger.
- Kellermann, P.F. (2007) Sociodrama and Collective Trauma. London: Jessica Kingsley Publishers.

家族造形法の深度

10 家族造形法の展開 あれこれ

早樫 一男

○はじめに

相談事例の実践的検討方法として、家族造形法を活用することについては、これまで、報告してきました。今回は、相談事例以外の活用や展開について紹介します。

事例提出者や担当者が彫刻家役になる、参加者の中から家族役を選ぶ、それぞれのメンバーを粘土のかたまりと違って家族イメージを作っていく、完成後のフィードバックを大切にするといった一連の流れ（基本）については大きく変わりません。

○その1 児童養護施設での展開

処遇困難な児童が増えているといわれている昨今、児童や保護者にどのように向き合うかといったテーマは直接処遇職員が抱える大きな課題の一つです。

そこで、ある児童養護施設での事例検討に家族造形法を活用しました。その活用や展開について、3パターン紹介します。

まずは、入所児童の家族を造形として配

置することです。具体的には、入所前の家族（イメージ）、面会・帰省時の家族（イメージ）、さらには、退所後、想定される家族模様（あるいは、こうあればいいなという家族イメージ）などです。いずれを造形するにせよ、改めて、児童本人や家族の理解を深めることが可能となります。

二つ目の展開としては、施設入所中の子どもたちの関係を配置してみるといったものです。「家族造形法」というネーミングですが、造形法は、一緒に暮らしているメンバーの関係性や全体像を俯瞰できる、理解できるといった意味においては、「家族」に限っているものではありません。むしろ、子どもたちを取り巻く人間模様を具体的、視覚的、さらには、体験的に把握できるのが家族造形法の強味です。施設職員が子どもたちの役になってみるということを通して、体感的に学ぶことも大きな利点です。

3つ目の展開としては、子どもたちの周辺に、さらに、職員も配置するといったものです。造形法の特徴である距離感や視線などから、職員との関係性についても様々な発見が生まれます。

児童養護施設での活用は、職員間の情報共有の機会となります。一つのケースをみんなで考えているといった一体感も生まれることとなります。そして、いろいろな役を引き受けて、フィードバックするといったことに取り組んでみると、経験の差は気にしないで発言することも可能になります。もちろん、自分たちの関わり方にも目を向けてみるということにもつながるのです。児童養護施設での家族造形法の展開は、施設職員の自己覚知や研修にも大いにつながります。

これまでの経験では、学級集団や職場集団を造形として扱ったことがあります。

○その2 援助者向けの家族造形法紹介プログラム

今年の夏は、家族心理学会でのWSや支援者支援研修（主催：立命館大学人間科学研究所）で家族造形法を紹介するという機会がありました。

参加者は3～50名という多数の中で、「家族造形法の体験」をメインテーマにプログラム展開を心がけました。進め方の概略は次のようなものです。事例は事前に準備をしておきます。彫刻家役はこちらのスタッフの一員です。参加者の中から、家族役を選ぶということはいつもと同じです。

まずは、参加者全体で大きな円を作り、その中で、デモンストレーションのような形で家族を配置していきます。必要に応じて、家族造形法の進め方の解説を挟みます。家族役以外の参加者は、観客として、造形を眺めることとなります。観客は、彫刻を

見ての感想などを数人のグループに分かれて意見交換します。家族役からのフィードバックはいつものとおり行います。

ここまでが第一段階とすれば、次は、グループごとに分かれての造形体験です。デモンストレーションで作った造形を再現します。ファシリテーター及び家族役はグループの中から選ぶこととなります。その後は、グループごとに展開を考え、実施していくというものです。

講義や概略を聞いているだけでなく、また、事例に関しても、頭で考えるのではなく、実際に造形として配置されることによって生まれてくる感情などに集中するという体験は参加者にとって、とても新鮮だったようです。

それぞれの実践現場に合わせて、少しでも、家族造形法を活用してもらえればという思いを強くしました。

○「対人援助職のための自己覚知—原家族と向き合う—」(WS)での活用

このワークショップは、参加者自身の育った家族の中で、課題として抱えていることや未解決の課題について取り組むことをメインテーマとしています。

進め方は次のようなものです。家族情報について、ジェノグラムを作成しながら確認（共有）します。その後、家族造形法の手法を用いながら、家族を配置することによって、家族についての考察を深めていく作業が始まります。ここでの家族造形法は援助者自身の原家族のことを考えていく入り口として機能しています。その後の展開

は様々です。

参加者は、自分自身の家族が話題になる際には彫刻家の役割からスタートします。基本は原家族（イメージ）を造形として配置していきます。自分の家族以外のときは、他の参加者が提示した家族の役割を引き受けることとなります。丁寧なフィードバックを重ねながら、展開していくのがこのWSの特徴です。

ある人は、幼いころの家族を造形し、さまざまなフィードバックを確認したのち、「これからの家族」を配置してみることにチャレンジしました。

家族の歴史や大きな節目に沿い、時間をたどりながら、その時々家族模様を造形として作ったメンバーもいました。その都度、それぞれの役を引き受けた人からのフィードバックを丁寧に聞くことによって、さまざまな発見がありました。

あるメンバーは、原家族の造形後、「このようにあったらいいなあ」という配置を確認。その後、両親役との対話場面にチャレンジすることになりました。また、あるメンバーは、家族の位置に入ることにチャレンジしました。実際に体感することによって、何かを発見したようです。さらに、あるメンバーは、家族の大きな節目に沿って、家族造形を展開していくプロセスを通して、ジェノグラムの説明による家族イメージと家族造形により配置された家族イメージのギャップに気づくことになりました。

造形完成後、参加者は関心がある家族の周りに集まり、意見交換するという展開としたこともあります。その上で、これからの家族の関係について、いくつかの家族造形（配置）作ってみるという展開を試みま

した。

繰り返しになりますが、このプログラムにおいては、原家族のことを考えるキッカケとして、家族造形法を活用しています。自分自身の家族について考える際には自ら彫刻家になります。そして、他のメンバーが彫刻家の時は、さまざまな家族役割を取ることとなります。展開はさまざまであり、毎回、まったく同じものではありません。

自分自身の家族をテーマに取り組んだ際には、新たな発見を手に入れることができます。さらに、他の家族のメンバーを引き受けることによっても、自己覚知が深まっているという点が興味深いところです。

〇あらためて、一言

家族造形法の活用場面や展開はさまざまです。家族造形法の体験を通して、参加者に不思議な一体感が生まれるということ、その都度、体験してきました。この不思議な体験や感覚こそ、家族造形法の妙味なのかもしれません。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑩旅は続く

村本 邦子

設立から毎年発行している研究所年報22号の編集が終わった。今年の特集テーマは珍しく「家族」だ。大学では、「家族クラスター」に所属しているので、家族は中心的なテーマではあるが、私自身は、あまり「家族」という切り口で物を語ったことがない。たぶん、私にとっては、家族の境界はかなり緩くて、それがあまり明確な概念ではないからだと思う。家族の仲が悪いわけではないが（どちらかと言えば、むしろ仲が良い方ではないかと思うけれど）、家族のかたまりに対するこだわりは薄い。

幼稚園の初めてのお泊り遠足の時のことを思い出しては、母から、「みんなはお母さんと別れたくないって泣いてるのに、あんただけは眼をキラキラ輝かせてねえ。薄情

なんだから」と冗談交じりに何度か言われたことがある。高校生の頃、一ヶ月アメリカへ派遣される時も同様だった。でも、それを言うなら「こちらも同じ言葉を返しましょう」という感じで、どの家族も涙ながらに空港で別れを惜しんでいるのに、うちの家族だけは、みんなニコニコしていた。田舎だったから、「女の子は家から出てはいけません」というお嬢さんが多いなかで、そんなことを言う人は家族に誰もいなかった。

逆に言えば、それだけオープンでもあり、関係のない人がひょんなことでしばらく一緒に住んだというようなこともあったと思う。詳しい経過は知らないが、父の友達の奥さんが赤ちゃんを置いていなくなってし

まったので、うちで面倒を見ていたようなこともあった。ついでながら、一緒にしてよいのかどうかわからないけれど、父がどれだけ多くの鳥や動物たちを我が家で育ててきたか、とても数えきれない。

私自身も、学生時代、一年間、先生のお宅のお留守番をしていた時代があったが、夏休みの一ヶ月、妹や弟たちがやってきて（私は4人きょうだいの長女だ）、食事やら洗濯やら受験勉強まで面倒をみていたことがあったし、まだ子どもたちが小さい頃、従兄弟の面倒をみてやってくれないだろうかと頼まれたこともある（さすがに都会の狭いマンション暮らしなので断ったけど）。何かの事情で誰かがうまくはまるころがなくなれば、縁のあった誰かの家で面倒をみる・・・昔の家族はそんなふうではなかったのか。

思い出してもおかしいのだけれど、息子がまだ小さな頃、ふと気づくと、ファミリーレストランなんかで、よその家族の輪の中に入ってちょこんと座っているような場面があった。今なお、子どもたちはよそのお宅で大事にしてもらっているが、よその家族に自然と溶け込んでしまう性格では、ずいぶん得をしていると思う。よくよく考えてみると、夫にもそんなところがある。そして、そういう性格は、かえって人からつけこまれたり裏切られたりしないようだ。

子育てをしていると、「我が子が一番」的な親馬鹿なところもなかったわけではないが、それでも、よその子でも、よその大人でも、すぐに我が子のような気持ちになる。

そんな気持ちは必ずしも相手に伝わるわけではないし、余計なお世話だろうから、失礼にならないよう、わきまえはしているつもりだが。だから、昔から、いつかは孤児院（今は児童養護施設ですね）を開きたいなど漠然と思ってきた。そしたら、下の妹が就職して手伝ってくれることになっている。

そんなわけで、私にとっては、旅の道連れは家族かもしれないし、赤の他人かもしれない。少なくとも言えることは、長く一緒に時間を共有してきた人たちは、情が刷り込まれてしまい、私にとって、ほとんど家族であるということだ。女性ライフサイクル研究所の仲間たちは、明らかに家族（すでに子孫も繁栄しているので、むしろ拡大家族）の感覚だし、家族クラスターの同僚や卒業生たちもそれに近い。とは言え、こんな感覚は一般的ではなさそうだし、今年は、急に「家族心理学研究」という授業科目を担当することになり、「東日本・家族応援プロジェクト」も立ち上げたことだし、一度、「家族」を客観的に考えてみようと思って特集を組んだのだった。

研究所の年報は、毎年、特集のテーマを決め、月一回の会議でそれぞれのテーマを議論しながら、原稿を練り上げ、皆が書き上げてから私が序文を書き、お盆前に原稿を入れるというスケジュールになっている。一応、所長として編集責任の自覚があるので、皆が締め切りを守れなかったり、うまく原稿をまとめられなかったりしても、最終的には面倒を見てきた。私が研究所から身を引くにあたって、これをどうしていく

かが、実は、検討事項のひとつとして残っている。少なくとも現時点では、私が手を引けば、継続して年報を発行していくことは難しいし、できたとしても、所長として名前を残してよいという内容のものにはならないと思う。

それで、今年は限界設定をし、4月の宿泊研修までに第一稿を仕上げる約束にしていたが、結局、これは実現せずだった（個別には守ったスタッフもいるが）。それで、後はもう面倒を見ないことにして、年報会議にも出ず、知らん顔をすることにした。どうするつもりなのか横目では見ていたが、みんな最後まで協力し合って頑張った。それで、最後の一回だけは面倒を見ることにして、結局、8月頭までかかって仕上がった。発行の締切に間に合わすには、私が序文を2日で書かなければならないという。そんな馬鹿な。みんな、どこかで私が魔法使いのように辻褄を合わせてくれるだろうと思っているような気がする。実際には、このために、一週間、休暇を返上した。結果的には、それなりに良いものができたかなと思っている。来年、もう一回だけは面倒を見てもいいかなと思っている。ただし、来年は本当に4月で終わりにしよう。

この連載で、女性ライフサイクル研究所の設立前から20年を振り返ってきた。完全に所長を退いてバトンタッチしましたというところまでいって連載を終わるのが理想ではあったが、今のところ、まだ私は所長をやっているし、一定程度まで、その役割を果たし、自分自身の仕事も担当している。それでも、この1~2年、つまり、この連載

を始め、研究所が二十周年を迎えてから、相当程度身を引いてきたのは事実だ。次の事業展開についてはもう責任を持つつもりがないので、迷いが残っているのは、上記の年報とブログに月一で連載している「今月のトピック」。年報は、研究所のバックボーンとなっているので、もうしばらくは条件付きで面倒を見て、ブログはどこかで区切りをつけようかなと思っている。

私抜きにスタッフの皆がどんなふうに働いていくか、遠巻きに眺めているが、悪くない。リーダーシップを取ってくれているメンバーたちも、それぞれの限界だったところを越えて、さらに成長を続けている。人間の可能性はたいしたものだと感嘆させられるし、若い層もそれぞれなりに頑張ってくれている。すでに若手ではなく、立派に中堅どころであるが、自分のことだけでなく、次世代を育てることをしっかりと考えてくれている。こんなふうに世の中を眺められるのは幸せなことだと思う。

もとはといえば、大学院での専門家集団に馴染むことができず、一人で現場に飛び込んだのが始まりだった。進路変更を考えてみたこともあったが、結局のところ、心理臨床の世界でやってきた。世慣れて擦れた大人にはなりたくなかったし、志を持つ専門家でありたいと願いつけてきた。女性と子どもが直面する問題を世に問うという仕事は、ある意味で厳しいものだった。年を取りつつある今となつては、そういうことも少なくなったが、どうしても譲れない一線があって、闘いつつなければならぬこともあった。それでもやってこられたの

は、仲間があったからだと思う。

これまでも書いてきたように、関係性から言えば、私が責任を取らなければならない部分が大きかった。それだけ荷は重かったとも言えるが、自分で責任を取る覚悟さえあれば何でもできたとも言える。女性ライフサイクル研究所は、ある意味で、私にとってのラボであり、サンクシュアリだった。理想主義をどこまで実現できるかという意味でのラボであり、つねにそれが可能であったという意味でサンクシュアリだったのだ。

キャサンリン・フィッシャーの『もつとうまく怒りたい～怒りとスピリチュアリテイの心理学』（村本邦子訳、学陽書房）には、「場での離反」という概念が出てくる。これは、支配的な父権文化と、周辺部に現れつつある新しい文化の両方を表すものであり、留まりながら去るという両方を意味するメタファーだ。古い関係の仕方や考えから去り、まったく新しいやり方で、現在に留まる。抑圧的な権力関係は、私たちの中にも入り込む可能性があるが、小さなグループで集まることで、女性たちは、別の種類の力を経験し、洗練させていくことが可能になる。支配と抑圧とは違うこの力は、むしろ、愛に近いだろうとフィッシャーは言っている。互いに与え、受け取り、変化し、変化させられるような相互的結びつきのなかに見いだされる力である。このような力は、参加者たちの能力を解放し、行動へと力づける。

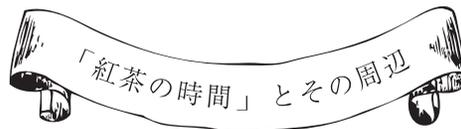
今、私がいるのは、もはやそんな場では

ない。もっと一般社会に近いだろう。子どもの頃、「世界中を全部つなげてひとつの大きな家を作ったらいいのに！」と空想していたことがあるが、世界がみんなでひとつの家族になることはないだろう。それでも、今や、地球がひとつの運命共同体であることは間違いない。ラボもサンクシュアリも現実の一部である。どこまで続くかわからない旅路ではあるが、まだまだ学ぶべきことは多く、人生日々修行と違って努力を続けている。

旅はどこまでも続く。もとよりパッケージ・ツアーは利用しない主義だ。楽で無難な旅はつまらない。パーソナルであることで、その時々気持ちやめぐりあわせを楽しむことに開かれていたい。一人旅が好きなのわけではない。でも、基本的に人生は一人旅だ。だからこそ、その時々で縁あって一緒になった人たちとの時間を大切にしたいと思う。たまたま同じ車両に乗り合わせたというだけの人もいれば、気が合ってしばらく同行する人もある。願わくばできるだけ長く一緒に旅ができたらと願う人もある。でも、それは自分で決められることではない。何しろ、自分でも行先のわからない旅である。いろんな偶然に左右される。そんな偶然を楽しみ、唯一の我が人生を愛おしみたいと思う。

おわり

きもちは、 言葉を さがしている



第9話

水野 スウ

「心の居場所の原点」、前号からの続き

毎春、お話の出前に行く調布のレストラン、クッキングハウス。代表の松浦さんから、今年は「心の居場所の原点」というテーマでお願いしますね、というリクエストが出ていた。

私にとっての居場所の原点、と考えた時、まさきに思い浮かんだのが、少女だった頃によく通った銀座の画材店だ。

店主のおぢちゃんが、いつどんな時の私も、まるごとのbeで受けとめてくれて、そのおかげで、こんな私にも何かいいところがあるのかなあ、と漠然とした安心感みたいなものをいつも持ち帰れる、そんな場所だったのだと思う。

長いことそのことに無自覚だったけれどやっと数年前、私が週に一度、誰でもどうぞの「紅茶の時間」を30年近くひらき続けてることのおおもとは、実はあそこにあったんだ、と気づくことができた。

あらためて振り返ってみると、50いくつも年の

違うあのおぢちゃんが、あの頃の私にしてくれたようなことを、私は私なりに、紅茶をとおして出逢う別の人たちに、以来ずっとお返ししているのかもしれない、とも思うのだ。

クッキングハウスの春の出前ではそのあたりから語り始めて、私が紅茶の時間からうけとった「聴くことの贈りもの」や、40年ぶりに義姉とかわすことのできた魂の会話について語った。今回はその続きを。

私の心の旅

数年前、私の心はちょっと不思議な場所に旅をした。浦河のべてるの家にならって自己病名をつけるなら、「正義感のかたまり型エネルギー大量消費消耗疲労症候群」とでもいうのだろうか。

がんばらないでいいよ、そのまんまでいいよ、身の丈がいいよ、が口癖の私が、あろうことか、「がんばります!」って大きな声で宣言して、文字通り身の丈以上にぐわんばってしまった結果だっ

た。と、今は冷静に分析できるけど、その渦中では、一体自分に何が起きちゃったのかわけもわからず、いい年をした私がおおいにうろたえた。

あの頃の私には、集中して考えたり、しっかり判断したり、たくさん記憶したり、外に出かけて人と会ったり、話したりすることが、いちいちとてもむずかしかった。

今にして思えばそれって、ひとに備わった大切な生命維持装置だったんだ。熊やリスやヤマネが体温を低くして、脈拍もいつもよりゆっくりになって冬を越すように、ひとにだって、時には冬眠して自分を保つことが必要な、人生の季節があるように思える。

そうやって休んでいけば、減ってしまったエネルギーはひとりでにたまってきて、また元気になってくるのかな？ それは人によりけり、疲れ度によりけり。現実にはなかなか、ってことが多そう。

それってたぶんこういうことだろうか。手持ちの希少なこころ資源は、前と違う自分を、なんて情けない、恥ずかしい、みっともない、と責めることでどんどん減っていき、世間もそう思ってるに違いない、と不安や恐怖をふくらませることでさらに大量に消費され、あげく、傍目には何もしていないのに、実際には激しい一人ボクシングの連続で、ぐったり、へとへとに疲れてしまう。

まるごと受けとめられるということ

誰かがこんな状態のとき、まわりの人には一体何ができるだろう、って思う。きっとすごくむずかしいことだろうけど、一つには、自分でもわけわからん状態のそのひとを、そのまんま、こわいんならこわいんだ、不安なら不安なんだね、とまるごと受け入れる、受けとめる、ってことかもしれない。

それも、「ああ、このどうしようもない、何もできないでいる自分という人間が、いま確かに、このひとには、受け入れてもらえているのだ」とそのひと本人が実感できるような誠実さでもって、

受け入れられている、ということが大事なんだ。

本当に幸いなことに、稀なことに、私はあの時、まさにそのように、受け入れられた。一番受け入れてほしい家族に、一度も責められず、舌打ちされず、呆れられず、おろおろもされず、無理に励まされもせずに。

心理学など一度も勉強したことのない夫が、なぜあの時期、あんなにも自然な態度で私に接することができていたのか、それはなかなか私にも解けないミステリーだった。

ずっと後になってから、どうしてあの時、あんなふうにできたのか、彼に尋ねてみたことがある。すると即、「そりゃあやっぱり、紅茶でしょう」って謎かけみたいな答えが返ってきた。

早めに会社を退職してからの夫が、毎週の、主に女のひとが集まる紅茶の場に、まったく空気のように居て、いろいろな人の人生の物語を、聴き手としてではない少し離れた位置から、曼荼羅を眺めるようにずっと見聴きしてきたこと。

そういう彼の、彼なりに腑に落ちたことの一つが、どの人もみんな、一生懸命に生きてるんだな、悩みの何も無いって人もいなければ、どれが絶対正しくてどれが間違ってる、ってのもまたないんだなあ、というようなことだったらしい。

彼が、私にも不思議なくらいの自然さで、あの時期の私を受けとめていられたのは、おそらく彼のそういう発見のおかげだったのだろうな、とその時思えた。

あんしん貯金

それにしても――。しんどい時は休めばいいよ、といつも人に言い、自分でもそう思っていて、なのになぜあの時期も、私は紅茶の時間を休まなかったのかなあ。

今日こそ誰も来ないだろう、と思いながらも、水曜日の1時になれば私はいつものように、ドアの外の、ちいさな紅茶の看板をひっくり返して、重たい気分ながら、わが家をあけた。そしてやはり、そこに誰かしらやって来た。

久しぶりに来て、いつもとちょっと違う私の様子にとまどった人も、いつも通り紅茶の場にいる、ふだんと変わらない夫の様子に少し安心したみたいだった。彼がそのようにそこに居てくれたおかげで、あの微妙な時期、仲間たちはまた次の紅茶に来ることができてたのかもしれない。

そのまんまのあなたでいいよ、そういうあなたが好きだよ。

そのことを、私は紅茶の時間でずっと言ってきた。その言葉を受けとった誰かれは、それをお土産に持ち帰る。と同時に、置いていくものらしい。

ある日の紅茶に来た誰かが、そうか、こういう私でもいいんだ、私にもいいところあるんだ、とちょっとでも思ったら、そのひと一人分の、そこで感じた安心の空気はそのままそこに残っている。

また別の日、他の人が感じた安心空気もそこに残り、それらはいつものまに紅茶の場に貯まってく。空気は伝染するものだから、紅茶にくる他の人たちも仲間に向かって、それでいいよ、それがいいよ、と互いによく言いあうようになって、もうずいぶんの年月になる。

仲間の一人は、そんな紅茶の空気のことを「ここにくると、いつもなんか上の方から、大丈夫だよ、それでいいんだよ、って声が降りてくるみたいな気がするんだ」と不思議な言い方で表現していた。

しんどい時期の私は、こんな私でもいい、なんでももちろん全然！ 思えてなかったけど、長年の「紅茶銀行不定期不定額あんしん貯金」は、紅茶という場の空気中に、利息分も含めてけっこう貯まっていたのだろう、少なくとも外の世界にいる時より、私はずっと楽に息ができた。

あとから思えば、その空気が「あんしん膜」とでもよびたいようなものをつくり、私を包み、保護してくれていたのだ。問いつめない、責めない、叱咤激励しない、一人ひとりのただそのまんま、を許す空気が、私を救ってくれていた。まるで相互循環の、再生可能エネルギーみたいに。

ああ、だから毎週の「紅茶の時間」を休もうと思いつけなかったのだ。いつ頃からか私の暮らしの一部になってた紅茶は、それ以上に意味のある、私のよりどころにもなってくれていたのだった。おちこんで何にもできない自分にも、紅茶だけはまだある、場を開けられる私がいる、とあの時期思っていたのだろう。紅茶という場が、ほかならぬ誰より私にとっての、貴重な居場所になってくれていたんだ。

クッキングハウスの循環

その「あんしん貯金」の循環は、まさにクッキングハウスで、紅茶よりいっそう濃く起きているのだと思う。

ソーシャルワーカーの松浦幸子さんが、心の病気をした人たちと、病院ではなく地域でともに生きていきたいと、ワンルームマンションを借りて、一緒に食事をつくり、“おいしいね、から、元気になる場”クッキングハウスをはじめたのは1987年のこと。

松浦さんはその時代から、誰がどんな状態で来ようと、「よく来てくれましたね」と笑顔で迎えること、その人が今できているいいところを見つけたら、言葉にしてその人に伝えること、そうやって安心感をプレゼントすることを一番に心がけてきたという。

ずっとうつむいていたメンバーの誰かれが、いつからか顔をあげて、その表情に光がさしてくる時を、見逃さない。何かしてくれた時にさりげなくかける「ありがとう」を欠かさない。そういう何気ないほめ言葉のシャワーを、松浦さんは本当に長いこと続けてきての今、なのだろう。

ワンルームマンションからはじまった食事づくりの場は、やがて町なかの、アットホームな自然食レストランへと発展していった。

メンバーさんたちは、薬を服用しながら、ウエイトレスや、料理やお菓子作り、食器洗いなど、それぞれのできることをして、クッキングハウスで働く。そんなメンバーの働いている姿がまたレス

トランに見えるお客の人たちに、あたたかな安心の空気を届けている。

ここでは食事を出すだけでなく、対人関係を練習するSSTや、サイコドラマ、心の健康講座、メンタルヘルス市民講座、市民大学といった、メンバーにも市民にもひらかれた様々な学びの機会がある。

それにくわえて、自分たちの歌づくりや本づくりの創作活動、絵画教室、コンサートや映画会、講演会などなど、福祉の文化を豊かに発信しつづき、こころの問題を抱えて全国からやってくる人たちやご家族、レストランのお客さんたちと、それらを共有しあってきた。

メンタルヘルス市民講座で講師役をつとめるのはいつも、松浦さんと何人かのメンバーたちだ。うつ病の勉強会ではうつの当事者であるメンバーさんが、統合失調症の回にはやはり当事者である別のメンバーさんが、参加者の前で、自らの病気やリカバリーの道のりを自分の言葉で語る。

数年前には深刻で心配な状況だった彼／彼女が、こんなにも落ち着いて、自分の病気をひと前で語れるようになる日が来る。それをまちかに見聞きできるって、今現在、悩み苦しんでいるご家族には、どんなに大きな安心だろう。それはメンバーたちからならでは、貴重なプレゼントだ。

はじめのうちこそ、もっぱら松浦さんからメンバーたちに贈られていた安心感は、やがてそれを受けとったメンバーたちからしだいに、クッキングハウスを訪ねるお客さんたちへと還元され、循環していく。

内からと外からと

居場所、という単語を聞くことが、以前にくらべて近ごろとても多くなった気がする。「居場所をつくりたい」「居場所をしています」「みんなの居場所、はじめましたから来てください」などなど。

そこを居場所だと、定義づけるものはいったい

何だろう、って時々考えさせられる。

はじめから居場所と銘打った看板があるわけではむろんなく、代表や会長といった人が意図してつくるものでもなく、器があればそれでいいというものでもなく。

私が思うに、それは、そこにやってくる一人ひとりがその時々、ああ、ここに居てなんだかこちいいな、私、ここにいてもいいみたいだ、ひょっとしてここって私の居場所かもしれない……と、それぞれ勝手に感じるものなんじゃないだろうか、ってことだ。

クッキングハウスで感じるこちよさは、中に居る人たちだけでつくられてはいない。そこがすばらしい、と行くたびに思う。

外からのお客さんたちが、ここに来て、松浦さんやメンバーやスタッフから、ようこそようこそ、来てくださってうれしい、どうぞゆっくりしてってくださいね、と笑顔で迎えられる。

ランチタイム以外に、誰にもオープンな講座がいくつもあるおかげで、参加者はメンバーたちのリカバリーの過程を実感できる。またそのお客さん自身が、松浦さんやその日のクッキングハウスで出逢った人たちから、あなたのままでいいんだよ、というメッセージをうけとって、その安心感をお土産に持ち帰る。と同時に、その人がその日、ほっと感じた空気をクッキングハウスに置いていく。

そうやって全国からみえるお客さんがそれぞれに残していった「クッキングハウス銀行・不定期不定額あんしん貯金」の預金総額は、それこそはんばじゃないはずだ。

クッキングハウスで感じる安心感は、内と外の両者でつくりながら循環していく、相互作用のたまもの。お客さんの一人ひとりが、そうか、この自分も、クッキングハウスの安心をつくっている支え手の、確かな一人だったんだ、と知ることは、きっと大きな意味のあることだ。

クッキングハウスに満ちている安心感を、もしもあえて言葉にするなら、今日は来てくれてあり

がとう、そのまんまのあなたでいいよ、何々できる、のdo以前に、あなたがいま生きているというbeが、何より大事なんだよ、といった感覚だろうか。

その空気は、一人じゃ決してつukれないし、てっとり早くも製造できない。時間をかけて、たくさんの人の想いで醸造されてきたものなんだと思う。

「居場所」のリレー

紅茶の時間が、誰より私にとっての心の居場所であった、と数年前のできごとではっきり認識したこと。クッキングハウスの場の空気は、松浦さんだけでなく、メンバーもスタッフも、そしてお客さんも、その全員でつくっているものなんだ、ということ。

そんな話を聴いてもらった後で、参加者のみなさんがそれぞれに思う「居場所」や、その言葉から連想するもの／こと／場所を、なんでも自由に書いてみてください、と折り紙を渡してお願いする。場所がら、クッキングハウスという単語ばかり出てきそうな予感がするけど、その場合は、クッキングハウスの何が、どこが、と具体的な言葉もちょっと書き添えて。

みなさんが出してくれた、数十もの「居場所」を巡る言葉たち。この日はそれを一枚ずつ順に7人で読みあげていく「居場所のリレー」をした。

そうやっていねいに声に出していくと、どの言葉も、ほんとにそうだな、そうなんだねえ、とうなずける。居場所のイメージが豊かに広がっていく。

それはたとえば、こんな言葉たちだ。

みんなでご飯を作ってみんなで食べる場所／わが家のリビングのソファ／クッキングハウスでケーキを作っている時、野菜を刻んでいる時／本音で語りあえる、ほっとできるあたたかい場所／見守る空気／みんなで作る場所／仲間がいると

ころ／何もしなくても、いていい場所／日だまりで好きな歌を聴いてる時／連れあいとワインを飲みながらよしなしごとをおしゃべりしてる時間／わが家のキッチン／ベッドにはいり冷えた足先を夫の足の間で暖める時／離れていても思いだせる場所／みんなと一緒にご飯を食べて、語りあっている時間／ぼろぼろになった私を、抱き起こしてくれた大好きな仲間のいるクッキングハウス／私が私でいられる場所／クッキングハウスのSSTやサイコドラマしてる時間が私の居場所／自然の中の、温泉に入ってる時間／恋人といる時間／wholeまるごと、そのまんまの自分でいられる場所／クッキングハウスのみんなと旅をして笑っている時／安心していられる場所／嫌だ、ダメだ、と思ってる自分のことを許せる場所／みんなとSSTを学んできもちをシェアしてる時間

クッキングハウスの集いのメに歌われる「不思議なレストラン」というテーマソングがある。何度聞いても聞くたび胸に響いてくるこの歌の、歌詞の最後は、「♪不思議なレストラン 心の居場所 ここにいても いいですね」。

元気があってもなくても行ける場所、私はここにいてもいいのだ、と思える場所。歌いながら、そのまんまで受け入れられている自分の存在を確認できるようなこの歌詞、クッキングハウスを見事に言いえて、なんてシンボリック、といつも思う。

憲法13条やさしい日本語訳

おはなしの出前の最後に、この3年間は毎回、オリジナルのちいさな歌を歌わせてもらっている。

そんなだいそれたことをはじめたのもきっと、クッキングハウスに影響されたのだ。クッキングハウスの仲間たちが、歌をつくり、それを歌うことで、もっと自由に自分たちらしさを表現できるようになっていったこと、リアルに知っているから、私もつくって歌ってみよう、という勇気をもらえたのだと思う。

今年の歌のものは、3年前のクッキングハウス

の出前で、「ほめ言葉のシャワーから平和へ」をテーマに母娘で語った時の、娘の語りがかきつけだった。

自分で自分をほめることや認めることの、超苦手な娘が、「ほめ言葉のシャワー」という冊子の編集をしながら、少しずつ気づいていったことがある。

何百と寄せられた一人ひとりの、自分に言ってあげたいほめ言葉を何度も読み返すうち、そうか、他の人たちもそうように、自分にだっていんなしんどいことがあったけど、よく今日まで生き抜いてきたじゃないか、それってほんとはすごいことなのかもしれない、と思えてきたのだという。

それなら、自分と似たようなこと感じてる人たちがこの冊子を手にした時、さびしい気持ちにならないようなものを作ろう、と冊子づくりの柱を決めて、編集作業にとりかかった。その想いは、コラムの最後に彼女が書いたこんな文章に表現されている。

——誰かと比べられたり、何かができることを強いられたり、絶えずやらなきゃいけないことに追われる日々の中に、今あなたが生きているのだとしても。

あなたがあなたであるという、その存在は、決して他の誰ともとりかえることはできません。

——生きることは、時に辛く、苦しく、涙すること。それでもあなたは、それをくぐり抜けて、今ここに生きている。息をしている。それがもう十分にすごいこと。

こんなふうにした娘が、クッキングハウスで平和について語ることになった時、たどりついたのがなぜか憲法13条だった。自分のことも相手のことも認めあおう、という「ほめ言葉のシャワー」の考え方が、実は憲法13条と重なっているんじゃないか、と思えてきたからだそうだ。

「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由および幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しないかぎり、立法その他の

国政の上で、最大の尊重を必要とする」

と書かれている13条が、娘の解釈によればこんなふうにも読める。

「自分を大切にすることとはちっともわがままなんかじゃない。なにもできなくても、個として生きていることそのものが、尊重されていいんだ。

“公共の福祉”は、私から切り離された場所にぽっかり浮いてるのではなくて、今この目に映る、あなたや、あの人や、この子の“大切さをないがしろにしない”ということじゃないだろうか。

60数年前は、一人ひとりよりもずっと、国という公が大切だった。生きたい、っていう当たり前の願いだって口に出せなかった。そういう時代があったからこそ、新しい憲法には、そうではないよと、私が大切なと同じように、どの人も、とりかえのきかない大切な存在なのだよ、ということわざわざ書きこんだんだ。13条は、それが一方通行ではないことの確認なんだ。

だから私は堂々と、私のこと大切、って思っている。生きたいって願っている。同じように、あの人もこの子も大切ってちゃんと認める。そうやって一人ひとりが自分をかけがえのない存在と思えば、また相手のこともそう思うことなしには、平和なんてありえないんだ」

その上で、娘は13条にやさしい日本語訳をつけて、クッキングハウスの語りの中で朗読をした。

「わたしは ほかの誰ともとりかえがきかない
わたしは 幸せを追い求めていい
わたしはわたしを 大切と認めていい
あなたもあなたを 大切と認めていい
その大切さは 行ったり来たり
でないと 平和は成り立たない」

♪ほかの誰とも

この一編の詩のような憲法の言葉は、3年前にはじめて聞いた時からとても心に残っていた。ひ

とがひととして、大切にされていない状況があまりに多すぎる。原発震災によって、それがいっそう明らかになってきている今だからなお、この13条を自分の身近に感じていたい、と思った。

そうやって出来たのが、憲法13条をもとにした「ほかの誰とも」という歌だ。「心の居場所の原点」というテーマで語った後ならいっそう、この日の語りと歌はいろんな点できっと重なる気がして、出前の最後に歌わせてもらった。

先のやさしい日本語訳の朗読からはじまり、続く歌詞はこんな言葉にした。

♪ 誰とも ほかの誰とも
とりかえっこできない
あなたが生まれたその時から
ひとつっきりのいのち
あなたが大切にされ わたしも大切にされ
それが行ったり来たり ともに生きること

誰もが そう誰もが 幸せになるために
生まれて来たんだ
この星で 同じときを生きる
あなたはとくべつなひと
わたしもとくべつなひと
一人ひとりちがうことが
不思議ですてきなこと

誰でも心が疲れた時に立ち寄れて、ほっとできるレストラン。一人ひとりが大切にされる場、市民の居場所にもなっているクッキングハウスのHPもどうぞのぞいてみてくださいね。

クッキングハウスのHP
<http://www.cookinghouse.jp/index.shtml>

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド 大野 睦

第九章 ライフライン

■水



屋久島には水が溢れている。山間部では年間10000ミリもの雨が降る。その雨が屋久島の自然はもちろんのこと、私たちの暮らしを支えている。月に35日雨が降ると言われれば、屋久島では本当に毎日ずっと雨が降っていて、青空を見ることなんて年に何日もないのでは？なんて印象を持たれているらしいが、そんなことはない。平地でも大阪や東京の3倍以上の雨量が観測されているが、屋久島は熱帯雨林でもなく四季のはっきりとした日本の気候そのものである。



春には春の「木の芽流し」と呼ばれる雨が降り、新緑を美しくする。梅雨入り前の5月はさほど雨は降らず、初夏の屋久島を楽しむことが出来る。6月には梅雨の止まない雨。7月から9月の雨量は多くは台風がもたらしてくれるもの。秋には静かに雨が降り、冬の雨は雪へと変わる。一年中、雨の恵みに困ることのない屋久島では断水になることがほとんどない。私が屋久島に暮らして17年。一度だけ断水になったことがあるが、それは台風で送水ポンプが壊れたから、という理由であった。われわれ人間が生きるために欠かせない大切な水はまさに溢れんばかりにあり、その贅沢な環境を当たり前と感じてしまうが、島を出たときにその水の美味さや清らかさにあらためて感謝する。

■電気

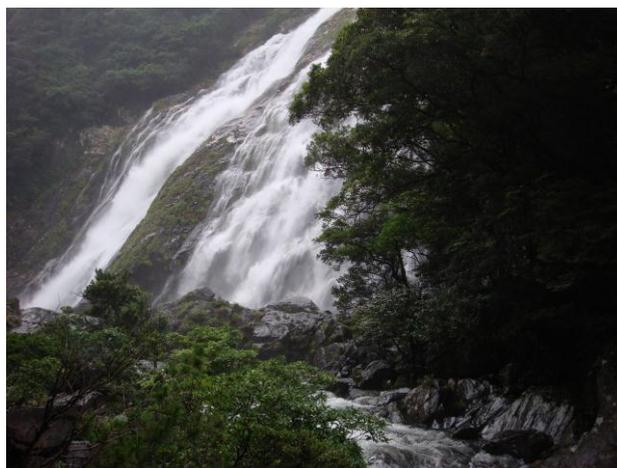


昨年の東日本大震災以降、各地で計画停電の対策、また節電への呼びかけが続いているが、屋久島には九州電力からの送電地域は極わずかであり、ほとんどが屋久島電工から送電されている。そして、その電力の源は水力発電であり、今や電気に至っても豊富な水から生み出される。今となつては原発問題、エネルギー問題が取り上げられる際に、世界自然遺産の屋久島がクリーンエネルギーで生活をしていることが少しずつ知られるようになってきたようだが、この暮らしは決して安泰ではない。何故なら毎年夏から秋にかけて台風が幾度も通り過ぎてゆくからである。その台風のたびに数時間の停電や1～2時間の停電が断続的に続くことや、長ければ2日間停電になることもある。また、雨の多いとき、雷雨のときにも停電になることがあり、その度に「無計画停電」に慌てず、憤ることもなく自然の営みの流れを見つめ、ただただじっと過ぎ去るのを待つのみである。



■ガソリン

生活に必要な物資などは船で運ばれる。離島なのだから当然のことではあるが、そのことがあらゆる物価を高くさせており、日用品や、食料品、ガソリンの価格が本土の2割増くらいになる。また台風で船が欠航すればスーパーから日配品など食料が消えてゆく光景も珍しくない。このことは以前第3章でも触れているが、こうして物価が高くなっていることも離島の暮らしには致し方ないのかもしれないが、背負うリスクとしては些かフェアじゃないと言いたくもなる。



もちろん、私自身はここを選んで暮らしており、恵みもリスクも受けとめているのだが、様々な面で矛盾のない、もっと暮らしやすい社会へと変わることを切に願う部分もあるが、これだけ自然の恩恵を目の当たりに生きることが出来ることも贅沢な暮らしであると感じている。

大野 睦 BLOG やくしまに暮らして
<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

お寺の社会性

生臭坊主のつづやき



竹中尚文

1. お盆明け

近年、お盆のお参りは宗派を問わず盛んになってきたらしい。坊主友達がラジオでそんな話しをしていた。今年のお盆も忙しい思いをしたのは、そんな事もあるのかもしれない。お盆が終わって、思考が半ば停止した中で友人にメールをした。彼は高校時代からの付き合いなのでもう40年になる。お互いの住まいが千キロほども離れているので、顔を合わせることはめったにない。いつもメールのやりとりである。

私は、彼の奥さんがどれだけすばらしい人であるかを書いた。彼からの返信は、「どうしたんだ？」と云うげげんな感じであった。彼

は私に言われるまでもなく、自分の奥さんのすばらしさを知っているだろう。また、私がいくら生臭坊主と言っても友人の奥さんに横恋慕をするわけがない。彼の奥さんは本当にチャーミングな女性でいい人である。女性に不器用な友人がどうやって彼女と結婚できたのか不思議である。

友人にとっては迷惑で不思議なメールであっただろう。私は、友人の夫婦関係にお説教をしてしまったようだ。私はお盆参りでいろんな家族を見て、ハイになっていたのかもしれない。それで、友人に余計なことを言ってしまった。

2. 家族の季節

最近のお盆は家族の季節である、と私は思う。亡くなった家族も含めての家族の季節である。

もともと、私たちの浄土真宗は盆行事に重きを置いてこなかった。だから、お盆の特別のお供え物と言ったきまりはない。お参り先でお盆に何をお供えすべきかと尋ねられることがよくある。そんな時、「家族の気持ちをお供えして下さい」と答える。苦し紛れの答えだと言えればそれまでである。

今年のお盆に私がお参りしたいくつかの家族を紹介したい。

【青原さん】早口のお経を上げて向き直ったら、青原さんが一人で座っている。昨年に99歳のお母さんが亡くなった。結婚をする機会がなかった彼が母親の介護をした。父親は30年ほど前に亡くなっている。75歳になる青原さんが一人になった。これからどうしようという感じが伝わる。先は決まっているのだと言う。今の住まいを売って老人介護施設に

入所するつもりらしい。それはいつのことになるのかは、分からない。では、それまでをどうするか。75歳からの人生設計である。人間は、生きている限り生きる状況は変わる。死ぬまで、人生設計の立て直しである。いろいろな要素を含んでこれからがある。次に会うときに、青原さんはどんな話しをしてくれるのだろう。

【井上さん】かなり前に井上さんから、娘たちが帰ってくることを聞いていた。井上さんは半年ほど前にご主人を亡くした。娘が二人いるが、遠くに嫁いでいる。父親の初盆だからと言って帰ってきた。いつもは奥さんと犬一匹の静かな家が大騒ぎである。それぞれのパートナーと幼児から小学生までの子供たちが5人である。台所と仏間の二間続きの空間は、泣いている子供、犬を追い回す子供、テレビを見始める子供たちでごった返している。私は仏壇の前で縮こまって座っている。井上さんは、私に接待ができないことを詫げる。詫げながらその顔は嬉し

そうである。悲しいはずの初盆に参ってきたのだが、なんか楽しいお盆だ。

【海野さん】私がお参りに行くと、五人で待っていてくれた。いつもは海野さんと 80 代後半のお母さんの二人の家族である。海野さんは昨年 60 代半ばのご主人を亡くした。長男は半年ほど前に、遠くに転勤になって一人住まいである。次男は先月に結婚をした。今日はその奥さんと並んで座っている。私は若い奥さんに初対面の挨拶をした。ニコニコしている若い奥さんに「笑顔をお父さんにお供えしてくれるのは、ありがたいね」と言った。そうしたら、長男も「僕も結婚が決まりました」と笑っている。

そんな挨拶の後、私は仏壇に向かってお経をあげ始めた。背後で男性の鼻水をすする音がする。デュエットのようだ。この一年は、彼らにとっても辛い一年だった。かつて、海野さんが「主人が亡くなった後、息子があんなにしっかりしているなんて、思ってもみま

せんでした」と言っていた。かつては賑やかな海野家だったが、今はおばあちゃんと海野さんの二人暮らしである。家族のそれぞれが人生の新たなステージを歩み始めたようだ。今年のお盆はそんな報告会のようだ。

【江藤さん】江藤さんのお宅に約束の時間にお参りに行くと、奥さんが一人で座っていた。昨秋にご主人が亡くなって奥さんは一人暮らしなのだから、奥さん一人というのも不思議ではない。朝、長男から新幹線が集中豪雨で動かないと電話があったそうだ。母は無理せずに自宅に帰るように言った。江藤さんは長男夫婦もいれば長女夫婦も次女夫婦もいる。どんな事情があるのかは知らないが、子供たちの存在感が薄い。それは、江藤さんのご主人の闘病中も、奥さんだけが介護をしていた印象がある。

子供たちは独立した。江藤さんは息子や娘の配偶者に頼み事をしないようだ。独立した人間の関係において、必ずしも頼み事をし

ないというものではない。江藤さんは息子や娘やその連れ合いに「いいお母さん」なのだろう。面倒な事を言わない「いいお母さん」は、「どうでもいいお母さん」になりはしないか。杞憂であってほしい。

江藤さんは来年のお盆には、私に参ることを頼んでくれるだろうか。家族に「坊さんが参ってくるから、帰ってきて」と言ってくれれば嬉しい。

【小原さん】10年ほど前のお盆にお参りをしたときにおじいちゃんが高校生の孫を紹介してくれた。夏休みにおじいちゃんのところ遊びに来ているのかと思ったら、数メートル先に自分たちの家があるという。その翌年におじいちゃんは亡くなった。お葬式があって家族構成を知った。小原さんは、数メートル先に自宅が会って、夫婦と子供は姉と弟の四人家族である。お葬式の後はお参りの回数が多くなるので少しずつ様子も伺い知れる。父親の居心地が悪そうだ。娘が父親に対して

否定的な視線であった。母親も父親に距離をとっているように感じた。それから、父親は転勤が決まった。単身赴任である。父親は、帰れるときは一生懸命に帰ってくる。同僚の車に同乗させてもらったり、バスに揺られて帰ったりしていた。昨年のお盆は、私がお参りした日に父親が帰省する日だった。数キロ先の高速バスのバス停に息子が自家用車で迎えに行った。入れ違いに、父親が歩いて帰ってきた。程なくして、帰ってきた息子に、父親は礼を言った。感謝の気持ちを込めての言葉だった。

昨年、誰かにうわさ話として聞いた。小原家の息子が高校生の時に、何かで不登校になったらしい。その時に父親の発した言葉で、あの家族は上手くいかなかったと。爾来、彼はほとんど家に居る。しかし、昨年のお盆の日に息子は父親をバス停に迎えに行った。

昨年のお盆に、私は息子に短期の海外留学にでも行かないかと言った。ほとんど家に居る息子に

出かけてほしかった。今年のお盆にお参りをしたら、姉が仕事を辞めてワーキングホリデーで、カナダに行ったと言う。そんな家族の様子を聞いているとき、息子が僕もカナダに行ってみようかなと言った。両親は、ぱっと嬉しそうな顔になった。

この家族にはいろんな試練があったのだろう。家族はお互いの手を離すまいとしてきたのだろう。私は父親の行動にその意志を感じた。だからと言って、この家族の問題が一気に解決するのではないが。おじいちゃんが亡くなってからお参りの時にはできる限り家族がそろってお参りをする。父親は今も単身赴任先から一生懸命に帰ってくる。そして、家族は仏壇の前でそれぞれが、何かを語る。私は一度もこの家族から相談をされたことはない。いつも家族ドラマの観客をさせてもらっている。

3. 坊さんの立場

私は、お盆のお参りでは法話

をしない。法話とは、仏の教えを話すことである。浄土真宗ではお経と法話はセットになっているのだが、祥月命日やお盆のお参りでは私は法話をしない。私は聞き役になる。私は市井の生臭坊主であるのだから、どんな話しにも乗るようにしている。私は住職になってから、他者の話を聞く勉強をしておけばよかったと思う。これから坊さんに成る人には、他者の話を聞く勉強をしておくことを勧めたい。

坊さんの中には人に悩みを語られることで、自分が偉くなったような勘違いをする人もいる。だから自分がすべてを掌握しないと納得しなかつたり、自分の力で解決できると勘違いをしたりする。私たち坊さんは、仏を背に座ることが多い。人は私の背後にいる仏に向かって話しているのかもしれない。

蛇足ではあるが、仏は就職や縁談の世話もしないし、病気を治したりもしない。歳をとるのを止めたりもしないし、死を止

めたりもしない。宝くじも当て
てくれたりもしない。でも、仏
に向かって語ることに意味があ
ると思う。

4. まとめ

今年、あるお家で私がお盆のお
参りを済ませたら、これからみん
なでバーベキューをしよう。お
じいちゃんが亡くなっておば
あちゃん一人暮らしになった家
に、みんなが集まって、バーベ
キューだそう。一昔前なら考えら
れない初盆だが、私はいいお盆だ
なあと思う。お盆は変わってきた

なあと思う。

はじめにも書いたように、お盆
は盛んになってきている。それは、
家族の行事となっているからだ
と思う。家族が、亡くなった家族
に語りかけ、お互いの繋がりを確
認している季節なのかもしれない。
仏に家族の問題を語ったとこ
ろで、その解法を教えてくれるわ
けではないが、その意味はあると
思っている。

来年のお盆は、もっと忙しいお
盆になるかもしれない。来年も暑
いだろうなあ。

第8回 これからの男性援助を考える

婚活中の女性の視点から考える

男性が婚活で成功する援助①

松本健輔 坊隆史

「私は普通の人でいいんです。条件は大卒で、年収は最低600万。身長は170以上。あとやさしくて尊敬できる人がいいです。」

結婚相談所で毎日のように女性会員が話す結婚相手への希望条件だ。彼女たちのが暗に伝えたいことはこうだ。「私は現実を分かっているので、無理な希望は言わない常識的な人なんです」

現代の男性たちは、婚活という戦場で『現実を分かっている』彼女たちの相対しなければならぬ。今回は結婚相談所の中の婚活という限定的な状況の中で見える物を材料に、男性支援を考えてみたい。そのために、本稿では、まず婚活の現状の整理と、女性側からみた婚活事情を記載し、次回それを元に男性の婚活、そして支援を考えていきたい。

1、婚活という市場がどうなっているのか。

婚活という言葉が山田ら(2008)によって作られてから、この言葉は定着し、結婚は自然にするものから努力して意識的にするものに変化しつつある。国勢調査(2010)によると、30歳から34歳の未婚率は男性が46.5%、女性で33.3%。35歳から34歳では、男性が34.6%、女性は22.4%となっている。これを多いととるか少ないととるかは別として、かなりの数の男女が結婚をせずに独身でいることが見て取れる。

図1 調査別に見た、夫婦が特定年齢までに会った割合。

夫妻が 出会った年齢	第9回調査 (1987年)	第10回調査 (1992年)	第11回調査 (1997年)	第12回調査 (2002年)	第13回調査 (2005年)	第14回調査 (2010年)
夫						
20歳までに	14.3 %	14.7	17.8	16.9	16.4	17.7
25歳までに	43.9	49.4	53.3	55.2	49.9	49.6
30歳までに	79.9	81.1	81.6	82.7	82.5	77.3
35歳までに	96.5	95.4	94.8	95.7	93.8	91.3
出会い中位数年齢	25.8 歳	25.1	24.5	24.1	25.0	25.1
妻						
20歳までに	27.8 %	26.4	27.9	25.3	23.2	24.4
25歳までに	71.5	72.4	71.8	68.0	63.7	57.4
30歳までに	94.5	94.3	93.6	90.8	89.7	82.6
35歳までに	98.8	99.1	98.9	98.7	97.9	95.4
出会い中位数年齢	22.3 歳	22.4	22.3	22.8	23.3	23.7

図1は第14回出生動向基本調査(2010)によるもので、7,847人の妻の年齢が50歳未満の夫婦を対象とした調査で、上記は其中で配偶者と出会った年齢を表している。

注目すべき点は35歳までに配偶者と出会った確率である。男性は91.3%、女性は95.4%と異常に高い数字を示している。そこから、35歳を超えて恋人のいない男女の結婚が非常に厳しい状況が見て取れる。それだけ婚活というのは難しい現実がある。統計的に見ていろいろな見方ができる数字ではあるが、ここでは結婚が難しい時代になったということだけ理解して欲しい。

多くの人は出会いさえあれば結婚できると考える。だから結婚相談所などのサービスを利用して、初めて現実を知りショックを受ける。出会いが無限のように存在しても、それは結婚とは直接結びつかないということをそこで知るのだ。それを証明するような数字も存在する。山田ら(2008)によると、結婚紹介サービス会員の一年以内の成婚率は7%から16%にすぎないという。また、交際相手のいない人が一年以内に結婚する確率は2~5%とされているという数字もあり、結婚情報サービスを利用することにより可能性が約二倍になっていることが見て取れる。つまり、サービスが悪いのではなく、出会うだけでは結婚はできない人の数が現代はあまりにも多いのだ。

2、希望条件を紐解く

ここで冒頭に紹介した女性の希望から、多くの女性が何を求めているか考えてみたい。多くの女性が尊敬という言葉と同時に学歴を口にする。「尊敬できる人がいい。だからせめて大学ぐらいでいて欲しい」と。彼女たちは実に現実を良く分かっている。高学歴を求めても競争が激しいからせめて大学卒をというわけだ。しかし、現実にはさらに厳しい。学校基本調査(2012)によると現在の大学進学率は男性で56%。つまり半分は大卒以外の人間がいるのだ。また、年収に関しては、婚活に関するあらゆる本で取り扱っている数字だが、山田(2002)の調査では、23歳から35歳で年収が600万円以上の男性は3.5%しかいないことが明らかにされている。ちなみに学校保健健康調査・運動能力調査(2011)によると、30歳から34歳の男性の平均は172センチである。ちなみに、30歳から34歳の平均に関しては他のどの世代よりこの年代が一番平均身長が高い。つまり、どの

年代を対象にしようと、これもまた170センチ以上と言った時点で多くの男性がそのふりから落とされる計算になる。条件だけでほとんどの男性が残っていない中で、さらに性格、ルックスを求める。それがいかに難しい作業か分かって頂けたらだろうか。

さて、個々からは中身の部分に言及していきたい。小倉(2003)は、女子大生からのヒアリングから彼女たちの希望する「尊敬できる人」「夢を持った人」「やさしい人」の意味を翻訳している。尊敬できる人は、「高学歴」。夢を持った人は「勝ち組の男」。つまりは高収入または高収入の可能性のある人。そして「やさしい人」は、借金を頼まれて同情するやさしさではなく、家族のことを考えて断り、ゴミの日を覚えていて、黙ってゴミを出す優しさ、家族優先の思いや家事参加である。小倉の主張は既に10年近く前であるが、現代においてもとても的を射ている気がする。しかし、女子大生と現実的な婚活をしている女性の違いなのか、その主張にはやや不足しているように感じる。たとえば、彼女たちの求める尊敬は、暗に高学歴を意図していると主張しているが、それだけではない。婚活の現場では、高学歴、さらに高収入の相手を「尊敬できない」という理由で交際を断る場面をよく目にするからだ。

では、彼女たちが「尊敬」という言葉にこめた本当の希望はなんなのか。彼女たちに尊敬の意味を問うと、「常識を知っていて教えてほしい」、「自分より出来る部分があり引っ張ってほしい」と、その先にはリーダーシップ、そして自分より上であって欲しいとする願望が見え隠れする。ある女性に尊敬についてさらに突っ込んで聞いたところ以下のように答えた。「なんでもいいのです。一つ、仕事への情熱でもいいので持っていて欲しいのです。それがあただけですごく好きになれるのです。」ちなみに彼女は次のお見合いで鉄道オタクが嫌という理由でお見合いを断っていた。電車に対して誰よりも詳しく、そして教えてくれる彼は尊敬に値しなかったようだ。つまり、尊敬できる箇所は趣味ではだめのだ。

男女関係の中での尊敬ということを見えていくと、彼女たちから一つの共通点を見ることが出来る。「仕事への情熱」というキーワードだ。つまり、仕事を好きで頑張っている人が尊敬できる人となるのだ。考えてみたら当たり前なのかもしれない。これだけ世の中うつ病で休職したり、仕事を辞めてフリーターになる人で溢れている現在、もし夫がそうなってしまったらと思うのはごくごく普通の感性と言える。そういう意味でも尊敬という言葉は、今の高学歴、高年収だけでなく、将来的な安定的収入を可能な人を選定するということを暗に正当化する言葉とも言えるのかもしれない。

ここまで読んで、彼女たちは我が侘のように見えてくるが決してそうは言えない状況もある。なぜなら、彼女たちにとっては、それは当たり前、むしろ現実を知って妥協しているのだ。想像してほしい。多くの女性は学生時代に恋をする。その恋は目に映る沢山の男性の中からおそらく一番良いと思える人との恋だ。大卒の女性に関しては、まわりの多くは大卒だ。そして頑張って入った会社には、高学歴の上司や同僚がいる。たとえ、高卒で派遣であろうと、大企業に派遣されれば周りの男性は高学歴、高収入となる。そして彼らはやさしくしてくれる。綺麗だと褒めてくれる。その環境の中で生活していたら、男性への要求はどんどんあがっていく。さらに不倫などをしていたら問題は深刻だ。不倫をする男性の多くは俗にいう『いい男』の可能性が高い。それは経済的かもしれないし、精神的なところかもしれない。なぜなら、既婚者であるというマイナスを補うほど魅力があるわ

けだからだ。そしてさらにたちが悪いのは、彼らは結婚しているからこそその余裕がある。そこで、不倫相手と、結婚していない男性では比べるとどうしても不倫相手の方が良く見える場合が多い。多少誇張した説明になったが、女性達から婚活での相談を聞いていると、少なからず多くの女性達に当てはまるように感じる。

また、結婚と恋愛というステージの違いに女性は気づきにくい。美人であればちやほやされる。それは年齢に限らずだ。恋愛なら年齢は関係ない。でも結婚は違うと多くの男性が思っている。だからこそ、モテるが結婚はできないアラフォーが産まれる。そうやって産まれた彼女たちの願望を誰が責めることができるだろうか。

3、最後に

ここまで婚活の現状、女性側の婚活を見て来た。それを踏まえて次回男性の婚活、男性への援助を考えていきたいと思う。

引用文献

小倉知加子(2003)「結婚の条件」 朝日新聞社

厚生省(2010)「第14回出生動向調査」 国立社会保障・人口問題研究所
(<http://www.ipss.go.jp/>)(2012年8月現在)

総務省(2010)「平成22年国勢調査」 総務省統計局、政策統括官(統計基準担当)、統計研修所 Homepege(<http://www.stat.go.jp/index.htm>)(2012年8月現在)

山田昌弘・白河桃子(2008)「婚活時代」 デイスクヴァー・トゥエンティワン



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(6)

～ 混乱からの脱出～

中村周平

今回は、病院を退院してからの在宅生活について触れていきたいと思います。北の大地で教えていただいたトレーニングを自宅でも続けていく中で、自身の体に起きる「変化」に気付いていきます。また、両親と事故のことについて話し合う中で知ることとなった事故の認識の違いが、それまで無意識のうちに避けていた自身の事故と向き合うことに。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親

へのインタビュー」で交わされた会話の内容を手がかりに、当時の私と両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=Hとする。

3 在宅に移っての生活

1) 体の変化、生活の変化

退院して3日後には飛行機で北海道へ渡り、事故直後から連絡を取っていた男性と初めて会うことができました。そして、トレーニングは会った次の瞬間から始まりました。精神を集中して体の動きをイメージする訓練、椅子に体を固定しての座位の訓練、床上での寝返り、壁に固定されたバーを使っての上肢の訓練。これまで体験したことのない独自のトレーニングを重ねていきました。そして、極めつけは冷蔵庫を背にしての立位の訓練でした。

I:「医者のおうとおりにせんでも、なんとかして回復していきいたいという気持ちがある。ところが、そうは上手いこと事は運べへん、やってもやってもうまくいかん、そういう感覚というのになっていくわけ？」

S:「そうですね、ちょっとずつ、完全に目に見えて取れる動きはなかったんですけど。北海道見に行つてトレーニングしたことで、血圧全く下がらなくなって、今では立っても血圧下がることは殆ど無いので」

I:「どういうトレーニングしたの？」

S:「体ぐにゃぐにゃなんですけど、病院に半年間もいて座るのも大変だった人間を突然二人がかりで抱えて冷蔵庫を背に立たせはるんですよ。膝だけ押えて倒れてこんように肩押えて。血圧おちそうになったら、暗くなるんですけど、血圧下がったら膝をポーンと抜いて、下にズルズルと降りて戻ったらすぐ立たす。結構スパルタですよな」

それまで、座っているだけでも血圧が下がって気を失っていた体は、その訓練の最中に何度となく気を失いました。それでも繰り返し立位を続けていく中で、少しずつ血圧が下がって気を失うまでの時間が長くなっていき、それに比例して立つ時間も長くなっていきました。5時間に及ぶそのような訓練を8日間「家に帰っても同じように訓練ができるように」と、指導を受け、京都の家に帰ってきました。そして、そこからトレーニング漬けの毎日が始まったのです。

I:「それは中村くんのためのメニュー？」

S:「だけじゃないですよ。女性の方を8年間リハビリしてはったんですけど、寝たきりから松葉杖で歩く

とこまでをやってこられて。その8年間の中でいろんなトレーニングをしてこられて、その中で使えるメニューを教えてもらった。椅子に体をくくりつけて、前後に体を振ってもらいながら、腹筋背筋に刺激を与えるトレーニングだとか、病院では絶対にやらないトレーニングを考えはって、これやったら他の人にもいけるんやないかって。最初は情報発信のつもりで、ネットに情報を流しはじめはったんですけど、全国から会いたって言う情報がいっぱいきて、全国から来られる頸椎のリハビリを一人8日間のリハビリを受け持って」

I:「今でもやってるの？」

S:「ずっとやってはります。(中略)開かなかった脇がちょっとずつ開くようになつたり。最初思っていた、立って歩きたいという気持ちからはちょっとずつ小さくはなってるんですけど、ちょっとずつ反応が出だしたのも確かだったんで、なにかその回復がちょっとでも長く続いたらいいなと思って」

朝から晩まで、1日の大半をトレーニングだけに明け暮れていました。「事故に遭うまで頑張っていた部活動の代わりに、今はトレーニングに励む」そのような気持ちを持って取り組んでいました。体に筋肉の反応が出だしたり、血圧が安定しだしたり、本当に微々たる変化ではありましたが、回復している自分を確かに感じていました。

しかし、病院を出るということは家族だけで全ての介護を引き受ける必要がありました。ご飯を食べる、風呂に入るなど生きていく上で当たり前のことをするための介護だけで、一日が終わってしまいました。家族が限界を訴えるまで1ヵ月とかがからなかったと思います。その時、私や家族の支えとなってくださったのがヘルパーの方々でした。2003年度から始まった障害者福祉制度である「支援費制度」を利用して、退院した翌月から、ヘルパーの方が訪問介護に来てくださるようになりました。家族ではない人が常に家にいるということに抵抗がなかったといえばウソになると思います。しかし、私や家族を支えようとしてくださるヘルパーの方々の気持ちが少しずつその抵抗を無くしていってくれました。当初、お風呂だけの介助だったものが、日中に入って

いただく時間が徐々に増えていきました。

2) 不安が「不信感」に変わるとき

事故から時間が経過していく中で、事故について、家族とも監督やコーチとも話をする機会はありませんでした。特に家族とは、事故のことは話をする気持ちになれませんでした。ある日の夕食後、いつもはするはずもない事故の話、その日は何でもないきっかけから両親と話すことになりました。そのことを契機に、自分の事故と向き合うことになっていきます。事故が起きてから病院に運ばれるまでの両親の行動や学校からの連絡、集中治療室に入っていた時の様子など、私の中で記憶があいまいな部分や知らないことをたくさん話し合いました。「そんなことがあったんや、全然知らなかった」と思う一方で、一つ引っ掛かる話がありました。それは両親の口から事故が起きた当時のことを聞いたときです。

S:「やっぱり気持ちが離れてきたのかなって寂しさみたいなものはありましたね」

I:「それはどっか不信感に変わっていくわけ？」

S:「変わっていきますね」

(中略)

I:「その入院ときはまだ不信感まではいかへんけど、あれ？これってどうなん？そんな感じぐらいで退院するわけやんな？」

S:「退院したのが5月で、その後ずっと在宅に戻って家族とヘルパーの方とリハビリを続けていましたね。で、家に帰ってからなかなか会うってことはなかったんですけど、それでもたまに家の方に顔出してくれはったりとか、病院のリハビリの時間見つけてきてくれはったりとか、それで連絡は取れてたんですけど」

I:「監督とね」

S:「はい。なんか家族とも退院してから、事故のことは半分タブーではないですけど、暗黙の了解とは言わないですけど、そういう方向には話がいかなくて」

I:「事故のことについて具体的にどういうことがタブーやったん？」

S:「事故のことに触れるというか、当日の話のことすら家族の中ではしなかったですね。というも

家に帰ってから忙しかった。今でこそ、ヘルパーの方が生活の中心に入ってくださってるんですけど、その時はまだ限定的で...例えばこの時間2時間だけ来て下さいとか、風呂のこの時間だけお願いしますとか。家族の中でも抵抗みたいなものがあったので」

I:「それはそうやな、家の中に他人が入ってきはるわけやから」

S:「そういったのに慣れていくのも、家族の中で時間がかかってしまって。いっぱいいっぱいでしたね。ただ、そんなに話さへんかったのに、ある日突然話さ」

I:「それいつごろの話？」

S:「たぶん9月頃」

I:「9月、そやから退院してから4ヶ月くらい経ってるわけやな？」

S:「はい。秋頃だと思うんですけど、家族とそういう話をするようになって、ぼろっと僕の首の上に乗った子の名前がでたんですね」

I:「それは知ってたわけやろ？」

S:「僕は知ってたんですけど、その時にオカンから聞いた名前が僕の知ってる名前じゃなかったんですね」

I:「監督が言ってた名前ではなかった」

S:「『それ違うで』って話になって、そこから家族のなかで、僕は監督からこう言われたんやけどってことを言ったときに、両親は事故の当日、監督じゃなくてコーチにこうこうこういう経緯でなってしまったんです、みたいなことを聞いたらくて」

事故が起きた経緯は私が記憶しているものと変わりませんでした。首の上に乗ってしまった人の名前が、私が監督から聞かされた名前とは異なる人物でした。両親はその人の名前をコーチから説明されたいと言います。また、それ以外にも事故当日の自身のプレーについて全く知らない話も耳にしました。では、私が病室で監督から聞いたことや、信じてきたものは何だったのか。初めて今回起きた事故に対して不安を感じた瞬間でした。

私と両親との間に起きたこの違いを確認するため、リハビリを見に来ていた監督に真相を確かめました。私の事故がどのような経緯で起きたのかを。監督の

口から出てきた言葉は誰も予想していないものでした。

S:「それおかしいぞって話になって、これはそのまま置いといたらあかかなくて、一回聞いてみなアカンなってことで、監督にリハビリに来てくれはったときに聞いたんですね。監督からはこう聞いたんですけど、両親とは話が違って、実際僕の事故ってどうやったんですかってことを聞いたときに、そこで名前の経緯ではなくて、僕が危険なプレーをしたからって言う話が出てきて。それは僕が怪我する数年前までは認められたプレーで、どこのチームも使ってたんですけど、高校日本代表の合宿で代表候補の子がそれで頸椎をやってしまって、危険なプレーってことで禁止になったんですね。それに準じたプレーをした時点でペナルティが取られてしまう...僕はそれ知ってて、そんなことはしないという自信があったので、それは違いますよってところから、なんか『その事故後どういうヒアリングをされたんですか』って聞いたら、当日そのへんにいた部員数人に経緯を聞いたりとか、僕に許したってくれよって言った子がなんで分かったかというのも、その子がもしかしたら僕が乗ったかもしれんということの名乗り出ただけみたいで。かもしれないってだけで、それに対する調査、周りにどうやったんやっていうことも聞いてなくて、最終的に向こうから『よう分からんのですわ』って返事が返ってきたんですね。この時に家族の中で始めて不信感が。こんだけ大きな事故が起きたのに、誰が乗ったかは人によって話が違ふし、事故当日の様子もちゃんと周りに話を聞かず、現在に至るまでに全く進展がない」

(中略)

I:「そっか。そしたら、不信感というものは、これだけ大きな事故があるにもかかわらず状況とかをちゃんと調査してないやないかっていう感じやね。そういう不信感？」

S:「そうですね。その話を聞いたのが、9月頃だったんで、約10ヶ月の間、なんとなくこんな感じかかっていうのを放置し続けてきて、さらに僕が危険なプレーをしたかもしれないって...」

I:「君のせいになったかのような」

S:「よくある話じゃないですか、こういう事故とかあって結局本人のせいになってしまって。そんな先入観みたいのもあって、なんで僕なんですかっていう...聞いてみたら、ちゃんと調べてもいないのに、そういう意見もあったというのも、うかつにしゃべってしまう、この事故をどう捉えているんですかっていう所に不信感というか。それまで決して絶対的な信頼を置いていたわけではないんですけど、指導者と部員としての最低限の関係はあったので、そこが切れてしまったというのか、その時初めて...」

不安は、強い「不信感」となって私と家族の心に残りました。

また、事故直後に「日本ラグビーフットボール協会に対する事故報告書」というものが作成されました。

S:「やっぱり父や母からそういう話(事故の経緯)っていうのは聞きにくいってところがあった？それとも、私たちが関与することじゃないって感じやった？(中略)事故がなんで起きたかとか、そのあとどんなことやってはるとか、知らぬ存ぜぬやったやん。試合があれば、応援に行くわというみたいやって、事故のことを掘り下げて話することもなく、高校にあの事故はどうやったんですかと聞くこともなかったのはなんでやったんかかって思って」

H:「一つは事故報告書に、個人が特定できる形で、報告書を出している。事故のその日に私が報告を受けているから、これはもう、いまさらどうこうじゃなくて、誰の目にも、明らかな事故の起き方やと思っていた。行った時に一番に説明されたのがその中身やった。周平がパスした子が押し返されて、首の上に乗って...だから、『そうなんです、ラグビーやらそんなことも起きるよね』って。その親御さんが謝りに行こうかという話になったんやけど、謝る、謝らないっていうよりも、練習で起きたことやから、謝る、謝らないとか関係のものじゃないからって。父はそんなこと言われてもそんな状況では判断できへんって、また後日見せてほしいという風で返した。それはもう動かない事実やと思ってた。いまさら話

題にする必要性もないくらい明白な事実で、事故のことはそれで完結しているもんやと思っていたから」

ざるを得ない現状がありました。

個人が特定できる形で書かれたこの報告書の存在は、当時の両親の心境において「不安」を抱かせない十分すぎるものでした。事故から半年以上も事故のことに触れなかったのは、事故を思い返したくないということよりも、私の事故については「事故報告書」の内容が動かない事実で、すでに完結しているものと考えていたからでした。

しかし、私との話し合いで判明した認識の違いによって「動かない事実」だと思っていた「事実」が、本当にそうであるのか確信が持てなくなりました。

S:「で退院して4ヶ月くらい、夏休み明けて復学するか、せえへんかぐらいの話が出始めた頃に、家族でたまたま事故について話した。なんのあれもなく」

H:「なんかで、ひょっと名前が出たときに私らの記憶にあった名前と、周平が監督から聞いたっていう名前が違うっていうことがわかって(中略)とりあえずね、まず『最初に周平に伝えたのは〇〇のであって間違いはない。ただ、それも今どうかわからなくなってるんですよ』みたいな話は電話でしたよね。でその流れの中で『生徒の中には、周平が危険なプレーをしたっていう者もいましてね』って。周平は『えっ、絶対そんなんしてへんし』って。だから(監督が言いたいのは)君の取った体勢が悪かったっていうことかって。その後、監督が病院のリハビリ室に来てくれはったときに...」

S:「憶えてる、たぶん起立台にいた時やわ」

H:「『危険なプレーをしてたって聞いて心外やっています。説明してやってください』って伝えて、監督が周平になんか話をしていってたわ。今の話が2003年の9月、で事実関係を確認するために洛西公団(トレーニングのために借りていた部屋)に集まってもうたら、そっから湯呑みを使っただけの事実関係確認になったのが2004年6月の話」

話を進めていく中で内容は二転三転していき、あの「事故報告書」でさえ本当に正しいものであったのか。両親にとって私の事故の対応に何か疑問を抱か

それでも「遍照金剛言う」 ことにします

第5回

脱精神科病院「アメリカの脱精神科病院」

三野 宏治

前回は 1930 年代までのアメリカの精神障害者 / 病者の置かれた状況を概観した。19 世紀の初頭までは、限られた人が私立病院でのモラルトリートメントを受けていた。その後、ディックスらの尽力で州立の精神科病院が設置され精神障害 / 病ケアの量的な拡大が図られた。しかし、精神病に対する精神医学的見立ての潮流や経済的な要因によって州立精神科病院でのケアの質は低下した。20 世紀初頭、州立精神科病院でのケアの質の低下を告発するクリフォード・ビーズ (Clifford beers 1876-1941) の『わが魂に逢うまで A Mind That Found Itself』(1908) が出版される。この『わが魂に逢うまで A Mind That Found Itself』の出版にも協力した精神科医の A.マイヤーとともに、ビーズは精神衛生運動を行う。ビーズらの運動は全国組織全国精神衛生委員会 (National Committee for Mental Hygiene 後の全国精神衛生連盟 National Association for Mental Health) に発展する。

同時期にニューヨークでアフターケア事業が開始される。このアフターケア事業の開始はソーシャル・ワーカーが精神病院に雇用されるきっかけとなった。精神科ソーシャル・ワーカー (PSW) の需要に関しては第一次世界大戦により生まれた大量「戦争神経症」に対して、1918 年にマサチューセッツ州のスミス・カレッジ (Smith College) で戦時緊急コースとしてアメリカ最初となる高等教育機関での PSW 養成がはじまったとの記述がある。小花和 (2005) は精神病の予防や精神的健康の増進を目指す精神衛生運動が看護やリハビリテーションの質の向上に寄与したと次のように述べている。「二度の世界大戦では従軍兵士の精神障害の発見や治療に貢献し、精神障害を負って帰還した兵士の社会適応の問題から精神科医療におけるリハビリテーションが促進された。精神病院の改革も徐々にではあるが実を結び、看護者の訓練や地位の向上が進められた。」

20 世紀初頭に試みが始まったアフターケア事業と PSW の活動は精神衛生運動の影響を受けながら発展した。先に述べたように PSW は戦争帰還兵へのケアにおいて求められ、精神衛生運動も従軍兵士の精神障害の発見や治療、精神障害を負って帰還した兵士の社会適

応の問題から精神科医療におけるリハビリテーションが促進において貢献した。戦争で精神障害者／患者となった兵士へのケアの経験は精神科医の精神病／障害への考え方を換え、1946年の精神健康法（National Mental Health Act）制定へのきっかけとなった。この精神健康法（National Mental Health Act）制定以後、「ケネディ教書」へ至る様々な動きがみられる。

精神健康法（National Mental Health Act） 制定とその後

「戦争神経症」は第1次世界大戦に報告された「シェルショック（弾神経症）ⁱ」を起点に原因やケアの方法が研究されている。野田（2001）が述べる「戦争神経症」の記述を引くと「塹壕の中で、危険であることは当然わかっている、目が見えなくなったり、足が動かなくなったり、声が出なくなる多くの兵士達が出たわけです。……器質的な見解をもってシェルショックという言い方をされました。シェルすなわち砲弾の爆発音で、脳が震盪を起こしたためにおかしくなったという器質的解釈です。」とある。

第2次大戦中には「戦争神経症」や戦争神経症となった兵士に対する研究が行われている。保坂廣志は第二次大戦における米軍の「戦争神経症」研究についての事例を挙げており、「軍医等の心理的ケアなどによって「戦争神経症」発症を抑えられることや集中的な治療・休息によって大多数は五日以内に任務に戻ることができた」という研究成果について言及しているⁱⁱ。「戦争神経症」に対する軍医の仕事はこれらの精神障害／病を治療することであったが、軍隊においては戦力を低下させる「戦争神経症」治療は関心事の一つであったのだろう。それは「戦争神経症」の研究が戦時中に行われたことからわかる。

軍部にとって「戦争神経症」治療が関心事の一つであったことを示すものに1930年創立の退役軍人庁の取り組みがある。前身の連邦退役軍人局はすでに退役軍人病院を設立していたが、この退役軍人病院では「戦争神経症（shell shock）」に対して治療を行っていた。しかし、この退役軍人病院は都市部から離れた場所に設立されていたことその維持費も大きいことから、第二次大戦前にはあまり機能していなかった。

しかし、第二次大戦のために戦力確保の一環として国民の精神的健康についての統計調査を行ったところ、480万人の男子に対して約110万人が精神・神経的な障害があるという理由で兵役を免除されており、医学的理由で除隊となったものの40%にあたる40万人近くが精神医学的な障害を持っているという結果を得る。加えて前述した、第二次世界大戦における「戦争神経症」兵士の大量出現によって退役軍人の精神疾患治療のための病院を多数必要としていた。これら精神障害／病による兵役免除者が大量に生まれたことと「戦争神経症」兵士に対する早期の集中的な治療（野戦病院等における）が効果的であるという二つの経験は連邦としての精神衛生政策を打ち出す一つのきっかけとなった。

戦争と「戦争神経症」研究と精神衛生運動の隆盛は1946年の精神健康法（National Mental Health Act）制定を後押しした。精神

健康法 (National Mental Health Act) をもとにして国立精神衛生研究所 (NIMH; National Institute of Mental Health) が設立される。

精神健康法 (National Mental Health Act) によって金銭的裏付けが担保された退役軍人庁は、全国規模の退役軍人サービスプログラム創設を後押しした。創設されたプログラムには精神病院や地域クリニックを分散させて設立することが含まれており、設立された精神病院や地域クリニックは大学病院の助言や協力の下、高い水準の入院看護や通院サービスを実践した。加えて退役軍人庁は精神病院や地域クリニックを精神医学、臨床心理学、精神科ソーシャル・ワークの訓練のために提供した。ウォルター・トラットナー (Walter I. Trattner) は著作の中で、全国精神衛生法の制定について以下のように述べている。

第二次世界大戦が終結したとき、精神衛生の領域にはなお将来の発展を期待するいくつかの重要なニーズが存在していた。新しい処遇の方法、精神異常に関するより豊富な知識、そしてそれを予防するより一層の努力が必要とされるのと同様に、より多くの、そしてよりよい訓練をつんだ精神科医と病院がいかにしても必要であった。連邦議会は、退陣軍人庁を改組し、合わせて1946年7月3日にハリー・S・トルーマン大統領の署名によって成立した、全国精神衛生法を通過させることによって、これらのニーズを満たす方向へ大きく踏み出したのであった。

これらの発展はいずれも、従前の戦争がそうしたのと同様に、死や破壊とともにいくつかの重大な進歩をもたらした第二次世界大戦の産物であった (Trattner[1974=1978:173-4])

兵士の精神的健康の維持や治療をいかに行うかという命題は精神健康法 (National Mental Health Act) を成立させ、精神衛生運動を活発化させた。同時に精神病院や地域クリニック、精神科ソーシャルワーカーの増大に寄与したといっていよう。

1955年、精神衛生研究条例 (Mental Health Study Act) が議会を通過し、同条例に基づき、「精神疾患の人的、経済的問題と精神病患者に対する診断、治療、看護、リハビリテーションに利用される、資金、方法、技術の国家的分析と再評価」という目的をもった「精神疾患と精神衛生に関する合同委員会」が設立される。そして1950-60年初頭には精神健康法や国立精神衛生研究所によって精神科医、心理士、PSW、精神科看護の専門家がさらに増大した。1950-60年代には収容施設化した州立精神病院に社会学者らの注目が集まりその現状が記述され出版されるⁱⁱⁱ。

これらの社会的な情勢の中、1958年にアメリカ精神医学会総会で会長であるソロモン (Solomon, H.) が「州立精神病院はできるだけ速やかに解体整理すべきである」との発言をしている。寺島 (1985) 記したソロモンの発言を以下に引く。

巨大な精神病院は老朽化しているし、もはや時代遅れであり、急速に使用に耐えなくなりつつある。それらの精神病院をわれわれは今日なお建設することはできるが、そこに職員を配することはできない。したがってそれらの病院を真の病院にすることができないのである。一一四年の努力をしてきて今年一九五八年という時点に到達して州立病院のうちわれわれが定めた最

低基準に照らして十分な数のスタッフを置いている病院は例外的にしかない。……今日、精神病院をいかに合理的に客観的とらえ方をしてみても、それらはもはや修理不能な程度にまで破産していると結論せざるをえない。したがってわが国の巨大精神病院はできるだけ速やかに秩序的に解体整理すべきであると私は確信する。
(寺島 1985) ^{iv}

寺島は当時の州立精神科病院について「状況を変えようにも力を発揮するプレッシャー・グループも、改善の味方になってくれるような積極的な議員もいず、戦闘的リーダーもいない」というソロモンの記述を紹介し、州立精神科病院の状況を変えたいと考える者はいたが決定的な行動に移れず停滞していたと述べている。その後「精神病および精神衛生に関する合同委員会」^vによる調査が行われ 1961 年に最終報告「精神衛生行動計画」(Action for Mental Health) がまとめられた。この合同委員会の最終報告書はケネディ教書に大きな影響を与えている。合同委員会の最終報告内容に関しての記述があるので紹介する。

合同委員会の 1961 年のレポートでは、病院の規模を減少し、その財源を増大させ、地域へサービスを拡大させることにより、精神病院を改革することを述べている。それは当時主として、ハドソン・バレー(Hudson Valley)州立病院の院長をしていたロバート・C・ハントの意見によるもので、彼は「精神疾患による無能力さは[病院のケアにより]かなり強められる[それは]防ぐことができるし、治療も可能である。……治療の役割のある部分および病院のほとんどの監視的機能は地域に戻されるべきである」と述べて

いる。したがって“収容所の衰弱させるような作用から[入院させられている]患者を救うために”委員会は患者を“できるだけはやく家庭や地域の生活に”戻すことをすすめた。そこで患者は“デイホスピタル、ナイトホスピタル、アフターケアクリニック、一般健康ケアサービス、里親ケア、回復期ナーシングホーム、リハビリテーションセンターおよび退院患者集団といった施設が健全な考えに基づいて設立されたものであり、スタッフも揃っており、精神病患者へのサービスの統合されたシステムの一部として運営されている限り”、これらの援助で支えられるべきである。

(The Chronic Mental Patient in the Community the Group for the Advancement of Psychiatry 1978)

この記述は『アメリカの精神医療』という書籍からである。この書は The Group for the Advancement of Psychiatry(GAP)^{vi} という学術団体の精神医療に関する報告書であり、原著は 1978 年に GAP の機関誌に掲載された“The Chronic Patient in the Community”という論文である。

州立の精神科病院が慢性的に治療的雰囲気を見失ったことは述べたとおりであるが、その要因には経済的なものも含まれる。医師や看護師といった専門職を雇用するには経済的負担があるので専門職者ではない看護助手を少人数雇うことで精神科病院のケアとした。そして調査によって「州立精神科病院は修復ができない。解体し新たなケアの体制を構築すべき」という意見と調査結果を得たのだが、“The Chronic Patient in the Community”では地域ケアも金がかかると「精神病および精神衛生に関する合

同委員会」は結論づけていたとある。当該部分を以下に紹介する。

委員会は、立法化する際に経済的な面を強調しているが、効果的な地域プログラムには金のかかることを認めている。その最後の勧告は“一般の精神科患者に対するサービスのための費用は5年後には2倍にあるであろう　そして10年後には3倍に……[なぜなら]このような多額の費用によってのみ、外来患者や退院者のプログラムは精神病院から地域へと十分に拡げられるものであるから”ということであった。政府はこのレポートの多くの発見を受け入れたが、基金を増加させることが必要であるという決定的な勧告には留意することがなかった

専門家が専門的な場でケアを行うことで経済的な負担が増す。想像に難くないことである。そしてケネディは教書の中で地域ケアへ金をかけることを議会に要望している。しかし、政府は予算の増加について特段の配慮を行わなかったという。それはいったいどういうことか。

ケネディ教書は1963年のものだが、「脱精神科病院政策」が本格したのは1970年代に入ってからである。そして病院を「退院した」人の多くがホームレスとなったことはよく知られている。ケネディ教書が脱精神科病院の起点であるとするならケネディ教書から急激な「脱精神科病院政策」までの期間で何が行われていたのか。また、1970年ころより脱精神科病院化が急激に進んだのはなぜだろうか。次章ではケネディ教書成立までと1960年代の脱精神科病院化の特徴について述べる。

ケネディ教書

「精神病および精神衛生に関する合同委員」が作成した1961年の最終報告「精神衛生行動計画」(Action for Mental Health)をもとにケネディ大統領は「精神病及び精神薄弱に関する大統領教書」(Special Message to the Congress on Mental Illness and Mental Retardation いわゆる「ケネディ教書」)を発表する。教書のなかでケネディは州立精神科病院で行われているような監置的医療(隔離)から地域ケアに政策を転換することを謳った。そして地域ケアを行うに当たりその予算を議会に要求した。

「ケネディ教書」が1961年の最終報告「精神衛生行動計画」(Action for Mental Health)をもとに作成されたことは述べた。ではケネディが地域ケアを謳った理由は州立精神科病院での非人道的処遇に対する憤りだけなのだろうか。入院処遇から地域ケアへの方向転換には地域ケアが実施可能である要素が存在したのではないか。もちろんケネディ大統領にとって州立精神科病院でのケアは看過できないものであったことは想像できる。中井久夫は「アメリカにとって1960年代は力動精神医学が中心でしたが、ケネディ大統領は、精神病院の病床を五十万床から十五万床に減らすことを一気に三年で行います。……ケネディ政権以来、力動精神医学はうさん臭いと言われだします。ケネディのお姉さんが精神病でさっぱり治らなかったところが、クロルプロマジンを飲むとずいぶんよくなったのです。……1952年にフランスで初めて使われ、日本でも1955年 - 1960年までの間に普及し

た向精神薬第一号です。大統領やその親戚の病気が非常に医学を左右するということがアメリカではよくあります。」と記述している。中井の記述には姉とあるが J.W トレント.Jr (1995)には妹とある。トレントの記述にはケネディ大統領が州立精神病院での処遇に関して看過できなかった事情が記載されている。当該部分を以下に引く。

ローズマリー・ケネディ (Rosemary Kennedy) は、1919年のインフルエンザが猛威をふるっている最中に生まれた。成長とともに、彼女には遅れ 1920年代の人が「遅滞」(backward)と呼んだような が見られるようになった。……

ローズマリーは、同年齢の子供に比べ時間はかかったが、読み書きができるようになり、家族の中でも上手にふるまえるようにもなった。そして、ケネディ家の一員として成長していった。……

愛らしく穏和だったはずのローズマリーがやがて引きこもりがちになり、攻撃的になりだしたのである。そして1941年の夏、彼女は、母方の祖父である年老いた“ハニー・フィッツ”、すなわち、ジョン・フィッツジェラルド (John Fitzgerald) に危害を加えたのである。

この事件がきっかけとなり、父親であるジョセフ・ケネディは、医師たちの助言に従って、「前頭葉白質切截」(prefrontal lobotomy) すなわちロボトミー法という、当時、まだ有効性が期待されていた新しい治療法を試してみることにする。……

ほどなく判明したことは、以前は軽い遅滞だったローズマリーが、より重度の遅滞者になってしまったということである。……

ケネディ家は、それまで一度も施設に入れた

ことのなかった自分たちの娘を、首都ワシントンの私立精神薄弱者施設に入れることにした。ローズマリーは、現在もそこで暮らしている^{vii}。……

ケネディー家は、ローズマリーが精神遅滞という理由からだけでなく、開頭手術を受けたこともあって、身の上話をすることをしばらく躊躇していた。1962年9月になって、ようやく彼らは、家族の秘密を明るみに出す決心をした。(J.W トレント.Jr 1995)

ケネディが大統領となり教書で「脱精神病院」を謳うまでもにも医師などから州立精神病院に対する批判はあった。また、州立精神病院に対する調査や社会学者たちの研究によって非人道的な処遇も指摘された。ケネディ大統領の兄妹が精神障害者であったということだけで「ケネディ教書」が生まれたわけではないだろう。しかし、州立精神病院における非人道的な処遇についてはある感情をもって理解したのではないだろうか。1961年、ケネディ大統領は就任後すぐ、精神発達遅滞者のための「大統領パネル」を設置し重要ポストを姉のユニスに与えている。ケネディは政治的な問題として精神発達遅滞者/知的障害者・精神病/障害者への処遇を意識したことがうかがえる。それは家族に当事者がいたからという見解には無理があるとは言えないだろう。もちろんそれは問題意識であり政策の起点でしかない。ケネディの問題意識と同様にまた違った視点で医師や社会学者も州立精神病院に向けられたがケネディが大統領であったという点は重要であろう。つまり、州立精神病院での処遇については20世紀初頭のクリフォード・ピアーズの

著書『わが魂に逢うまで A Mind That Found Itself』でも述べられていた。問題意識を持つものは少なからずいた。しかし変革は起こせなかった。先にも述べたがソロモンの記述では「状況を変えようにも力を発揮するプレッシャー・グループも、改善の味方になってくれるような積極的な議員もいず、戦闘的リーダーもいない」とある。その状況がケネディ大統領という存在と教書という議会へのメッセージで変化が起こる。

では、ケネディが教書で述べたような地域ケアへの方向に向かわせたその他の要因は何か。一つには入院だけではない治療法への期待があったと考えられる。教書の中でケネディは「患者を社会から隔離し、長期ときには半永久的に、巨大で憂うつな精神病院に押しこめ、われわれの視野から抹殺し、忘れ去っていくといった従来の治療法は、今や古めかしいもの」と述べた。それは投薬治療の確立という技術的進歩によるところが大きい。前掲した中井の記述にもあるように統合失調症治療に有効であるとされる 1952 年にクロルプロマジンがフランスで 1957 年にベルギーでハロペリドールが開発された。同年、スイスではうつ病の薬物療法としてイミプラミンが用いられた。「州立精神病院が治療的雰囲気を失ったこと要因に経済的理由での専門職種の雇用困難と、精神病 = 治療不可能という医師の判断があった」との指摘があったことは述べたが、ハロペリドールやイミプラミンという新薬が治療効果的であるということは精神病 治療不可能という解釈となり得る^{viii}。同時に「ここ数年、次第に増えていた施設へのつめこみ傾向が、逆を向いて

きたことである。それは、新薬の使用、精神病の本質に対する公衆の理解の増大、総合病院における精神病床、昼間通院施設(デイ・ケア・センター)、外来精神科施設などを含む地域社会施設が設置されるようになったことによる。地域社会の総合病院では、1961 年に 20 万人以上の精神科患者治療退院させている」とあるように精神科病院収容主義から脱しようとした実践例^{ix}があったことも要因であろう。

ケネディ教書で脱精神科病院と地域ケアの方法性が示された要因に関して考察したのだが、次章では脱精神科病院がなぜ起こったかについての先行研究を紹介する。紹介する先行研究はケネディ教書がどのような要因の元に世に出たのかという論点からは外れるが、脱精神科病院という現象を多角的に捉えたもので興味深い。

脱精神科病院に関する見解

杉野昭博は論文の中で脱精神科病院について二つの異なる見解を紹介している。もっとも一般的な見解として杉野はキャスリーン・ジョーンズのそれを挙げている。ジョーンズは脱精神科病院を「三つの革命」によって説明する。三つの革命とは、精神医薬の登場、病院における解放治療の実践、精神障害法制の改革である。このジョーンズの指摘は本稿で述べた歴史的な事実と合致している。ジョーンズはその後の逸脱理論やノーマライゼーション理論などの社会科学的知見と社会改良、財政危機に伴う 1970 年代の政治的な要因も地域ケア政策に影響を与えたとしている。

他方、ジョーンズの解釈に対しての批判もある。アンドリュー・スカルはジョーンズの提起した精神医薬の登場と病院におけ

る解放治療の実践については要因として適当でないという見方を示す。理由として治療薬の登場以前から退院促進は始まっていたということ。薬の導入と病床数の減少の間には直接的な相関がみられないこと。更にイタリアなどでは精神病薬導入よりかなりの時間が経過してから脱精神科病院が進んでおり、国際間での脱精神科病院化がジョンソンの示した要因では説明できないことなどを指摘し「精神医薬の導入は早期退院といった新しい治療方針を実現しやすくなったかもしれないが、それは脱施設化を引き起こした主要原因とは言えない」と結論付けた。さらに逸脱理論やノーマライゼーション理論などの社会科学的知見についても、「反収容主義」の主張は19世紀の精神科病院設立直後にも見られたと主張している。(杉野 1994)

ではスカルは脱精神科病院が進んだ要因を何としたのか。スカルは技術の進歩やイデオロギーの変化などでは脱精神科病院は説明がつかず、説明を行うには資本主義の下部構造の変化に注目するほかないと述べる。ではどのような変化があったというのか。スカルは精神科病院の社会における意味・役割の変化を説明することで説明できるといふ。杉野が記したスカルの脱精神科病院論を以下に紹介する。

かつて、精神障害者等の施設収容によるセグレーションは、極端な介護負担による家族全体崩壊を防止しその一般労働力としての有用性を維持するとともに、施設外での救済すなわち金銭福祉給付を禁止することにより自由労働市場原理を維持し、さらには逸脱に対する見せしめにより社会的同調を促進するといった、資本主

義の初期形態にとって不可欠な機能を果たしていた。一方、今日の福祉国家の政治経済構造下においては、基本的社会保障制度の普及により施設収容の必然性が減少するとともに、人権費などの施設収容コストが旧対的に上昇したため、施設外における逸脱統制が可能になるだけでなく相対的に低コストの方法となった。以上のような「財政要因」こそが「脱施設化」の主因であるというのがスカルの「脱施設化論」である。(杉野 1994)

杉野の論文を引くことで脱精神科病院が進んだ要因についての二つの説を紹介した。

ではケネディが教書で脱精神科病院・地域ケア推進という方向性を打ち出した要因としてはジョーンズとスカルの主張の部分を採用できるか。筆者はケネディ教書に至る要因としては概ねジョーンズの指摘が適当であろう。それは脱精神科病院が大きく分けて二つの時期に分けられるという主張があること。そしてケネディ教書は前期に属し、さらに前期はケネディ教書以前より始まっていること。

ジョーンズの主張は本稿で述べた1960年代半ばまでの歴史的事実に合致することによる。

“Opening the Backdoor”と”Closing the Frontdoors”

アメリカの脱精神科病院は歴史的に二つの時期に分かれる。前期は“Opening the Backdoor”と表現されるように早期退院が実施された時期であり、後期は”Closing the Frontdoors”と表現され州立精神科病院の病床数削減や病院閉鎖がおこった時期である。杉野は「前期と後期の区分は難しい」

としながらもモリセイの区分を採用している。モリセイの区分によると“Opening the Backdoor”と表現される脱精神科病院前期は 1950 年代から 1970 年頃までであり“Closing the Frontdoors”と表現される後期は 1970 年代以降としている。この区分に従うとケネディ教書が発せられた 1963 年は脱精神科病院前期の中盤である。

杉野はモリセイらがおこなった州立精神科病院における周期的改革分析^xから医師たちの職業的関心を二つ抽出しその職業的やしいが前期脱精神科病院化に影響を与えたとしている。では杉野が指摘した医師の職業的関心とはどういったものか。

杉野がいう医師の職業的関心とは州立精神科病院の医療水準の向上と公衆精神衛生の一般化という二点であり、この精神科医たちの職業的野心が脱精神科病院に影響を与えたい。杉野は前掲したカリフォルニア州での大規模仮退院制度と仮退院患者へのアフターケアや 1950 年代にマサチューセッツ州ウォチェスター州立精神科病院での早期退院と退院患者のための地域アフターケアという“Opening the Backdoor”という現象を次のように分析している。

1950-70 年の州立精神科病院は入院患者の過密化と治療水準の低下が著しい状況であった。医療水準を引き上げるためには入院患者の制限は重要課題であったわけだが、州立精神科病院は強制入院の受け入れ先としての機能を担わされており政治的な外圧がかかっていた。すなわち新規入院を制限することは病院の性質から難しく、入院患者の過密状態解消には“Opening the Backdoor”つまり退院の促進が唯一の方法であった。

さらに例示したような早期退院患者に対する地域アフターケア導入に際しては公衆精神衛生の一般化という精神科医たちの野心の影響を読み取れるという。杉野は 1920 年代に地域外来診療制度を導入したウォチェスター病院長のウィリアム・ブライアンという言葉を紹介している。

州立精神科病院の未来は地域公衆衛生の主導的役割を果たすものとして力に充ちたものであります。州立精神科病院は、多数の地域診療所をその傘下におさめ、あらゆる人間的ニーズに対するサービス活動を結びつける調整機関として働くことでしょう。こうして、州立精神科病院は社会から完全な信頼と尊敬を受け、もはや派閥政治に振り回されたり無理難題をふっかける政治家の横槍に苦勞することはないのです。(杉野 1994)

ウォチェスター病院ウィリアム・ブライアン院長の政治に振り回されたという記述は、州立精神科病院が新規入院患者の抑制を進める立場になかったことを示していると同時に次のような意味合いもあると杉野は指摘する。

アメリカにおいては、私立精神科病院が常に「裕福で急性の知的な任意入院患者」を対象としてきたのに対して、州立精神科病院はその設立以来一貫して「貧しく慢性の強制入院患者」という特殊な人口にサービスしてきた。入院患者の持つこうした社会的スティグマは病院および精神科医にも波及し、公立精神医療システム全体が一般医療システムから差別される傾向を生み出していた。こうした文脈の中で、公立精神医療システムの一般人口への拡大、すなわち「公衆精神衛生」の確立は、公立精神科病院医にとって、

一般医療職としての社会的地位と名声を獲得する有効な手段であったと考えられる。

(杉野 1994)

ディックスらの活動は裕福な者のみが享受できる私立病院でのケアを広く必要なものが得られるように州立精神科病院の設立を求めたものである。この州立精神科病院の成り立ちや紹介した 1958 年にアメリカ精神医学会総会で会長であるソロモン (Solomon, H.) の「州立精神病院はできるだけ速やかに解体整理すべきである」といった発言から考えると杉野の精神科医たちの職業的野心が脱精神科病院に影響を及ぼしたという指摘には首肯させられる。この職業的野心は「医師という職業に立った人道的な観点」とも表現できるだろう。「医師という職業に立った人道的な観点」は日本における入院中心を否とするものからの意見表明に際しても見られる。

1964 年にケネディ教書は邦訳と原文が日本精神衛生会の機関誌「精神衛生」92-93号(昭和39年10月31日発行)の11-16頁に紹介されている。また、同号の『精神衛生』では、当時東京大学教授であった秋元波留夫がケネディ教書の基礎となった調査 Action for Mental Health (1961) をあげて「米国の精神障害者に対する医療施設がもっぱら公共の責任においてなされているのに対し、日本のそれは私立病院が中心である」と述べている。脱精神科病院そのものに対する評価というよりも日本の病床が足りないといったことと公の責任で病床数の増加とそれを可能にする政策が必要であるという主張といった趣である。また、1970年代に入っても、秋元は米国精神病院

の医師不足を指摘(秋元[1970: 89-90])し、「病院ではなく収容所であるところも多いが、大学と連携をして充実した研究を行っているところは、臨床場面でも活発で病院としても立派」と述べている。対して福岡県精神衛生センター所長の寺島正吾は地域精神医療に転換した米国の政策を「戦略的一大転換」と評しており「地域に開いた精神病院であってこそ、はじめて入院治療が各種治療の一つであることが確認でき、責任ある治療の連続性が確保できる」と述べ、神奈川県精神衛生センターの石原幸夫は、米国の地域精神衛生・地域ケアの中心施設である CMHC を評価し、日本における地域精神衛生活動の在り方を示唆するものと結論付けると同時に入院中心である日本の現状を批判している。後に秋元は地域ケアの必要性を訴えるのだが 1964 年当時秋元は東京大学医学部教授であり 1966 年からは国立武蔵療養所(現在国立精神・神経センター)所長を務めている。対して寺島・石川が所長を務めた精神衛生センターは、1965 年の精神衛生法改正により設けられた機関であり、設置時期はアメリカの CMHC とほぼ同時期であるが、その役割と機能については大きく異なっていた。精神衛生センターの役割は、精神衛生の第一線の活動をおこなう保健所に対し技術援助を与え精神保健従事者の研修などを担当する性格のものであった。アメリカの脱精神科病院に対するわが国の専門家の評価ならびに当時の日本の状況については稿を改めて考察するが、精神衛生センター長である医師が杉野の指摘にあった職業的野心をもってアメリカの脱精神科病院の状況を評価したとも考えられるのではないかと^{xi}。

小括

本稿では 1940 年代からケネディ教書が発せられるまでを概観した。さまざまな要因をともなつてケネディ教書は発せられたことがうかがえる。その後ケネディは暗殺され政権はジョンソン大統領にうつる。本稿で述べたように脱精神科病院は 1970 年あたりまでは比較的緩やかに行われた。ま

た、ケネディが地域精神医療・ケアの中心的役割を担うはずであった CMHC の設立も行われた。

しかし 1970 年代以降、急激な脱精神科病院がおこり結果として多くの（元）入院患者たちがホームレス化した。今回はケネディ教書以降に脱精神科病院がどのように進んでいったのかを述べる。

文献

- Committee on Psychiatry the Community 1978 *The Chronic Mental Patient in the Community* the Group for the Advancement of Psychiatry=1980 仙波 恒雄・高橋 光彦 監訳 『アメリカの精神医療』 星和書店
- 保坂廣志 2006 「今次大戦下太平洋戦争における米軍の「戦争神経症」対策とその実際」『琉球大学法文学部紀要 人間科学』第 17 号 琉球大学
- 三野宏治 2010 「日本の精神医療保健関係者の脱病院観についての考察 米国地域精神医療保健改革とそれについての議論をもとに」『コア・エシックス』vol.6: 413-423
- 中井久夫 2004 『徴候・記憶・外傷』, みすず書房
- 野田正彰 2001 「危機における人間（大会基調講演）」『人間学紀要』上智大学
- 小花和昭介 2005 「心理的地域支援活動の積極的目標を模索する」『地域支援心理研究センター紀要』創刊号大手門学院大学地域支援心理研究センターpp39-49
- 杉野昭博 1994 「社会福祉と社会統制」『社会学評論』177 第 45 巻第 1 号 pp16-29
- 寺島正吾 1985 「精神科医療の最近の国際的動向」『人間性回復への道 精神医療と人権 III』亜紀書房 pp3-58
- Trattner, I, Walter 1974 *FROM POOR LAW TO STATE A History of Social Welfare in America* A Division of Macmillan Publishing =1978 古川 孝順 訳, 『アメリカ社会福祉の歴史』 川島書店
- Trent, James W., Jr. 1995 *Inventing the Feeble Minded A History of Mental Retardation in the United States*, University of California Press
= 19970705 清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀男監訳, 『「精神薄弱」の誕生と変貌 アメリカにおける精神遅滞の歴史』, 学苑社

注

¹筆者の管見である PTSD の治療史の文脈で語られる場合が少なくない。

²十分な量の睡眠剤が睡眠を保証するために投与された[.....] できるだけ兵士を安息にさ

せ、シャワーを浴びせたりリラックスさせた。患者たちは、24 時間から 36 時間治療を受け、その後休息所 (Clearing station) に搬送された

iii Alfred Stanton , M.S. Schwartz, Morris Schwartz 1954 *Mental Hospital*, Goffman, Irving 1961 *Asylums*, Thomas J. Scheff 1966 *Being Mentally Ill* Ennis, Bruce 1972 *Prisoners of Psychiatry* など
後年の映画では *One Flew Over the Cuckoo's Nest* (1975) が知られる。

iv 寺島正吾 1985 「精神科医療の最近の国際的動向」『人間性回復への道 精神医療と人権 III』pp3-58 原文は Soimom, H.: *American Psychiatric Association in relation to American Psychiatry*, *Am.J.Psychiatry*, 115, 1, 1958

v 「精神病および精神衛生に関する合同委員会」による調査は Mental Health Study Act (精神衛生実態調査法あるいは精神衛生研究条例) を根拠としている。精神衛生実態調査法の立法化は 1950 年代後半におこった州立精神科病院への批判や非難を受けてものと考えられる。法の目的は「精神障害の人的、経済的諸問題の客観的で完全な全国的分析と再評価」であった。(寺島 1985)

vi アメリカの精神科医 300 人がメンバーとなり、精神医学の研究ならびに精神衛生領域への応用等を活動目的とした学術団体。

vii 2005 年死去。

viii 精神科における治療では寛解という言葉が使われる。症状がほとんどなくなったものの、完全に治癒したわけではない状態をいう。治る / 治すについての問題点や諸現象は筆者の関心事であり、今後の重要な研究テーマでもある。

ix カリフォルニア州では 1939 年に州施設局長に就任したロザノフ医師によって大規模仮退院制度と仮退院患者へのアフターケアが行われた。また、1950 年代にマサチューセッツ州ウォチェスター州立精神病院では早期退院と退院患者のための地域アフターケアが実施されている。

x 19 世紀に創設されたマサチューセッツ州ウォチェスター州立精神病院の創立当初からの周期的改革分析である。

xi ケネディ教書や脱精神科病院に対するわが国の専門家の評価については稿を改めて検証をおこなう。

「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い ～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～



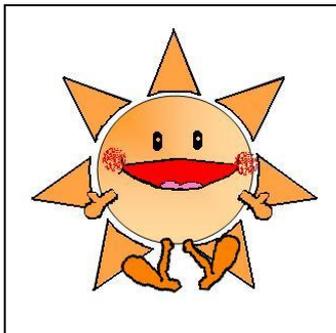
(5)

山本菜穂子

今回は、コア笑いプロデューサーがどうやってこの取組のリーダーになっていったか、について書きたいと思います。

そして同時に、一つ一つはたいしたことではないかもしれないけれど、そこそこにちりばめられた、この取組が継続するために力を貸してくれた工夫についても。

本題に入る前に。小さな小さな工夫の一つとして、例えば、イメージキャラクターの作成です。一般県民を巻き込む取組ですから、イメージ戦略も大事だ、などという慣れない



ことを考えまして。(基本的に、県職員は本当にきまじめな行政マンの集団ですから、こう

いう事は苦手だな～と思うのです。企画部門にいる人たちは毛色が違うなど思うことはありますが、私、福祉部ですから。)で、イラストの上手な知り合いの県職員に個人的に頼んで描いてもらって。こんなにかわいらしい、イメージぴったりの「ほほえみ太陽くん」(私はそう呼んでいま

すが実はオーソライズされていない。)ができました。これ、手や足や目や口のパーツを数種類つくってくれて、自由に組み合わせてみたらいいよ、と渡してくれたのです。喜んでいたり、照れていたり、座っていたり、お辞儀していたり、側転していたり、といろいろなバージョンをつくって、チラシやパンフレット、ホームページなどを飾らせてきました。

このイラストをみたら「ほほえみだ」とわかる人も増えてきて。この子が愛され、この取組への愛着もちよっとは強まったかなと感じています。このイラストで缶バッジをつくって持ってきてくれる仲間が出てきたり。今、協会をつくってから、この「ほほえみ太陽くん」は活躍中です。

コア笑いプロデューサー 働く！

さて、ほほえみ太陽くんの笑顔をプレゼントしたところで本題へ。人材養成には二つの方向性がありますよね。一つは、まず初級講習を受講させその中から優秀な人材を中級者として育て、そこからさらに上級者講習を経て指導者にするというや

り方。そしてその逆と。「青い森のほほえみプロデューサー」に関しては、その“逆スタイル”の養成でした。まず、一番中心となる指導的立場に立ってもらう人をつくってしまい、その人達に裾野を拡げてもらう。私は、今回はそのことの効果は絶大だったと感じています。たった2年間で2万人を養成しようという計画を実践するためには。たぶん私たちが中心の人材として必要としたのは、指導者として、より多くの知識・技術をもった人ではなく、想いの強い人たちだったんだと思います。

コア笑いプロデューサーになった仲間たちは高柳先生の有無を言わせぬ要請により、それぞれの地元で開催される「笑いプロデューサー講習会」に参加することになりました。高柳先生の助手として。そこで、コアの仲間たちは、実際に人を育てるという経験をしました。そう、ほほえみ隊がやってきた「受講生の申込時のレポートチェック」から今度はコアがやるのです。「え～私たちの時にもこんなことをやってくれていたんですか?」「講習中も毎晩、その日のレポートを全部チェックして、一日のその人の言動を思い出しながら、翌日の配慮の必要性や方法を話し合ったりしていたんですね。」そうそう、そうなんです。コアのみんなは、今度は、配慮される側から配慮する側の体験をすることになったんです。そして、その時、コアの中には、配慮される立場だった時の、嬉しかった寄り添い、欲しかったことばなど

が思い起こされていきました。それが今度は「笑いプロデューサー受講生」への自分の態度を決めていきます。どんな配慮がどのように相手に響くのか、自分の体験を踏まえて、より深く、実感を伴って理解できる機会になったと思っています。一人一人を大切にすること、その **technique** ではなく、**attitude** を体得する貴重な体験であったと思っています。

ちょっと雑談です。私、大学時代心理学科に所属していたのですが、カウンセリングゼミで恩師であった小林純一先生に言われたことばで忘れられないのが、この **attitude** です。模擬面接を繰り返しながら、ただやみくもに来談者のことばを繰り返す私たちゼミ生に、とても悲しそうに「あなた達は本当に相手のことを判りたいと思っていますか。私が皆さんに伝えたいのは **technique** ではなくて、**attitude** なんですよ。」と言われたことがあるのです。私がおのことばの意味を深く正しく理解しているかどうかは自信がありませんが、対人援助の仕事をするに際し、私の中にはいつもそのことばがありました。小手先でなく、こころを込めて相手に向かおうとする姿勢そのもの、そのことがどんなテクニックの習得よりもその前に大切だということ。コアが笑いの講習の手伝いをしながら学んだことはその芯のところに近かったような気がしています。高柳先生もよく **technique** で

はないと言って教えてくれていましたっけ。

その大切な、そして微妙な感覚をつかむにはとても有効な講習方法だったと感じていました。

教えることで深まる知識

そして、知識などを身につけるには、人に教えることが一番！ですね。笑いの講習を体験するまで、コア笑いプロデューサー養成講習会の4泊5日で得たはずの知識や技術は、コアの私たちの中に混沌と詰め込まれた状態でした。それが、笑いの講習会でスタッフ側として入り、教える側の一員となって体験したことで整理されていくことになりました。

3日間の笑いプロデューサーの講習会は、だいたいこんな内容になります。1日目、まず、高柳先生からの講義で笑うことの効果などについて、医学的な知識も含めて教えて頂きます。その後、全員による自己紹介。これも研修です。相手の話をちゃんと聞くこと、自分のことを印象深く伝える方法を学びます。そしてコア笑いプロデューサーによる「ほほえみの7か条」の紹介。先程、人に教えることで知識が身に付くといいましたが、つまり、分かったつもりになっているだけでは結局人には教えられず、教えるためにはその知識を自分のことばで自分の中に取り込まなければならないのですよね。コアは講習前日何時間もかけて高柳先生と打ち合わせし、7か条を1条

づつ役割分担し、体験談を交えたりしながら自分のことばで説明を試みました。1日目の最後はグループに分かれて、PNPやアイメッセージの事例を作成しながら理解していきます。グループには、コアが複数で入り、その作業をサポートします。

2日目は発声練習から始まります。人前で講習を行える人材の養成ですから。そして自分のよいところを見つめ直すワークショップを行います。同時に他者のよいところを探し出してことばにして伝える練習も行います。コアは机間巡視しながら、とまどっている人の側でその過程に寄り添い、いいところ探しの手伝いをします。この寄り添い方も相手を大事にする *attitude* が試される気がしていました。そして次が、言うべきことをメリハリよく、大きな声で届かせる練習。その後、翌日の最終日にグループでほほえみの7か条を発表するための準備にかかります。ここにも各グループにコアが入ってサポートします。

3日目は、グループごとにほほえみの7か条を伝えるための模擬講習発表です。それぞれの発表には、高柳先生やアシスタントの先生からのコメント(ダメだし?)。そして改善してやり直し。全てのラストは、コアも笑いも一緒に輪になった、一人一人、この3日間の感想を発表します。

コアはこの3日間、自らの発表をしながら、グループのサポートをし

ながら、実は、迷い、考え、行動し、迷い、考え・・・を繰り返していたのです。これらがコアにとっての第二弾の講習だったんですね。この時のコアの仲間の感想です。

「4泊5日で詰め込んだものを前よりも深く理解するチャンスになった3日間でした。」「弘前会場の笑いプロデューサー養成講習会は参加者44名。そこに15名ものコア笑いプロデューサーがサポートに駆けつけました。私たちのサポート、我ながら見事でしたよね。笑いプロデューサーの皆さんが、3日間でどんどん変化していく様子を感じ、ついこの間までの自分たちを見る思いがして、嬉しい驚きでした。」

感謝を伝え、感謝される体験

この人材養成の仕組みにはもっともっと、私たちがこの取組を継続できるための重要な鍵が隠されていたと感じています。その一つが「感謝し、感謝される体験」です。ここでも高柳先生のアイデアが。笑いの初回講習の前日、ほほえみ隊は、講習会場の壁全面に紙を貼れるように工夫して欲しいと言われました。(実際、いろいろな会場がありますから、その注文に応えることもたいへんでした。)受講生は開講日に受付をすますとその“壁に貼るための用紙”をもらいます。(その紙にも中央に「ほほえみ太陽くん」をプリントしたので、壁はかわいいイラストで埋め尽くされて、殺風景だった会場が明るい雰囲気になりました。それも先生の

狙いです。)そこに自分の名前を書いて壁の好きなところに貼るんです。講習中ずっとそれは貼られています。そして、休憩時間になると、コアやほほえみ隊、そして受講生相互に、そこにメッセージを書き込むんです。そこには、一人一人の言動への気づき、感謝、感動が記載されていきます。コアはすでにほほえみの7か条を学んだ面々です。相手の良いところを見つけてプラス評価で伝えるという訓練をしてきて、下手くそでもそのことの重要性を理解し、実践しようとしている仲間です。紙にはいっぱい受講生一人ひとりへのプラスメッセージが書き込まれることとなります。そして、講習最終日には笑いプロデューサー講習会の修了証と一緒に「自分のいいところ」がたくさん書かれたその紙を持って帰るという仕組みです。

そしてそれは受講生分だけでなく、コア笑いプロデューサーの分もあるのです。そうです。迷いながら必死にサポートを続けてきたコアの仲間たちに、受講生からの感謝のことばがたくさん伝えられたのでした。「あのときの一言が嬉しかった。」「あなたが話してくれた体験談に感動した。」「笑顔に励まされた。」というような。

誰かの役に立てる！その喜びに、コアの瞳がさらに輝きを増した体験だったと思います。

「誰かに感謝される取組であること。」そのことがこの活動が継続されるための大きな原動力であることを、

私は、やっとそのころ薄々感じ始めていました。謝礼金も払わない、交通費すら出ない、でもみんなでこの取組を続けるためには、目的に意義を感じているだけでなく、そこに自分がこれをやっていて楽しいと感じる何かがないと。その何かになりうるのが、受講生からの感謝であると。

笑いプロデューサー養成講習会では、受講生からこんな感想が残されました。「苦しいとき、悲しいとき、自分だけでは立ち直れないとき、人のほほえみで助けられたことがたくさんあることを思い出した。この講習会で自分に自信がついた。できれば近くから、できれば遠くまで皆さんにほほえみをあげたい。」「高柳先生の本気が嬉しかった。そしてスタッフとコアの一生懸命さがとても伝わってきた。」「これまでは自分のために笑っていたが、相手のために心からの笑いがあるということを感じた。」「自分を嫌いな人間が周囲を幸せにはできないと改めて感じた。」「笑いといえば心がスカッとするものと思っていたが、講習を受けて、心をあたたかくする笑いっていいものだなと思った。」

笑いプロデューサーの投書

この頃から、私たちのこの取組は新聞の投書欄を何度も飾ることになります。受講した笑いプロデューサーの皆さんが、その体験や感動を投書してくれたものです。体験した県民が「これは良い取組だ、一緒にやりたい。」と言ってくれる。それはと

ても嬉しいことでした。

雑誌、テレビ、新聞などからの取材を受けることも出てきました。でも、全国でも例のないこの取組を理解してもらうことが、私に上手にできず、結果として取り上げられないということも数多く経験してきました。(NHKが一番困難だったかな。別々の支局から3回くらいアプローチがあって、それぞれ丁寧に時間をかけて対応して、結局一度も使われたことがなかった。一度は撮影スケジュールもたてたのにドタキャンされた。まあ、いいんですけど。(^^)v ちょっと恨み節?)取材を受けていると、時には、「笑うと虐待しなくなるんですか?」と問われたり、「虐待する人をどうやってこの講習に引っ張り出すんですか?」と言われ首をかしげられることもありました。「これはポピュレーションアプローチである」ともっとちゃんと伝えられれば良かったんでしょうが、そのころは今よりもっと説明が下手くそだったと思います。でも、取材は誠意をもって受け続けました。どうしてって。

ひとつは、そうやって取材を受けることで、この取組を広くわかりやすく知らせるために、何をどう伝えたらいいのかを勉強させてもらうことができたから。そしてもう一つは、たとえ3つ取材を受けて1つしか掲載されなくても、それが好意的記事になってみんなの目に触れることになれば、広報の意味合いだけでなく、コア笑いプロデューサーや笑いプロ

デューサーの仲間たち、そして、事業担当者のほほえみ隊にとっても、自信を持ってこの活動を続けていける大きな後押しになると感じていたからです。

笑い講習会での ちょっと不思議な体験

笑うこと、こころから心地よいほほえみには、人を前向きにする効果がある、時には人を病気から回復させる効果すらある。そんなことを私たちは高柳先生から知識として学んできました。それは、文脈としては理解しますが、目の前で見せつけられるとこれはもう驚きの体験です。

笑いプロデューサー養成講習会では、講習のラストに3日間受講した感想を一人一人に語ってもらう時間をつくっていました。そこで、男性の参加者が「笑ってもいい、泣いてもいい、ありのままの自分でいいんだと心から思えた。このことがこんなに心地良いとは思ってもみなかった。」と泣きながら語ってくれました。

長年のリウマチで初日は片時も杖を離せずに参加していた受講生がいました。その方が3日目には、痛みが楽になったと話し、明るい色の服を身につけ、杖を使わずに過ごす様子を目撃しました。

元気に3日間を過ごした受講生の女性が、終了後、実はこの講習に来る前には、自殺を考えて、通帳なども整理していたと。でも申し込んだ講習会に行くようにと職場からせつ

つかれ、仕方なく参加した。初日に7か条の話を聞き、とにかくだまされたと思ってやってみようと、初日に、講習会場から自宅までの帰路、自分の良いところを一生懸命列挙し、かみしめながら戻ったそうです。途中、涙が出て涙が出て、運転が大変だったが、それで、自殺を思いとどまったと話してくれました。

自らを好きになり、あたたかいほほえみを浮かべ、笑うことができる、そのことが引き起こす大きな効果を、共に参加したコアも笑いもほほえみ隊も、理屈ではなく実感することになりました。

もう一つの視点

そう、こういったいろいろなことがコア笑いプロデューサーをこの取組のリーダーにしていっていると思います。そして、これらのコアが想いを込めて懸命にバックアップした3日間の講習に参加した笑いプロデューサーのうちから、その想いが乗り移ったように、地域のために共に動きたい、という仲間が生まれてきたのです。

この連鎖が、その後のほほえみ活動を支えるキーポイントでした。自分と変わらない一県民が地域を良くしようと語りかけている、それも一生懸命、そして楽しく。それを聞いていて、そして体験していて自分も楽しい、そして、自分にもできそう。よし、私もここに参加しよう、自分も役に立ちたい。この連鎖の始まりです。

さあ、コアだけでなく、初年度で5回の講習会を経て、179人（最終的には3年間で11回の講習会を経て395名になります）を数えることになる笑いプロデューサーを味方につけて、さらに活動が広がっていくこととなります。

この3日間講習をコアの仲間たちと繰り返し体験し、共に迷い、考え、ほほえみの7か条を自分のものにしていきながら、私はそこにどっぷりとつかっているわけにはいきません。次に向けたもう一つ別の視点が必要でした。それは、この人たちをどう組織していくか、そして次の活動を広く県民の中へ滞りなく広げていくために、私は、そしてほほえみ隊は何をしていかなければならないか、ということです。

高柳先生のもとで生まれてきた仲間たちを引継ぎ、これからは高柳先生から少しだけ離れて自分たちで育っていかなければなりません。高柳先生にはついてきてくれた仲間たちでしたが、私とも一緒に歩いてくれるのだろうか、という心配も実はかなりありました。でも、高柳先生はそのこともしっかり意識してくれていたのだと思います。各講習会の中で、必ず、この取組の青森側の発案者が私であることを繰り返し紹介し、私に、想いを語る時間を必ず作ってくれました。ですので、受講者の中には、私はそれなりの特別な存在として意識はされていました。それにしても、です。高柳先生のようなカ

リスマ性は私にはないのですから。

またひとつ、ステップアップの時期を迎えていました。

私のなすべきことは、せっかく味方についてくれた仲間たちに、ここから先、大きな失敗をさせることなく、この取組を継続したいと思ってもらえる経験を積んでもらうことだと、強く感じていました。そのために、高柳先生のようなカリスマ性で引っ張っていくことができないとしたら。私にできることは何か。それは丁寧に一人ひとりを見て、得意不得意を見きわめ、無理なく一人ひとりのできることをしてもらいながら、ステップアップしてもらえる環境をつくること。それは管理しすぎてもダメで、勝手にさせすぎてもダメなんじゃないか。そのバランスを自分は上手にできるだろうか。

きつとここから先、様々な配慮や工夫が必要になるのだろう。でも、この先どうなるかわからないモヤモヤも含め、何かが動き始めた感覚が、当時の私にはとても楽しいことのように感じられていた気がします。

男は 痛い

!

國友万裕

第4回

フライ・ダディ・フライ

1. 上裸で散歩

8月のある朝。僕は鴨川沿いにある30過ぎの男性と上半身裸で散歩していた。

「楽しいなあ。こうやって男同士で裸になると、男同士って感じするものね」

「女にはできないことですものね」

と話しながら、1時間くらい半裸のまま、2人で歩いた。朝の鴨川沿いの空気を素肌に感じるのとはとても気持ちがいい。通りすがりの人も何人かはいた。一人だと、女性から見られるのはちょっと気になったかもしれない。いくら川べりとはいえ、裸になるのはちょっと恥ずかしい。しかし、2人だと、まったく恥ずかしさを感じない。むしろ、男の友情をたっぷり感じて、この時間がずっと続いてくれればいいなあ、鴨川の流れを見ながら感じたりもした。

彼と僕は、「お互いの乳首を見せ合う仲」だ（笑）。「乳首」なんて卑猥に感じる人もいるかもしれないけど、日ごろ、大学生と接していると、今の男子大学生は、頻りに乳首という言葉を使っていることに気づく。しかも、女性の乳首ではなく、男の乳首だ。僕は専門学校でも教えているのだが、専門学校は大学に比べると先生と学生の距離が近いせいもあって、服の上からではあるが、もろ僕の乳首に触ってくる男子学生がいる。「先生、こんな着ているのに乳首出ていますよ」と僕の乳首を指で弾いてきた男子もいたし、「先生、乳首、すけてますよ。セクハラですよ」とギョッと乳首を摘ままれたこともあった。

昔は男の乳首なんて、大した意味はもたなかったのだろうけど、今は、ダウンタウンや

からお笑い芸人がネタに使うせいか、一つの記号のようになってしまっている。女は乳首があるから胸を隠す、しかし、男は乳首があるのに胸を隠さない……これはジェンダー的に考えても面白い事実なのである。男の子が、男の乳首の存在を意識する。なんとなく男の子が女っぽくなってきたみたいで、僕みたいな男には結構嬉しい。

1時間あまり、たっぷり乳首を出して歩いた後、「最後に鴨川ファイトクラブをしましょうか」と彼が言い出した。『ファイトクラブ』はブラッド・ピットとエドワード・ノートンが主演の映画で、男たちが上半身裸で殴りあうクラブの話だ。「殴りあうんじゃなくて、国友さんが俺を殴ってくださいよ。俺は逃げるから。ちょっとでも俺の身体に触れたら、国友さんの勝ちですよ」と彼は言った。で、それから5分ほど、逃げる彼を、僕が拳を掲げて追いかけて、走り回った。もちろん、身体の動きの迅速な彼に俺の拳があたるわけがない。散々振り回されて、息はぜいぜい。「結構、頑張りましたね(笑)」と彼は言ってくれた。

たっぷり男の喜びを満喫した時間だった。

2. 救世主が現れた!

この6月頃、FACEBOOKで毎日のようにぼやいていた。「腰が痛い!!!」。。。。
整骨院には通っていたのだが、異常に痛いので病院にも行った。ついには、仕事を休んで、ちょっと遠いところにある整体院にまで足を延ばしてみた。しかし、痛みはおさまらない。僕は元々、猫背で、それを治そうと意識していたため、そり気味の姿勢になってしまった。腰に激痛が走るようになったのは、それが一

つの原因だったようだ。

そんなある日。FACEBOOKにメッセージが届いた。友達登録をしている男性からのメッセージだ。「僕は今、出張マッサージをやっているんです。よかったら治療させてくれませんか。最初はお試しだから、料金は要りません。代わりに飯をおごってください」という内容のものだった。

彼は以前、僕の通っているスポーツクラブでインストラクターをやっていた人だ。偶然彼のFACEBOOKを見つけて、僕のほうが友達リクエストを送り、承認してもらった。といっても、彼と再び会うことはないだろうと思っていた。彼は3年ほど前にスポーツクラブをやめて、それ以来、会う術もなかったし、何よりも、彼と僕の関係は、顔見知りという程度で友達というほど深いものではなかったからである。

彼が僕の部屋に初めてやってきたのは、6月の半ばのことだったと思う。1時間たっぷりマッサージをしてもらった。予想以上に気持ちよかった。相性もいい。僕は、ちょっとしたマッサージ通で、さまざまところでマッサージを受けてきたが、マッサージは上手い下手もさることながら、相性の問題がある。生理的にいやな人に触られるのは気分が悪い。あれこれ世間話をしながら身体を押してもらうわけだから、性格的な相性もある。彼は、どの角度から見ても最高に相性がよかったし、これはしばらくやらしてもらおうかと思った。

その後、2人でイタリアン・レストランに行き、飯を食いながらあれこれ話した。てっきり僕は、彼は3年前までスポーツクラブの正社員だったのだと思っていた。ところが、彼曰く「一番正社員らしいバイトだったんです」。

考えてみれば、彼はあの当時、20代後半。バイトの子は、大抵は大学生だから、年が他のバイトの連中よりも上だった分、正社員ぽかったのだろう。彼は、脱ぐとヘラクレスだが、性格はやさしいタイプ。怖い奴が苦手な僕は、優しいタイプの男の人としか友達になれない。彼の裸を始めてプールで見た時、驚いたものだ。顔はかわいいのに、身体は鍛えに鍛え抜かれている。プールサイドで体操をしている彼に思わず近づいて、「いい身体なってますねー」と言ってしまったのを覚えている。

彼が担当していたクラスで印象に残っているのは、水中ウォーク。上半身裸のままプールサイドにたって、指導してくれた。他の指導員の人は、上裸にはならないのだが、彼は「筋肉の動きを見てほしかったんです」と言っていた。お客さんは、おばさんがほとんどなので、汚い男の先生だったら、「シャツの一枚くらいつけてくれ」とクレームがついていたところだろう。筋肉隆々の男の裸は、女性に威圧感を与えるし、間近に見て気持ちのいいものではないらしい。しかし、彼は顔がかわいいし、物腰がソフトなので、なんとなく身体とアンバランスで、魅力的だった。清潔感があった。

しかし、その後、いつの間にか彼はいなくなっていた。僕の通っているスポーツクラブは、正社員の人でも他の店舗に転勤したり、退職したりで、しょっちゅう移動があるし、バイトの子は、いつの間にか辞めていたりするのだ。なんとなく、寂しかった。

男同士でも、どうしても友達になりたいと思うタイプの人と、握手するのも嫌だと感じる人がいるものだが、僕にとって彼は間違いなく前者だった。しかし、彼と友達になれる

わけがない。ただのインストラクターとお客さんの間柄だし、じっくり話す機会もない。どっちみち、友達になれるはずもなかったのだ。

その彼から突然の連絡。運命的なものを感じた。ひょっとすると、この人は俺の救世主なのかも知れない。

3 . やはり、救世主！！

果たして、その通りだった。

それから何度か続けてきてもらったのだが、友情はトントン拍子に進んでいった。2度目の時は、「まず、部屋の掃除をしましょうか」と本と書類で埃だらけの僕の部屋を箒ではいてくれ、それから、いらぬものは手際よくどんどん捨ててくれた。若さの自信なのか、人の部屋に来て、これだけ自分の判断で捨てていいのかと思うくらいだったが、彼の捨てる技術は大変なもので、僕の部屋は、みるみる綺麗になっていった。

さらに「ベッドのシーツを洗濯して、コインランドリーで乾かして、気持ちのいい状態で、マッサージしましょう」と、洗濯が終わった後、2人で近所のコインランドリーに行った。僕はコインランドリーなんて行ったこともなかったのだが、2人であれこれ話をしていると、乾燥するくらいの時間はすぐに過ぎる。彼はマッサージというだけでなく、ボディ・メンテナンスをやりたんだと言っていて、そのためには環境も大事だと考えているみたいだった。

さらに、3度目の時だったと思う。今度は彼のほうから「僕の部屋の掃除ができたので、今日は僕の部屋でやりましょう」と連絡がき

た。彼が車で迎えに来てくれて、行ってみると2ルームの小さなマンションだが、こぎれいに片付いている。彼は、マッサージのバイトをしばらくしていたことはあるみたいだが、個人で始めたのは最近みたいで、「まだ今のところ、自分と相性のいい人や僕を可愛がってくれる人にだけやっているんです」と言っていた。

彼と僕の友情は加速度的に進んでいった。その後、2人で、船岡山に登り、写真を撮り、それから船岡温泉に入りに行った。船岡温泉は有名な銭湯で、スーパー銭湯ほど大きくはないけども、町の銭湯の割には大きくて京都らしい風情がある。すっかり気にってしまった。鏡の前で、彼と並んで、お互いの裸を見比べた。「やっぱり、お腹が全然、違っているよね。俺は、胸より腹のほうが大きいもんなあ(笑)」と僕は言った。2人で、話をしながら、サウナに入り、水風呂に入り、露天に入り、電気風呂に入り、たっぴりと男同士の裸の付き合いを堪能した。その後、彼の部屋でマッサージを受けたのだが、マッサージの終わりがけに、「カレーをつくったんですけど、食べていきます？」と飯まで出してくれた。サラダもつけてくれて、味も上手い。

7月になると、僕は急に引越しが決まったため、荷造りやらなんやらで忙しかったのだが、彼が何度もプライベートで手伝いに来てくれて、大助かりだった。今、思えば、無茶な引越しの計画だった。一番、暑い時期だし、僕の仕事も一番忙しい時期だった。疲れもたまっていた。彼がいなかったら、引っ越しは終わっていなかっただろう。本当に神様がくれたプレゼントのような人だ。

そして、鴨川の上裸散歩。たったの2か月

の付き合いで、彼は僕の人生になくってはならない人になってしまったのだった。

4.『フライ、ダディ、フライ』

彼と俺は、まるで『フライ、ダディ、フライ』(2005)のような関係だなあと思った。これは娘を傷つけられたおっさん(堤真一)と彼を鍛えなおして対決させようとする高校生グループのスンシン(岡田准一)の奇妙な友情を描く映画だ。

年の差からしてそっくりだった。僕は堤真一とほぼ同年だし、彼は岡田准一とほぼ同年。16歳違いだ。服装も、彼は、夏場は大抵タンクトップ姿で、映画の岡田准一そのものだ。映画ではスンシンがおっさんにあれこれ身体を鍛える手助けをしていくのだが、この主人公のおっさん、堤真一が演じているから、それほどカッコ悪くは見えないが、原作ではもっと無様なおじさんと描かれているらしい。まさしく僕と似たタイプだ(笑)。

映画では、このおっさんが、スンシンと出会ったことで変化していく様子が描かれるのだが、僕も彼と出会った後、どんどん変わっていった。

引越しが終わった後、「前のところのままだったら、国友さん、10年ぐらい寿命が短くなっていたはずですよ(笑)」と彼は言った。そう言われてみれば、そうだなあ。俺は、掃除が嫌いだし、引っ越すとなるとお金がかかるので、同じ賃貸のマンションに18年以上も暮らしていた。こういう賃貸のマンションだと、皆、2,3年で気前よくでていくのだが、お金かかるのによくやるなあと思っていた。しかし、実際やってみると、引っ越しはお金に代

わるものを与えてくれる。新しいマンションに移って、気分はさわやかになったし、18年もたまったほこりからおさらばする生活は何ともいいものだ。

また彼の影響で、ダイエットも本格的に始めた。食事は間食にヨーグルトを食べることにした。まともに食べるのは一日に一食だけにとどめ、後はヨーグルトと軽いものですませる。この甲斐あって85キロくらいあった体重が、今は78キロだ。

それから運動。彼が僕に教えてくれたことは、スンシンのおっさんへの台詞に似ている。スンシンは、おっさんに「まずは基礎づくりだ。おっさんの頭の中には余計なものがこびりついている。それをそぎ落とすんだ。要は走ればいいんだよ」という。僕も基礎づくりの段階なのだが、彼は、僕に、「できないという思い込みをなくすんですよ。そうすれば、できるようになります。ウォーキングが一番いいんです。まずはスポーツクラブでウォーキングを始めてください」と言ってくれた。

僕は、これまでスポーツクラブに行っても、ただ遊びに行っているようなもの。プールに入るのは気持ちがいいし、たまに音楽に合わせてスタジオのプログラムで身体を動かすのは楽しい。ウォーキングマシンなどは使ったこともなかった。しかし、彼に言われて、僕はウォーキングマシンに初挑戦し始めた。遅すぎる。もうクラブに入って6年もたっているというのに……。しかし、彼の言うとおりだった。1度にマシンを使える制限時間は30分なので、大して歩くわけではない。しかし、黙々と30分歩き続けると、終わったあとが爽快だ。身体が軽くなったような気持ちになる。

「俺はこれまで歩いてこなかったわけじゃないよ。重い荷物を抱えて、仕事場に向かうのもそれなりにしんどいからね」と僕が言うと、「仕事の移動で歩くのと、運動で歩くのでは違うんですよ」と彼は言っていたが、本当にそうだった。歩くことに集中する。一定のリズムで歩く。これは思っていた以上の運動で、やってみると楽しいものでもあった。考えてみると俺は、せっかちなので、仕事場に早め早めに出かける。遅刻したことは一度もない。他の人たちよりも早くに仕事場に着いている。しかし、これは良いとばかりも言えないのかもしれない。僕は時間のゆとりをたっぷり持って行動するため、約束の時間に遅れることはないが、急ぐということがない。歩くのもダラダラした歩き方だ。電車の時間も調べたりはしない。これからは、「何時の電車にのるんだ」と時間の目標を持って行動することにしようと思われた。

映画では、スンシンがおっさんに「感情なんだよ。恐怖の先にあるものを見たくないのかよ」と諭す場面が出てくる。彼も僕にこれと似たようなことを言ってくれた。「国友さんは、結果をおそれて、外に出ようとしませんですよ。地震が来るのを恐れて、部屋から出れないのと一緒なんです」。うーん、耳が痛い！ 確かにそうなんだよなあ。僕は、いったん思いこんでしまうと、なかなかそこから抜け出すことができない。

僕が不登校になったのは、スポーツができない、男らしくないという問題が大きかったのだが、今の僕は、プールだったら体力の続く限り泳げるし、彼に言わせれば、「国友さん、自分では男らしくないと思っているみたいだけど、他の人から見たら、十分、男らしい人

に見えますよ」とのこと。同じことは、何人もの人から言われた。俺は、子供の頃、「おかま」とか「女の腐ったような子」だと言われ続けたため、それから40年近い月日がたっているのに、いまだに、自分が女っぽい男だと思い込んでいる。しかし、そういえば、大学に入って、京都に出てきてからは、女っぽいなんて言われたことは一度もないのだ。だけど、僕は、自分が女っぽいと思ひ込み、そして、それを意識し過ぎて、男っぽいことをするのは柄に合わないから恥ずかしいと極力男っぽいことを避けてきた。俺だって男だから、心の奥底には男性性が眠っていたのに、それを必死で抑圧してきたのだ。

だから今となって、少しその呪縛がとけて、彼と半裸のまま歩きまわったり、ファイトクラブごっこしたりするのが、なんとも言えず楽しい。自分の中の男性性を解放する。これもある意味で男性解放である。

5. ピンタ

僕は、彼に何度かピンタもくらわしてもらっている。僕は尊敬する男の人からだったら殴られてもいいし、殴られたいというマゾヒスティックな欲望があった。子供の頃、殴り合いとか、男っぽい喧嘩をしたことがないから、そういうものに憧れたのだろう。しかも、僕は本質的にMなので、相手を殴りたいとは思わない。殴られたいのだ。

しかし、この欲望も、なかなかかなわなかったし、これからもかなわないだろうと思っていた。いくらなんでも大人になって、相手を殴るなんてことをしたら、犯罪と見做される。だけど、彼には素直に僕の欲求を話した。

「男のドラマなんかだと、『俺を殴ってくれ』という場面が出てくるだろう？俺はああいうのに憧れるんだよね。韓国映画の『クライング・フィスト』って、大好きな映画なんだけど、この映画では主演の中年男が殴られ屋という設定になっているんだ。今度ピンタしてくれるか。」

彼もこのお願いにはさすがに戸惑っていたが、しばらくたって、僕の性格がわかってくると、殴っても大丈夫だと思っただけで、結構痛いピンタを何発か浴びせてくれた。一度、左の頬にピンタされた時はマジで痛くて、「左だけ痛いって何となく気分悪いよ」というと、今度は右の頬をピシャリとピンタしてくれた(笑)。「俺たち、変な関係だよね。」だけど、変なことでも許しあうのが友情というもの。

彼と僕の間には固い友情が芽生えていって、彼は他の人に打ち明けられないことも、僕には打ち明けてくれるようになっていった。

『フライ、ダディ、フライ』でも、スンシンがおっさんに「殴ってみよう」という場面があるのだが、殴るっていう行為は、一つのホモエロスだ。男同士の友情の証なのである。

彼と僕は、今は頻繁に会う仲だが、別れるときは必ず、男同士の固い握手を交わす。「国友さんの握手は強くて痛いくらいですよ」と彼からは言われる。僕も彼のマッサージやトレーニングの時に痛いと感じるときはたびたびだ。しかし、その痛みがなんとも気持ちいい。

映画のDVDのパッケージでは、スンシンがおっさんを殴っているところが使われているし、映画の中で、「頭殴られ過ぎて、いい感じになっているんじゃないんですか？」と訊か

れて、「かもね。」とおっさんが答える場面がある。もちろん、おっさんは、殴られるのが不快だとは感じていない。

こう考えてみると、「男は痛い！」っていうのも、悪くないことに思えてくる。男は痛いけど、それを分かち合える男の友がいれば、痛みがホモエロスとなるのだ。

6. ギブ&テイクの友情

彼と僕には、16年の年の差がある。父子というには年が近過ぎるし、兄弟というには離れ過ぎている。友達というにも離れ過ぎているのかもしれない。したがって、一番親密になれない年の差のようにも思うんだけど、僕は彼から多くのことを学んでいった。つきあっていて楽しいし、まったく疲れない。

マッサージの後、トレーニングも教えてもらうのだが、時々、厳しいことを言われたりもする。僕は厳しくされると反発する性格なのだが、しかし、16歳年齢が下なので、それほど腹が立たない。スポーツの面では彼のほうが上だから、上から目線になるけれど、年や僕のほうが上だから、上手い具合に緩和されるのである。彼から若さをテイク、代わりに僕は人生経験と知識をギブするのだ。そうそう、時々、彼に飯をおごってあげたりもする。彼は、さすがに男っぽくて、王将とかが好きなので、おごってもそれほどお金はかからない(笑)。

『フライ、ダディ、フライ』では、夕焼けをバックに、木の大きな枝の上に座った、スンシンとおっさんが身の上話をする場面が、メルヘンのようにきれいで、一つのハイライトだ。2人はお互いの頭を抱きしめ会ったり、

腰を抱いたりする。男同士の心が通い合うスキンシップの瞬間だ。

「早く強くなって、俺を守ってくれよ」というスンシン。一見、スンシンのほうが腕っ節が強くて、おっさんを守っているように見えるのだが、彼もどこかでおっさんに頼っているのだ。友情っていうのはこうでなきゃいけないよね。

「自分を信じることができなくなった時、恐怖が入ってくる。どんなことがあっても自分を信じるんだ」とスンシン。「君を信じるよ」とおっさん。なんとなく、涙が出てくる。僕は、若い頃に男同士の友情を経験できなかったため、こういう友情ものに弱いのだ。。。

7. 心の傷を抱えて.....

彼と僕には共通点があることも、つきあっているうちに分かっていった。彼は大学を出た後、肉体系フリーターで、定職についたことはないらしい。「周りからは大学まで出ているのに、なぜ、そんな仕事ばかりするの?」と言われるけど、「身体を動かすのが好きなんです」と言っていた。どおりで、彼は身体のことには知り尽くしていて、マッサージの腕は生半可じゃない。

僕も、48にもなって定職についたことのない非常勤講師だ。周りからは、「あなたみたいに能力のある人が、非常勤のままなんてもったいない」と皮肉をこめた、意地の悪い言い方で言われることがあって、カチンとくることがたびたびだ。俺だって、何も考えずに非常勤を貫いてきたわけじゃないよ。俺はトラウマを背負っているから、どうしても自分の殻をやぶることができなくて、もがき苦しん

だ。そして、もう運命にまかせよう、よい仕事がめぐってきたら、そして、そういう気分になったら、専任になってもいいし、そういう巡り合いがなかったら、一生非常勤でもいいと開き直るようになったんだよ。長い葛藤の末に……。

フェミニストは、「結婚すると女は檻に入れられる」と言うだろう。そうであるのならば、「就職すると男は檻に入れられる」と言うことなんじゃないわけ……。棚からぼた餅を待っているなんて、考え方が甘いと言われるかもしれないが、僕は自分にふさわしい檻がやってくるまでは、放浪の旅を続けようと思う。幸い、一緒に旅してくれる相棒も見つかった。

男は痛い！けど、でも、痛がることを楽しみながら生きていきたい。その支えとなってくれる人が、一人現れた。男は痛い！のならば、その傷を癒してくれるのは、女ではなく、男なのだ。

でも、そういう友はなかなか見つからない男が大半なんじゃないかな？ やはり、男は痛い！！！！よね。

援助職のリカバリー

《3》

～「一人っ子」の呪い～

袴田 洋子

去年の夏、ちょうど女子サッカーがワールドカップで優勝した時、私はある認定試験のようなものに不合格になり、苦しい思いでいました。06年頃から取り組んでいたものだったので、そのショックはかなり大きいものでした。自分のことを不合格にした団体組織のことを恨み、この後、団体に残って修行を続けるか、どうしたいのか、自分の気持ちを観察してみました。

「認定」という評価を強く求める自分、その団体の「肩書き」を欲している自分、この分野において認められるべき存在だと主張したい自分、などなど、すべては「認められたい願望」「他者評価」に繋がっていると判断、それこそは私が手放したいと思っていることだと考え、数年に渡ってお世話になってきた団体から離れることを選択しました。

自分の「認められたい願望」とどう折り合いをつけられるのか、私の永

遠の課題かもなあと、オリンピック女子サッカー決勝戦を見ながら、去年の夏を思い出しました。

看護実習、始まる

なんとか入学できた看護大学でしたが、「アディクション」的に彼氏のアパートに入り浸って、2年に進級するのに必要な単位を取得できずに留年、1年生を2度やって、ようやく2年に進級できても「新型うつ」のごとく「不登校」となり、それでもぎりぎりなんとか単位を取得して3年に進級。そうして、看護学部3年のメインイベント、病棟実習が始まりました。

正直、病棟実習で覚えていることと言えば、とにかく疲れたとか、とにかくいい加減な気持ちだったとか、そんなことが真っ先に思い浮かぶほど、「看護」に対する真摯な気持ちを持っている看護学生、ではありませんでした。

実習は5人くらいのグループに分

かれ、消化器外科、脳神経外科、救命救急センター、精神科病棟、産婦人科、オペ室などなど、色々な「看護」を勉強しに、大学病院内の病棟に向かいました。

あまり(ほとんど)真剣に勉強していなかった私は、まるで、実習もオリンピックのごとく「参加することに意義がある」精神で乗り切ろうとしていたようでした。外科病棟の実習では、「オペ後の看護」を主に学ぶのですが、病棟主任から「袴田さん、オペ後は何を観察するのですか？」と聞かれて、即答で「全身状態です」と言った私は、「袴田～！『全身』とは、何と何と何のことだかわかって言っているの!？ まったくもう～！」と呆れ怒られ、半日マンツーマンで指導されたことは、鮮明に覚えています。

「子ども」は苦手

毎朝8時15分から始まる病棟実習は、寝坊しないで起きられるか、そこからして恐怖なのですが、実は、私がもっとも憂鬱に思っていたのは、保育園での実習でした。小児看護だったか、地域看護だったか覚えていないのですが、地域の保育園で数日間、子どもたちと一緒に過ごして「健常児を知ること」が実習の目的でした。昔から「子どもは苦手」と

思っていた私は、その保育園実習に強い不安を感じていました。

私が「子どもは苦手」と思っていた当時の理由は、こんなものでした。「私は一人っ子で、自分の下に妹や弟がいないので、子どもの扱い方がわからない、知らない」。

誰かの家に遊びに行ったり、あるいは旅先で泊まったペンションなどに「子ども」がいたりすると、どう彼らに接していいか分からずに、私はとても困惑しました。「子どもってかわいいね」「子どもが好き」という人の気持ちも、まったく分かりませんでした。もっと言えば、わがままで甘えるばかりの子どもが、どうしてかわいいと思えるのだろうと、そんな風にも思っていました。また、ずけずけモノを言う子どもが、怖くもありました。そんな自分が看護実習で保育園に行き、子どもたちと戯れて過ごさなければいけない。想像するだけでげんなりしてきました。

ワケのわからない涙

保育園での実習そのものは、「戸惑い続けた」以外はあまり覚えていませんが、それでも強く印象に残っている場面があります。実習は、ちょうど保育園の運動会の頃で、かけっこやリレーの練習を一緒にしました。

確か、運動会当日が実習の最終日で、多くの保護者がきている中、運動会最後の園児全員リレー。最終走者のゴール場面で、ゴールした先生チームの保母さんが、一緒にゴールした園児を抱きしめたのを見て、涙があふれてきました。一緒に実習に来ている仲間にバレないようにしましたが、どうしてこんなことで自分は泣くのだろうと、その時はまったくワケがわかりませんでした。これを書いている今も、じわじわと涙ぐんでしまうのですが(苦笑)、その理由が、今はなんとなく言語化できます。「園児であるその子が、その子の存在が、そのまま丸ごと愛されている、認められている」という場面に思えるから、のようです。そして、それを羨ましいと思うのでした。

親には、甘えません！

すでに述べましたが、私は一人っ子で育ちました。私の下には3人生まれましたようですが、死産、流産、早産ということで、私は一人っ子になりました。幼稚園の頃、入院した母親のベッドサイドに集まった親戚の人たちを見て、「赤ちゃんが生まれたのに、どうしておばちゃんたちは泣いているんだろう、喜ばないの？」と不思議に思ったことを覚えています。

ということで、私は「昭和42年生まれの一人っ子」なのですが、この時代の一人っ子はあまり多くありません。クラスの子のほとんどに「きょうだい」がいました。そして、私は、「一人っ子は、甘ったれで、泣き虫で、わがまま」と、母方の伯母からいつも言われていて、この「一人っ子」という事実には、かなり長いこと、支配されてきました。

幼心にも、「甘ったれで、泣き虫で、わがまま」は、褒め言葉じゃないのはわかります。子どもの私は、それを言われることが、とにかくすごく嫌だったので、「絶対に言われたくない」と強く思い、「よし、自分が一人っ子って思われないようにすればいいんだ」と思って、親に甘えることを封印しました。「親に甘えない」というのが、子ども時代の私の課題で、幼稚園に入った時には、親に抱っこしてもらうことはありませんでした。

「一人っ子って思われないようにすること」の具体的な取り組みとして、「親に甘えないこと」が私の行動指針となり、それは、「親に甘えないことで、自分はようやく認めてもらうことが出来る」という思いになっていたと思います。親に甘えないこと、しっかりものでいること、そうしないと自分は認めてもらえない。子どもの頃は、こ

のように言語化などしていませんが、数年前に、自分の成育歴を振り返った時、自分が「一人っ子」に囚われていたということを思い出しました。

母親も認められたかった？

一方、昭和 20 年生まれの母親は、自身の姉(私の伯母)から「女は、子どもを複数人生まない、一人前じゃない」と言われていたようでした。「一人っ子は甘ったれ泣き虫わがまま」を会う度に幼い私に言っていた伯母なので、自身の妹(私の母親)にそのような事も言ったであろうことは想像に難くありません。

この先は、私の想像に過ぎませんが、結果として一人っ子になってしまった私を、母親は「甘ったれで、泣き虫で、わがまま」にならないよう、「甘やかさないようにしよう」と普通以上に意識したかもしれません。「一人っ子」を「しっかり者」に育てることで、母は自身の姉から認められようと思ったのかもしれません。しかし、「甘やかす」ことと、子どもを健全に「甘えさせる」ことは同じではありません。そのあたりのことを、18 歳で結婚し、22 歳で私を生んで、初めての子を育てるにあたっては、母親も手探り状態だったのでしょうか。母親が、私のことを笑顔で褒めたり、気持ちを認

めたりすることはありませんでした。なにより、自分より 14 歳年上の、昭和 6 年生まれの短気で真面目過ぎて怖い大工職人の夫の機嫌を確認しながらの日々では、娘の私に笑顔を見せる余裕は無かった、ということもあるかもしれません。

母親(18)、父親(32)

自分の成育歴の振り返り作業をしている時、叔母(母親の妹)にインタビューをしに行きました。私の母親はいったいどういう人生を送って来たのか、どんな人なのか、叔母に尋ねると、「お前の母ちゃんは、お前の父ちゃんと結婚してから変わったんだよ。お前の母ちゃんは、どこか抜けてて、ぽーっとしてて、おっとりしてたんだよ、もともとは。お前の父ちゃん、怖いだらう？(前号ご参照下さいませ) だから、初めはお前のうちにみんな遊びに行ったりしたんだけどさ、だんだん行かなくなっちゃったんだよ」と言いました。聞いて、少し驚いたものの、私の中では、パズルのピースがひとつ、はまったような感覚がありました。

18 歳で、父親(私の祖父)のやっている工務店で働いていた 32 歳の大工職人と結婚した私の母親は、4 年後の 22 歳で私を生むまでの間、

どんな生活だったのか、ようやく私が生まれた後、3度も妊娠しながら子どもは育つことができず、どんなことを考えながら生活をしていたのか、叔母の話聞いた後、「母親」ではなく、一人の女性としての物語をあれこれ想像しました。

封印、したツケ

そんなわけで、甘やかさないようにしたであろう母親と、親に甘えることを封印した子どもの関係性の中で、私は、「子どもとコミュニケーションをする」ということをモデルとして学んでいなかった、と言えるかもしれません。自分の成育歴の振り返り作業をしている時、「甘えられなかった」という言葉を「私は、ほんとは、甘えたかったんだ」と言い変えた時、たくさん涙が出ました。

「親に甘えない」を自分に課して、しっかり者であることを評価してもらい認めってもらうことで、ようやく存在することが許される。それが、私の生き方であり、生き延びる方法となりました。「他者から認められたい」と無意識のうちに強過ぎるほどココロの奥底で思っている自分は、こんな子ども時代の生き方をいまだに身にまわっているのかもしれない。早く脱ぎたいものです。

介護・親子・ウラの気持ち

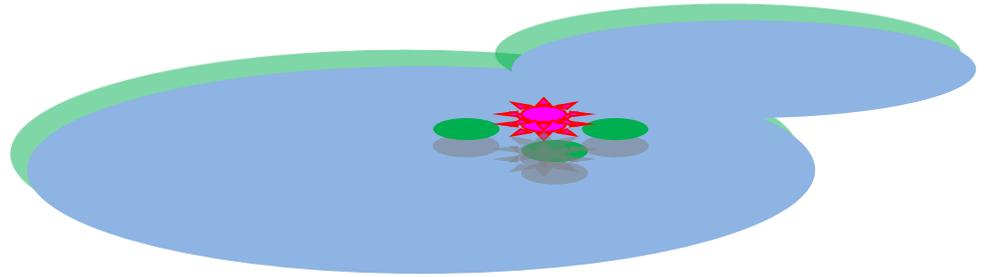
私は結婚していますが、子どもはいません。それをコンプレックスに思うことはしょっちゅうですが、でも、「親」の立場になっていないことで、ひるむことなく「子ども側」の気持ちを想像することができて、これはひとつの援助職としての強みかも、とも思います。(自分を制御できずに代理戦争させてしまった失敗もありますが...)

親を介護する大人になった「子ども」さん方の、多様な気持ちに触れるたびに、親子であるがゆえの、めんどくささ、悲しさ、切なさ、などに共感し、言葉にならない部分を想像しています。

しゅう せん か にっ き
周旋家日記 (3)

それぞれの想い—退蔵院襖絵プロジェクト

乾 明 紀



前号では、このプロジェクトを通じて、お釈迦様が私に「お前はどこに向かって生きようとしているのか？」と質問されているように思えたと書いたが、芸術と宗教は共に、人に生き方を問う。しかも、その問い方が奥深い。慣れ親しんだ日常や習慣を疑うことが必要となる。さらに、芸術と宗教は、商業活動を凌駕したところにその価値を置く。

傘屋卸問屋の四代目として生まれた私は、「商い」の世界こそ興味の中

心であった。大学職員時代は、その商いの世界の発想を大学や芸術、まちづくりの世界に持ち込むことで評価を受けてきたと言える。そんな私が大学教員となり、宗教と芸術とを周旋した結果、それまでの悩みが堰を切ったように溢れだしてきた。

本当にお恥ずかしいことだが、新米教員であった私は、芸大出身でないこともあり、3年間ずっと「自分は芸大生に何を教えるべきなのか」で悩んでいた。実務型教員として、ジェネリッ

クスキルとしてのプロジェクトマネジメント・スキルを身につけさせながら社会と連携したプロジェクトを成功させることが私の役割であったが、自分自身が戴くべき価値をずっと問い続けていたとっていい。

社会でコトを成し遂げるためのジェネリックスキルは大切である。就職にだって有利だ。しかし、社会の当たり前を疑う感性が魅力の芸大生に過度な「社会適応」はさせたくない。そのためにも、芸大生が関わるべきプロジェクトはどのようなものであるべきか。学生の将来に好影響を与える世界観や哲学を、プロジェクトを通じて伝えているだろうか。この悩みが、このプロジェクトの推進と共にどんどん膨張していった。

しかしながら、そんな悩みを抱えながらも、このプロジェクトは内外の期待を受けながら着々と進行していく。私の周旋で企画意図を公表すべく記者会見も開いた。とにかく、このプロジェクトは、震災で落ち込んだ日本に勇気と元気を与えるものにしたかった。

日本の長い歴史の中で不安や問題がないときなどなかった。退蔵院自身が応仁の乱によって、一度焼失した寺院である。今の方丈が建てられた慶長年間には、東寺や伏見城の天守閣が倒壊したマグニチュード7.0の「慶長伏見地震」も起きている。そんな戦乱や災害を乗り越えて京都も日本も、そし

て退蔵院も復活してきた。そして、今、再建後400年の歳月が過ぎ、新たな価値が生まれようとしている。大切なことは、長い時間軸で物事を捉え、次の世代に夢を与えていくことなのかもしれない。

プロジェクトは、夢を託す絵師の公募と選考を残すだけとなった。絵師は、その年の3月に卒業(修了)予定の京都造形芸術大学の学生、大学院生を対象に公募した。退蔵院に匹敵するような古刹ではこれまで、名だたる画家による襖絵の制作や模写による複製はあったが、大学卒業(修了)間もない若者に襖絵64枚もの「大作」を任せる機会は皆無であったであろう。しかも、慶長年間に建てられた重要文化財の方丈の襖絵である。

このような挑戦的な考え方は、松山副住職の意向が大きいことは既に述べた。お寺は人を育てるべきであり、自らが種を撒く存在でありたいとの思いが副住職にはあった。ちなみに、このプロジェクトに際して、寺院側から檀家側へ説明した際の反応は、賛成8割、反対2割であった。この2割の反対について副住職は、この反対意見の存在が、とても大事なことであると言う。なぜなら、誰もが賛成する取組は、既に新規性が無く、やる価値がない可能性が高いからだそうだ。

このような副住職の思いが詰まった挑戦的なプロジェクトの主役とな

る絵師に求められたのは、技術以上に覚悟であった。参禅することの覚悟、住み込みに近い生活で制作することの覚悟、2年間で64枚の襖絵を描く覚悟、将来絵師として自立する覚悟。

絵師公募要綱にあるように、これらを求められた。絵師となれば相当なプレッシャーに耐えなければならない。

<つづく>

妙心寺退蔵院方丈の狩野了慶の襖絵



トランスジェンダー をいきる

(2)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

幼少期 1

これから 2 回にわたって、私の幼少期のころの「自己物語の記述」を分析する。1 回目は、私が小学校に上がるまでの時期を中心に、すでにジェンダーが男の子であると確信した事柄について記述する。

(1) 「俺は男の子や」

性自認は 1 歳半ごろから

私は 1971 年 3 月 9 日に、「視覚に障害のある女の子」としてこの世に生を受けた。少なくとも祖母や両親たちは、私をそのように見て疑わなかった。

ところが、視覚障害に関しては、あちこちの病院を駆けずり回った結果、一生背負っていくものとして確定したのだが、「女の子」という性別に関してはすでに 2、3 歳ごろには反発を覚えており、「自分は男の子である」と認識していた。

性科学者のジョン・マネーは、「自分の性別がどちらに属しているかを認識する（性自認）は、だいたい 1 歳半ごろで確定し、その後の性自認の変更はできない」としている。そうだとすれば、すでにこのころから、男の子であると確信していた事実が、より鮮明に確かさを持って、当時の私に迫ってきた、ということになる。遠い記憶だが、確かに反抗しがたい力によって、自己の性の方向性が、他者（主に女性）とは異なった方向に引きずられ

ている、という感覚を、おぼろげながら抱いていた。そしてこのことが、後に詳述するさまざまな行動様式における不一致や違和感を生じさせることになるのである。

2 男の子としての3台要素がもたらしたもの

私の「男の子としての3台要素」は、「寡黙」、「過活動」、「行動化」であった。2、3歳ころの男の子なら少なからず持っているこの3台要素は、すでにこのころからさまざまな場面で発揮され、そのたびに両親や父方の祖母の怒りの原因になっていた。

私には、2歳年上の兄がいる。当時、兄の持っていたおもちゃをめぐって、兄との喧嘩が絶えなかった。兄貴に与えられていたおもちゃは、手動または自動式の車やボール・プラモデルといった、いわゆる心身の活動力を喚起させられるような物であったのに対し、私に与えられたおもちゃと言うのは、人形や果物の模型セットなど、ほとんど心身の活動力を期待できないような物ばかりであった。通常であれば、「お兄ちゃん、それほしい」と言えるのだろうが、寡黙であった私は、兄に、そのような活動力を期待できないおもちゃをいきなりぶつけ、時には噛み付いたりするなどの暴力を行使しながら、自己の男の子性をアピールし、正当化したものであった。

そのような私に対し、両親や父方の祖母は、もっとおとなしく、しとやかでいること、すなわち女の子らしくすることを求めてきた。その度に私は、「俺は男の子や」と心の中でつぶやき、祖母や両親に反発していた。

女の子のいたずらを「おてんば」、男の子のいたずらを「やんちゃ」というが、私のこのような行動は「やんちゃ」に属しており、けっして「おてんば」という表現では足りない。そこには、「おてんば」よりも、「やんちゃ」という表現のほうが、行動力においても、行動様式においても、領域が広範囲であると考えからだ。したがって、ある程度大胆な行動様式をとることによって、「おてんば」の領域を超え、「やんちゃ」へと近づきたい、という欲求が、知らず知らずの内に自己の過活動・行動化を促進させ、変わって寡黙という形で、言語によるコミュニケーションを低下させていったと考えることができる。

一方、盲学校の幼稚園に通い始めたころから、私に対して執拗にやんちゃをしかけてくる男の子Aがいた。彼のやんちゃ振りは、普段の私のやんちゃ振りとは明らかに行動の質や量が異なっていた。私は必死でAのやんちゃぶりに抵抗しながらそれでもなんとかAとの間で男の子同士のホモソーシャルな関係を築くための模索をしていた。

しかし、私の行動は、周囲の大人たちの誤解を招いてしまった。すなわち、「仲のよい男の子と女の子」、「喧嘩するほど仲がよい」、「嫌い・嫌いも好きのうち」というように、子供同士の係わり合いの中に、大人たちによってかつてに異性の交際として考えられてしまったのである。私の彼のやんちゃ振りへの抵抗は、「彼からやんちゃをされる」こと自体が、もはや私を男の子ではなく、女の子にさせられてしまうことへの恐怖であり、不本意さであった。したがって、大多数の大人たちの連想する子供同士のほほえましい恋愛ムードか

らは逸脱しているのである。

このようにして、私の「男の子としての3台要素」は、周囲の大人たちを困惑させることになるのである。

3 自己の中で構築した「方程式」による男性性形成

私の男性性形成は、もともとの男の子としての性自認に加え、祖母と暮らしていたときの体験が大きなシェアを占めていた。当時、祖母は、両親とのいざこざが絶えなかったので、祖母の家だけ別棟にし、別居していた。2、3歳ごろ、しばらく両親と兄と別居させられ、祖母と一緒に暮らしていた時期があった。そのときの体験が、後に私の男性性形成の中核をなしていくのである。

祖母の口癖はこうであった。「女の子やったら泣きなさんな。女の子はいちいちべらべらしゃべるもんやない。(ええ。なんでえ?) (そんなのありえない!)」どこからか、そのような声が聞こえてきそうなくらい、祖母は私の行動様式の不備な点や至らない部分について、このように叱責した。

しかし、祖母のこのような要求に対して、私は違和感を覚えるようになった。私はどういうわけか、すでにこのころから、男性の演歌歌手の歌を大声で歌うようになっていた。その歌の歌詞の内容やドラマ・漫画などのメディアの要求する「女の子」と、祖母の要求する「女の子」との間に、食い違いのあることに気づいた。例えば、演歌の歌詞では、「男だったら泣いたりせずに」(小柳留美子『瀬戸の花嫁』)や、漫画・ドラマでは、「女の子なんだから、もう少し機嫌よく話をしたらどうなの?」などと、養育者らしき人たちから叱責される場面が見受けられた。すなわち、ここで言えることは、「女の子やったらいちいち泣きなさんな」、「女の子はべらべらしゃべるもんやない」という要求は、演歌の歌詞やドラマ・漫画などのメディアでは、男の子像として要求していたものであった。

その食い違いに気づいたとき、子供心に一瞬どちらの要求を尊重すべきか、と躊躇したかといえそうではなかった。私はまるで、数学の方程式を解くような方法で、祖母の「女の子としての要求」を、すべて「男の子としての要求」に代入し、自己の「男らしさ定義」を構築していった。すなわち、「男の子やったら泣きなさんな」、「男の子やったらいちいちべらべらしゃべるもんやない」という風に、「女の子やったら」を「男の子やったら」に代入することで、自己の「男の子としての性自認」とも一致したのである。

また、「女の子やったらつべこべ文句を言わんとさっさと早くしなさい」、「女の子やったら食べ物の好き嫌いやうまいまずいを言うもんやない」という祖母の要求をそのまま「男の子やったら」に代入することによって、もともと有していた「寡黙」、「過活動」、「行動化」に拍車をかける結果になり、そのことが私をいわゆる伝統的な男性性形成へと導いていったのである。

ではなぜ、祖母がそのようにして私に対して要求する「男の子像」をわざわざ「女の子

像」として置き換える必要性があったのか。

祖母は明治の終わりの生まれの人であった。現在でも「障碍」に対する強固な負の感情だけではなく、ジェンダーに規定された思考パターンの強い社会ではあるものの、私の父をはじめ、3人の男の子を女手一つで育ててきた祖母にとっては、私が「視覚障碍」で、しかも「女の子」であるということ、社会的な二重の劣等性を持った子ども」として認識した上で、だからこそ将来は独立して一人前にしなければならない、という強い使命感の下、メディアや社会一般に要求される「男の子像」を、わざわざ「女の子像」に置き換えて私に要求したのだろう。したがって、祖母のそうした男の子像から女の子像への「置き換え行為」は、私を将来独立させるための戦略的方法として利用されたものであり、このことが私の「男の子としての性自認」と一致し、ますます男性性を強固にしていっていったのである。

4 終わりに

このような祖母との暮らしを通じて、いつしか私の中に、「男らしさ」、「女らしさ」が、独特の様相を持って定義されていった。例えば、男は感情を表出しないが、女は感情を表出する、男は涙を見せたり弱さを吐露したりしないが、女は涙を見せたり弱さを吐露したりする、男は活動性に優れ、女はそれほど活動的ではない、というように、男女二分法的な仕方で、自己の行動様式を適宜選択するようになった。しかし、このような時代錯誤的な「男らしさ」、「女らしさ」の定義は、その後、数々の体験や人との出会いを通して、脆くも崩壊していくのである。(続く)

うしわかこうじ(立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士過程)

役場の対人援助論

(2)

岡崎 正明

(広島市)

「お客様は・・・」

私の知人でやはり福祉事務所に勤める人から聞いた話だ。彼はお役所の事業で、聴覚障害者に手話通訳を派遣する仕事をしている。とある関係者会議で話にあがった20代のS子さん。生まれつき耳が聞こえず、体にも重度の障害があって電動車イスを利用。小さい頃は病弱で、学校にあまり通えない時期もあったらしい。

その彼女が通訳の派遣依頼をしてくるのだが、いつも決まった人を指名してくる。それも制度の制限時間を超えそうなくらいの頻度で。事情を確認したところ、目的地までの移動介助や、食事の世話まで馴染みの通訳者が請け負っていることが分かった。

むろん彼女に通訳以外の支援が必要なことは明らかだった。しかし移動や食事の世話などは通訳のする仕事ではなく、別にヘルパーの派遣事業があった。制度の趣旨からも、そちらの利用が適切ではないか、という意見が出た。

知人もその意見がもっともとは思ったが、彼女の状況や通訳者との信頼関係を知るだけに、簡単には割り切れないものがあった。

事情を知る関係者からも「困っているのに放っておくのか」「通訳者の方がきめ細かいサービスができるのでは」との声が上がった。

そのとき、聴覚障害者の当事者会の方が発言された。「そんなにお母さんがたくさんいたらだめだよ」と。

「対人援助」と「サービス業」の違いってなんだろう。ふと考えることがある。どちらもいわゆる接客仕事であり、信頼関係やコミュニケーション能力が重要といった共通点がある。根本に流れる哲学は近いものを感じる。しかしこの2つには大きな違いがあるように思われる。それは顧客のニーズに対して、「サービス業」が常にそれを積極的に満たそう、叶えようとするのに対し、「対人援助」は必ずしもそうではない場合がありえる、という点である。

飲食店、スーパーマーケット、美容院、ホテル。どんな形態のサービス業でも、顧客のニーズを満たすことは至上命題だ。要望を素早く察知し、それを叶えることが利

益となり、自らの存続に繋がる。昔から言われる「お客様は神様です」という言葉は、まさしくこの精神を謳っている。

しかし対人援助は少し違う。確かにニーズを大切にし、それを満たすための支援をすることも多い。だがいつもそうとは限らない。ニーズだけ尊重していたら、児童相談所の職員は虐待の家庭訪問なんてできないし、障害者や高齢者の介護は、家政婦さんと変わらない存在になってしまう。

対人援助では、例え目の前のお客が望んだことでも、それが本当の意味でそのお客のためになるのか、そうでないのか、見極めた上で支援やサービスを提供していく。美容院のように「かゆいところはありませんか？」とすぐに先回りするのではなく、お客が自ら「ここがかゆい。かいて！」と言えるようになったり、自分でかゆみという問題を解決できるようになる支援を志向する。もちろん本人がどうやっても無理な場合は、かくこともあるが。なので理想としては「かゆいところに手がとどかない」くらいの支援がちょうど良いといえる。

こう考えるとサービス業では「お客様は神様」だが、対人援助では少し様子が違うように思われる。しいていえば「お客様は人間です」といったところか（当たり前だが）。常に正しい“神様”でも、生物としての“ヒト”でもなく、社会で他者と繋がりを持って生活し、成長・発展する存在としての“人間”を支援するのが、まさしく「対人援助」なのだろう。

S子さんの支援をしていた通訳者は、自らの仕事の範囲を超えてでも彼女をサポートしていた。それ自体は純粋な親切心からであろうし、けっして悪いことのように思えない。

しかし対人援助の視点から見るとどうだろう。S子さんが困らないように支援をすることだけが、本当の意味で彼女のためになるのか。そのちょっと無理をした支援は、はたしていつまで続けることができるのだろうか。

S子さんが生活をしていく上で、今後も様々な人や制度の手を借りていかなければいけないことは、おそらく間違いない。そして行政であれ、ボランティアであれ、支援というのはそれひとつで完璧なものなどない。その中で彼女自身が自分に合うものを取捨選択し、自己決定していくことが必要になる。そのためには自分にどんな支援が必要で、世の中にはどんな支援の方法があるのか、その長所と短所など、よく知ることが重要だ。だが馴染みの通訳者の「かゆいところに手がとどく」支援は、結果的にその機会を奪ってしまっているともいえるのではないか。

当事者会の方の言葉はまさにそのことに対して向けられている。周囲の関係者が親のように心配し、何も困らないように支援してしまうことは、実は彼女が困る機会を奪ってしまっている。自分自身が困らなければ、気付きや知識は得られない。当然、自己決定の力も身に付かない。当事者として経験してきたからこそいえる言葉である。

当事者の力ってやはりすごいなあと感じるとともに、対人援助の「お客様」について気づきをもたらした話であった。

発達検査でわかること									
新版K式発達検査をめぐって							その1		
							大谷 多加志		

はじめに

「発達検査の研究と研修の仕事をしている。」

何の仕事をしているかを問われて私がこう答えた時、友人は私が白衣を着て、脳波測定装置の前で細かな数値を記録している姿を思い浮かべたとか。

乳幼児や学童期の子どもに関わる現場では、近年、“発達障害”や“特別支援”が一大テーマとなり、子どもへのアセスメントツールの1つとして知能検査や発達検査にも関心が集まりました。私の職場で研究・発行されている「新版K式発達検査 2001」もその1つで、検査の実施法を学習する講習会に多くの人を訪れています。このように、児童福祉や教育などに関わる人たちの間ではどのようなものか周知されつつある「発達検査」ですが、一方で、それ以外の方から見ればまだまだ「何それ？」と言われてもおかしくない存在だと思います。

私は現在の職場で約 10 年間、この新版K式発達検査（以下、新K式検査と略記）の研究会、講習会の仕事に携わってきました。検査を作成した先生方をサポートする実務者として、研究会では資料収集やデータの整理、講習会ではアシスタントを務めています。今回、その経験の中で自分なりにこの検査について理解したことを紹介したいと思っています。目的はこの新 K 式検査が“どのようなものか”をお伝えすること。新 K 式検査は、もちろん“検査”ですが同時に、人間をみる時の1つの視点である、とも言えます。この視点は、この検査を使用するか否かに関わらず、「対人援助」を考える1つの切り口になるのではと考え、本稿を執筆することにしました。

新 K 式検査の概要

まず、極めて簡単にですが、新 K 式検査の歴史と概要を述べます。新 K 式検査の原型である「K 式乳幼児発達検査」が、1951 年、故生澤雅夫先生によって作られ、京都市の児童相談所（京都市児童

院、現在の京都市児童福祉センター)で院内検査として用いられていました。その後様々な経緯を経て、1980年に京都国際社会福祉センターから「新版 K 式発達検査」として公刊されることになりました。その後、時代に合わせた検査の再編作業があり、2002年に「新版 K 式発達検査 2001」が公刊されました。0歳の乳児から成人までに適用可能で、検査結果として発達年齢と発達指数が算出されます。検査に用いる用具は適用年齢の幅にふさわしく多種多様なものがありますが、乳児から幼児にかけて用いる用具はどちらかという「玩具」という趣です。もちろん脳波測定装置は含まれていません。

本稿ではこの新 K 式検査について、毎回1つのキーワードに沿って紹介していこうと思います。初回のキーワードは「発達検査でわかること」です。

発達検査でわかること

「こんなもので何がわかるの？」

「検査？ほんの30分ほど玩具で遊んでただけなのに、それでウチの子の何がわかるの？」

発達という目に見えないものを数量化しようとする発達検査は、ともすれば懐疑的にも見られがちです。もちろん検査で何もかもがわかるわけではなく、講習会でもこの「検査の限界」については必ず触れていますが、まずは検査をとってそれから相談を

と考えていた援助者としては出鼻をくじかれるというか、いささかやりづらく感じてしまう言葉かもしれません。

検査に携わる人であれば一度は浴びるであろうこの言葉ですが、私自身は学生時代に新 K 式検査について学び始めた時、実の母親から言われることになりました。

私の弟は知的障害があり、それは乳児期から「言葉の遅れ」として表れていました。母は様々な福祉施設や療育機関に訪れ、弟は発達検査を受けました。結果として“発達が遅れている”という指摘はどこでも受けたものの、「じゃあどうすればいいの？」に対する答えはなく、母に残ったのは「結局親が何とかするしかない」「発達検査なんてデータを取るだけ。実験されているみたいで気分が悪い」という思いだけでした。大学で発達検査を学び始めた息子に対する複雑な心境が表情にも浮かんでいました。

このような経緯から障害というテーマは物心ついた頃から常に私の身近にあったのですが、私自身が発達検査に携わる仕事に就いたのはほぼ偶然で、何か縁のようなものを感じています。「発達検査もまあ役に立つじゃない」と検査を受けた人やその家族からも言ってもらえるように、そんなことを心の片隅に置きながら、新 K 式検査の仕事に携わっています。

前置きが長くなりましたが、では発達検査は役に立たないものかと言うと、もちろんそんなことはないと思っています。しかし、

単に検査をすればいいというものではありません。検査が役立つかどうかは、検査をどのように活用するか、検査場面の中で何をを見つけるか、ということにかかっています。

構造化された観察場面

生澤先生は検査場面を「構造化された観察場面」と言っています。

熟練した発達相談員であれば、保育園等で子どもが自由に活動している場面を観察してその子の発達像をつかむことも可能ですが、発達についての深い理解と鋭い観察眼が必要になりますし、観察した活動の内容によって得られる情報が偏ることも避けられません。新 K 式検査は、こうした臨床観察を、名人芸ではなく、なるべく偏りなく行なうことができる、非常に有効なツールなのです。

新 K 式検査では、一定の手続きで構成された検査場面の中で、子どもがどのように反応するかを観察します。そして、子どもが状況をどう理解し、どう対応（解決）しようとしたかを、子どもの目線から考えることによって、子どもの認識世界を知り、発達を支える上で必要な関わりや手立てを考えていきます。

1つだけ例を挙げてみます。目の前に積木が置かれたとして、見ているだけの子どもいれば、掴んで口に運ぶ子、積み上げて遊ぶ子、積木を組み合わせて車や電車のようにして遊ぶ子など、その扱いは様々です。発達検査が着目しているのは、

このような積木の扱い方が、「年齢」という軸によって質的に変化していくという点です。大まかに言えば、生後半年くらいの子どもは積木を口に運んで感覚的に遊びますし、1歳前後には積んで遊ぶなど、物を用途に沿って扱う姿も見られるようになってきます。2-3歳頃には積木を車にして遊ぶなど「見立てて」遊ぶようになっていきます。このことから、逆に子どもの積木の扱い方を観察することで、およそどのくらいの年齢の子どもに相当する認知的な基盤を持っているかを推察しようとするのが発達検査の基本的な考え方です。

もちろん、1つの課題に対する反応だけで子どもの発達像がすぐに判断できるわけではありません。新 K 式検査は、他にも様々な課題状況を用意していますし、各種の課題から子どもの姿が徐々に多面的に浮かび上がってきます。そのために最も大切なのが、子どもの反応を「よく見る」ことなのです。さらに観察した子どもの反応を「どうしてそのように反応したのだろうか？」と子どもの目線から考えていくことも必要です。そういう意味ではやはり子どもを理解するためには十分な観察力と想像力が求められますが、それでも検査を用いることで、同じ状況に対する子どもたちの様々な反応を見ることができ、「この反応は前にも見たなあ」と類型化して理解したり、「これは初めての反応だ」と気になる反応にも気づきやすくなる利点があると思います。

「数値」の持つ力

一方で、フォーマルな結果として「発達年齢」「発達指数」が算出されます。数値で表される結果は、もちろん重要なものではありますが、功罪の両面を併せ持っていると言えると思います。

数値はパッと見てわかりやすいものです。「誰かと」「前回と」比較することも容易ですので、数値を聞いて大まかに子どもの様子を想像することができますし、前回と比較した時の変化も数値としてわかりやすく表れてきます。

一方で数値の厄介さを感じる場面も少なくありません。通常、検査結果は検査を実施した者が検査所見として、数値だけでなく臨床観察も含めて総合的にまとめます。しかし、結果を伝えられた人にとっては数値的な結果の方がやはりインパクトを持ちやすいように思います。また「1000円」と「980円」が人に与える印象が違うように、実質的にほぼ差はないのに、少しの数値の違いで印象が左右されてしまう場合もあります。

数値的な結果もちろん「発達検査でわかること」の1つなのですが、過大に見られたりひとり歩きしやすい傾向があるという点で、扱いには慎重さが求められます。

終わりに

新 K 式検査は子どもを理解するための有効なツールですが、同時にそれで全てが分かるわけではないという限界もありま

す。最後に生澤先生の言葉を紹介して、今回のまとめとしたいと思います。

「K 式をお使い下さる方の中にはおられないと思いますが、万が一にも、K 式でこういう結果になったのだから、この子はこうだ、とわかったつもりにならないでほしいと思います。K 式でわかるのは、あくまで子どもの位置側面です。やはり、子どもをもっともっとよく知り、そのことによって、子どもにすこしでもプラスになすように考えることが大切だと思います。そもそも K 式そのものが、大勢の子どもたちから学んだことの集大成なのですから」(生澤雅夫 発達をとらえる視点をめぐって 京都国際社会福祉センター紀要 発達療育研究 1996 年別冊)

編集後記

編集長(ダン シロウ)

通巻第10号が出た。一応、対人援助学会のニュースレター拡大版の位置づけである。執筆者には学会員になってもらって書いていただいている。

しかし実態は、まったく勝手に編集をしている。ほとんど学会の関与はない。もっとも、編集長をしている私が、現在は理事長だから、全然関係がないわけではない。書いて欲しい人に打診したり、執筆者からの提案を受けて、書いて貰ったりしてここまで来た。

こんな形で刊行物が作れるのか？作っても良いのか！と感心というか、あきれている人もいるに違いない。

世の中のたくさんのねばならないを、けっして不要なことだとは思わない。勝手気ままが一番良いなどと、自己中で、特権的なことを主張したいわけではない。

世間のしがらみには、やるせないものや、どうしようもないものが、たくさん含まれている。それも込みで、維持形成されているものが沢山ある事を十分承知している。綺麗さっぱり片付けることが、良きものを作る道筋だとも思わない。

だから静かに、積み重なってゆくものを、今後も続けたいと思う。いつまでというような時間の区切りはない。続けられる限り。そして仮にその号が最終号になったとしても、その中断に悔いがないように、その時を力投しておきたいと思う。

やりたいこと、出来たらいいと思っていたことがドンドン実現している。これから、自分に出来ることをやり続けていきたいと思う65歳の秋だ。

編集員(チバ アキオ)

「ヘルタースケルター」を観た。原作漫画を持っていたので、どういう作品になるか楽しみだったからだ。沢尻エリカがどうでもよかったわけではないけど。

観てみると、原作には忠実な方な部類の映画だった。主人公「りりこ」の描写でどこにもいる女の子というところが原作よりは薄く、その分芸能人としての成功という色付け(ふんだんに「赤」も使ってね、蜷川さんですから)が濃かった。ストーリーや登場人物ではなく、演出のことをより思い出す鑑賞後感が自分でもおもしろい。原作漫画の「りりこ」。ああいう人なあ、感じとしては遠くないなあ。初期の田口ランディが取り上げてきたところ。「戦前の少年犯罪」を読んでも、「忘れられた日本人」を読んでも、男女問わず人にはそういう側面があるし、それでいいんだと思う。

同じネタを漫画と映画という表現。このマガジンは、「マガジン」という表現。他では論文という表現でもたくさん描かれてきた世界がテーマになっています。同じものでも、表現方法が異なると今までになかったところも表現できる。伝えることができる。祝10号！これでいいんだと思う。

ご意見・ご感想

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

印刷版対人援助学マガジン(1号~9号)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻10号

第三巻 第二号

2012年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第11号は2012年12月15日
発刊の予定です。

原稿締め切りは11月25日！

新規連載者も募っています。

未執筆分野からの、積極的なエ
ントリーをお待ちします。

執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

映画「ブルー スカイ」は1994年に公開された、ちょっと変わった映画だ。トニー・リチャードソン監督は「蜜の味」「長距離ランナーの孤独」で1960年代に登場し、「ブルー スカイ」が遺作になった。

このイラストは主人公の妻（カレン・ブラック）が、トップレスで海岸を歩いているシーンからのイメージだ。この作品でアカデミー主演女優賞を取ったのだが、知らない人も多い作品だと思う。

配給会社が倒産して、公開まで4年もかかったり、監督が亡くなったり、ストーリーもすっきりしないところのある変な話だ。

情緒不安定な妻を愛し、彼女の起こす様々なことに巻き込まれてゆく軍人の夫（トミー・リー・ジョーンズ）。

この妻のように、自分の今居る所を、そこが本当に自分の居場所だと思えない女性の物語はいくつも見た。

人はしばしば、本当の自分はこんなものではないとか、ここには自分が駄目になってしまうなどと言う。

私の高校時代、そんな風に語る女友達に、「今ここにいるお前も、お前だと思う。どこか他にいる自分が、本当の自分だなんてのは、そう思いたい自分がここに居るといだけのことだろう」等と、身も蓋もないことを言ってしまったことがある。そういう事には、妙に意地悪く敏感だった。自分に対して、そんなことはまったく思っていなかったから投影ではないと思う。

そしてこの作品でも登場する『女優になりたい女性』というキーワードとは、あちこちでお目にかかった。女の人のことを、ある意味、みんなそうだと思っているところが私にはある。

2012/09/15 団士郎